

中国農村地区における女性の地位とその変化に関する考察
—徽州における結婚・出産・養老・表彰から見る女性の位置づけ—

神奈川大学

歴史民俗資料学研究科

馬 路

論文目次

第1章 序

第1節 問題の所在と研究背景	1
第2節 先行研究	4
1 中国の女性に関する人類学と社会学の研究	
2 中国の女性史・ジェンダー史	
3 徽州における女性に関する研究	
第3節 概念の説明と研究方法	11
1 概念の説明	
2 研究方法	
3 論文構造	

第2章 調査地の紹介

第1節 徽州(黄山市)について	14
1 地理状況と地名について	
2 徽州の宗族と徽州商人	
3 徽州の古文書について	
第2節 調査した村の紹介	18
1 竹林村の状況	
2 竹林村の村生活	

第3章 結婚における女性の地位

第1節 結婚の儀礼から見る女性の地位の変化	22
1 伝統的な結婚の流れ及び結婚相手の選択	22
(1) 伝統的な結婚儀礼	
(2) 結婚相手の選択	
2 現在の結婚の流れ及び結婚相手の選択	29
(1) 現在の結婚の流れ	
(2) 計画経済時期(1950年代～1970年代)に行われた結婚	
(3) 改革開放以降(1978年以降)に行われた結婚	
第2節 結婚の贈与から見る女性の地位の変化	35
1 伝統的な結婚の贈与	35
(1) 男性側が贈った結納	
(2) 嫁入り道具の準備	
(3) 女性側の親友が贈った結婚祝い	
2 計画経済時期と改革開放以降における結婚の贈与	44
(1) 男性側の贈り物	
(2) 嫁入り道具の準備	
(3) 親友との贈与	

第4章 嫁生活における女性の地位——一人っ子政策による核家族の変化

第1節 皖南農村における出産観念の変化	56
1 伝統的な出産観念	56
(1) 文献から見た娘軽視の出産観念	

(2) 産児制限がない貧困時期における女性たち——「多子」が本当に「多福」か	
2 伝統の出産観念と一人っ子政策の交替期に生きる女性たち	62
3 現在の出産観念	64
(1) 全国の出産意思に関する調査	
(2) 竹林村における女性の出産観念	
(3) 息子偏愛から「娘偏愛」へ	
第2節 家生活における嫁の地位の変化	70
1 若い夫妻の家はどこか	70
(1) 伝統的な嫁入り婚	
(2) 夫・妻両方に住む若い夫婦たち	
2 「両辺住」が与えた影響及び原因	74
(1) 養老視点から見る「両辺住」	
(2) 村人が語った「両辺住」の原因	
第3節 若い嫁の経済生活	78
1 親世帯の伝統的な分家生活	78
(1) 分家のきっかけと家計の管理	
(2) 新しい生活のため頑張った若い嫁	
2 分家をしていない「分家」における若い嫁	80
(1) 舅姑との同居生活	
(2) 明白な家計管理——実際の「分家」生活	

第5章 老後生活における女性の地位——商品経済社会における養老生活の変化

第1節 子供から孫へ	88
1 二度目の母親の形成	88
(1) 伝統的な扶養制度における祖母の役割	
(2) 二度目の母親の形成	
2 孫の世話は祖母の責任か?	90
3 孫の世話に関する二度目の母親のため息	92
第2節 「婦人家」の養老生活	95
1 徽州農村のフィード・バック養老生活——「養児防老」	95
(1) 孝道と家産について	
(2) 異なる養老形式	
2 都市化における養老生活の変化	97
3 「等価交換」の養老生活	100
第3節 家族以外の人間交際	103
1 親類交際の変化	103
2 村に女性の交流の変化——広場ダンスを例として	105
(1) 広場ダンスについて	
(2) 竹林村の広場ダンスについて	
(3) 広場ダンスが交際の範囲に対する影響	

第6章 女性に対する社会的期待と女性の社会的地位——男性に従属する地位から「女性は天の半分を支える」へ

第1節 伝統社会における女性に対する社会的期待	112
-------------------------	-----

1 貞孝節烈婦のために建てる貞節牌坊……………	1 1 2
(1) 牌坊について	
(2) 牌坊の構造	
(3) 貞節牌坊の申請について	
(4) 貞節牌坊の機能	
2 宗族の女性のために建てた女祠……………	1 1 6
(1) 徽州の女祠について	
(2) 女祠の紹介	
(3) 宗族祠堂における女性の祭祀	
(4) 女祠の機能	
3 ほかの表彰……………	1 2 5
(1) 文人に記録される女性	
(2) ほかの貞節祠堂	
第2節 1949年以降女性に対する社会的期待——「女性は天の半分を支える」……………	1 2 9
1 社会主義農村の建設者と「鉄姑娘」式の農村女性……………	1 2 9
2 商品経済における女性の表彰……………	1 3 4
3 「良妻賢母式」の女性に対する再期待……………	1 3 7
第7章 結論……………	1 4 1
参考文献……………	1 4 6

第1章 序

第1節 問題の所在と研究背景

徽州は私の故郷である。徽州古民居や村を歩いていると、立派な牌坊や静肅な祠堂が目に入り、徽州の女性の寂しい人生と悲惨な物語が耳に入る。しかし、村の嫁やお婆さんと話していると、彼女たちの結婚、子供、老後生活における喜びや悩みが感じられる。彼女たちが感心を持っている話や生き方は、伝統的な徽州の女性と大きな差がありそうである。なぜこのような大きな差があるのか、徽州の女性の生活にどのような変化が起きるのか、またその変化の原因は何だろうか。これらの問題を明らかにすることが、徽州の女性の地位を研究する動機である。

徽州の女性の地位は研究課題になるのか。文献資料を通して、社会学、人類学は女性と結婚、出産、家族、親類などの視点から、中国の女性に関する研究成果が多い。その中で女性の地位に関する研究はそれらの分野において大切な理論と現実的な意味を持っている研究課題である。現在までの研究成果から見ると、中国の女性の地位に関して、主に二つの研究方法がある。

一つは結婚、家庭などの視点から女性の社会地位を検討する。初期の中国女性の地位に関する研究は、結婚、家庭制度の視点から間接に女性の地位を論じた。たとえば、陳顧遠の『中国婚姻史』(1936年)、陶希圣の『婚姻与家庭』(1934年)、呂誠之の『中国婚姻制度史』(1935年)である。この時期の女性研究はまだシステムになれず、女性の地位に関する研究は主導的なものとは言えない。1970年代、M. ウルフは『Women and the Family in Rural Taiwan』で、母親と子供で構成された「子宮家族」の視点から、家庭における女性の地位を分析した。1980年代以降、中国の女性の地位に関する社会人類学の研究はただ結婚、出産、教育、就職などの一つの点を切り口として検討していた。たとえば、尹旦萍の『当代土家族女性婚姻変遷』(2009年)、馮雪紅の『嫁給誰』(2013年)などは婚姻の視点から、女性の社会地位を研究した。黄盈盈は『身体・性・性感』(2008年)に、女性の身体・セックスに関する認識を研究した。これらの研究は筆者に示唆を与える。徽州の女性の地位を研究すれば、結婚、出産、家族生活などの視点から具体的な研究を行い、それによって、徽州の女性の地位とその変化を分析するはずである。

もう一つは村落の女性に対する研究方法である。村落は空間的な単位であり、人間関係の統合である。初期の人類学に村落に対する研究は主に、D.H. カルプの「鳳凰村」(1925年)、楊懋春の「台頭村」(1945年)、費孝通の「江村」(1939年)、林耀華の「義序」(1935年)および「黄村」(1944年)、楊慶堃の「鷺江村」(1959年)などである。これらの研究は人類学における代表的なものである。1980年代以来、陳佩華等の「陳村」(1984年)、黄樹民の「林村」(1989年)、王銘銘の「溪村」(1996年)、閻雲翔の「下岬村」

(1999 年)などの研究がある。それらの研究は村落研究のブームをより一層推進した。彼らが取得した成果および、研究経路、方法は中国の女性の研究に大きな影響を与えた。その後、村落の女性を中心とする研究が相次いで出てきた。たとえば、李霞の『娘家与婆家』(2010 年)は、山東省張村における農村の女性の生活空間と家庭における権力を研究している。刁統菊の『華北鄉村社会姻親関係研究』(2016 年)中では、山東省、天津などの 6 つの村を中心に、姻戚関係の形成と役割について論じた。植野弘子の『台湾漢民族の姻戚』(2000 年)は、台湾の「佳榕林」において、台湾の漢民族に対する姻戚関係の重要性を分析した。前述した尹旦萍の『当代土家族女性婚姻変遷』は埃山村の婚姻制度を視点として結婚における女性の地位を研究した。

村落を中心に、女性の活動を村落の政治、宗教、文化の環境におき、村落の変遷から女性の地位の変化を理解し、綿密な観察を行い、詳しいデータと調査資料を手に入れる。しかし周知のように、村落は孤立の存在ではなく、村の文化・制度なども独立で発展するわけではなく、所在の地域と密接な関係を持っている。また村の女性は村内に限らず、地域空間を行動範囲とする。地域の文化や制度は必ず村落および女性の生活に影響を及ぼしている。それゆえ、村の女性に対する研究を地域の背景において行い、村の女性研究と地域の女性研究を融合し、それを踏まえて全体的に女性の地位およびその変化を把握できると考えられる。

徽州の女性の生活を詳しく調査した上で、徽州農村における女性の地位および変化を研究することが可能であり、三つの理由があると考えられる。

まず、徽州の女性の歴史は女性の地位とその変化に関する研究にとって重要である。徽州は文化の深いところである。北宋時代、徽州に徽州府が設置されて以来、1 府 6 県（徽州府及び管轄したジャ県・休寧県・績溪县・黟県・婺源県・祁門県）の行政区画が形成され、現在まで影響している。山に囲まれた徽州では、中原の文化の基で独自の徽州文化を生み出し、徽州地域という地理的、文化的な地区が形成した。朱熹の出身地である徽州では、地元の人々が朱子学を推賞していた。彼が唱えた「三綱」「五常」を中心とした宋明理学は徽州人の生活に深い影響を与えた。徽州は「東南鄒魯」、「礼儀の邦」と称されている。明代と清代において、徽州は宗族の意識が強く、宗族が相当の勢力が持っているところである。祠堂や牌坊が林立し、宗族制度が族人に対する強い束縛力を持つ。また、徽州は全中国および海外まで商売が盛んな徽州商人の故郷である。徽州では商売の慣習や、商売がもたらす経済力が文化の発展に深く影響した。徽州の女性の生活は礼教、宗族、徽州商人などから影響と束縛を受け、漢民族の女性の生活状態を典型的に反映した。それゆえ、徽州における女性の地位を研究することは、歴史上の女性の地位を検討するだけではなく、歴史の変遷によって女性の地位の変化の考察もできる。

また、徽州は風景がよく、歴史感があふれる観光地であり、浙江省・江蘇省などの経済先進省に接す

るが、経済の発展が遅く、総体的に後進地区である。近年、徽州地区では、地方都市が急速に広がり、まち周辺の農村が都市化の進展によって、村の土地がまちの建設のために多く減少している。家屋と田んぼを失った村人たちは一戸建ての団地に移住し、土地に対する依存性が低くなり、多くの村人は市内やまちの経済開発区の工場に就職し、サラリーマンのような生活を送っている。また共産党政権において、宗族制度が壊滅され、一人っ子政策が実施され四十年近く経た現在において、宗族の観念が薄くなり、伝統的な生育制度も変わっている。都市化の発展とともに、徽州の村落が影響され、村の女性は思想や考え方も変化している。したがって、徽州のような経済発展途上地区において、都市化が女性の地位に与えた影響を考察することが可能である。

最後は徽州地区に残された豊富な女性に関する史料である。徽州地域には文献や古文書資料がたくさん残されている。その中に、数多い清代、中華民国時期の結婚礼単や帳簿など女性の生活に関する史料がある。これらは当時、徽州の結婚に作成された貴重な第一次資料であり、清代・中華民国時期における徽州女性の地位および変化の研究の資料となる。徽州に残された史料を踏まえて徽州を研究する学問である徽学は中国四大の地方顕学の一つである（チベット学・敦煌学・甲骨学・徽学）。徽学は土地の売買・宗族・徽州商人・教育などの分野で大きな成果を収めたが、徽州の女性に関する論文や著作は現在まであまり多くない。

それゆえ、筆者は徽州地域を選び、徽州女性の社会地位およびその変化について研究したい。

本論は結婚、出産、養老、表彰の四つの視点から、徽州の女性の地位および変化を分析する。理由は以下の四つである。

まずは、地位を持っている女性の全面的な考察ができる。結婚、出産、養老は人生の異なる段階を始め、表現する。女性は結婚によって、娘から妻に変わり、出産によって母になる。子供の結婚、孫の出産によって、彼女たちは祖母になり、養老生活が始まる。家族における役柄の変化により、異なる時期における女性の家庭の地位およびその変化が完全に考察できる。

そして、村の女性たちが同じ人生と似ている生活内容を送っていることによって、研究において、各段階の比較が可能になる。結婚、出産、養老は普通、女性の生活における必ず経験する段階である。各段階には、たくさんの女性の状況を観察したり、比較したり、裏付けたりし、共通性と変化をまとめる。

また、結婚、出産、養老は、ほぼすべての女性が経験した共同的な生活内容である。フィールドワークに自分の生活や経験談、感覚などの話をすれば、彼女たちは交流の意欲が興奮になり、インタビューが続けやすい。資料の収集に役立つ。

最後に、多視点から女性の地位とその変化を考察できる。上述した結婚、出産と養老は家庭生活の視点から女性の地位とその変化を分析したが、表彰は社会的期待の視点からそれを考察できる。女性の表

彰は女性に対する社会的期待の直接的な表現である。女性に対する社会的期待は政府、村人、宗族（かつて）、親戚が特定な女性の役柄に関する評判である。女性はこのにより、客観的に権力をもらったり、束縛されたりし、地位が上がったり、下がったりする。それゆえ、女性に対する社会的期待から、女性が持っている権力と受けた束縛が見られる。異なる時代における女性の表彰は、女性の地位とその変化、および社会の要求を反映する。

それゆえ、筆者は四つの面から女性の地位を分析する。

第2節 先行研究

1 中国の女性に関する人類学と社会学の研究

(1) 中国の親族関係に関する研究

中国の社会研究において、女性を主体として研究することは比較的少ない。「伝統的な人類学は最初から社会的性別（ジェンダー）について詳しく記載したが、親族関係、婚姻制度、儀礼とトーテムの研究及び民族誌の中に散見されている。女性は主流文化の集団ではなく、観察される地位において、研究者に他の問題を説明するため使用された要素と材料だけである」〔潘 1999 : 59〕。1949 年解放以前、中国の親族制度、婚姻関係と儀礼などを分析するとき、女性について論及したのは、費孝通と林耀華だが、女性を主体とした研究ではなかった〔費 2006 ; 林 2000〕。

朱愛嵐（Judd Ellen）は慣習の視点から、既婚女性と実家の間を繋いだ親密な関係を分析し、女性はその親密な関係に積極的な能動性を持ち、女性の親族関係が感情的な要素を大切にすることについて、父系の親族関係とは鮮明な対照となることを示した。

漢民族の家族制度では、大多数は嫁入り婚が行われ、女性は結婚により身分が変化し、婚家の家族の一員になっているが、実家との関連が断ち切られるというわけではない。植野弘子は台湾で行われた調査により、漢民族の親族・婚姻体系を再考し、嫁の実家である「後頭厝」が嫁一人だけではなく、夫及び子供までの全家族に経済的・儀礼的に重要な役割を論述し、「父系理念のバイアスによって歪められた姿」〔植野 2000 : 15〕を整え、「姻戚関係を抜きに彼らの生活を語ることはできない」〔植野：前掲〕と、漢民族の生活を究明しようとした。婚家に女性がもたらした緊張感と「分家」¹の可能性に気づいたが、彼女たちが能動性を発揮し、自分の核家族を作り、婚家から独立しようと求めることについて未だ注目されていない。刁統菊は宗族勢力が弱かった華北地区における調査により、漢民族の親族制度に姻戚関係の規則と実際の表現を考察し、姻戚関係の役割を究明した。姻戚関係は宗族制度に対して、

¹ 中国語の「分家」とは、一世帯として生活していた親と息子たちが財産を分けて、別に世帯を営み、かまどを分けることである。

維持と破壊の二つの影響があり、漢民族の親族制度において財産と社会地位の継承が「単系偏重」〔費 1985 : 226〕だが、実際、日常の生活では父系と母系の双系を重ずる〔刁 2016 : 289〕。

文化人類学者は女性を研究するとき、よく自己 (ego) を既婚男性と設定し、いわゆる男性 (少なくとも中立) の視点から女性を観察する。M. ウルフは台湾の実地調査から、「子宮家族」(the uterine family) という概念を規定した。既婚の女性が安心感と情感により子供をつなぐ母を中心とする核家族、いわゆる「母中心家族」を作る。この「子宮家族」のメンバーは母と子供のみであり、「子宮家族」の成立に従い、彼女たちが婚家さらに夫の宗族 (中国漢民族の父系親族集団) に地位を築くが、婚家の家族がどんどん「分家」をする〔周 2015 : 81〕。M. ウルフは「子宮家族」という概念を通じ、既婚女性が母と子供だけで構成された「核家族」を認める態度を明らかにした。しかし、M. ウルフの理論には、夫が「子宮家族」に排除され、なお周縁的に対立される場合もあり、核家族に対する夫の役割は無視された。李霞は華北農村における婦人生活の研究を踏まえ、母と子供だけを語った「子宮家族」より、夫を含む夫婦二人と子供が共に営む「生活家庭」を主張した。この「生活家庭」に大切にされたのは家族制度の権利・義務・権威 (= 制度家庭) などではなく、夫婦関係及び親子関係である〔李 2010〕。「生活家庭」は「制度家庭」と異なり、制度的な表象がないが、村人の生活に広く承認されている。

(2) 女性と結婚に関する研究

社会学、人類学、民俗学において結婚に関する研究は多い。

アルノルト・ファン・ヘネップの『通過儀礼』において、結婚の過程は分離儀礼と過渡儀礼である婚約期間を経て、新しい環境への本式の統合儀礼である結婚式をもって結婚儀礼が終了することを示した。結婚は、儀式から言うと実家と分離し、新しい家族へ融合することである。

そしてヘネップは、結婚が「経済的な意味を持って、……儀礼の中に経済活動的な要素が入り組んでいる」と言及する。家族や村落に元気な働き手を一人失う時、なんらかの見返り、補助を求めるなど男女が所属する集団は、「経済面での取り決めに利害関係を持っている」〔ヘネップ 2012 : 155〕。確かに、戦後、女性労働者の価値が高まった。そして、そのことは結納の儀礼が高まることへの説明によく用いられる。しかし、現在では結納を利用して嫁入道具を準備する家族より、結納を受けずに自前で嫁入道具を準備する家族が多い。単に補助論ではそれを解釈できない。

中国の結婚を始めとして全面的に論じた陳鵬の『中国婚姻史稿』では、歴史の方面から律令により、春秋時代から清朝まで婚姻の形態や流れ、婚姻制度を詳しく分析している。「導源于礼、範之以令、裁之以律」の中国の婚姻が、「往往与俗悬殊, 且有适相反者」〔陳 1990 : 7〕、礼を基本として、法に規範が決められるが、実際に民間には厳しく礼に合わない風俗、完全に逆の風俗もあるとして中国の婚姻の特徴を指摘した。金銭や労働力を考える上で、民衆は自分たちの都合に合わせ、礼に則らない場合も

見うけられる。

中国の結婚に関する日本人の研究者である中生勝美は「婚姻贈与と婚姻連帯」で、1930～40年の調査資料を利用し、華北農村で実地調査を行った。中国漢民族の婚姻体系の根本原則「門当戸対」が、婚姻贈与で表現すれば、婚資と持参財の等価交換であると指摘した。婚資と持参財の交換を地域、階層、機能の差異から分析した。女性が農作業をする価値より、婚資が高いと指摘した。階層差について、階層が低いほど、婚資と持参財の等価交換のバランスが崩れることを明らかにした。婚資と持参財の考察により、婚資は社会に承認をもらう社会的機能を持ち、婚約を成立させる必要な条件であり、持参財は嫁の地位の安定と婚姻連帯の安定性を保ち、婚姻成立の条件ではないと分析した。中生は中国を全体的に分析し、婚資と持参財の役割と関係を示したが、実は地域ごとの差異が大きい。筆者が知る限り、同じ水稲地帯に区分された徽州地区と福建省では婚資と持参財の差異が大きい。

贈物の意味は、共同関係を締結したい意志とその関係を持続したい意向を示すことであり〔モース 1962 : 85〕、贈物の交換は契約と交換である。「贈物によって婚姻が結ばれ、親族間に親族関係が形成される」〔モース 1962 : 70〕。これにより、中国の伝統的な結婚において、男女両方が結婚の各段階に贈与を交換するのは、結婚という契約を締結および持続する意向を解釈した。しかし、現在の結婚には、贈与の交換は新しい意味を持つ。

毛立平は清代の嫁入り道具を分析し、普遍性と贅沢の二つの特徴を明らかにした。豊かな嫁入り道具は女性に婚家の地位の安定を図り、女性の才能を生かすのに役立つ〔毛立平 2007〕。

植野弘子は持参財（嫁入道具）と婚資（結納）の関係と役割を分析した。経済の発展、少子化、女性労働力が評価されるなどの背景で、持参財も婚資も多額になり、娘が婚家における地位とメンツのため、婚資以上の持参財を準備する傾向が強いと明らかにした。夫および婚家も嫁の持参財（家具と家電製品など）が使用可能となり、嫁方の貢献が大きくなる。婚家も実家も財の分与を受け取り、二つの家庭の間に流動する財は若い夫婦へ移動する〔植野 2000〕。

吉国秀は遼東Q鎮を例に挙げ、結婚贈答の構造と流れの変遷により、姻戚関係の変化を論じた。1990年代以降、実家と婚家の援助額が同じくらいになることとともに、嫁の地位が高まるだけでなく、姻戚関係によって、実家は婚家と同じ地位になると指摘した〔吉国秀 2007〕。

中国の結婚贈答に関する先人の理論をもとに、「婚姻給付理論」と「婚姻分与理論」と二種類にまとめることができる。「婚姻給付理論」では、結納は嫁の実家に嫁の生産力と家事サービスの移動に対する補助と見なす。「婚姻分与理論」では間接な嫁入道具である結納は、婿の財産分与の最初の取り分と見なす。地域の偏差と強調点の違いにより、二つの理論が提唱できる。しかし、単に「婚姻給付理論」と「婚姻分与理論」だけでは中国の複雑な結婚贈答を解釈できない〔閻 2000 : 192～195〕ため、結婚で

の新郎新婦の役割に着目することが必要となる。

閻雲翔は新郎新婦が婚姻における積極的なイメージを強調し、親の権利の衰退、若者が結婚及び結婚後の生活で握る財産分配の主導権の強化を指摘した。結婚の贈答往来は以前のものとは意味が異なり、両家族における物々交換ではなく、子世代への贈与という意味になり、親世代から財産を受け継ぐ新しい制度になることを究明した〔閻 2000：195～199〕。

2 中国の女性・ジェンダー史

20 世紀以来、中国の女性史に関する研究は、主に三つの段階に分けられる。1920-30 年代の研究は、主に婚姻史の視点から中国女性の歴史を研究し始めた。たとえば陳顧遠の『中国婚姻史』、呂誠之の『中国婚姻制度史』などである。

1970-80 年代に、中国の女性と婚姻史はエンゲルスの婚姻家族理論により、中国の結婚と家族の歴史を研究するため、政治的視点が強い。

1990 年代以降、ジェンダーの概念が中国に導入された。中国女性史の研究では、新しく導入された女性学とジェンダーの概念が、新たな視点をもたらし、数多い成果が取得された。中国女性の通史があるし、たとえば、陳高華等の『中国婦女通史』（2011 年）、時代史の研究成果もある。たとえば邵雍の『中国近代婦女史』（2013 年）である。筆者は女性の結婚、家族の生活、および婦女運動と婦女解放の二つの点から中国の女性史の研究をまとめる。

(1) 女性の結婚、家庭生活

結婚制度は、女性の研究において伝統的な課題である。学者たちは結婚の語源、婚姻の目的、観念および結婚儀礼などの視点から、中国の結婚制度の変遷を分析し（陳鵬 1990；李衡眉 1992；董家遵 1995）、女性の結婚における地位を間接に論じた。山川麗は『中国女性史』において、中国の女性の歴史を簡明に描き、重要な歴史問題について理論的な分析を行い、民国時期には、女性は教育、就職、待遇、地位に男性と同じ平等ではなく、結婚、家庭の生活に束縛され、封建観念が強く女性の生活と地位を支配しているという認識を明白に示した〔山川 1987〕。

秦代以降、中国の各地の漢民族は結婚習俗において「六礼」の儀式に従っていた。清代末に、西洋の結婚文化に影響され、一部の都市で新式の結婚式が行われた〔常建華 2006〕。民間には、特別な結婚形式、たとえば略奪婚、冥婚などの非正常婚が存在した〔馮爾康、常建華 2001；李衡眉 1992〕。また早婚は中国の伝統社会にけるよくある現象であり、近代まで続けられていた〔岳隴 1999〕。妾は中国に長い歴史がある。妾は正式な家族員ではなく、家族関係は構成できない〔瞿同祖 2003〕。しかし、北洋政府時期に、夫と妾の関係は合法的な契約関係であり、家族一員としてある程度権力と義務を持つ

ている。南京政府時期に、妻の許可をもらわなく蓄妾するのは姦通の行為であると法律で決められた〔程郁 2002〕。

珠江デルタ地区に「自梳女」という特別な結婚俗習がある。この俗習の形成は、漢民族と少数民族である白族の文化が浸透しあうことと関わる。女性は生涯未婚、あるいは結婚しても「不落夫家」（夫婦が共に暮らすことを拒否する）と決めた。これは儒教が唱えた正統的な女性観に対する挑戦である〔王麗 2001〕。それは当時の女性が封建婚姻制度に対する非正常的な反抗だと葉春生は認めた〔葉春生 2001〕。

ジェンダーの概念を利用して、女性の生活に対する研究に成果が出ている。沈海梅は明代と清代に、雲南省の女性の物質生活や、結婚生活と祝日の娯楽に対する研究を通して、女性の生活の変化が民族の交流と社会の変遷に緊密な関係を持つと指摘した〔沈海梅 2001〕。社会変遷は、近代における女性の生き方の変化に対して重要な要因となる〔羅蘇文 1996〕。近代の江南地区における農村女性は、社会生活、社会地位の変化が主に工業化の影響と関わる〔陳曉燕 2001〕。江南地区の女性は家計に重要な役割があるが、家産の父系継続原則において、彼女たちに基本的には財産がなく、いわゆる財産権の「不完全」な権利である〔張佩国 2002〕。五四運動時期(1915-1921年)から1930年代初期まで、女性たちは財産権と継続権などの権利を勝ち取り、南京国民政府から法律上承認してもらった〔何黎萍 1998〕。

（2）女性運動と婦人解放

婦人運動は、近代女性史研究における重要な一環である。近代中国婦人解放運動は、戊戌維新時期(1898年前後)、辛亥革命時期(1911年前後)と五四運動時期の三つの高揚期がある。戊戌維新運動は中国近代の婦人解放の発端であるが〔呂美頤、鄭永福 1990〕、深刻な性別を無視する問題があった〔韓廉 2001〕。辛亥革命時期に知識人の女性が自立の精神、自らを救う意識と愛国心を持ち、それらの観念は伝統的に女性が教えられた観念を超え、今後の婦人運動の全面的な上昇に精神的な基礎を定めた〔蔣美華 1998〕。それゆえ、辛亥革命時期の婦女解放運動は五四時期における婦人運動の前進に社会的な基礎を固めた〔李木義 1998〕。1920-30年代は中国の女権拡張運動の活躍期であるが、効果はあまり大きくなかった〔潘敏 2001〕。中国近代の婦人運動は、女性の社会地位の改善と上昇に役割を果し、人々の価値観や行動規範、生き方に大きな影響を与えた〔呂美頤 1999〕。

中華人民共和国成立後の女性研究は、婦人解放の範囲に納められることが多い。1949年以降婦人運動の新しい発展は、政府から力強い支持を得て、強い制度的、人為的影響がみられる〔張珊珍 1999〕。1949-1956年は、共産党政権において、中国の女性が全面的に政治に参加する第一回の高揚期であり〔董妙齡 2000〕、その時期に婦人幹部が大量に任用され始めた〔董妙齡 2001〕。

1950年に新婚姻法が実施されたが、1950年代は旧式の結婚制度から新式への過渡期である。この時期

に新式の結婚が増え、女性の結婚相手に対する選択基準は変わるが〔羅開玉 1999〕、女性の結婚自由の権力を勝ち取る行動に、莫大な圧力を受け、数万名の女性が結婚、家庭の問題で殺害され、あるいは自殺した〔肖愛樹 2005〕。

1950年代に、国が力を入れて農村女性を農村の建設に参加するよう導いた原因は、婦人解放の政治的な需要がある一方、政府による経済発展の需要と認識である〔高小賢 1999〕。国家の呼びかけにおいて、女性たちは社会労働に参加し、女性解放が当時の流行したスローガンになった。農村の女性が自分の土地、労働用の道具などの生産財を獲得することによって、社会的生産の規模と範囲が広がった〔韓嘉玲、1998〕。

金一虹は、1950-80年代における中国の女性の新しい労働機能を研究し、これらの機能が、国家の呼びかけと政策の関与によって形成し、強制的性と「脱女性」性の特徴があり、文化大革命時期（1968-1976年）に左傾した政治的な呼びかけにおいて「脱女性」性が頂点になり、その新しい労働機能は積極的な意味があるが、消極的な影響もあると指摘した。〔金一虹 2006〕。

それ以外に、西洋の学者による中国の女性史に関する成果がある。宋代から清代までの女性史の研究において、資料の制限により、上層社会の女性の生活しか研究対象にならなかった。たとえば、上層女性の詩と詞の作品によって、Dorothy Y Ko は17世紀における中国の女性の生活を研究し〔Ko 2006〕、Francesca Bray は宋代から清代まで中国の「女性の技術」を研究した〔Bray 2006〕。またEbrey は宋代の女性の結婚と生活を研究し〔P. Ebrey 2006〕、Susan Mann は18世紀前後の中国の女性の生活を研究した〔Mann 2006〕。

近現代の女性史は、下層社会の女性を対象として研究した。たとえば、Gail Hershatte は20世紀上海の売春婦問題を研究した〔Hershatte 2006〕。Laurel Bossen は雲南禄村60年の変遷を研究し、纏足と紡績、土地制度、就職、結婚と家庭などの分野におけるジェンダー問題を研究し、60年に渡る農村の中国漢民族の社会に女性に関わる制度の変遷を分析した〔Bossen 2006〕。

1990年代にジェンダーの概念が導入されるとともに、女性史のもとで、ジェンダー史の研究が興って、研究成果が出現し続けた。しかし、上述した成果は、ほぼ歴史を主体とする実証的な研究である。これは中国の女性・ジェンダー史が伝統的な史学から発展することと関わる〔高世瑜 2015〕。したがって、伝統的な歴史学の分野に属する研究課題の比率が高いという結果が出る。また異なる時期、異なる地域における女性の生活は変化と差異が大きいいため、歴史の変遷の視点から研究する成果が少ないといえる。

3 徽州における女性に関する研究

20世紀90年代の黄梅戲『徽州女人』から、徽州の女性は封建社会に、夫が出稼ぎのため、妻一人で何

十年も家を守る寂しく悲しい生活を送っていたというイメージが地元に着定される。徽学（徽州に関する研究の学派）に、徽州の女性に関する専門の研究はあまり多くない。徽州の結婚に関する研究に、間接的に徽州の女性が言及された。

徽州の婚姻の研究は、儀式の流れ、結婚年齢、非常態婚と結婚の悪習、嫁入道具などの面で論じられている。大量の徽州古文書の発見に伴い、古文書を利用し、徽州の結婚を研究する人が増えた。姚暘は天津博物館に所蔵された徽州の「邵氏嫁女収支帳冊」により、清代の徽州の婚俗と社会生活を紹介し、六礼の流れを説明し、豊かな嫁入道具から贅沢婚の風潮を推測した〔姚暘 2010〕。

卞利は『徽州民俗』で、民俗の視点から、歴史の文献により徽州の各地域の結婚儀式を論じ、冥婚、婿入婚、童養媳、勞役婚など非正常婚も分析し、「同姓不婚」、「門当戸対」、と徽州の結婚の特徴を指摘した〔卞利 2005〕。黄山市シャ県出身の柯霊樞は、大量の民間から収集した古文書や族譜をもとに、シャ県の旧式の結婚儀式を詳しく記録した〔柯霊樞 2003〕。その他に、胡中生は非正常婚、朱琳は結婚の結納、王伝満は結婚の礼俗について論文を出した〔胡中生 2001 ; 朱琳 2005 ; 王伝満 2010〕。

女性を表彰し、祭祀する徽州の貞節牌坊と女祠に関して、張小平と羅剛は数量を統計し、建築の構造を紹介した〔張小平 2002 ; 羅剛 2002〕。毕民智は、徽州の女祠について構造、建造の原因と機能を簡単に紹介し、封建社会末期に女性が男権社会に対する反抗と目覚めのシンボルと認識した〔毕民智 1996〕。趙華富は、各宗族の族譜に記載された「祠規」（位牌堂の規則）を考察し、毕民智の論点を批判し、ほとんどの位牌堂には男女祖先両方とも祭り、故に女性を祭らない宗族は女祠を建造することは大した意味がないと認識した〔趙華富 2004〕。呉玉廉は、徽州の 10 軒の女祠に対する調査を通して、女祠が宗族の母になる女性の先祖を祭祀する場所であり、女性の地位との緊密な関連性を否定すると述べた〔呉玉廉 2004〕。

阿風〔阿風 2002〕の論文では、明代と清代の契約古文書の基で、土地売買、実家と婚家における財産の継承と処置、家分け及び後継者の決まりなどの視点から、家での女性の能動性に注目し、彼女たちの地位と権利を分析した。明代と清代の伝統的な男権社会は、家族の権利が家長である父に握られ、男尊女卑の観念が強かったが、「長幼尊卑」の思想が当時の民衆の生活に影響し、家長がいない場合に、家族で一番尊ばされた母が家の財産、家分けに大きな裁量権を持っていることが明らかにされた。伝統的な社会における女性の地位と権利の研究には、儀礼や法のしきたりによる分析にとどまらず、民衆の実生活で行われた経済、社会活動から考察することが新しい視点になる。しかし、阿風の研究対象になる女性は、財産がある家で家長を務め、大きい権力を持つ母親であり、徽州の全ての女性とは限らない。

徽州出身の女性である蘇雪林の自叙伝〔陳 2010〕において、自分に強く影響した母と祖母の実態から、清末、中華民国時期において、「礼教」の婦徳観念に従い、姑に仕え、家計を管理し、一生を婚家

に捧げた「孝婦賢妻」の母親、若いころから嫁の奉仕を受け、熱心に土地売買の活動に参加した祖母、伝統的な家庭習慣から脱皮して、知識と自由を渴望した娘（蘇雪林本人）の三つの家族における女性のイメージを分析した。

韓寧平、熊遠報など〔熊、韓 2008；胡、韓 2009；韓 2010〕は、1930年代前後生まれの徽州女性が語ったオーラルヒストリーを方言のままで整理し、商人の妻、農民の妻、女性の労働者を分類し、中華民国時代における徽州の女性の生活が現実的に表現した。

上述した徽州の女性に関する研究から見れば、徽学には、女性と結婚、家庭生活などの問題について研究を行ったが、その中に徽州の女性の地位にあまり注目していなかった。たとえば、卞利、柯靈樞、王伝満、胡中生などの研究に、結婚の儀式の内容を説明し、結婚における徽州の女性の地位を分析しなかった。阿風は家庭における女性の権利と地位を研究したが、明代に限っただけである。韓寧平などは、徽州の女性に関して、中華民国時期および計画経済時期の家庭生活について、オーラルヒストリーを記録したが、彼女たちの家庭における地位について論じていなかった。女祠や貞節牌坊は徽州における女性の祭祀と表彰の証明であり、今まで規模や構造など紹介的な成果がある。女祠が女性の社会的地位との関わりについて、まだ認識が不足と考えられる。また全体で言えば、徽州の女性の地位に関する研究はあまり多くないため、各視点から幅広い研究ができるわけではないと考えられる。

第3節 概念の説明、研究方法と論文構造

1 概念の説明

徽州と徽州文化について述べる。宋代宣和3年（1121）から、徽州に徽州府が設置されて以来、1府6県（徽州府及び管轄したジャ県・休寧県・績溪县・黟県・婺源県・祁門県）の行政区画が形成され、現在まで影響を及ぼしている。山に囲まれた徽州では、中原の文化のもとで、明代と清代に、独自の徽州文化を生み出し、徽州という地理的、文化的な地区が形成した。徽州文化は主に徽州の宗族制度、土地制度、徽州商人、新安理学、徽州教育、結婚民俗などを指している。20世紀以降、婺源県と績溪县が行政区画の調整で、徽州の管轄地がなくなり、徽州も「黄山市」と改名したが、当地の人々は伝統に沿って徽州人と自称する。筆者は主に徽州文化圏の範囲で女性の地位と変化を研究し、また地元の人々の慣習を尊ぶため、本論に徽州という言葉を使用する。

徽州の女性について、女性とは、普段、成人した女と指す。本論は研究のため、徽州の女性という概念を結婚の状態に入り、まもなく結婚する女性、および結婚した後の女性に限定する。

女性の地位について、今まで統一な定義がされていない。社会関係の視点から、男性の地位を参照として、女性の地位を女性が社会関係における地位と定義したことがあるし、権力から、女性の地位を女

性が家庭、社会資源の支配権、決定権と選択権および社会に所有した声望と権力と定めることもある。

時間の概念について、本論が使用した時間の概念は中国の歴史学界に時期を区分する方法である。その中に、清末、中華民国時期の時間は1840-1949年である。1949年10月1日に中華人民共和国が成立した以降の歴史が、中国の歴史学界において二つの段階に分けられる。一つは社会主義建設時期、つまり計画経済時期で、1950-1970年代であるが、もう一つは改革開放時期で、1978年以降、改革開放政策が実施される時期である。

2 研究方法

本論では聞き取り調査および文献資料分析という二つの方法を使用した。

聞き取り調査：筆者はフィールドワークにおいて主に聞き取り調査によって資料を集めた。竹林村、梓源村、棠樾村など典型的な村を中心に、仙林村、新潭と隆阜地区の村を兼ねて調査を行った。インタビューの対象は主に村に住んでいる女性であるが、情報を全面的に収集するため、村の婦人幹部を含む村委員会の役人たちや村の男性にも聞き取り調査を行った。

また筆者は村に短期の参与観察を行った。村人の生活環境に入り、近くに研究対象の日常生活を考察するだけではなく、町出身の筆者が村社会の生活秩序をより深く理解できることに役立つ。

文献資料分析方法：本論では、徽州府、県誌の資料および結婚の礼単、帳簿などの古文書を利用し、徽州地区に女性が結婚、家庭、出産、養老などの資料を集め、分析し、聞き取り調査で得た資料を比較しながら、女性の地位を分析する。

3 論文構造

本論は7章で構成される。

第1章は序論であり、徽州地区の女性の地位を研究する原因と研究背景を説明し、徽州の女性を含む女性の地位に関する先行研究を整理した。また概念の説明と研究方法を説明し、本論の研究経緯と論文の構造を明らかにした。

第2章は調査地についての紹介である。まずは徽州地区（黄山市）の地理と社会経済の基本情報、徽州の宗族と徽州商人の歴史、および徽州の古文書資料の現状を説明し、また、調査地の竹林村の地理状況や経済事情と人口などについて説明した。

第3章は結婚における女性の地位を分析する。まず、結婚儀式的視点から、清末と中華民国時期、計画経済時期、および改革開放時期に、徽州の女性が結婚における地位および変化を分析した。また上述の三つの時期に、結婚贈与の内容と流れという視点から、徽州の女性は結婚における地位とその変化を

論じた。それによって、徽州の女性が清代から現在に至るまで結婚における地位と変化をまとめる。

第4章は出産観念、若い夫婦の暮らし向きと家計の管理、三つの視点から、徽州の若い嫁が家族における地位を分析した。

第5章は徽州の年取った「婦人家」の養老生活における地位を分析した。「婦人家」の養老方法、孫を世話する生活、および親類との交際に起きた変化を考察し、都市化が徽州農村の「婦人家」の養老生活に与えた家族と社会的地位の変化を究明した。

第6章は女性に対する社会的期待の視点から徽州の女性の地位と変化を分析した。女性に対する表彰は社会的期待を直接に表現する。本章はまず、貞節牌坊、女祠などの表彰および文献資料により、清代と中華民国時期における社会が女性に対する期待の内容を考察し、そこから徽州地区の女性の地位を分析した。また計画経済時期および改革開放時期に、徽州地区における女性に対する表彰を研究し、異なる時期に表彰内容の転換から徽州女性に対する社会的期待の変化を分析した。それによって清代から現在に至るまで徽州女性の地位の変化を論じた。

第7章は結論である。上述した各章の研究のもとで、徽州の農村女性の地位とその変化をまとめる。

第2章 調査地の紹介

第1節 徽州(黄山市)について

1 地理状況と地名について

本研究の調査地は筆者の故郷、安徽省黄山市である。黄山市はかつて徽州と呼ばれた場所で、北緯 $29^{\circ} 24'$ ～ $30^{\circ} 24'$ 、東経 $117^{\circ} 02'$ ～ $118^{\circ} 55'$ 、安徽省の最南部に位置し、浙江省と江西省に境を接している（地図1）。



地図1 黄山市の位置(筆者作成)

徽州はかつて新安とも呼ばれ、秦時代に歙県、黟県が設立されてから実に2200年もの時を経ている。現在徽州と呼ばれているのは、宋代に形成された「一府六県」（徽州府と歙県・黟県・休寧県・祁門県・婺源・績溪）を含めた範疇であり、徽州の文化を研究する徽学は主にその範囲を対象に研究を行っている。1987年に800年続いた徽州府が廃止となり黄山市が設立された。現在、黄山市は三区（屯溪区・黄山区・徽州区）・四県（休寧県・歙県・祁門県・黟県）を管轄下に置き（地図2）、その面積は9,807平方キロメートル、人口数は1,481,089人（2011年末時点）である。現在の行政区画では婺源は江西省の管轄下に、績溪は安徽省宣城市の管轄下に置かれている。なかでも黄山市は徽州の主要部を占めており、徽州文化の源とも見なされている。現在、婺源と績溪が黄山市の管轄区に所属していないが、二県の人々は徽州に対する相当高い帰属意識を持っている。それゆえ、筆者は婺源と績溪县を徽州文化

の地理的範疇に納める。

黄山市は丘陵地帯であり、民間でもよく「七山一水一分田、一分道路和莊園」（山が七割を占め、余った三割が川、田圃と莊園がそれぞれ一割を占める）と評されている。北西部には黄山山脈が、南部には天目山と率山山脈が位置し、中部は155平方キロメートルと徽州地区最大の徽州盆地が広がる。市内にある黄山は中国国内有数の山岳景勝地であり、1990年に世界複数遺産にも登録されている。

黄山市は中国の江南地区に位置する亜熱帯季節風気候の地域であり、四季の変化がはっきりしている。降雨は五月と六月の梅雨季節に集中し、土石流と洪水が頻発するほか、秋にはしばしば干ばつを引き起こす。

黄山市は水資源が豊富な地域であり、二つの川が市の外部と接している。東側は横江と率水が屯溪で合流し、新安江となって浙江省へ流れ、钱塘江に合流している。西側は祁門県内の閭江が鄱陽湖へ流れている。

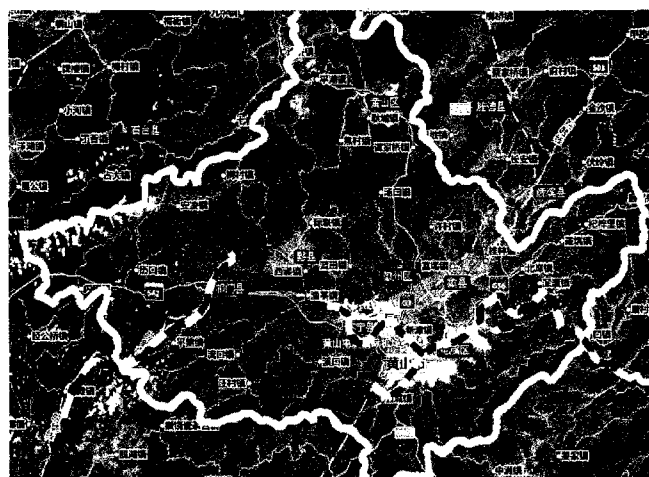
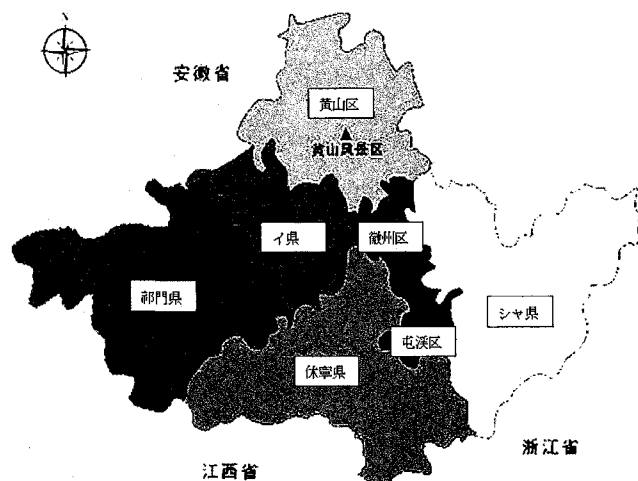
徽州は昔から新安江によって浙江省、江蘇省南部と繋がっている。

七割が山地を占める徽州では、狭い田地が山の谷間や盆地にぼつぼつと分布している。土壌は酸性で食糧の産量は低い、茶葉と林業が盛んである。

2 徽州の宗族と徽州商人

徽州は山に囲まれた閉鎖的な地域であるが、漢時代から北方の貴族が戦乱を避けるために徽州へと転居し、それがこの地における中原文化の伝播に繋がったといわれている。父系血縁を重要視していた貴族は何世代も経るうちに、徽州にも強い宗族社会を築くことになった。宗族文化とは、儒教を基礎としており、宗族内の血縁的つながりと地縁的つながりを強固にしながら、宗族の政治、経済地位と族人の団結力を強調する文化を指す〔唐 2005 : 7〕。

教育を重んじる徽州は宋時代から多くの文臣が輩出された。南宋から全国に広まった朱子の思想は徽州にも深く影響を与え、新安理学として形作られ、それは徽州の文化の柱となった。朱子学を学ぶこと



地図 2 黄山市の行政区画図及び地形図(筆者作成)

は徽州社会の伝統であり、朱子家礼が徽州人の生活と人生儀礼にとって規範となっている。それゆえに、徽州は「東南鄒魯」¹と称えられることがある。新安理学は宗族社会を固め、それに呼応するように、徽州の宗族社会は新安理学を促進したのである。

徽州において大きな宗族は名門とされ、そうした宗族は家庭と社会地位を重視し、宗族の声望を保つために婚姻の約束を取り交わす際、「門当戸対」、すなわち家柄の釣り合いを重視する。

「七山一水一分田、一分道路和莊園」と評されるほど自然に恵まれないこの地域にとって、増大する人口とそれを支える食糧は厳しい問題である。西晋の時期、新安郡には3,000戸しかなかったが、元代になるとその人口は80万人を越えた。こうして、徽州では隣接する浙江や江西からの水路・陸路での食糧調達に頼り、「一日米船不至、民有飢色、三日不至有餓殍、五日不至有昼奪」²という状態になる。大きな食糧不足が全国で商売をする徽州商人を輩出する社会的背景となった。〔馮 2008 : 37〕。

宋代に誕生した徽商は木材、茶、紙、墨などの徽州の特産品を扱い、臨安³や揚州で商売をした。明代には両淮地域の塩を専売し、揚州では徽州の塩商人が上位の売り上げを誇るようになった。⁴明代後期になると、徽州商人は塩の専売により、商売の範囲を全国及び海外にまで広げた〔馮 2008 : 41〕。その後、清朝の康熙年間から乾隆年間までの百年間は、徽州商人の全盛期ともいえる時代を迎える。巨額の財を得た商人たちは故郷に帰って「拓祠宇、置義田、敬宗睦族、収恤貧乏」⁵といわれる状況をもたらした〔許 2001 : 601〕。彼らは立派な家屋や祠堂を建て、文教事業に投資し、宗族の後輩に勉強させて官途に就かせようとしたのである。すなわち、徽州商人は経済と物質の両面から宗族を支えたといえる。商売を維持し、拡大するために、各家族や宗族の間には、何世代にもわたる付き合いと通婚の習俗が保たれていた。

巨額の富を得ることのできた徽州商人は揚州、杭州、蘇州などの大都市で商売し、そこで豊かな生活を手に入れ、贅沢な生活様式を故郷に持ち帰った。清代の小説や日記に、徽州商人の贅沢な生活について記録したものも少なくない。たとえば、『揚州画舫録』には「冠婚葬祭にややもすれば十万もかかる」と書かれている。⁶徽州の上層社会に見られた「贅沢婚」の風習も、そうした背景の下で形成されたと見ることができる。

3 徽州の古文書について

¹ 鄒魯は孔子の故郷であり、儒学も鄒魯学と呼ばれる。

² 「米を運送する船が一日来ないと、民衆がひもじい顔をする、三日来ないと、餓死者がでる、五日来ないと、白日にも米の掠奪が起こる」という意味である。

³ 南宋の時代の都、現在の杭州を指す。

⁴ 『揚州府志』巻十一において、揚州の塩商売人は「徽歙及山陝之寓籍淮揚者」として登場する。

⁵ 「祠堂を広げ、祠堂に所属する田地を購入し、族人を助け、生活に窮した人を救済する」の意である。

⁶ 『揚州画舫録』の一部を転載した『近代徽商研究』より引用したもの。

徽州の古文書は、徽州文書と通称され、徽州の歴史的に保存された官府の文書と民間の文書の総和である〔臼井 2003 : 96〕。官府の文書は官府が作成し発行したものであり、官印が押された。たとえば、土地売買に関する契約書、魚鱗図冊など税役に関する簿冊、科挙の試験問題、訴訟裁判の公文、呈文などがある。民間の古文書は租佃・土売買の文書、典契・当契・借金に関する文書、遺書・家産分割に関わる文書、人身の身分関係に関する文書などである。徽州商人の故郷には商業関係の古文書が大量に残されている。甲骨文、秦漢簡帛、敦煌文書、清内閣大庫档案とともに、中国における歴史文化の五大発見と言われる〔田口 2011 : 1〕。文書は一枚、数枚でワンセットになる文書及び装丁した簿冊など、さまざまな形態がある。材質はほとんど紙だが、「徽州地域に残された建造物である牌坊などに刻された記録なども「徽州文書」」〔臼井 2003 : 97〕と捉えられている。

1952年から中国が土地改革を行い、全国の地主の土地と財産を没収し、国有の財産になり、貧農層（土地を持っていない農民）に再分配した。それにより多くの契約書や古文書を廃棄したり、焼却したりした。その際に上海の古籍商人韓世保が安徽省共産党委員会の書記に進言し、古文書を守るため、1956年に屯溪の新華書店で古文書を組織的に収集し始めた。新華書店の古籍書店は約十万件の古文書を預かっていたと思われる。現在徽州の古文書の所蔵地は以下の通りとなっている。中国社会科学歴史研究所 1 万 4 千件、安徽省の省立と各地の档案館 8 万件以上、安徽省博物館 1 万余件、黄山市博物館 3 万件、安徽大学徽学研究センター 1 万件、黄山学院 3 万件である。その他、中国第一歴史档案館、中国歴史博物館、中国国家図書館や北京大学、北京師範大学などの大学にも総計 1 万件以上の古文書を保存しており、推算すれば全国の古文書は 20 万件くらいである。なお民間にも古文書が数多く残されていると思われ、10 万件を越えると推測している〔田口 2011 : 3〕。最も古い文書は中国国家図書館に所蔵された南宋嘉定 8 年（1215 年）の「祁門県吳拱売山地契抄白」である。最新のものは 1952 年に始まる土地改革前夜のものがあ

中国社会科学歴史研究所に所蔵された徽州の古文書の一部を整理して、写真版で 1993 年に出版した『徽州千年契約文書』に、宋・元・明時代の古文書 1869 件、清民国時代 2957 件を掲載している。章有義「明清徽州地主分家書選輯」（1987）に家産の分割に関わる文書を掲載し、安徽省博物館『明清徽州社会経済資料叢編』第一集（1988）に館蔵の山・土地・田地売買契約、分界、族産の合同、出継長子文書など 950 件を掲載した。第二集も 1990 年に出版された。

収集された古文書により、1980 年代から徽州の歴史と文化を研究する学問——「徽学」が次第に形成された。徽州の古文書を用い、当地の土地制度、村制度、経済史、宗族などが考察されている。

筆者は黄山学院で徽州の古文書を見た。整理して封筒に入れた古文書を専門室に置き、大学の図書館の最上層が古文書の展覧室になっている。今まで整理、撮影した古文書の目録では結婚についてのもの

を三十二件見つけることができた。三万件の所蔵に対して三十二件は僅かだが、結婚の古文書を用いて、徽州の婚姻を研究することは珍しいと言える。三十二件の古文書には清同治三年が（1864年）一件、民国時代が二十九件、時代不明のもの二件がある。これらの古文書はほぼ男性側から出した結納品を記録した「聘礼単」で、女性側から出した「礼単」は一件しかない。

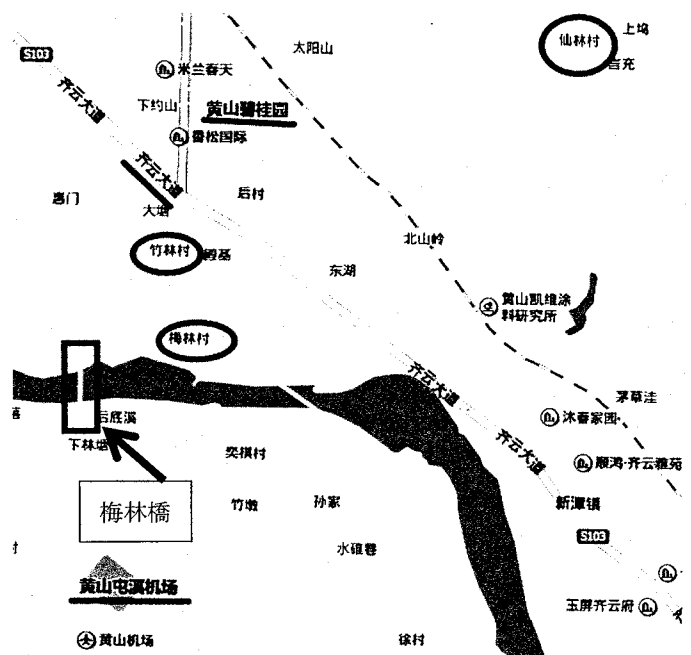
本論の第3章で、黄山学院に所蔵された同治3年（1864）の古文書『夫荣子貴』を使い、伝統的な結婚を分析する。

第2節 調査した村の紹介

筆者は博士コース三年間の冬休みと春休みを利用して徽州の村でフィールド調査を行った。本研究の主な調査地は竹林村であり、周辺の仙林村、梅林村、隆阜村、上資村などの村をも参照として調査を行った。上記の村は都市化の影響を強く受ける屯溪という町の近郊農村であり、比較のため、筆者は2017年2月に都市化の影響が少ない山村である休寧県源芳郷梓源村を選定し、農村の日常生活を観察した。また女祠と貞節牌坊を調査するため、2015年夏に、ジャ島の棠樾村、潭渡村、西溪南村、長齡橋村、澄塘村、徽州区の呈坎村、祁門県の渚口村、芦溪村、汪村、および休寧県の黄村に行き、女祠の写真を撮り、村史に詳しい古老をインタビューした。女祠に関する調査は第6章にまとめる。以下は主な調査地である竹林村を紹介する。

1 竹林村の概況

竹林村は黄山市屯溪区の北西部、省道である「斎雲大道」と「梅林大道」が接する所に位置し、交通が便利な村である。もともと休寧県に所属した竹林村は、現在屯溪区新潭鎮に管轄される。村道一本隔てた隣の村は梅林村であり、1952年に三つの村（梅林村、竹林村、引充村）から梅林郷を構成した。2001年から斎雲大道と大型ホテルの「黄山碧桂園鳳凰ホテル」（写真2-2-2）を建設するため、村の土地が急速に買収され、村人は斎雲大道の南に立ち退き、新築の一戸建ての団地に移住した。竹林村の東北には仙林村がある。もともと繋がっている二村



地図3 竹林村の地図（筆者作成）

が大型ホテルによって隔たれ、遠くなっている。竹林、梅林と仙林の村人が頻繁に往来し、通婚の家族も多く、互いに強い関係を保っている。竹林村の村人の紹介により、梅林村と仙林村で聞き取り調査を行うことができた。

斎雲大道に隣接する竹林村は交通の便がよい村であり、黄山市のバスターミナルより4キロ離れ、市内と黄山新幹線駅を繋ぐ専用のバスがここで停車する。黄山市の一番評判のいい高校はここから5キロ離れている。黄山空港まで直線距離が2.5キロだが、2010年から着工した梅林橋が現在も開通していないため、市内まで遠回ししなければならない。村人は梅林橋が早く開通し、空港からより多くの観光客が直接ホテルへ来られるように望んでいる。

1949年の解放前、竹林村は単一の稲作（早生稲と晩生稲）により、最低限の生活を維持し、農閑期になると、男性が近くの町へアルバイトに行き、賄い生活をした。女性は農作業以外、家で家事をし、子供の面倒を見た。解放以降、1958年に、竹林村では「人民公社」を成立し、竹林村と梅林村を「生産大隊」と改称された。現在に至るまで、50代以上の村人は竹林生産大隊という言葉を使用している。1970年代に、竹林村では全国と同様に「農業学大寨」活動が行われ、村人が生産大隊に率いられ、田地をつくり、水利工事を行い、「工分」をもらう生活を暮した。1982年から、全村における「分田到戸」が実施され、村人の生産意欲が高騰になっていた。1980年代から、村では稲作のほか、副業生産が発達し、ザトウキビ、スイカなどの経済作物を栽培し、養鶏場を建設した。2000年以降、ホテルや道路建設で田んぼが失われた村人は出稼ぎに行き、現在八割以上の若者が、市内や経済開発区及び近隣のホテルで働いている。ホテルと道路に近い農家は家屋を改装し、飲食店や売店を営んでいる。

2 竹林村の村生活

竹林村は現在、村人口が1408人（401世帯）となり、新潭鎮において人口数が一番多い村である。朝7時頃に子供を村の小学校に送ってから、スクーターで梅林大道を走り、経済開発区へ出勤する女性が多い。午後4時に祖父或いは祖母は孫を迎えに来て連れて帰る。6時くらいになると出稼ぎの村民は村へ帰り、家族と一緒に食事をする。竹林村の子供がいる女性は、その多くが楽な仕事で適当に家計を助け、夫と子供の面倒を見ることを生活の中心としている。

筆者は町に育ち、農村の生活にあまり詳しくないため、2017年2月に休寧県源芳郷梓源村に住み、農村の日常生活を観察した。梓源村は山間に位置し、町とつなぐ舗装した道路があるが、なかなか交通が不便な典型的な山村であり、政府に「貧困村」と認定される。村を興すため、2015年から「農家楽」（農村体験ツアー）を始め、現在まで三つの農家だけ「農家楽」を営んでいる。ほとんどの若者が浙江省に出稼ぎに行くため、村の日常生活があまり都市化に影響されていない。昼間は人が多く、村人が家の前の庭に座り、家事をしたり、

村の空き地に集まりおしゃべりする光景がよくみられる。お昼になると、村人は料理をいっぱい積んだ碗を持ち、自家の庭、あるいは他人の庭に行ってお飯を食べて、「馱飯碗^{トーフアンワン}」という徽州農村の伝統的な風習が継続されている。夜食事以降、中年の女性4、5人は暗い夜道を歩き、村の講堂で一時間くらいの「広場ダンス」を踊り、家に帰る。全村では、室外の娯楽活動があまりない。

しかし、竹林村では、朝と夕方以外、昼間は全村が静かで、あまり村人に合えない。若者は工場や町に出勤し、家の門が閉められるが、年配の人たちは家にひきこもって、テレビを見たり、家事をしたりして、あまり庭に出ない。天気がよい時に、孫を連れて散歩する祖母の姿が時々みられる。週末に休みの子供たちで村がにぎやかになる。夜食事後、街灯に明るく照らされる「斎雲大道」に沿って散歩する村人が多く、村委員会ビルの前に集まり広場ダンスを踊る中年女性が50人ほど以上いる。広場ダンスが始まる前に、早く来た女性は三々五々集まり、最近村に起きたことや、うわさなどの情報を交換する。若者の多くが屯溪の町に友達と夜食をしたり、映画を見たり、遊んだりして、夜十時以降車（あるいはバスやタクシー）で家に帰る。現在、ほとんどの竹林村の村民は、町の生活スタイルを模倣し、うちの生活が町の人と同様だと自慢している。しかし、結婚相手の選択、結婚、遺産の相続などの問題について、彼らは「我々農村の人だから（農村の慣習に従うべきだ）」という話を強調する。

現在、村人たちはほとんど「農民新村」（土地が収用された農民のために新しく建てた一戸建ての団地）に移住した。すべての家屋は外観が同様に、小さい庭がついた三階建住宅が5、6棟並んでいる（写真2-2-3）。2016年から敷地不足のため、村は16階のマンションを建て始める。これから敷地が収用された村人は敷地をもらえなく、高いマンションに移住せざるを得ない。それゆえ、一部の村人は、村のマンションに住むより、町のほうがよいと考え、「碧桂園鳳凰ホテル」の北西部に位置している「碧桂園」団地でマンションを購入する。彼らにとって、「碧桂園」団地は先祖代々が住んでいた土地であり、村人たちは深い感情を抱いている。

以上、徽州地区(黄山市)の地理と行政区画の基本状況、徽州の宗族、商人および古文書など歴史の背景について紹介した。また筆者が実地調査した屯溪区新潭鎮竹林村について、村の地理、交通、人口など基本の情報、村人の労働、住宅条件および日常生活と娯楽活動を概説した。徽州地区の文化背景および村人の生き方の総括的な印象について述べる。



写真 2-2-1 竹林村の村委員会ビルの入口

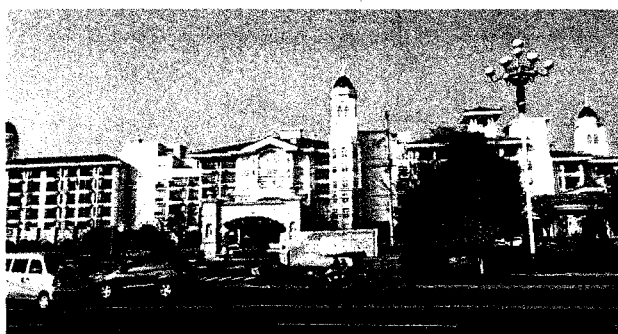


写真 2-2-2 収用された竹林村の土地に建てた「黄山碧桂園鳳凰ホテル」



写真 2-2-3 現在村人が住んでいた「農民新村」



写真 2-2-4 村の小学校と中学校

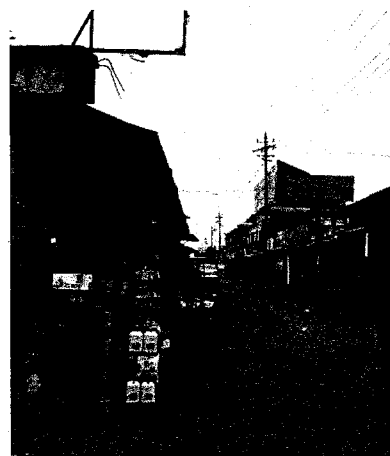


写真 2-2-5 竹林村と「斎雲大道」を繋ぐ細道

注：以上の写真は全部筆者撮影である。

第3章 結婚における女性の地位

はじめに

結婚の過程における女性の地位は、女性の社会地位の一部分に所属する。女性は結婚により身分が変化する。婚約から女性の身分は過渡期に入り、結婚の当日に一連の儀礼に則り娘から嫁への変身を完了する。二つの家族に関わる結婚において、嫁になる女性はどんな地位を持っているのか。また、社会が激変するなかにおいて嫁の位置づけはどのように変化しているのか。本章は結婚の帳簿『夫栄子貴』¹、結婚を歌った民間歌謡、および聞き取り調査により、結婚儀礼の実行と結婚贈与の二つの視点から、異なる時期における徽州農村の女性の地位の変化を研究する。

第1節 結婚の儀礼から見る女性の地位の変化

1 伝統的な結婚の流れおよび結婚相手の選択

(1) 伝統的な結婚儀礼

① 結婚六礼と流れ

中国の伝統的な結婚は、正式は「聘娶婚」と呼ばれる。つまり、嫁入り婚である。結婚により、血縁関係がなかった二つの家族は姻戚となる。結婚後、上に祖先を祭り、親孝行を行い、下に子供を育て、故に人々は結婚のことを大切にする²。親の意思と仲人の取り持ち（「父母之命、媒妁之言」）により、礼儀に則った結婚が行われる。いわゆる結婚は、新郎新婦個人より、現実的には双方の家族間の結びつきに大きな意義を持つ。

周時代に結婚の儀礼が決まり、『礼記』における「結婚六礼」——「納采」「問名」「納吉」「納徴」「請期」「親迎」³に沿って結婚式を挙げることは非常に重要視されてきた。宋時代に朱熹は『朱子家礼』

¹ 『夫栄子貴』は黄山学院の大学図書館古文書展覧室に所蔵された同治三年（1864）の古文書である。記録者は女性側であり、納吉から回門まで男性側、親友の間に贈与の往来、および嫁入り道具の内容を詳しく記録した。記録した時間が五月二十七日から来年の八月十三日までであり、何回により作成した帳簿である。同治三年夏月に帳簿を書き始めた。

² 原文は「昏礼者、将合二姓之好。上以事宗廟、而下以继后世也。故君子重之」である。（『礼記・昏儀』）

³ 納采：男性側が雇った仲人は贈物を持って女性側に求婚の希望を伝え、即ち求婚である。

問名：仲人を通し、男性の名前と生年月日時を書いた招待状と贈物を女性側に送り、女性の名前と生年月日時を問う。

納吉：名前と生年月日時により、2人の相性および相手の家族との相性を占う。結果が吉でも不吉でもかわからず、仲人を通し、贈物と共に女性側に送り、事実を知らせる。

納徴：男性側から高額な贈物を準備し、縁起が良い日に仲人と共に女性側へ送り、正式に縁を定める。

請期：男性側は結婚の吉日を決め、贈物と共に吉日を書いている「日子単」を女の家贈る。吉日の日付に異議があれば、また変更できる。請期の「請」は相手と相談し、決定を求めるという意味を持つ。

親迎：結婚する日になれば贈物を持って女性側に行く。婿は嫁の親と面会し、祠堂を排謁し、嫁を迎え、婚家へ行く。婚家で2人は「拜堂」をする（新郎新婦が天地の神、婿の親を拝してから、向かい合って礼拝する）。これが済むとす

に正式的な結婚六礼を「納吉」、「納幣」、「親迎」の三礼にまとめた。

徽州地区は儒教の文化圏であり、礼を重要視し、庶民でも結婚の儀礼に則った結婚式を行った。清末、中華民国時代に新式と旧式の二つの結婚式があったが、簡単な儀式を行う文明結婚は少なく、多数の人が煩雑な旧式の儀礼を行っていた。1937年『新運導報』には、結婚の一連の流れが、以下の通り記録されている。

(1)請庚：仲人が双方の家に結婚の話しを持ち掛け、女性の生年月日時を求める。

(2)合婚：男性側は女性の生年月日時を書いた紙を台所の「灶司亭」（かまど神の神棚）に置き、3日間にお皿やお椀が割れなく、お箸やひしゃくが紛失しないと吉といわれ、そして2人の生年月日時を占い師に占ってもらう。相性が良ければ男性側から3世帯の名前、身分を女性側に教え、女性側も同じ情報を返すが、良くなければ、女性の生年月日時を返す。

(3)行聘：女性側は赤紙に求めた物のリストである礼単を男性側に渡す。男性側は礼単により、縁起が良い日に贈与の結納を贈る。男性側は2人の生年月日時により、結婚日を決め、仲人が女性側に伝える。

(4)婚期：男性側が嫁の結婚の服とアクセサリーを女性側に贈ることは「上頭」であり、嫁入道具を婚家に贈ることは「陪嫁」と呼ばれる。男性側は提灯、御輿を準備し、嫁を迎えるが、婿が自ら迎えに行くことはない。婚家で新郎新婦が「拜堂」⁴の儀礼をしてから、嫁が交互に地面に敷いた二つの袋「接袋」を踏み、新郎新婦の部屋へ導かれる。司会者はナツメ、ピーナツ、竜眼、ハスの実を新郎新婦のベッドに蒔きながら、縁起が良い話を唱える。夜、人々は新郎新婦の部屋で「吵房」し、新婚夫婦2人をからかう。翌日嫁は台所へ行き、料理を作るふりをしてから、舅姑と年上の親戚に挨拶し、「拝見銭」をもらう。以上で結婚の手続きが終わり、新郎新婦は正式な夫婦となり、新しい家族ができたと認められる。

(5)回門：結婚した後の3日間、あるいは1ヶ月後に、嫁として初めて婿と一緒に実家に帰ること。

② 実際に行われた結婚の流れ

『夫栄子貴』に記載された実際の結婚の流れを時間的経緯から、表1に整理した。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	5月27日	6月10日	8月21日	12月18日	4月2日	4月30日	5月1日	8月13日
男性側		↓回単	↓送福履、 吉定	↓送年節、 日子単	↓行聘	↓上頭	↓発輿	↓回門
女性側	↑礼単							

表1 『夫栄子貴』に記載した結婚の流れ（筆者作成）

に結婚儀式を終えることになる。

⁴ 新郎新婦が天地の神、男性側の親を拝してから向かい合って礼拝する。

①と②は結婚における男性側から女性側に贈った必須品と贈答品に関する談合である。「礼单」は女性側が結婚の各段階に男性側へ請求した贈り物のリストであり、赤い紙に書いて仲人により男性側に贈る。5月27日に男性側へ礼单を贈り、その2週間後、6月初旬の10日に男性側から礼单への答え「回单」をした。

③送福履は「送鞋様」とも呼ばれる。男性側は婿と婿の親の靴のサイズを教え、嫁になる女性はそれにより靴を作る。それは、男性側が嫁になる女性の女工を判断する重要な方法である。男性側は送福履と同時に、吉定をし、結婚の話が正式に決められた。④は男性側が春節の贈与と共に、結婚の日取りが書かれた招待状を送った。⑤の行聘に結納が完納され、⑥の上頭に娘の成人式を経て、5月1日に結婚儀式を行った。3か月以降、若い夫婦は女性側の家に里帰りした。

筆者は中華民国時期に作成された結婚の礼单を参考した。その中に記録された結婚儀礼は「議婚」、「問名」、「納彩」、「納徴」、「請期」、「親迎」の六つの段階である。例えば、中華民国13年(1924)、葉氏宗族の裕徳堂(堂号)が作成した礼单(黄山学院図書館所蔵)に「礼目」(儀礼の順番)を書き、そして上述した六つの儀礼を後ろに並んでいる(写真3-1-1)。

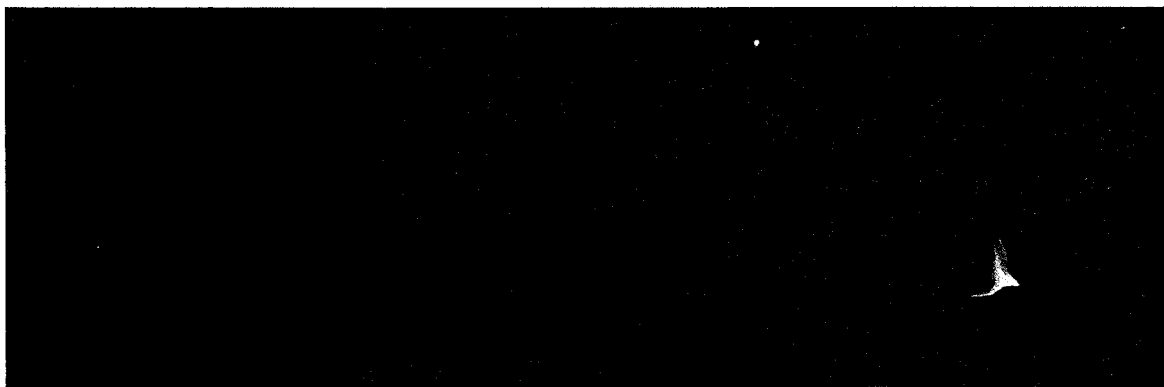


写真 3-1-1 葉氏宗族の裕徳堂が作成した礼单 (筆者撮影)

それゆえ、清末の『夫栄子貴』に記載された結婚儀礼も、中華民国時期の結婚儀礼も、結婚六礼に従い行われた。

漢民族は2千年も上述した儀礼の流れに従い結婚式を続けてきたが、時代の変化の中で各段階の呼び方が変わり、内容も合併、簡略化され、また実際の状況では結婚の流れを逆にすることもあった。結婚六礼、簡単化した三礼、徽州の結婚の流れ、『夫栄子貴』の回单に決まった儀礼(詳しい内容は表4である)および実行の流れをまとめ、表を作った。各段階の言い方はそれぞれ違うが、意味はほぼ同じである。

六礼	三礼	徽州の結婚の流れ	礼単に決まった儀礼	実行した儀礼
納采		請庚 合婚		
問名				
納吉	納吉	行聘	吉定	吉定
納徴	納幣		行聘	送日子単
請期				行聘
親迎	親迎	婚期	冠笄	上頭
			迎娶	発輿
		回門		回門

表2 結婚項目の比較（筆者作成）

実行した儀式の「吉定」は納吉と同じ意味であり、女性側が贈物を受け取ったら婚約が決まるということ。「行聘」は即ち納徴であり、結納金と結納品を贈ること。「送日子単」は結婚日付を女性側に伝えること。「冠笄」は元々女性が大人の髪型に変えることで、大人になることを象徴する。しかし、次第に単独で成人の儀式をしなくなり、結婚の儀礼のなかで嫁になり家を出る前に、顔のうぶ毛を刈ったり、髪型が変わったり、化粧したりし、冠笄の儀礼を行うようになった。「冠笄」は成人になり嫁に行くという意味である。「夫栄子貴」は初頭の回単に「吉定」、「行聘」、「冠笄」、「迎娶」の四つの項目が記されていた。その後、「吉定」、「送日子単」、「行聘」、「上頭」、「發輿」という流れで儀式が展開された。徽州地区における結婚式は六礼に則り行う。これは儒教を大切にする風習と関連していた。

儀式は二つ、三つの項目に纏め、簡略化した。儀礼を則り、結婚を行うことが大切だが、金銭や労働力を考える上で、民衆は便利のため、六礼を簡単化したこともある。婚約から結婚までの時間を縮めるか、贈り物の量を減らすか、それは断言できないが、回数を減らし、手続きが以前より簡略になっていた。基本的な順序は納徴してから請期するが、実行した儀礼では「送日子単」が「行聘」の前に行われる。まさに民間の結婚儀式が時間や経済の状況により、決められた流れに異なり、さらに反する場合もある。

徽州では、結婚はすべて男性側から始まる。男性側は相手を選び、仲人に頼み、女性側に結婚の意思を伝え〔休寧県誌地方志編纂委員会 2012：1393〕、主導的な地位を占める。若い娘および女性側は選ばれる立場であり、結婚相手を選択する権利を持っていない。

徽州地区での結婚の儀式は、各村で細かな相違点があるものの、基本的に「結婚六礼」に従い行われる。仲人や結婚式の司会者は結婚の流れの各コマまで指導する。結婚儀式については、各村に完全な台

本があり、結婚する女性は既定された台本により花嫁の役を演じる。儀式の流れについて異議も出せず、自分の事情で儀式を部分的に変更することもできない。花嫁は結婚の過程において服従の態度をとらざるをえず、まわりの人に合わせて儀式を成し遂げる。

結婚の儀礼において、女性には選択権と決定権がなく、受け身の立場で男性側の選択を受ける。結婚儀式では、花嫁は既定された流れにより、他人に導かれ、自分の婚姻を迎える。それゆえ、徽州の結婚儀礼において、女性は結婚式の始めから終わりまで、始終選択され、受け身の立場に位置づけられる。

(2) 結婚相手の選択

「父母之命、媒酌之言」（親の意思、仲人の取り持ち）で行わる伝統的な結婚では、親の意思が決定的であった。例えば韓が記録した徽州の女性のオーラルヒストリーには、胡さん(1928年生まれ)は次男に嫁をもらうため、直接結婚相手を選び、相手の母親と相談したとある。「次男の嫁の母親が最初はこの縁談を断った。うちは息子が三人いるので、いつか「捉壮丁」⁵されると向こうの母親が心配した。私は「捉壮丁」のことは心配しないで、絶対に連れられないからと保証した。それで2番目の嫁がきた」〔韓 2010: 28〕。この縁談は、双方の母親が合意すれば、2人は結婚することが決まる。

男性側が求婚する時の「求婚書」、男女2人の生年月日を交換する「年庚帖」、結婚の日付を伝える「日子单」は書式があり、当時の人々はその見本を真似して結婚の各段階に使う書類や招待状を書く。以上の書類はすべて家長の名義で作成され、向こうの家長に贈る〔郭 2005: 41、42、50〕。家長である親世帯が子世帯を代表し、親世帯の意思で結婚相手を選択する。未婚の娘が決められた結婚相手について決定する権限はあまりない。

結婚相手の選択に、親は男性側の社会地位や、経済条件および家柄など顕在的な条件によって婚約を決定し、娘の感情や意見をあまり考慮しない。家柄について、徽州では「門当戸対」（家柄が釣り合うこと）という思想が強く、多くの宗族は『族規』や『家法』に「良賤不婚」の規定を定め、これを犯す族人を宗族から追放されるほど厳しい罰を与える。現実の生活では家風を重視し、家柄が相応しい結婚相手を求める〔卞 2005: 173-174〕。

また「合婚」では男女2人の生年月日時（八字）を占い師に占ってもらい、2人の「八字」が合うと、次の段階に進む。徽州では、結婚をうまく進めるため、相手の「八字」に合うように娘の「八字」を調整する。民間には「十女九不真，改命做夫人」（うまく結婚できるように、10人の女性に9人が「八字」を変える）ということわざがある〔柯 2003: 178〕。若い女性は、結婚相手の選定や「八字」の占いなど結婚の相談の段階で受け身の立場に立つ。

⁵ 息子が拉致され、強制的に徴兵されること。

結婚当事者である女性について、文献資料にはあまり記載がなされていない。そのため、女性が結婚相手に対しどのような態度をとったのか、また、決められた結婚をどのように思ったのかなどに関する女性の考えは不明である。徽州では、結婚に関する民謡が伝承、記載されている。その民謡は結婚儀式が行われる途中で即興的に作られ、唱えられた歌である。その内容は、女性の結婚相手や婚姻に対する態度をある程度、表している。一例として、江がシャ県の北岸村で収集した「撒帳歌」〔江 2004 : 14〕を見てみよう。

撒帳正月梅占春，閨中處女望媒人。^①不知何處年庚對，早早回音好做成。

（訳：生年月日がどこで占っているか、早く結果を出して、結婚へと続くようにと未婚の娘が仲人に望んでいる。）

…

撒帳四月楊柳青，佳人日日不寬心。^②雖然收得名門禮，未識其人貌與名。

（訳：結納を受け取ったが、結婚相手の顔と名前はまだわからない。）

撒帳五月石榴紅，想看郎君面未逢。倘然听得傍人說，低头不語記心中。

（訳：相手に会いたいのが、なかなか会えない。ほかの人がちょうど結婚相手のことを話しているが、娘が尋ねなく、ただ聞いている。）

撒帳六月是新荷，不識牛郎貌若何。靜坐旁邊初思想，心中意欲問媒婆。

（訳：彼がどんな顔しているのかと仲人に聞きたいけど…）

撒帳八月桂花香，家家送節鬧嚷嚷。忽然听得才郎到，偷看一面也心寬。

（訳：中秋節に彼が送節に来て、こっそりでちらりと見たら安心した。）

撒帳九月菊花黃，登高飲酒看山光。見景生情心有感，^③期書不報自心傷。

（訳：期書がまだ来ないから、つらくて悲しいと感じる。）

…

撒帳子月是葭灰，^④迎娶星期未報来。想必今冬難了事，来年再看几時始。

撒帳丑月雪花飄，百般思想好心焦。但愿来年佳期早，相逢琴瑟自然調。

（訳：結婚の日付の書類がまだ届いていない。今年はたぶん無理だろう。来年早く結婚できるように願っている。）

この歌は、結婚の各段階に嫁になる娘が男性側の決定を焦って待っている心理を描写している。横線を引いたところ^{①②③④}から見れば、生年月日の占い、婚約の決まり、結婚式の日取りなどすべて男性側が主導権を持ち、女性側は待つしかできない。また嫁になる娘は、婿になる男性と接触がなく、結婚相手のことが全然わからない。中秋に送節に来た婿になる男性をこっそり、ちらりと見ることもできなかった。結婚前に結婚相手と会ったり、互いに話したりする娘は「婦徳」（伝統社会で女性が守るべき道徳）を守らない女性と噂された。この若い女性はきまり悪く、よく知らない結婚相手を知りたいにも関わらず、世間体のため、積極的に会いに行けない。北岸村の「撒帳歌」は、まさに女性が結婚相手の選択の際に、受け身の立場に立つことを表している。

「哭嫁歌」は、結婚当日、実家から婚出する前に、嫁と母親が泣きながら掛け合って唱えた民謡である。特定の環境と雰囲気ですぐに唱えられた「哭嫁歌」の歌詞から、嫁になる女性の結婚に関する態

度がわかる。

(1)「姆啊，汝何様舍得の啊…為某儿嫁到山庄去啊，爹娘狠心扯肚腸！」

(訳：母よ、惜しいと思わないか。娘の私を山の奥へ嫁に行かせる、親の心は冷たい！)

(2)「前世不曾修，嫁過南郷背茶婆。…不敢違背父母命，只怪自己命不好！」——104「背茶婆」

(訳：前世に修行しなかったので、南郷（貧しいところ）に嫁に行かせた。親の命令に反抗できない、自分の悪い運命のせいだ。)

(3)「瞎娘嫁女，嫁進深山石塔培…」——114「瞎⁶娘嫁女」

(訳：愚かな母が娘を山の奥へ嫁に行かせた…)

(4)「烘炉笑，外公来；喜鵲叫，外婆来…給外甥女做媒。做到哪一塊？深山老竹培…真是孤凄不好歪」——116「給外甥女做媒」(訳：叔父さんとおばさんが仲人して、甥娘を山の奥へ嫁に行かせた。(嫁が)独りぼっちで、寂しくて怖いよ。)

(5)「…旧社会，家教緊，爹娘專制瞎操心。算命做卦排八字，聽天由命不由人…」——155「婦女解放歌」

(訳：昔、娘が親に厳しく管理された。生年月日の占いで結婚相手を選び、自分の運命は自分で把握できない。)

引用した五つの歌詞には、嫁の嫁ぎ先である(1)の「山庄」、(2)の「南郷」、(3)と(4)の「深山」などの地理的状況に関する文言が唱えられている。例えばシャ県の南郷は、山に囲まれ、田地が少なく、経済的な状況が貧しいところである。「各家は自食用のトウモロコシを栽培する。その家庭は暮し向きのよい家庭ではなく、普段米や面をあまり食べられない」⁷ [劉・1997: 582]。このような基本的な食生活を保障できない貧しいところでは、生活の苦しさはいうまでもない。嫁は嫁ぎ先の状況に対する文句にかこつけ、婚家の貧しい経済条件に不満を表す。そして各「哭嫁歌」で、嫁が不平をいう相手は異なる。(1)と(3)では女性は親に不平を述べ、貧しいところに行かせた親の決定を責める。(4)は仲人であるオジとオバが経済条件の悪い婚家を紹介したことに不満を表す。(2)と(5)では嫁が自分の運命と「八字」がよくないと不満を述べている。上述した「父母之命、媒酌之言」という結婚の決め方と自分の運に対する不満は、実は女性の結婚における選ばれ方、扱われ方に対する不満である。「哭家歌」は結婚当日に嫁が実家を離れる前に行われた儀式の一環である。それが終わると、儀式は続けられ、嫁は自分の結婚を変えるという考えも行動もできず、親の決定に服従しなければならない。それゆえ、「哭家歌」の歌詞は、嫁が決められた結婚に従わざるをえないことを前提として、自分の運と地位を嘆き、不満を吐き出したものになっている。

親の命令に反抗できなく、貧しい家に婚出させられて不幸になると、親が決めたことを訴えながらも、自分の運命が悪いと思っている娘は少なくない。呉さんが「(夫と結婚するのは)私の運が悪いから、

⁶ 「瞎」の本義は目が見えないことだが、徽州方言には、良心がないという意味があり、ここで愚かと訳す。

⁷ 原文は「家家多种植苞芦以自食，非小康之家，几不易得米面为常食」である。『陶甓公牘』卷12『法制科・歙県風俗之習慣・飲食』。

それは親に決められた結婚で、仕方がない」と早く亡くなった夫に不満をいった〔韓 2010 : 31〕。自分の運命が自分で把握できない現実について、娘たちは仕方がないと嘆くしかできなかった。

伝統的な結婚には嫁の幸せについて、女性個人の感情より、家族の方が強調される。嫁の実家は結婚に関する往来の贈り物と金銭を詳しく記録した帳簿に「夫栄子貴」というめでたい名を付け、夫が出世し、息子が立派になるようにと願ったが、嫁のことを全然言及しなかった。嫁の幸せは夫婦良好な関係によって感じるものではなく、立派な主人と息子に恵まれることだと思われた。

以上、伝統社会における結婚の儀式と結婚相手の選択から嫁になる女性の地位を分析した。親の意思と仲人の取り持ちに行われた結婚は、家長に社会や法的に認められた完全な主導権が与えられているが、未婚の女性は発言権がない。婚約の決定、結婚の相談、結納の交渉、結婚儀式の実行において、若い女性には選択権や決定権がなく、自分の気持ちや意見はあまり考慮されない。彼女は常に選択され、受け身の立場に位置づけられる。この状況において女性たちは決められた結婚に反抗できず、不幸になっても運が悪いと思うしかない。

2 現在の結婚の流れおよび結婚相手の選択

(1) 現在の結婚の流れ

万新村の村書記姜さん(68)の話から、以下に結婚の流れをまとめた。

①「看人家」 年上の親戚や近隣の人が積極的に仲人の役割を果たし、若者に相手を紹介する。当時、男性側が仲人に頼み、女性側に結婚の話を持ちかけることが多かった。女性側は男性側の状況を調べるため、親世帯の親戚 10 人くらいが男性の家に行き「看人家」をする。女性側が満足であれば、男性側の家で昼食を食べる。気に入らない場合はすぐに帰る。

②婚約 男女 2 人の生年月日時は占わない。農閑期の週末に、婚約する二つの家族と男性側の親戚が集まって男性の家で簡単な婚約儀式を行い、昼食をする。料理は鶏肉、魚、豚肉、豆腐と肉を混ぜた団子の四品で、経済的に余裕があれば、八品を準備する。

③「送年節」 婚約以降、端午、中秋、春節の三つの祝日に婿になる男性がカゴ（または籠）一つ（中身が魚 2 匹、豚肉、赤紙に包んだ頂市酥（お菓子）、カシワの枝と実を付ける雲片糕（お菓子））、タバコ二カートン、お酒、肉まん、卵を持って女性の両親を訪れる。もし嫁の祖父と祖母がいれば、もう一つの小包（緑豆糕（お菓子）、月餅、頂市酥）を贈る。女性側は半分を返す。男性側の経済状況により結婚の準備時間を定める。大体半年から 2 年間くらいで、一番大切なのは家屋、小さくてもワンルームの部屋を準備する。部屋がないと結婚できない。

④「彩礼」（結納金と結納品） 男性側は「酒水錢」（女性側が披露宴をするお金）、「陪嫁錢」（嫁入り道具を準備するお金）、嫁の夏服と冬服各二セット、布などを贈り、女性側はお礼としてハンカチなどを贈る。布団、洗面器、水瓶、石油ランプ、枕、ゴザ、タオルなどの生活用品や嫁の服、靴、婿と舅姑に贈る靴などの嫁入り道具を準備する。

⑤「送日子」 結婚式の日取りの3ヶ月前に、仲人と婿はお金を入れた赤い封筒、コノテガシワの枝と実を付ける雲片糕と魚を持って「日子単」を女性側に贈る。魚がない場合は代わりにお金を紙に包んで贈る。紙に「代魚」（魚の代金）と書いておく。嫁側が受け止ってから魚を返し、仲人と婿にごちそうをする。

⑥「結婚式」 結婚式の三日間前に、婚家は新郎新婦の部屋を飾り、「囍」のシールを貼り付け、新しい真っ赤の夜具を準備する。結婚当日の朝、早めに婚家から仲人を始め、男女各2人がかご二つ、タバコ、飴などを持って女性側に行く。婚家が準備した嫁の結婚服を入れるひごのカゴも一緒に運ばれる。実家に着く直前に、爆竹を鳴らす。婿は嫁を実家から迎えるため、嫁側の人にかからかわれ、ドアを閉めるいたずらな子供たちに「開門礼」を、嫁の支度を手伝った女の子に感謝の「洗臉錢」などの小遣いを女性側の人に配る。実家では嫁を迎える人たちにお茶や味付け卵をご馳走する。嫁は不満や要求があれば、はっきりと仲人に話す。仲人はできるだけ根回しをする。実家を離れる前に、嫁と母親は泣きながら、即興の「出嫁歌」⁸を歌う。実家から婚家まで嫁の脚を地面につけることができないため、嫁は男性の兄弟に部屋から実家の入口まで背負われ、脚で地面を踏まないまま自転車の後ろに座る。嫁を迎えに来た男性側の女性1人が邪気を遮るため、赤い傘を嫁に差す。婚家へ行く途中に沿路の村の人たちに飴を配る。嫁と一緒に嫁入り道具を婚家に贈る。仲人は嫁入り道具に不可欠の紫竹（蚊帳つり用）とござを背負う。運ばれた嫁入り道具を庭に置き、まわりの人々に見せる。果物、飴、向日葵の種、ピーナツ、米粉菓（粉せんべい）13個、子供の靴2足を入れた「甥かご」を嫁の男性の兄弟が持って婚家へ行く。

婚家に着くと、婿が嫁を新郎新婦の部屋のベッドまで背負う。ベッドに棗、ピーナツ、竜眼、ひまわりの種を撒く。嫁は肉まん、味付け卵を軽く食べる。そして嫁と婿の2人は嫁の実家に帰って女性側の親戚のために披露宴を行い、ご馳走を振る舞う。午後3時くらいに婚家に戻り、婿側の披露宴が始まる。料理は鶏肉、魚、豚肉、豆腐と肉を混ぜた団子の四品が基本で、ひまわりの種、ピーナツなどのお菓子、野菜なども用意する。料理人は同村の村人であり、隣家の女性も手伝いに来る。新郎新婦の部屋で暴れる「鬧新房」はあまり行わない。

⁸ 1960年代まで、徽州地区には出嫁歌をする風習があった。嫁が歌った内容は親と離れたくない、嫁としての新生活が心細いなどである。母親の歌は大体娘と離れたくない、よい生活を願い、舅姑に孝行しようなどの言いつけである。間断なく歌う嫁は賢いと思われる。たとえば「口口吃油、身身穿綢」（毎日油が食べられる、シルクが穿ける）。

⑦里帰り 結婚式の当日に嫁の実家に帰る。実家が遠い場合は、当日嫁は帰らず婿の村の入口を巡回して里帰りのふりをする。実家に帰り、昼頃嫁側の親戚が集まり、新婚夫婦は嫁側の親戚を順番に挨拶し、年上の親戚からもらった祝い金を、杯を置く四角い盒に入れる。当日婚家に帰る際、嫁の母親は夫婦仲良くという意味するメス、オスの鶏それぞれ一羽と卵を入れた箱を送り、生活がよくなるようにという願いをこめて、サトウキビを新婚夫婦に食べさせる。披露宴では最後の魚料理が出ないと、婿は帰れない。早く帰るため、こっそりと飴とタバコを料理人にあげる。しかし、婿はその魚が食べられない。もし食べたら婿は嫁の実家の家族や親族に飲まされる。婿が酔っ払う場合が多いため、婿の代わりにお酒を飲む人がある。

(2) 計画経済時期（1950年代～1970年代）に行われた結婚

1949年中華人民共和国の成立以降、法律で自由結婚と一夫一妻制を実行し、童養媳、妾などの非正常婚が破棄され、若い男女が自由意思で恋愛、結婚し、親が取り決めた結婚は禁じられる。しかし、まだ保守的な思想が残る農村部には、自由恋愛で結婚する夫婦は極めて少なく、多くの若者が親戚や隣人の紹介によりお見合いをした。この時期、仲人は不可欠である。なぜならば、当時の村人たちは礼儀知らずとまわりの人に笑われたくないので、伝統の儀礼に従い結婚する意識がまだ深かった。仲人に紹介され、お見合いに行っても、若い男女はお互いにあまり話がかけられない。2人きりのデートは恥知らずと思われ、親あるいはたくさんの人がいる場所で会っていた。若い娘は直接に相手の家状況や個人状況を聞くことができないので、「看人家」に行った親戚や、知り合いの若い女性から相手のことを尋ねた。戴さんはそれについて、「現在の若い娘は満足するまで何人もお見合いできるが、当時の娘はほとんど最初に紹介された男性との結婚を受け入れた。あの当時は、みんなだいたい（経済状況）同じで、「一個蘿ト一個坑」⁹だ」といった。紹介された男性を拒否するのは彼女たちにとって恥ずかしいことであり、また2-3回男性を拒否した娘はまわりの人に噂され、評判が悪くなり、より結婚の縁談が来ないと心配するのが原因である。結婚相手の選定について娘の意見を多少受け入れ、結婚前に男女2人を合わせたのが、親が主導権を持っていた。また計画経済時期には、農村では集団労働が行われ、貧富の差が小さく、各家は私有財産があまりないので、男性側の暮らし向きがまだ決定的な結婚条件にならなかった。

計画経済の前期（1950年代～1960年代前半）は結婚式が極めて簡単であり、さらに式を挙げずに結婚する家が少なくなかった。当時の結婚は「看人家」、「送日子」、「結婚式」三つの段階で済んでいた。1952年に結婚した陳姓のお婆さんは村内婚を行い、双方の家族が男性側の家に揃い、食事しながら相談しあって、婚約が成り立った。そして都合がよい日に女性側から布団などを向こう側に運んでひとまず

⁹ 一本の大根は一つの穴を占める。各々がみな自身の場所を受け持つと比喻する。

結婚した。1956年に結婚した胡さんは、結婚当日に黒の衣装¹⁰を着て婚家に行った。「解放したばかりで、相手は部屋を借りるほどお金がない人だった。赤い布どころか、新しい布を手に入れるのが難しかった」と答えた。物資が乏しい時期には、結婚の儀式や縁起物に関する要求が下げられた。1960年代初大飢饉の状況において、1961年に結婚した呉さん（75）は、嫁の叔母さんに紹介され、婚約、結婚日取りの日子単など何にもないままに結婚した。結婚当日、嫁は歩いて婚家に行き、披露宴に四品の料理しかなかった。血縁関係が近い親戚が参加したが、お礼はあまりなかった。「贈り物どころか、飢え死にしないようにするのが精一杯だった」と呉さんがいった。1960年から1962年は自然災害で食糧の産量が激減し、休寧県にお米の産量が三割以上減産した¹¹。食品はなく、親戚や隣人も祝い金を出す余裕がなかった。経済状況が極度に悪い場合には、結婚の贈答や儀式は簡略化され、更にはなしになり、縁起物すらも妥協していたことがわかる。

1960年代後半から、結婚儀式が徐々に復活し、結婚の贈物も再開されている。文化大革命の時期は、派手な儀式や、伝統なやり方などが封建社会の残留として禁じられていることではないかと問われると、姜さんは「そこまでは至らない。結婚はめでたいことだから、正常な範囲で披露宴を行い、飴などを配ることができた。生年月日時の占いが禁じられた。これは迷信だから。その時みんなも貧乏で、嫁入道具や結納に拘らない、親戚と隣人をご馳走することにより、結婚が完成した」と答えた。戦後の貧困時期と自然災害の時期を越えると、「全国の経済は緩やかだが発展し、村には農村合作社の生産指導が急進派から現実的な指導に戻り、村民の生活も好転の兆しが見える」¹²。余裕がある状態において結婚儀式や贈物はまた蘇る。

（3） 改革開放以降（1978年以降）に行われた結婚

1978年から全国に改革開放の風潮が盛んになり、1979年に黄山市も生産責任制を始めた。それにより、村民たちの個人収入が増加し、生活も次第に豊かになっている。各家庭も経済的な余裕が出てきたことから儀式も回復しつつあり、贅沢になっている。お祝いのために、婚家は3日間、嫁の実家は2日間披露宴を行う。

80年代の結婚は、村ではお見合いのほうが主流だったが、当時結婚した女性たちは、「〇〇親戚に紹介されたが、その後は2人で話し合った」とよく話した。特に1980年代末に結婚した女性には、自分の結婚は自由恋愛であり、70年代の結婚とは違うと思う人は多い。李霞は張村で見たお見合いの状況を記

¹⁰ 中国の伝統意識に、結婚はめでたい色—赤を使うはずであり、白と黒が葬式に使われる色なので、結婚に不吉だと思われる。

¹¹ 『休寧県誌』により、休寧県の米産量は1952年が42321トンであり、1960年が28551トンに減らした。

¹² 典拠は11に同じ。

した：18才の娘と19才の男の子がお見合いに来て、双方とも母親と女性の親戚2人が同行した。一定の距離を保ちながら、お互いの相手を観察した。仲人である李霞の大家さんが根回しして「2人だけで話をさせたら」と勧めた後、若い男女2人は百メートルほど離れたところへ行って話をした。親戚や母親たちは「2人は盛り上がってるみたい」、「2人が気に入るのが大切だ」などと話しかけた。20分後、若者2人が微笑んで自分の集団に帰って、初めてのお見合いが終わった。夜に双方から結婚に向けて前向きに進めたいという気持ちを仲人に伝えた。〔李 2010：73-74〕。若い娘は自主的にお見合いの相手と話し合っただけで判断し、親は結婚相手を決めるのではなく、付き添いとして最初のお見合いに同行した。本人同士が気に入れば、付き合いが続けられる。若い男はよく女性側の家の農業や家事の手伝いに来て、娘は男性に手作りの靴の中敷きや、ハンカチなどを贈り、また2人で一緒に鎮の市へ遊びに行くこともあった。近年、携帯電話やインターネットの発展により、若者の交流は現実の顔合わせからインターネット、携帯電話でのチャットに移り変わり、親は把握できない。

相手を選ぶ基準について、多くの女性は「親が反対しない」ほか、夫になる男性について「相手が悪くない」と曖昧に評価したが、1980年代に結婚した仙林村の黄さんは夫について、「付き合った時に、彼の家は子供が多くて貧しいことがわかったが、私のことを大切にしてくる夫本人を気に入った」とはっきりいった。しかしごく一部の女性しか黄さんのように明白に「私にやさしい」という理由をいかなかった。現在、「満足するまで何十人とお見合い」する若い娘たちは結婚相手の条件を明白にいい出すようになった。1989年に結婚した程さんは「現在の女の子はよく分かっているね、どんな人と結婚するって。彼女たちの母は若い頃結婚について何にもわからないから、いろいろ苦労した。その結婚の経験談を娘に教える。何にもわからない当時の私たちと違って、現在の娘がすごいよ」と評価した。母親の結婚経験を基にして、現在の若い女性は、相手の自分に対する態度、および男性が自分に幸せな気持ちを与えるかどうかということにより、恋愛関係の結び付き、および付き合いの進展を決める。また学校を卒業して早くに就職する彼女たちは社会経験を積み、将来の生活についてより明確な目標を持っている。



写真 3-1-2(上) 壁に書いた「婚纱照」写真館の広告（筆者撮影）



写真 3-1-3(左) 若い夫婦の「婚纱照」（筆者撮影）

村では、恋愛中の若い男女が一緒に写真を撮るのが 80 年代のファッションであり、町の写真館に行ってカラーの結婚写真を撮り、結婚届に張り付けたり、親戚に配ったりするのが風潮であった。90 年代から屯溪の町にウェディングドレスを着て記念写真を撮る店ができ、10 年前から、結婚式の前に「婚紗照」^{フンサジアウ}（結婚記念写真）を撮ることが結婚の流れの定番になり、「婚紗照」の専門店が町から県へ広がり、村の壁にまで広告が書かれた（写真 3-1-2）。夫婦 2 人を撮る結婚記念写真だが、「婚紗」とは女性が着るウェディングドレスであり、完全に嫁のために行われることである。写真を撮る当日に、嫁はレンタルのウェディングドレスを 4、5 着替えるが、夫は嫁のドレスに合わせる衣服を着る。若い夫婦は写真館で大量の写真を撮影し、アルバムを結婚当日に新郎新婦の部屋に置き、見学の人々に披露する。しかし、その後、写真が棚に置かれたままあまり使われない。少なくとも 3 千元をかかる高額な「婚紗照」はもちろん男性側が出費する。ほとんどの若い男性は嫁が撮りたいから仕方がなく付き合っただけとあきらめた。若い女性は興味津々で自分の「婚紗照」を語った。「普段着られないドレスを着て、スターのような写真を撮りたい」とか、「一生に一回だけの体験だから、若い頃が一番きれいな姿を大切な思い出として残したい」とか、「まわりの人がきれいな写真を撮るから、私もしたい」などといった。家族や将来の生活にあまり現実的な意味を持っていない「婚紗照」は、嫁になる女性の気持ちを表す。小さいころからテレビやネットなどのメディアに接触してきた若い娘たちにとって、「婚紗照」のような写真は、彼女たちの幸せときれいな姿へのあこがれを満足させるものである。穏やかな生活のほか、彼女たちは幸せな感覚を積極的に求める。もともと婚姻届けに張り付ける写真は、男女 2 人の愛情の印になり、現在の若い娘たちが幸せを掴む手段となる。

親世帯は子世帯の結婚に対して決定的な地位が失われたが、大切な相談者の立場で子供に意見を出し、また結婚の各段取りのさまざまな手続きは親世帯によって行われる。若い女性たちは、徐々に結婚において自分の気持ちと要求を明言し、積極的に幸せの感覚を追い求める。

清末と中華民国時期には、結婚は完全に結婚六礼の流れによって行われ、嫁は結婚の「道具」として各段階に扱われ、異議を出すことはできなかった。親は結婚相手を選択し、娘の気持ちや意見をあまり考慮しなかった。女性たちは決められた結婚に反抗できず、不幸になっても運が悪いと不満をいうことしかできない。

1949 年解放後、結婚儀礼の伝統は、より簡略化された。新しい婚姻法では「父母之命、媒妁之言」式の結婚は禁止された。しかし、農村においては親が主導的な地位に立つことが普通であった。法律は女性に自由結婚の権利を与えたが、保守的思想が強い農村で育てられた若い女性は、結婚相手に対し、自分の要求をはっきりとさえいえず、またそれを表す勇氣もない。

1978年改革開放以降、結婚儀式は復活しつつあり、贅沢になっている。また西洋の結婚習俗が中国の村にまで浸透している。結婚式では嫁が主役になり、嫁の都合と好みで儀式を行う。多くの若い女性は、結婚についての自分の気持ちと要求を、はっきり述べるようになった。また、結婚相手に対する気持ちと、男性が自分に与える幸せな感じを、恋愛と結婚の大切な条件とする。

伝統的な結婚では、親が完全に主導権を持っている。未婚の女性には発言権、選択権や決定権がなく、始終選択され、受け身的な立場に位置づけられる。解放以降、結婚における女性の地位は、法律的には向上した。しかし、保守的な村では伝統に従い結婚する意識がまだ強かった。1978年改革開放以降、親の結婚に関する役割は減少し、相談者の立場で意見を出す程度である。若い女性の結婚における選択権は大きくなり、彼女たちは自分の意思で結婚を決めるようになった。

第2節 結婚の贈与から見る女性の地位の変化

1 伝統的な結婚の贈与

徽州の古文書には、結婚の礼単と帳簿が数多く残されている。その礼単と帳簿の中には、結婚の贈与について詳しく記録したものがある。ここでは清代同治3年(1864)の古文書で、女性側が作成した結婚に関する帳簿『夫栄子貴』を中心として、清末、中華民国時期における徽州の結婚の贈与について分析する。

(1) 男性側が贈った贈与

『夫栄子貴』に記載された男性側と女性側、女性側と親友との間で贈ったり、贈られたりした贈与を時間的経緯から、表3に整理した。礼単は女性側が求めた結納リストであり、回単は男性側が女性側と交渉した後、決めた結納である。

①		男性側	←礼单	女性側		女性の親友
②	6月10日		→回单			
③	8月21日 送福履、吉 定		→盒満肩（糕、肉、寿桃、魚 代、金十元）			
			←盒満肩（糕、蛋、寿桃、魚）			
④					→寿桃	
⑤	12月18日 送年節、日 子单		→盒六元（糕、肉、寿桃）年 花代、日子单 ←糕、魚			
⑥	{				→寿桃	
⑦	4月2日 行聘		→盒一肩（糕、肉、魚、饅頭）、 日子書、礼書、筆墨匣、首 飾、金三十元			

		←盒一担(寿桃、糕、魚、蛋)、 筆墨匣		
⑧	4月30日 上頭	→茶盒二元(糕、魚)、旺相、 服、燭、芋頭		
⑨			→三元	
⑩	5月1日 発輿	→子孫桶、送親礼、門門礼、 下書礼、菓盒一個、茶料盒 一担、望娘盒 →(三朝)茶料盒二担、籃一 只、盒二元、帖、 ←一担		
⑪	8月13日 回門	→盒一肩、姨太提盒一個、通 手提盒一個、茶桃、喜桃、子 婿帖、謝酒帖 ←子婿帖、眷弟帖、眷侍生帖	→仲人、介添えへお礼 ←茶四盃(二房三太爺)、 茶四盃(三房九太爺)、 茶四盃(三房七太爺八太 爺)、帖(眷侍生)	
⑫	8月14日	←回門盒一肩、提籃一只、中 秋節盒一肩	←提盒(姨太) →回拝帖	

表3 贈与の流れ(筆者作成)

①と②は結婚における男性側から女性側に贈った必須品と贈答品に関する談合である。

③、⑤、⑦、⑧、⑩は回單の項目により、結婚の各段階で贈答品を贈った。「→」は贈答の流れの方向を表す。吉定、送日子單、行聘、発輿の四つの日に、女性側は贈り物を受け取った後、返礼をした。毎回の返しはほぼ同じ、魚、糕、寿桃と蛋である。

男性側から受け取った寿桃を女性側は、④、⑥、⑨に「本房親友」へ配った。

⑪、⑫は里歸りをして女性側と男性側および女性側親友の間の贈答往来を行った。

以下は礼單と回單の比較である。

		礼单	回单	
送福履*・吉 定	履儀*	二十四金*	礼儀	十金
	菓子担*	双肩*		
	鮮肉	四十觔*	喜盒*	満肩
	鮮魚	二十觔		
	三元*	百二十斤		
行聘	礼書*	四十双付	二十双付	
	書套*	百六十金	八十金	
	花紅	十二金	六金	
	首飾	全福	全福	
	大担*	十六金	八金	
	鮮肉	六十斤	四十斤	
	鮮魚	四十斤	二十斤	

	三元	百二十斤	六十斤
冠筭	茶儀	十二金	六金
	菓子担	八金	四金
迎娶	大担	十六金	八金
	鮮肉	六十斤	四十斤
	鮮魚	四十斤	二十斤
	三元	百二十斤	六十斤
	喜蛋	二百元*	百元
	紅燭	六十斤	三十斤
	花紅*	十二金	六金
	公堂礼	十二金	六金
	大門礼	四金	二金
	小門礼	二金	一金
	送親礼	四金	二金
	門門礼	一金	一金
	乳母担*	八金	四金
	福首担* ²¹	成肩	成肩
	旺相* ²¹	二十対	二十対

表4 礼单と回单（筆者作成）

まずは表4に出た贈与を説明する。

送福履：「送鞋様」ともいわれ、婿と婿の親の靴のサイズを女性に教えること。

履儀：送福履と共に女性側に贈るお礼（金銭あるいは贈答品）である。

二十四金：「金」は金銭の単位である。古代から中国に「銀両」と「銅銭」2種類の金銭が流通し、銀両の単位は両、銭、分、厘（り）であり、銅銭の単位は文である。銅銭と銀両の為替は大体銀1両＝銅銭1200～1500文であり、本文に1200を基準として計算する。

菓子担：一担のお菓子。担は計量単位であり、昔の人は天秤棒で二つの籠に掛けた荷物を一担と計る。

双肩：一肩＝一担。

觔：觔＝斤＝250g、計量単位である。

喜盒：糕、豚肉、魚、寿桃などを入れる盒であり、計量単位として贈物を計算する。

三元：ミートボール、魚肉ボール、エビボールという説があるが、本帳簿によれば、寿桃の可能性が高い。

礼書：招待状。

書套：招待状の封筒。

大担：菓子担と同じ、贈物の計量単位であり、豚肉、お米、鶏などを入れる籠二つを天秤棒で担う。内

容物と量により、価値が違う。

二百元：蛋の計量単位、元＝個。

花紅：方言である故、まだ分らない。

公堂礼：祠堂に差し上げる金銭。

大門礼：嫁の家に入るためあげる金銭。

送親礼：嫁を贈る女性側の人にあげる金銭。

乳母担：嫁の母への贈物。

福首担：大担と同じ、内容物により、呼び方が違う。

旺相：トーチ。

比較すると、男性側が礼単に「首飾」「門門礼」「福首担」を除き、「鮮肉」が3分の2、「送福履」においては女性の要求に対して五つの求めが「吉定」の二つと、他のものは全部半分まで減らしている。結納品の内容と数量はどう決まるのだろうか。文献資料によると、男女両側は結納について繰り返し相談する。その順序は、まず女性側から礼単を起草し、結納金の金額や結納品の内容物、数量など具体的な要求を提出する。男性側は仲人を通して、リストされた結納について交渉する。交渉が成功すると、男性側は正式に新しい礼単を書き、女性側に送り、結納の金額や数を確認する〔績溪县地方志編纂委員会 1998：1043；歙県地方志編纂委員会 2010：960；休寧県地方志編纂委員会 1990：585〕。結納の内容物と数について、女性側が起草した礼単のリストおよび男性側の交渉は、一定の根拠により決められる。それは徽州当地における結婚の習俗によって決められたものだけではなく、当時の経済状況と男性側の収入状況も重要な決め手になる。礼単については、起草、交渉、決定に至るまで、双方の親が相談者である。

男性側の贈り物には、食品である「非干礼」と金銭である「干礼」の二種類がある。

清代末期の『夫栄子貴』に記録された礼単は、回数と量から見ると、食品である非干礼が圧倒的な地位を占めた。そのうち、豚肉、魚、饅頭（寿桃）、糕の四つの食品は結婚の各段階に必ず見られる。これらの食品は量が多いが、すべて女性側が受け取るわけではない。毎回「非干礼」を女性側は受け取った後、すぐ価値が相当な物を返す（表3）。その中に男性側が贈った糕と魚をそのまま全部返した。魚1匹が「有頭有尾」（尾頭付き）であるのは、最初と最後をしっかりとまとめるという意味を象徴している。糕と魚を全部返すのは「有頭有尾步步高（高と糕と発音が同じ）」という意味であり、他のお返しは「有来有往（付き合って交際する）」という意味である。受け取ったままで糕と魚を返さない家は礼儀知らずと笑われる。男女両方の間に贈ったり贈られたりした非干礼はただの食品ではない。贈り物を

受け取るということは「共同関係を締結したいという意志、またかかる関係を持続したいという意向を示す」〔モース 1962 : 85〕ものである。面倒を嫌がらずに非干札の交換をすることにより、双方は結婚の各段階の完成を確認した。

干札には、儀礼の金銭を除き、贈与を金銭に換算して贈ったこともある。よく金銭に換算されたものは魚である。閩の調査には 1980 年代以降、下岬村の村人が結婚の贈与を金銭に換算することが多くなる〔閩 2000 : 173〕。その現象は商品経済が発達した時代の表現であり、自然経済にあまり多く出なかった。この時期の干札はほぼ儀礼の金銭であり、表 4 の「大門札」、「送親札」、「公堂札」などである。結婚当日に、女性側の親戚が嫁迎えを阻む——男性側がお金を出す——女性側が同意するという儀式により、女性側は「簡単にうちの娘を渡さない」という態度を表し〔費 2010 : 131〕、男性側は嫁の実家のほうが地位が高いと認める。女性側の親戚が男性側のにあら探しして喧嘩することを「争発」と呼び、これにより雰囲気は盛り上がり、喧嘩するほど吉である。

儀礼の金銭で最も高いのは嫁の宗族の祠堂に差し上げる「公堂札」である。『夫荣子貴』だけではなく、他の結婚の礼単にもそのような状況がある¹³。宗族を大切にした徽州地区では、結婚とは、単なる家庭の行為だけではなく、一宗族に父系血縁の継続と関わるものとされる。個人や家族の重要な行為は宗族に報告すべきものである。ゆえに、娘の婚出と嫁のもらいを必ず実家と婚家の祠堂に報告し、族人に知らせる。

男性側の贈与で、嫁と関わるのはアクセサリーの「首飾」だけである（帳簿の嫁入り道具に出現した）。ほかの贈与リストに¹⁴嫁と関わるものは頬紅、布、絹など少量の化粧品と織物だのみである。大部分の男性側の贈与は、女性側を対象として準備されたものである。その贈与は、実は女性側が求めたものであり、すなわち、当時の男性側が贈った結婚贈与は、結婚儀式のため準備したものである。

中国の伝統的な結婚には、生年月日時を占わない時、不吉の場合があるので、婚約がまだ決められないと、納吉から婚約が決まる¹⁵〔陳 2004 : 171〕。贈り物を「受取ることによって生ぜしめられる法的状態を表している……取引が結ばれたものと見なされる」〔モース 1962 : 85〕。つまり高額な贈与を受け取ったら、婚約が締結され、覆さない。双方、さらに双方の家長の間での結婚の贈物の交換は、結婚という契約の履行を保障する一方、結婚の流れをつつがなく進め、各段階の完成を確認する証拠である。

(2) 嫁入り道具の準備

¹³ 筆者の修士論文『中国農村における結婚の贈答に関する研究—安徽省黄山市休寧県を例として—』（2014）に添付②③④⑤⑥を参照。

¹⁴ 注 13 に同じ。

¹⁵ 本文は「未卜時、恐有不吉、婚姻不定、故納吉乃定也」である。

類別	名称	数量	価格	%
A 類 アクセサリー (34 件)	髪飾り	22	53.32 元	57.82%
	腕輪	8		
	指輪	2		
	ピアス	1		
	その他	1		
B 類 服 (41 件)	服	8	12.97 元	14.07%
	ボタン	3		
	布	25		
	帯	2		
	靴	2		
	その他	1		
C 類 生活用具 (19 件)	寝具	4	8.13 元	9.01%
	化粧箱	2		
	風呂敷	2		
	その他	11		
D 類 金銭 (5 件)	手間代	4	7.49 元	8.12%
	金銭	1		
E 類 食品 (1 件)	食品	1		
F 類 読み取り不可 (6 件)		6	10.3 元	11.17%
		106	92.21 元	

表5 嫁入り道具の分類（筆者作成）

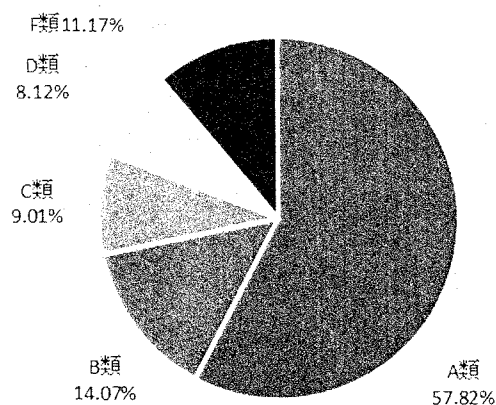


図1 嫁入り道具の内容物の比率（筆者作成）

表5は清代末期の『夫栄子貴』に記載された嫁入道具を五つの種類に分け、別々に金額を統計している。嫁入り道具は全部で106件、総額が94.19元¹⁶である。そのうち、アクセサリー類が34件、53.32元；衣服類が41件、12.97元；生活用具類が19件、8.31元；金銭類が5件、7.49元である。

清時代の徽州府知府（知事）であった劉汝驥は、200元の贈与を求める礼単が普通であり、このような高額な結納品を請求した悪習¹⁷を批判した。毛立平の分析によれば、清代後期に二百円で体面がある嫁入り道具を準備できる〔毛2007：30〕。上の礼単に、結納金286元を女性側は請求し、『陶甓公牘』に記載してある話と合っているが、男性側から戻ってきた「回単」は半分まで減らしている。実際に渡した結納金は約140元であり、当時の田地約130畝の収穫高に相当する¹⁸。毎回男性側の贈与を受け取った時、女性側はすぐ価値相当のものを返す。また百元の嫁入道具と合計は、ほぼ結納金に相当し、さらに結納品を越えるほどである。清時代にこのようなことわざがある：「小戸人家売女売儿，中戸人家将女嫁女，

¹⁶ 筆者は銅錢(文)と銀兩(元)の両替率を1200：1で統計し、総額が92.21元である。

¹⁷ 劉汝驥は徽州の一府六県の環境や民俗などを『陶甓公牘』に詳しく記録する。「聘用財或墨銀百圓至二三百圓不等…」、「開一礼単送男家去廩費以二百圓為中数三兩也」。

¹⁸ 同治四、五年に、米一石～二石が約一元であり（ここは1.5石で換算する）〔王2002：113〕、モミと米の還元率が100：70として、清代の田地平均産量は2.37石/畝である。〔朱2005：14〕

大戸人家貼錢嫁女」（貧しい家は結納品をもらい、嫁入道具を準備しない；普通の家は結納品と同じ価値の嫁入道具を準備する；お金持ちの家は結納品を超えるほど嫁入道具を準備する）〔毛 2007：11〕。

『夫栄子貴』に記録された嫁入道具の内容と毛、柯がリスト化した嫁入り道具を比較すれば、『夫栄子貴』を作成した女性側がより豊かな家ということがわかる。

図1の「嫁入り道具の内容物の比率」には、嫁個人の生活用品であるアクセサリーと衣服は嫁入り道具の70%以上を占める。アクセサリーは、種類が豊富で、髪飾りからピアス、指輪、腕輪まで全部揃え、材質から見れば真珠、金、瑪瑙、脂玉などの貴金属と宝石で作られた。また異なる素材と色の服と布は数量が多く、結婚後に長年使える。清代には、大部分の娘が親に嫁入り道具を準備してもらう〔毛 2007：44〕。娘が婚家でよい生活をするように、できる限り豊かな嫁入り道具を準備したいという親心が見られる。また実家から持参し長年使えるアクセサリーや服は1人で知らない婚家へ嫁に来た女性にとって、緊張感を消し、慰めるものである〔毛 2007：21〕。屯溪の呉さん（90）の話によれば、彼女が若い頃、お金持ちはアクセサリーや服だけでなく、棺おけまで嫁入道具にする家があった。うちの娘は嫁にいくが、死ぬまで婚家のものを使わないという娘への思いやりで、婚家における嫁の地位を保つため、多様な嫁入道具を準備した。徽州には嫁入り道具を婚家に贈る時、テーブルの上に置き、展示する風習がある。まわりの人々に見せることは嫁の実家の豊かさ誇示する一方、嫁入り道具の内容を確認してもらう意味がある。

多種多様な嫁の個人用品に対し、嫁入り道具には新しい家で使うための道具が少なく、蠟燭台、洗面器、寝具など細かい生活用品が19件しかなかった。徽州地域には新郎新婦の部屋、ベッド、簞笥、椅子などの大型生活道具は全部男性側が準備する風習がある。嫁の私有財産とする嫁入り道具があくまで嫁の身の回り品であり、嫁は男性側が準備した部屋や大型生活道具に関する意見や発言権がない。

嫁入り道具はもちろん家の経済条件に応じて物を準備するが、清代には、家の貧富を問わず、経済の条件さえあれば、多少嫁入り道具を贈る¹⁹〔張 2003：151〕。毛は異なる階層の女性の嫁入り道具を記録している〔毛 2007：16〕。生活が貧しい再婚の女性の嫁入り道具は「止銀簪、耳輪、戒指、衣裙寥寥数件」（銀のかんざし、イヤリング、指輪と衣服だけで、きわめて少ない）であり、下女の妹は嫁道具に布の服30枚と稀に皮ごろもがある。また『夫栄子貴』のように各種類のアクセサリーや衣服が揃っている豊かな嫁入り道具を持つ女性もいる。

徽州では、輿に乗れる嫁がより経済条件がよいと見なされるという年配の女性たちの証言があった。1946年に結婚した黄さんは、実家と婚家がシャ県の唐模村だが、輿に乗って婚家に行った。黄さんの嫁

¹⁹ 『中国風土志丛刊』NO.13『北平風俗類徴』、原文は「不論大小戸、貧富不等、但有一線之路、都得賠送点嫁粧」である。

入り道具には布団類と衣服以外、おまる、火鉢、櫛、はさみ、自分で作った靴などがある。家計が貧しい家が準備した嫁入り道具は少なく、1人で運べるので、「一担挑」と呼ぶ。さらに童養媳²⁰であった許さんは農業の鎌一つを持って婚家に行った。嫁入り道具は、ほとんどの嫁になる娘のほか、再婚、婿入り婚、冥婚などの嫁も持っている〔毛 2007:2〕。

以上、結婚の嫁入り道具について分析した。親ができる限り豊かな嫁入り道具を準備するのは、家族を離れる娘に対する思いやりを表す。さらに、高価な嫁入り道具によって、娘の婚家における地位を高める効果もある。しかし、嫁入り道具は多種多様な個人用品にわたるため、親の若い夫婦家庭に対する支援には限りがある。

(3) 女性側の親友が贈った結婚祝い

清代末期の『夫栄子貴』には、女性側が男性側から贈物を受け取った後、親友に配った寿桃、および親友のお返しが記録されている。贈与の相手、内容物、および数量を表6に表す。

	親友の 居所	親友	一回目 (寿桃)	二回目 (寿桃)	三回目 (三元)	親友返礼
1.	埭田	汪五爺	六十個 肉二斤	三十個	二合 十二 双 肉二斤	* 盒二元(染包四) 礼 (篋四、漆扇一、粉)
2.		載之兄	十二個	八個		
3.	西溪	汪宅	二十個		六双	
4.	長林橋	大姑奶々	二十個		寿桃三十	* 草染包二個(花生二、 棗二) 花(生)二、燕尾 二、篋四、粉
5.	羅田	五姑奶々	二十個		四双	
6.	羅田	三太爺	二十個又 另二個		四双 又四 双	茶四盒(蛋、月餅、桂圓、 棗)
7.		杏姑	八個			
8.		東苟奶	十二個		二双	
9.		姨太	十二個	六個	二双	* 提盒一個、草染包二(花 生、棗)
10.		兆華司	八個		寿桃十二	
11.		春和元妹	四個			
12.		鮑授翁	四個	四個		
13.		二、三相	每六個 又十二個			
14.		大二小娘	十二個			
15.		緑華				

²⁰ 幼女をもらって育て、年ごろになって自分の息子の配偶者とする旧中国の風習である。

16.		家人人 男二女四	二十四個	男每四個 女每四個		
17.		月老順姑	二十個		二双	
18.	喝田	老四	八個			
19.		汪載汜			四双	
20.	梅村	葉宅			四双	
21.		八太爺			四双	茶四盒（糯米糰、糕、桃酥、条糖）
22.		九太爺			四双	茶四盒（蛋十個、包一盒、厚糕、麻片糖）
23.	西溪	大姑娘				*草染包四個（花生、棗）
24.	羅田	方宅				*草染包二個（花生、糖棗）絨花、草花

表6 女性側と親友の贈答のやり取り（筆者作成）

吉定、送日子単、行聘に、女性側は贈り物を受け取った後、「本房親友」（血縁が近い親友）に寿桃を配った。親戚のお返しはほぼお菓子である。第一回に送られた96%の寿桃が親友に配られた。寿桃は、9人が1回のみ、また9人が2回、汪五爺、姨太の2人は3回全部配られている。結婚した後、女性側は主要な仲人である汪五爺に感謝するため、フカヒレ、シジミ、豚足、お菓子など高価な物を贈った。仲人の謝金は男性側が3分の2を負担し、女性側が3分の1、嫁が婚家に入る後、全部払い切った〔柯 2003：178〕。帳簿に記録した親友の「送嫁」（親友が贈った嫁入り道具の補助）は表6の「*」を付けた部分であり、お菓子以外に、櫛や布で作った安い髪飾りなど手軽なものを贈った。親戚が贈った贈与はほぼお菓子であり、回門当日に来た客を招待することに使われる。

また帳簿に年上の男性の親戚が「○房○太爺」と記入されている。これは回門の時、女性側の親戚「二房」「三房」「四房」「五房」「七房」「八房」「九房」に招待状を送ったということで、嫁側の宗族が大きい家族と考えられる。

昔、用事で他人の宅を尋ねる前に、「帖」（名刺）を渡し、知らせる習慣がある。回門の時、女性側は男性側および親戚の間でこのやり取りをした。新郎新婦を迎えるため、男性側に「眷生帖」を贈る。新郎新婦が嫁の実家に来るとき、新郎の「子婿帖」以外、「眷弟帖」もある。「眷生」、「眷弟」とは、姻戚関係を持っている同世帯の男性の謙称である。つまり回門は、せめて名義では、新郎新婦が双方の家長の指示で行われた活動である。また、回門に来た女性側の親戚が渡した名刺にも、「眷侍教生」「姻侍生」の家長が子、孫、甥を率いて女性側の家長を祝う。「結婚が家長に取り仕切られ、主宰者は結婚当事者の親が多い」〔柯 2003：202〕ため、お祝いや贈与のやり取りが家長同士の間で行われた。

以上は清代末期の帳簿『夫栄子貴』により、結婚に男性側と女性側、女性側と親友の間に贈ったり、

贈られたりする贈与を分析した。男性側が贈った結納には食品である非干礼が圧倒的な地位を占めた。家長間の結婚の贈物の交換は、面倒を嫌がらずに非干礼の交換をすることにより、結婚という契約の履行を保障する一方、結婚の流れを安らかに進め、各段階の完成を確認する証拠である。

徽州地区に、親が準備してくれた嫁入り道具は、先に述べたようによく知らない婚家へ行った嫁を慰めるものである一方、婚家における嫁の地位に役に立つが、ほぼ嫁の個人用品の範囲に限り、若い夫婦の新しい生活のために準備したものはあまりなかった。

婚家、嫁の実家と親友の間に流れている贈与は親世帯の範囲で交換しあい、若い子世帯がその交換の範囲に入れなく、もちろん贈与をもらえない。

2 計画経済時期と改革開放以降における結婚の贈与

1950-1970年代は、中国の計画経済時期であり、個人財産が抑えられ、家庭の物質生活が乏しい時期である。1949年から1960年代中期まで、物質の欠乏と自然災害で結納と嫁入り道具が省略された。1960年代中後から、村の農業の生産が安定的になり、村人の生活状況が徐々に回復し、結婚贈与の交換が再び蘇った。1978年以降、改革開放政策が実施され、村社会の経済は発展し、村人の収入は大幅に増えた。それにつれて結婚贈与も高くなった。

表7、8は村で行ったインタビューのデータから、結婚の贈答をまとめたものである。表は時代により順番をつけた。灰色の名前は女性である。結納、嫁入り道具と親友の贈物と整理した。結納はお金、食品、服に、嫁入り道具はお金、食物、生活用具、服、とその他に分けられる。

調査者名 (結婚年)	結納			家具	嫁入道具				親戚からもらう贈り物
	金銭	食物	服		食物	生活用具	服	その他	
戴さん① (1951)	なし	米2石(約300kg)	なし	古いベッドと箆笥		馬桶	靴、中敷、服		
胡さん① (1956)	なし	なし	黒い服				靴(嫁1足と婿1足)		
お婆さん (1960)	なし	玉蜀黍粉の「餅」	なし		なし	ふとん	服		
呉さん① (1960)	なし	なし	赤いコールテンの服			なし			
于さん (1963)	なし	なし	なし	部屋と家具を準備した	なし	箆笥、ふとん、ゴザ、化粧箱	靴、服		
姜さん (1968)	40元(酒水錢、陪嫁錢)	「籠」(婚約、三節、結婚日)	嫁の夏服と冬服、靴下、靴			布団、洗面器、水瓶、石油ランプ、枕、蓆、タオル、紫竹、ござ			
黄さん (1969)	100-200元(酒水錢)	なし	セーター、ズボン、綿入れコート	新作のベッド、箆笥、椅子と結納品全部500元	外甥籠	ふとん、木箱、化粧箱、洗面器、ゴザ、竹竿	靴		嫁の兄と弟が2-4元、「改口費」2角
潘さん① (1974)			上着、ズボン	新作の箆笥		ふとん、おまる	靴(子孫靴なし)		2-4元

表7 計画経済時代の結婚の贈答(筆者作成)

調査者名 (結婚年)	結納				嫁入道具				親戚からもらう贈り物
	金銭	食物	服	その他	食物	生活用具	服	その他	
戴さん② (1986)	酒水銭 300 元	なし	嫁の服	白黒テレビ、 ソファと結納 全部 500 元		腕時計、木箱、ふとん、裁縫箱	靴、中敷、服		
程さん (1986)	酒水銭 300 元	三節に豚、魚 (代金)	嫁とご両親の服	ベッド、箆笥		腕時計、ふとん、ソーイングボックス、化粧箱、洗面器、ゴザ	靴、服		1 人 10 元以下
胡さん② (1987)	洗尿布銭 200 元	籠				白黒テレビ、布団、枕、洗面器、ござ	靴		
呉さん② (1988)	800 元	なし	服(婚約と結婚当日)	腕時計(婚約)	甥籠	ふとん、白黒テレビ、冷蔵庫、自転車、ゴザ、ソファ、化粧箱	靴、		40 元(婚約) 改口費 2~8 元
潘さん② (1989)	900 元 (披露宴)	飴、籠、魚				ソファ、自転車、白黒テレビ、炊飯器、ポット、洗面器、洗脚器、タオル、ふとん	服、靴(婿の両親各 1 足、嫁 2 足、婿 2 足)		
汪さん (1997)	3000 元 (婚約) 3000 元 (結婚当日)	籠(祝日、結婚当日)、タバコ、飴			甥籠	カラテレビ、冷蔵庫、自転車、ミシン、洗濯機、布団、枕、洗面器、タオル、シャンプー、化粧クリーム、歯ブラシ、ござ	靴(嫁 6 あるいは 12 足と婿 2 足)	金の指輪	

表 8 改革解放以降の結婚の贈答(筆者作成)

(1) 男性側の贈り物

表7に計画経済時代に男性側が女性側に贈った結納を表す。男性側の結納はほぼ食品、金銭、衣装に分けられる。戦後直後の困難期から、1960～1962年の自然災害を経て、1960年代中葉の以前は、結婚には互いに贈与するのは特別な状況であり、何もないのが普通だった。男性側が準備すべきベッド、テーブルと椅子、タンスなどの大型道具は古いものであった。表7の胡さん①は、結婚した時に、夫が軍隊から引退し故郷に帰ったばかりで、部屋まで他の村人に貸してもらったと嘆いた。当時に結婚について「本当に何にもなかった。解放前すら及ばない」と村人にいわれた。

生活状況が徐々に回復した1960年代中葉以降、結婚儀礼が蘇り、現在にも婚約の期間に、毎年の三節に食品贈与の「籠」（お菓子、豚肉、魚、卵を入れるカゴ）を女性側に贈る習慣が続けられている。70年代前後に、竹林村のあたりは鶏の卵の代わりに、アヒルの卵を贈った。村の近くに川があり、アヒルの養殖ができ、また鶏の卵より安く大きいので、経済的には贈与として最適といわれた。

表8に改革解放以降、男性側が女性側に贈る結納を表す。改革開放以降、食品である「籠」は儀礼的に保持されるが、数量には大幅に減少し、豚肉が1～2キロ、お菓子が2パックくらいで気持ちだけの贈与となっている。その儀礼的な贈与が続けられているが、どのように扱うべきかわかる人が少なくなっている。表8の潘さん②が結婚した時に、男性側が小さい魚を贈ったが、潘さんの母が魚を返すべきことを知らず、裏で「向こうの人がケチだ」と文句をいった。1978年以降の商品経済社会では、以前入手し難い「葷」（動物性食品）のものは簡単に買え、珍しいものではない。また、たくさんのお肉や卵を送ってほしくないという声もある。置く場所がない、早く食べないと臭うという意見を持っている村人が多い。現在の結婚には、大量な食品贈与で結婚契約を確保することがなくなり、各項目を金銭に換算し直接女性側に渡すことにより結婚契約を固める。

結納の一環である金銭は徽州地区には、「洗尿布銭」（おむつを洗う金銭）、「酒水銭」（披露宴の金銭）、「陪嫁銭」（嫁入り道具の金銭）などさまざまな呼び方がある。

「洗尿布銭」とは、嫁を育てたことに対する手当、昔の「乳母担」と同義である。この金銭について、実家が娘の出産

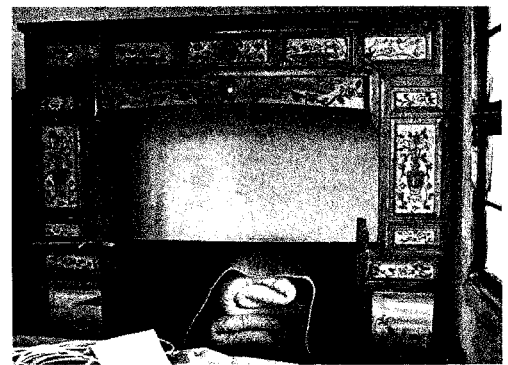


写真 3-2-1 80年代に結婚のため造った家具（上：ベッド 下：タンス、ベッドサイドテーブル）（筆者撮影）

後に、祝いの子供の服や栄養食品などの代金として婚家に贈ると柯は解釈している〔柯 2003: 182〕。現在の結婚には、その嫁の親に対する謝礼についてはあまり聞いたことがない。

女性側の披露宴を催す費用や親友に配った飴とタバコなどの「酒水銭」は男性側からもらう。「酒水銭」を娘の育てる手当てと歪曲し、それをいいわけとして男性側に膨大な金銭を請求し、少ない嫁入道具を準備し、その格差で家計の改善や息子の嫁もらい資金にする行為が「売女兒」（娘を売る）と村人に軽蔑される。多くの娘の親は男性側からもらった金銭について、「売女兒」と評判されないように、警戒心を持って「うちはお金をもらわなかったし、向こうもくれなかった。披露宴専用のお金だけをももらった」と強調した。近年、両側が一緒にホテルで披露宴をして、酒水銭が若い夫婦に管理される場合があるが（2013年筆者はいとこの姉の披露宴に参加した時に、彼女が披露宴の費用を支払ったところを見た）、農村では若者が外で働き、親に頼んで家で披露宴をするのが主流である。それゆえ、嫁の親は酒水銭を持って披露宴を準備する。酒水銭の受け止めについて、村人からは誤解されたくないが、親世帯は男性側が出費すべきだという認識が強い。

「陪嫁銭」とは、女性側が男性側からもらったお金で嫁入り道具を準備する、いわゆる閭が論述した「間接の嫁入り道具」である。徽州農村では、「陪嫁銭」より一般的に「接銭」という言い方をする。接銭とは、女性側が酒水銭以外の金銭をもらう行為である。多くの村人たちは高い接銭に舌打ちし、「現在の女の子は強いよ、求めた金額を送らないと。婚約の時にも、結婚の時にも、何回も払う」と評価し、接銭の金額について「何万元だったら、まま負担できるから、（男性側が）何にもいわないが、十万元以上を要求したら男性側が駆け引きをする」といった。娘が結婚した時に接銭をもらった親たちは、接銭に聞かれると、まずもらわなかったと否認し、話が深くすれば「ちょっとだけをももらった」、「要求するわけでもない、相手が積極的にくれるんだ」と曖昧に認めた。あるいは明らかに「娘が高額な嫁入り道具を求めるから」と強調した。村には接銭に関する態度が中立および以下であることが調査の結果判明した。女性側のメンツだけのため、高い接銭をもらい、より高い嫁入り道具を準備するのは両方にとってつらいことであり、無駄なことだと評価される。息子の結婚に女性側に接銭を贈った程さんは中立で「（女性側が）山の奥にいる村の出身で、あまり豊かではない。少ない嫁入り道具を心配するので、こっちから38888元を贈った。そのうち酒水銭も含まれた。嫁入り道具としてカラーテレビ、冷蔵庫、パソコン、洗濯機、ソファを贈った。披露宴に合わせて4万元以上嫁の実家がかかったのも、まあ、嫁入り道具をくれたといえるんだ」と述べた。いわゆる接銭は女性側に贈られても、若い夫婦の家庭に役割が立つ嫁入り道具に変わり、最後子世帯の家庭に流れ込む。

閭や刁が調査した村と同様に、嫁は男性側が贈った贈与の把握を衣服から始めた。徽州地区には、嫁

が結婚当日に着たすべての服は男性側が贈ったものであり、「新娘」（嫁）の男性側の新しい家族一員になることに相応しいとされる。生活条件の改善と共に、結婚当日の服だけではなく、男性側は嫁に贈る衣装の量が増えている。1990年代以前、各家にはほぼ布で裁縫に服を作ってもらい、既製服の販売が少なかったため、結婚や新年などがきっかけで新しい衣装を作る。男性側が嫁に準備した新しい衣装が個人用品として、女性側の家長を経ることなく直接に嫁に贈る。1990年代以降、男性側が贈った衣装が減少し、閨が調査した下岬村と同様に、衣装が金銭に換算され嫁に送られる。親世帯は若者の好き嫌いがわからず、彼女自身に選ばせた方が楽だといい、嫁がお金をどのように使うのかに干渉しない。

1990年代後期から、村人の生活が豊かになり、嫁のアクセサリーの価値が徐々に回復した。金の指輪一つから、プラチナ、そしてダイヤモンドの指輪になり、量的にはセットの「三金」（ネックレス、ブレスレット、イヤリング）に増え、男性側が嫁専用の贈与における費用が高くなっている。このアクセサリーを決めたのは嫁であり、男性側の親世帯が若い男女と一緒に町のデパートに行き、あるいは、親が渡したお金を持ってアクセサリーを買いに行く。一方、現在の嫁は一気にたくさんの衣服を買う者があまりいなくなった。流行遅れしやすく、もったいないので、必要な服だけを買って、残った費用を新しい家庭に持ち込み、より合理的なアレンジをすることが多くの嫁のやり方である。若い嫁は双方家族の親に従う受動的な地位から離れ、自由に結納を支配することができる。

近年男性側の贈与に家屋をめぐる費用の急増が目立っている。Dさんは息子が1994年に結婚し、結婚費用が全て3000円で、家屋について「古い家屋で結婚した。当時家屋あれば、結婚ができる」といった。さらに古い家屋に部屋一つを準備しても結婚できる。1980、90年代に結婚した夫婦はほとんど古い部屋で結婚して、「分家」してから夫婦2人で新しい部屋を造った。現在、村では基本的に結婚の部屋は新築が要求される。2003年から道路とホテルの建設で、村の半分以上が立ち退き家庭になった竹林村の村民にとってこれはそれほど難しいことではない。しかし町に安定的な仕事があり、あるいは村の家屋が足りない場合に、若い夫婦は町で建売住宅を買う必要がある。高騰しつつある町のマンションの価格は村人にとって容易なことではない。結婚の家屋に準備した家具や家電に関わる費用が急激に増加している。カラーテレビ、エアコン、洗濯機、電気湯沸器、冷蔵庫、レンジフード、レンジなど生活に必需の家電を結婚する前に一気に全部取り揃えなければならない。そうでなければ、住めないところで嫁が来ないと思われる。それゆえ、生活家電を嫁入り道具にすることは婚家に歓迎される。もともと男性側が準備すべき家具や家電に、若い女性は決定権が高くなる。Cさんは息子に新郎新婦の部屋を改装する前に、わざと息子の媳に電話して、ペンキの色や家具の材質などについて意見を聞き、「息子と嫁がこれから住んでいる部屋だから」といった。

現在、嫁は結婚する前に、一部分の結納を支配できるほか、新郎新婦の部屋について意見を出す「越権行為」も普通になっている。

1950-1970年代の計画経済時期には、結納金ではなく、男性側は少ない食品や衣服を贈り、簡単な家具を準備した。また、この時期における家庭の収入は低く、男性側は結納を準備する金銭がなかった。

1978年以降、改革開放により、村人たちの生活は豊かになる。食品である「籠」は数量的には大幅に減少したが、儀礼的な贈与として続けられている。結納金は大幅に増え、10年間で10倍になる（1986年から1997年まで、300元から3000元に増加する）。儀礼や謝礼用の結納金は嫁の「陪嫁金」に変化し、若い夫婦の家庭に役立つ嫁入り道具として、子世帯の家庭に流れ込んだ。嫁にあげる服やアクセサリーの金銭は増加し続け、嫁になる女性はそれを自由に支配することができた。さらに結婚前に、新郎新婦の部屋についても意見を述べる。

(2) 嫁入り道具の準備

表7に計画経済時期に女性側が準備した嫁入り道具を示す。物資が欠乏していた計画経済時期にも、嫁が手作りの靴を持って婚家に行く習慣が続けられる。それは靴が嫁入り道具に特別な意味があるだけでなく、当時古い布で作った靴は材料が入手しやすかったため、気持ちとして嫁に持たせて婚家に行った。

表8に改革開放以降、女性側が準備した嫁入り道具を表す。その中で、伝統的な儀礼用の嫁入り道具は現在にも贈られる。写真3-2-2に示した物は「外甥籠」とその内容物である。カシワの葉と実の枝が付いている雲片糕、赤染め卵9個、「金竜送子」という米煎餅13個、魚2尾、「外甥靴」という赤ちゃんの靴2足、嫁の普段着一点を籠にまとめ、赤いタオルでカバーした。カシワ（柏）の実は「百子」と、雲片糕のは「高」と発音が同じ、たくさんの男の子に恵まれ、生活が豊かになるよという意味であり、卵9個と米煎餅13個は竜の「九子十三孫」のようにたくさんの立派な息子に恵まれるという希望である。

「外甥籠」は必ず一番年下の男性の兄弟が持って婚家へ送ってもらう。年上の「兄貴」は地位が高いので、そのようなことをしない。兄弟がいない場合、いとこの兄弟に担当してもらう。嫁の将来の子供にとって、初めての贈物である赤ちゃんの靴を通じて、母方のオジとの関係が築かれ始めた。籠に入れた普段着は新しい服ではなく、嫁の古着である。「外甥籠」に殆ど嫁の実家から子供のために準備した贈物であったが、古着を入れるのは嫁になっても、実家が嫁の後ろ盾であり、絆が続けていることを象徴していると考えている。

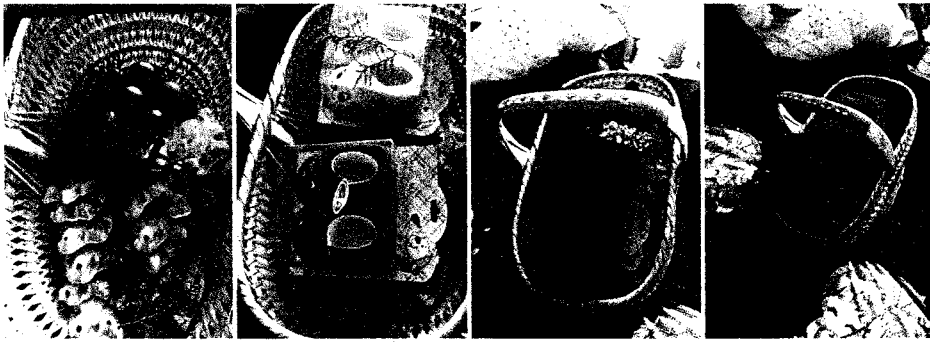


写真 3-2-2 「外甥籠」 (筆者撮影)

トラクターやトラックが使われる以前、徽州地区の嫁入り道具は持ち運びやすいものであった。軽便な生活用具が箱あるいはかごに入れられ、婚家に運ばれた。山に囲まれた徽州地区には、人力と畜力で大きくて重いベッドやテーブル、タンスを狭い山道に運搬することが非常に困難である。この大形家具が基本的に男性側は材料を買って大工に家に来て、作ってもらう。写真 3-2-3 の左上下は伝統的なかごであり、現在の結婚にも大きな役割を果たす。かごは底が四角く、口が丸く、蓋に二つの喜「囍」を書き、嫁入り道具に服や細かいものがそこに入れられる。

嫁入り道具は社会の風潮を反映している。計画経済時期に嫁入り道具はほぼ以前と同じように、手作りの靴や、子孫繁栄を象徴するおまるなど簡単な生活、生産用具が送られた。1980 年代後期から、電子、電気製品が嫁入り道具に現れた。最初はよい生活を象徴して、みんなが憧れる「三転一響」²¹が出て、1990 年代に白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機、扇風機、炊飯器などの家電が嫁入り道具になる。2000 年以降、カラーテレビ、エアコン、オートバイなどが流行っていた。さらに現在、豊かな家が車を嫁入り道具にすることもある。

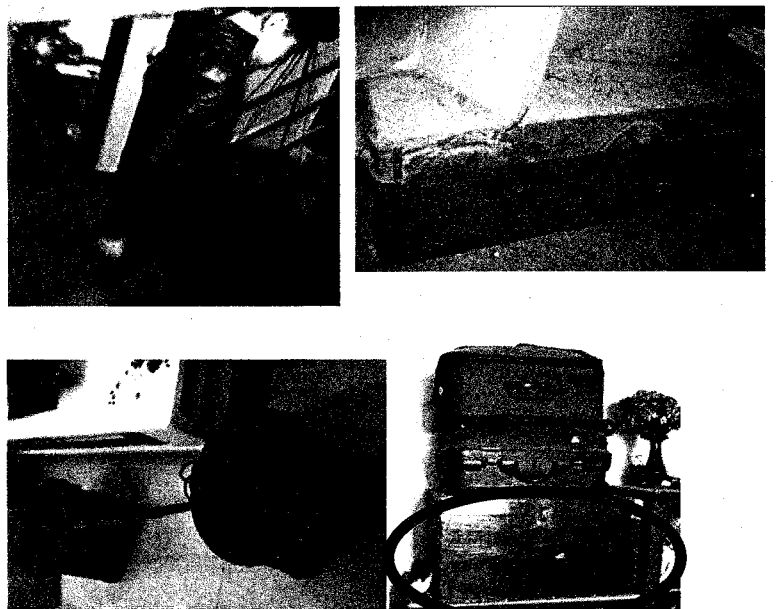


写真 3-2-3 嫁入り道具を運ぶかご (左上下) と箱 (右上下) (筆者撮影)

配給制度で何でもチケットで買わなければならない時代では、「三転一響」は町より十年ほど遅れ、80 年代の後半から村に流行っている。配給制度は一つの原因だが、流行品が大都市から地方の町へ、町から山に囲まれる村へ伝わることは時間がかかるし、またその高価なものを買うため貯金も何年間もか

²¹ 三転はくるくる回って、動ける腕時計、自転車、ミシンであり、一響は音が響くラジオである。

かる。近年、村人の嫁入り道具は町に比べれば、差が小さくなり、逆に町の人を超える場合もある。

筆者は2015年に万新村で余家の結婚式を見学した。婚家に冷蔵庫、洗濯機、カラーテレビ、エアコンなどの家電がすでに部屋に取り付けられていたが、結婚当日には空ダンボールだけを持って隣人に見せた。また嫁の実家から家電の空段ボールを持ち運ぶときに、段ボールに赤い紙を貼り付け、あるいは赤い糸を結び付け、2人が力を入れて重い冷蔵庫、テレビを持ち上げるふりをしてトラックに運ぶ（写真3-2-4）。

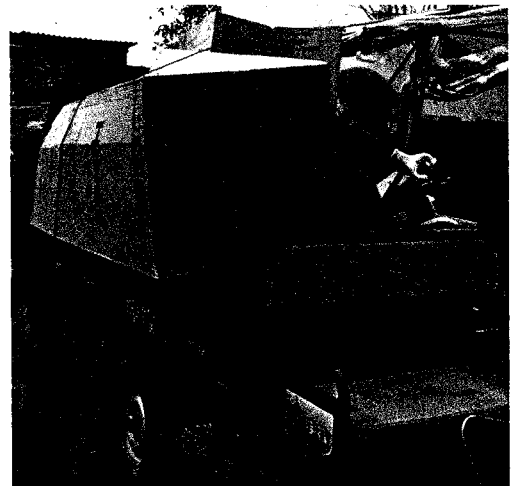


写真 3-2-4 嫁入り道具の空段ボール(筆者撮影)

これらの電気製品は家族全員が使えるため、嫁の個人用品

や普通の生活用具よりも婚家に歓迎される。電気製品は家具から派生するものといえ、新郎新婦の部屋を準備する時、揃えられたはずだと思われる。嫁入り道具として送られた電気製品はある意味では婚家の新郎新婦の部屋にとって助力になるため、嫁が婚家および若い夫婦の家庭において地位が上がる。

男性側の生活条件に脅かすほど高い「接銭」を要求したら、娘が結婚後の生活条件や舅姑の関係に悪い影響をもたらす可能性が高いという考慮から、女性側はあまり高額な「接銭」を求めない、あるいは「接銭」を受け取らない。「接銭」をもらわない場合に、村人は「不接不給」（結納をもらわず、嫁入り道具をあげず）と口を揃え、家電など高いものがなく、嫁が日常の生活用具だけを持って婚家に行く。村にはお金をかけて娘に嫁入り道具を準備することがよくある。余家の嫁しさんは「うちの父はお金をもらわない上で、2万元の嫁入り道具を準備してくれたんだ」と自慢した。現在、村では男性側の贈与に比べて嫁入り道具が高い場合が多くなっている。徽州区虹光村に村工場を持つ余さんは生活が豊かで、男性側から現金10万元と「四金」（金のアクセサリ一四点）をもらい、現金40万とマンション1戸を娘の嫁入り道具として結婚当日に贈った。お金を貢いで、高価な嫁入り道具を準備する親がよい評判を得られ、婚出する娘の面目もたち、婚家では嫁も実家も高い地位を保てる。

閤が調査した下岬村に、嫁になる女性が婿になる男性にそそのかされ、将来の新しい家のために男性側に多くの結納を要求する事例がある。その反対に、竹林村には、女性側が高価な嫁入り道具を送られる事例を聞いた。男性側が最初に4万元を贈り、女性側が8万元の車を嫁入り道具にすると決めた。婿になる男性は8万元の車が安すぎて、より高い車がほしくて、4万元を追加した。女性側が15万元の車を贈ろうとして、また安いと思われ、結局20万元以上の車を嫁入り道具にした。女性側と車の値段を相談するのは婿になる男性だが、その裏に嫁になる娘の意思があり、彼女が賛成しないと金額は決まらな

い。もう一つの事例は男性側から4万円をもらったMさんである。Mさんの娘は結婚する前に、男性側にリビングルームにも寝室にも、エアコンとテレビを設置してほしいといった。男性側はそれについてMさんと相談し、一部分を嫁入り道具として分担してもらい、婚約と結婚の披露宴の費用を含み4万円を渡した。女性側が家電を買い、披露宴を予約した後、少し余った「接銭」について、娘は「お母さんがもっとお金をくれたら車を買おう」といい、Mさんは仕方がなくお金を貢いで安い車を嫁入り道具に加えた。嫁入り道具の価値が結納より高い風潮において、若者ができるだけ親から高額な支援をもらえるため、高い結納を与えることを通してより高価な嫁入り道具をもらう。

娘は貯めた給料で嫁入り道具を準備するのが容易なことではないため、実家から支援をしてもらう。一人っ子政策が実施された農村には、各家に子供の数が最大2人であり、娘でも親に大切に育てられる。1人子娘がいる家に親が力を尽くし嫁入り道具を準備し、さらに家屋まで贈る。息子1人と娘1人の場合には、息子の結婚に影響しない状態でできるだけ嫁入り道具を多く贈る。嫁入り道具にもそのほかに、通帳一冊を嫁に持参金として直接贈る実家が多くなっている。これは嫁の個人財産であり自由に使える、若い夫婦家庭の支援として親世帯から子世帯に流れ込む。

女性の嫁入り道具は、計画経済時期の後半期では、簡単な生活用具であり、若い夫婦である小家庭の支援となった。1978年以降、伝統的な嫁入り道具である「籠」、おまるなどは儀礼上の贈与として続けられたが、社会風潮を反映する電子、電気製品が多くなる。新郎新婦の家庭にとって助力になる電気製品が歓迎され、それにより婚家および若い夫婦の家庭における、嫁の地位は向上した。さらに現在、嫁入り道具に通帳や家屋が現れる。それは単なる若い夫婦に対する支援だけではなく、親世帯から子世帯への財産の移動と見られる。村では嫁入り道具の価値が、結納より高い風潮がある。若者はできるだけ親から高額な支援をもらい、男性側が高い結納を与えることを通して、女性側がさらに高価な嫁入り道具を買うことになる。

(3) 親友との贈与

計画経済時期に平均主義に従い、村人は同じ労働点数をとり、食堂で同様の「大鍋飯」を食べ、日常用品を配給されたチケットで購入するため、各家ではあまり貨幣を持っていなかった。また経済困難期には、人々は飢餓線上でもがき、結婚の披露宴をする余裕がなかったので、親友が祝い金や結婚祝いのプレゼントを贈る状況は極めて少なかった。60年代後期から、結婚儀式が徐々に回復され、親戚が参加に来て、家庭用の魔法瓶、洗面器、タオルなど簡単な生活用品を贈る。血縁に近い年長の親戚はいくらかの祝い金を贈る。1989年に結婚した潘さんは自分の嫁入り道具に、男性兄弟たちがお金を集めソファを贈り、母方の叔父と叔母たちが自転車、白黒テレビ、炊飯器、ポットなどを贈った。Lさんのほうは

弟が電気オートバイを贈り、母方の叔父がアイロンと毛布を贈った。嫁の好み分からない親戚が贈与を祝い金に換算し、嫁あるいは嫁の親に渡すことが多い。筆者のいとこの姉が結婚する時に、叔父である筆者の父は千元の祝い金を彼女に渡した。もともと家長の間で流れていた贈与が現在、直接に若い夫婦の支援金として、子世帯の家に流れ込む。

年長の親戚を結婚披露宴に誘う時には、招待状だけではなく、ごま飴と蜂蜜漬けの棗のお菓子小包を同送する決まりが、現在は随意になり、対象問わず「喜糖」（結婚祝いの飴）2パック（約飴20粒）と招待状を送り、関係がよいあるいは血縁に近い親友には、その上タバコ1〜2箱も贈る。

祝い金が毎年増加している。現在竹林村では、血縁関係に近い親戚が1000元以上、一般の親友が400-600元、普通の関係が200-400元であり、既に屯溪の町のレベルになっている。農家で披露宴をする際には、送られた祝い金を記録する会計者が入口に座っている。徽州では、現場で祝い金を大きな声でいう行為をしない、自分の前後に渡した祝いの金額しか見えない。また同意を求めず帳簿を見ることは非常に無礼なことである。この祝い金のリストは、主人は親友へのお返しの参考となっている。

1990年代以降、民衆の生活条件がよくなり、百人以上大人数の結婚披露宴が流行っている。親戚以外を多く誘うことは、人間交際を促し、メンツがたてられるが、結婚披露宴に祝い金で儲けられることが現実的な要因となっている。潘が調査した披露宴の収支を計算すると、約三分の一〜二分の一の祝い金を得ていた〔潘 2013: 51〕。村には婚約、結婚、出産、新築のきっかけに披露宴を行うことが一般的になり、毎年披露宴に参加した祝い金は4000-5000元かかる。村人から「さまざまな理由で披露宴をやるのはただお金を儲けるためだ」という文句をよく聞いた。もらった祝い金は一部分が披露宴の費用になるほか、親にとって長年間、親友（あるいは親友の子供）の結婚のため出した祝い金の補償である。祝い金が若い夫婦に預けられ、披露宴の費用以外に、新しい家庭の支援になる状況もある。

徽州地区には、1978年改革開放以前、結婚の贈与は伝統的な食品、簡単な生活、生産用具であり、昔とあまり変わらなかった。商品経済の発展と共に、若い夫婦の家庭に役に立つ高価な電子製品が嫁入り道具に出て、女性側が新しい家庭に対する支援が高くなる。男性側が贈った贈与が金銭に換算され、若い女性に渡すのが当たり前のことになる。彼女たちはその金銭を自由に使えるが、必要なものだけを買ひ、残ったお金は子世帯で管理され、必要に応じて使われるようになった。血縁関係に近い親戚の贈与は子世帯に直接行われ、若い夫婦の家庭を支える。

おわりに

本章は結婚の儀式と贈与の視点から徽州農村における女性の地位の変化を分析した。

伝統社会において、結婚とは、若い男女の結びつきにより、男女双方で姻戚関係を締結することである。親の意思に従い結婚する女性は、結婚の儀式、結婚相手の選定などに関して、自分の意見や気持ちは考慮されない。強い父権に抑圧された状況において、嫁になる女性に発言権、選択権、および決定権はなかった。解放以降、新しい婚姻法では個人の結婚自由の権利が認められ、結婚における女性の地位が保障された。しかし、保守的な村では伝統に従い結婚する意識がまだ強かった。1978年改革開放以降、一人っ子政策が実施され、子世帯の地位が大幅に向上した。また、結婚に関する親の役割は減少し、若い女性の結婚における選択権は大きくなった。彼女たちは自分の意思で結婚を決めることができる。

伝統的な村社会では、結婚の贈与は、結婚儀式のため準備されたものである。婚家、嫁の実家と親友の間で行われる贈与は、親世帯の範囲で交換しあうもので、若い夫婦の家庭に対する支援ではなかった。それゆえ、親が準備した個人用品の嫁入り道具を除き、結婚の贈与において、嫁は決定権と支配権を持っていなかった。物資が欠乏した計画経済時期には、結婚の贈与はあまり行われずに、少量な食品で済ませた。1978年以降、商品経済時期に、生活が豊かになると共に、結婚の贈与が復活し、特に1990年代後半、初代の一人っ子世帯が結婚適齢期に入る以降、結婚の贈与は高騰した。近年では贈与が金銭に換算され、子世帯に移り、若い夫婦の家庭の支援になっている。さらに、現在、嫁入り道具以外の結婚の贈与を管理、決定する嫁の権利はかなり大きい。贈与の金銭の扱いにおいて、嫁の意思が明白に表される。買い物は自分の好みで選び、彼女たちの選択は多元化している。また消費観念の変化と共に、金銭をあまり使わず、より合理的なアレンジをすることが多くの嫁のやり方になっている。さらに、嫁入り道具の価値が結納より高い風潮において、嫁が親から高額な支援をもらえるため、男性側が高い結納を与えることを通してより高価な嫁入り道具をもらう。結婚儀式と贈与の分析から、社会の転換、経済の発展、政策の調整に従い、徽州農村において、結婚における女性の地位が高くなり、彼女たちが結婚に関して、自由に意思を表すようになったことがわかる。

第4章 嫁生活における女性の地位——一人子政策による核家族の変化

はじめに

筆者が黄山市の近郊で農村女性の生活について聞き取り調査を行った時、村民たち、特に年上の女性は「現在の村の若い女たちの生活は自分たちの頃よりよっぽど楽しいよ」と嘆いた。

激変している近現代の中国の社会において、特に1949年解放後から、政治制度、法律により女性の地位がかつてないほど高くなっていることは言うまでもない。しかしそれを体験した彼女たちがなぜ現在の女性をそのように評価するのか。「彼女たちは子供を一人か二人しか生まないから楽だよ」、「現在の嫁たちは家族に地位が高いから」とすぐ答えが返ってきた。

嫁の地位がどのように変化しているのか。本章は出産、暮し向きと家計の三つの方面から嫁の位置づけを論じ、また変化の原因と影響を究明する。

第1節 徽州農村における出産観念の変化

1980年代から実施された一人っ子政策によると、安徽省の農村では、（子供が健康である前提で）長女を産んだ場合のみ四年間空けて第二子を設けてもよいと決められた。竹林村は長男がいれば、一人っ子政策を違反して第二子を産むことは非常に少ない。長女の場合には、第二子を産む家が結構多い。村人のなかには息子がほしいという気持ちがある一方、「やっぱりできるだけ多くの子供が欲しい」という願いもあるのである。現在、経済や教育などの原因により、そういう考えが薄くなり、娘一人しかいない家もある。さらに多くの人は「今、村に息子好きの人は少ない、皆娘が好きだよ」「息子ってさ、うるさいよ」と話している。

息子の生まれにより、生母の地位が上がる（母凭子貴）という考え方が強い農村では、一人っ子政策が実施された約四十年の間に村人の性別観念はどのように変化しているのか。また、地方都市の近郊に位置し、町の文化などに強く影響を受ける竹林村は2001年から国道や大型ホテルなどの建設のため、家屋と田地を失った村人は団地に移住し、近くの工場や市内へ働きに行き、土地に対する依存性が低くなった。生活様式の変化により、村の女性は出産観念はどのように変化しているのか。

1 伝統的な出産観念

(1) 文献から見た娘軽視の出産観念

中国において、子供を産む伝統的な理由は「伝宗接代」と「養児防老」の二点にまとめられる。「村

において、結婚の主な目的は、子孫の連続を確保することである」〔費 1939 : 50〕とあるように、「伝宗接代」の考えのもとでは父系血縁を継ぐためできる限り多くの子供、特に息子が望まれる。嫁は息子の誕生によって夫の家族および宗族における地位が固まる。それ以外に経済の方面において息子の価値が重視される。農家の息子は小さい頃から、家事を手伝ったり、年下の兄弟を世話したりする。また、「養児防老」の考えとして、中国の伝統的な「フィード・バック式の親子関係」〔費 1985 : 308〕において、成年の息子に老いた親が扶養される。したがって、中国の伝統的な出産観念は「多子多福」であり、子孫繁栄が幸せなこととされる。それに対して婚出した娘は他の家の人になり、肉親を扶養する義務がないので、娘の方は望まれない。貧乏で子供を育てられない場合や息子を早急に望んでいる状況においては、産まれて間もない娘を捨てたり溺れさせたりすることもあった。特に清代には嬰兒の溺死がさらに広がり深刻になった〔郭 2000 : 139〕。

宗族が強かった徽州地区では、父系血統の継続が大切にされ、宗族の血縁を受け継ぐ義務があった。さらに現実的な問題として宗族の跡継ぎだけではなく、家産相続が関わっていた。伝統的な中国社会では娘には相続の権力がなく、息子がいない場合は家産が父親の兄弟に山分けられることになるので、息子が極めて要求された。

清代に徽州の一部の地域（婺源を例とする）で娘を溺死することが深刻な社会問題となっていた〔陳 2007 : 97〕。この行為に対し、嘉慶帝が禁止の詔書を頒布し、朝廷や文士が厳しく批評し、女兒の溺死を防止するため、娘が多い家庭に手当を配ったり、学齢期の娘によい先生を見つけたりするなどの解決方法を提出し〔劉 1997 : 586-587〕、また、宗族の規則で女兒の溺死、遺棄などの悪習が明らかに厳禁された〔趙 2004 : 397〕。

清代の光緒末期に徽州知府を務めた劉汝驥が編纂し、徽州の各県の風習を記載した『陶甕公牘』に、各県の風習について「溺女之有無」という項目がある¹。『陶甕公牘』によると徽州地区には娘の溺死が少ない、或いは地元の人がある風潮の存在を認めなかった。しかし、六県のうち祁門とイ県以外では、娘嫌いや親に捨てられることが多かったことが分かる。シャ県では貧乏な家に生まれた娘が小さい頃に

¹ シャ県：貧家女子有自襁褓時/為人抱養作童媳者/至溺女之風向來所無

休寧：溺女之風休人不認其有也/然以公濟一局言之/収養女嬰歲以數十/屯溪如此/四鄉可知/深山老坳寡人丐婦/豈无胞衣甫脫置之隘巷…

祁門：民不染他俗/虽飢饉之年/从无抛弃骨肉之事/溺女之風向來所無…無力扶養間有寄人養育/稱為義女者

婺源：…溺女者尚罕/然棄女則時有也

イ県：黟之女子尤能俟…故生女同為父母所愛憐/絶無溺女之弊

績溪：績之民情/重生男不重生女/俗有賠錢貨之呼/憎而賤之/又以食用之艱遂不恤…此道光咸豐間情事也/中興以後元氣未復/婚約聘金有增無減/民間乃稍稍重女/冀得多金/故溺女之風絶無僅有/近又有抱女養媳之一種習慣/大抵為節損婚費起見也

童養媳に送られた。休寧県の町である屯溪（現在の屯溪区）に位置した公済局（私人に設立された慈善組織）だけでいえば、一年間で引き取られた女の嬰兒が数十人いたので、生活が貧しい家庭や休寧県の奥山では娘を遺棄する行為があったことが想像できる。績溪县は従来、娘が嫌われ、「穀つぶし」と罵られ、食糧不足という言い訳で育てられなかった。婺源の場合は育嬰堂に11ヶ月に嬰兒118人を引き取り、すべて女の嬰兒であったという記載があった〔曾 2008: 45〕。

筆者は農村で聞き取り調査した時、童養媳の経験した年上の女性の事例を結構聞いた。竹林村81歳のおばあさんXは自分の童養媳の経験を話した：「小さい頃かわいそうだったよ。13才（1949年）で童養媳として他の家に送られた。まだ子供だったから毎日泣いた。学校にいかせてくれないの、なぜ苦しいところに私は送られたのかと泣きながら母に聞いたら、母は家が貧しくて、育てられないからと言った。うちは兄弟三、四人しかいなかったけど家が貧しかったから」。解放後、童養媳の習俗が禁止され、Xさんは実家に帰った。

娘軽視の風潮について、陶は直接の原因を「生計艱難」の生活において、娘を育てられない根本原因が「女職曠廢」（女性は働けない）にあるとまとめた〔陶 2006: 593〕。当時、女性の行動を制限するため、娘が小さい時から耳穴をあけ、纏足にして男と同一にさせなかった。貧家にとって息子のように労働できない娘は家の生計には役に立たず、ただ糧食を浪費する無用の者と見なされた²。それと際立って対照的なイ県では、娘は儉約だけではなく、家事も農事も両立できるので³、親に可愛がられた。労働力になれなく経済利益をもたらせない娘は、下層の家庭にとって負担になり、重視されていなかったと考えられる。

しかし、娘軽視は貧困家庭のみではなかった。明代以降、中産階級、さらに富裕層の家庭に至るまで、女の嬰兒を溺れさせることがあった。それは、嫁入り道具がますます贅沢になった風潮と関わる〔郭 2000: 133〕。財力がない下層の民衆は高価な嫁入り道具と結納について考えないが、一定の家産を持つ中級レベルの家庭にとっては、贅沢な嫁入り道具を揃えることが、家の経済に大きな影響を与えた。また結婚後も婚家との間の年中行事や婚家の冠婚葬祭での礼金、娘が産んだ子供に祝いをする贈与、家分けの時には娘と婿への補助など「外の人になった」娘への援助が継続することも娘軽視の原因になった〔徐 1984: 2193〕。

次に績溪县における娘に対する態度の変化に注目しよう。清代の道光咸豊時期（1821-1861）、娘は望まれずに粗末にされた。しかし、同光中興時期（1864-1894）以降、婚約や結婚にかかる結納金の高騰により、娘が少し大事にされるようになり、童養媳を育てることが増えていった。実家から高価な結納金

² 「其出入学問芸術皆不得與男子同」『陶甓公牘』。

³ 「負薪担糞皆女子任之」『陶甓公牘』。

がもらえるため、家計には役に立たない娘を大切にし、婚家が女の子を育てて大きくなったら、高い結納金を払わずに息子の嫁ができるなど、現実の利益に強く繋がっていた。

1949年解放前の徽州では、男尊女卑の観念と娘の育成には損が多いことから娘を捨てる、童養媳に送る、さらに間引きするという現象が長く続いていた。

(2) 産児制限がない貧困時期における女性たち——「多子」が本当に「多福」か

息子が多いほど幸せになれるという中国の伝統的な出産観念「多子多福」を、解放以前に育ち、現在80代以上の女性はまだ持っている。しかし、インタビューした村人は80代以上の女性が少なく、その上男女の差別について本人の記憶や表現が曖昧であった。そのため、彼女たちの子供——一人っ子政策が実施される以前1950～60年代に生まれの40、50代の人から親の話を聞きいた。解放以前に育った世代の女性の出産観念について、家族からの聞き取りをもとに考察する。

事例① 口述者：YZさんの母親（65才）

父の妻が娘一人しか生まなかつたので、息子がほしい父は18才の母を買い、妾として、息子六人と娘三人を産んだ。私は長女で、上に兄一人がいる。母はもともと街に住んでいた⁴ので、何もできない、家計も農業も私がすべて支えた。また母は子供を産んだだけで何の責任も取らず、上の子供四人は父の妻に育てられ、下の三人は私が育てた。私は18才の時に自分の未来を考え、兵隊に入り、技術とかを学ぼうと思ったが、母が私を離さないで大騒ぎし、結局行けなかった。入隊の健康診査も合格したのに、本当に悔しかった。

私は子供二人、長女のYZと年下三才の弟がいる。初産の子が女の子なので、舅はすぐ「明日他の人に送って」と言った。姑はただYZがいた部屋の外で立っていて、部屋に入ってYZを見ようと誘われても、産部屋に入ったら吹き出物が出てしまうという言い訳で断った。それから三年も妊娠しなかつたので、姑は私に嫁が子供を産まないと価値がないと言い、（避妊）薬を飲んでいるのかと疑った。本当に腹立つよ。私も産みたくないし、また女の子を産んだらどうしようと思った。自分はYZだけをちゃんと育てあげればと思っていたが、夫と姑は一人娘では絶対ダメでしょう。第四年にまた妊娠した。九月目に、（子供の性別を卦算する）本を読んで、結果が女の子でした。涙が枯れるほど泣いて、子供を医者に堕してもらおうとしたが、ちょうど手術する日に産んだ。男の子でした。姑はすごく嬉しくて、毎日産部屋で孫を抱いて、夜十時過ぎに自分の部屋に戻った。私にわざわざ栄養ドリンクを買ってくれた。産部屋で長くいるとできものが出るよと言われても、年取った人の肌は大丈夫だと返事した。私が山で仕事しても、姑が孫の面倒を見るよと言った。YZを一回も世話することがなかったのに。女の子が嫌いなんだなと思った。夫もそうでした。お正月の時に肉料理を作ったが、夫は四、五才くらいのYZが取った肉をお皿に戻した。YZが大きくなっても、靴下すら買ってくれなかった。娘のことをあまり取り合わなか

⁴ ここは方言であり、町に生活しているという意味である。

ったが、息子にすごく優しくかった。姑は夏休みに一所懸命に薪を割った YZ には褒め言葉を全然言わないのに、殴り合って帰ってきた弟には隠れて飴をあげた。娘を守るためこっそりと YZ に食べ物をあげ、姑と夫と喧嘩したこともある。私は不器用だし、彼らも女の子が嫌いだし、どうしようもない。

調査中に、YZ さんの隣に座っている年頃の友達「私もそうだよ。あの年代のおばあさんとおじいさんは女の子が嫌いだ。あなたの家ほどひどくないが、男兄弟に飴をいっぱいあげたのに、私は 2、3 個しかもらえなかった」と思い出した。

当時の舅姑は、まだ「男尊女卑」の観念が強く、早く息子を生まないことが嫁失格と考えられた。事例①YZ のお母さんは頭がいい、辛抱強い人で、舅姑に親孝行⁵したが、息子を早く産まないのも、姑に冷たい態度に扱われ、姑と嫁の関係は悪かったが、息子を産んでから、姑の態度が逆転し、二人の関係が少し緩和した。

中国は解放以降から 1960 年代中期まで、貧しい農村には、時間的に、経済的に、夫婦二人でたくさんの子供を育てることが難しかった。計画経済時代に、全村が集団労働を行い、母親が子供を世話する時間があまりなかった。事例①の YZ さんは生まれた一か月後に、母親が田んぼに働き、朝とお昼に乳を飲ませる時以外は、ベッドに寝かせるしかできなかった。したがって、「子供を多く産むと辛かったよ。食事、衣服、学校に行かせるなどいろんな面で世話し、子供が多すぎると本当に躰しきれなかった」と X おばあさんが話した。

事例② 口述者：劉さん (50 代)

劉さんは母親と姑について、同じく「頭が古い人」と評価した。劉さんの母親 (79) は、息子三人と娘一人がいる。劉さんは唯一の娘である。

私たち子どもはよく母親に孝行をするが、母親は息子が好きだから、息子たちだけ面倒を見る。姑 (90) は、息子四人と娘二人がいるが、子供たちの生活の世話をしなかった。1960 年代大飢饉の時には薪を売ったお金で食べ物を買ったが、姑が一人で食べた。同行の村人が子供にあげないかと聞いた時、彼女は私が餓死になったら彼らも死ぬよ。私のお腹がいっぱいになってから子供を世話すると答えた。その後、息子の一人が餓死したが、姑は死んでよかった、息子が多かったからと言った。長男が結婚してから、姑は 40 歳くらいだったが働かず扶養される生活を送るようになった。「当時の姑はほとんどそうだった。優しい姑もいたが少なかった。息子と娘が多すぎだから、誰も可愛がっていないし、孫も気にしなかった。自分がよい生活が送れば」と劉さんは話した。

⁵ 姑は三人兄弟を産んだが、YZ のお母さんしか親孝行をしなかった。

事例③ 口述者：黄さん（53才）

黄さんの姑には息子四人と娘三人がいる。姑は理不尽な人であり、長男は養子で親子関係はあまりよくない。三男とは喧嘩し、すでに決裂している。次男や四男の嫁が妊娠、出産した時は一切世話をせず、まったく関心を持っていなかった。

事例②、③の姑には、たくさんの子供と孫がいるが、あまり子供の世話をしなかった。子供が多く世話する時間と精力が足りなかったこともあるが、もう一つの原因は生産力が低い計画経済時期には生活の物質が不足し、さらに1960年の大飢饉の時期には糧食が足りなくなり、多くの人は栄養失調と飢餓で命を失った。休寧県誌から1960年代前後の自然増加人口数と食糧生産量を表1にまとめる。

年代	食糧		自然増加人口	
	総産量(担)	増加率(%)	人数(人)	増加率(‰)
1956	102.9	4.89	1854	10.60
1957	90.5	-12.05	5465	31.1
1958	105.6	16.69	4473	25.4
1959	97.4	-7.77	-1610	-9.1
1960	83.2	-14.58	-13470	-80.70
1961	73.7	-11.42	-2371	-14.8
1962	84.7	14.93	731	44.4

表1 休寧県人口自然増加と食糧統計表（データ典拠：『休寧県誌』）

表1によると、1959～1961年に食糧の総産量が連年減産していた。その中、徽州地区で主要な食糧である米の生産量は、1949年が550783担であり、1952年が878420に増加したが、1960年に49年の産量に落ち（571015担）、1965年に962184担に回復した。〔休寧県地方志編纂委員会 1990：110〕。産量が激変していた原因は、1958～1961年に全国に大躍進運動が行われ、農業生産に自然法則を違反する不適切な指導がされたうえ、1960～61年に深刻な干ばつに遭った。『屯溪市誌』の記載に、1961年に休寧県の屯溪が、夏から秋まで46日に雨降らず、94%の耕地が被害を受けたとある〔安徽省屯溪市地方志編纂委員会 1990：18〕。食糧不足だった時に出産したため大勢の人が餓死で亡くなった。休寧県は1959年の総人口が173529人であり、1960年が160228人に減り、減少率が80.70%であった。1960年代に人口戸籍の管理が厳しく、村から他のところへ移住することが制限されていたことからその失われた人口のほとんどが餓死であると考えられる。息子に無関心、飢饉で亡くなった息子を悲しまなかった例①の姑は極端な例だが、貧乏な村人にとって食糧不足の時期にたくさんの息子を産むことは幸せなことではなかった。

伝統的な出産観念では、娘は父系の血縁と財産を継ぐことができず、儒教の影響から外に働きに出られず、家計に役立たない上に婚出する時には高価な嫁入り道具を必要とする。そのため家にとって娘は無用な存在であり、軽視されていた。したがって、産まれたばかりの娘が捨てられたり童養媳に送られたり間引きされたりする現象が多かった。また、伝統的な中国の家族観念では「多子」はよく「多福」のシンボルとして表現されたが、実際には生産力が低かった農村や食糧と生活物質が足りない時期に、「多子」は「多福」ではなかった。

2 伝統的な出産観念と一人っ子政策の交替期に生きる女性たち

一人っ子政策は中国の基本の国策であり 1971 年から主張され、79 年に強力に実施され、82 年には憲法で決められた。政策により農村では第一子が娘の場合、四年の出産間隔において第二子の出産が許可される。安徽省で農村戸籍を持っている人は第二子を産んだら、夫婦のどちらかが、結紮避妊手術を受けることが決められた。この政策を執行するため、各村の村委員会には「計生専幹」⁶が設立された。

一人っ子政策はマクロ的視点で言えば人口抑制において役に立つが、同時に、中国人の伝統的な出産観念に背馳し、特にその観念が強い農村部では悲惨な衝突が相次いで引き起こされた。出産観念の面において、一人っ子政策は農村の女性にどのような影響をもたらしたのか。

中国の農村社会の研究では、一人っ子政策の実行が避けられない問題点となっている。特に政策が実施された初期には、村人たちと村の委員会との争いがよく起こり、中国の伝統的な出産観念と新しい政策の矛盾が言われ、数えきれない事例があげられた。例えば、閻が調査した下岬村では、息子を望むため罰金して子供を多く産む男性村民の老趙さんと鉄柱さん〔閻 2009 : 211-213〕、河南省農村では、計画生育の婦人検査と結紮をごまかすための奇想天外なやり方〔梁、許 1997 : 50-51〕、西村では息子が望まれたが、結局娘七人を産み、体を崩した女性〔胡 2014 : 159〕などがある。

竹林村の婦人幹部 Q さんの話によると、1980 年代には当村で計画外出産の事例が少なくなかった。「農村の女性はあちこちに逃げて、隠れて妊娠したが、計生専幹に見つかったら妊娠週数を問わずすぐ病院に連れられ、堕胎させられた。計画外の子供を産んだら、罰金がある。お金がないと、家の米や電気製品や、肉などが没収され、まるで敵軍が掃討していくみたいだった」と話した。

以上の事例や話により、農村女性は、夫及び夫側の親世帯（さらに彼女自身）から早く息子を産むようにというストレスと、子供人数が厳しく限定される現実の板挟みになっていることがすでに明白にさ

⁶ 「計画生育専職幹部」の略称であり、主な仕事は村に一人っ子に関する政策を宣伝し、全村の妊娠、出産状況を把握し、政策を違反する出産を防止することである。計生専幹は当村に能力があり、村人と仲がいい女性に担任され、よく村の婦人幹部と一緒に一人っ子政策の仕事を押し進める。

れた。しかし、筆者は別の農村女性の聞き取り調査から、これまでの事例とは異なる状況があることが分かった。それは、1970-80年代に、自分の意思で病院へ計画外の子供を墮胎しようとした女性である。

事例④ 口述者：黄さん（53才）

姑はわがままで利己的な人だ。息子の嫁たちが妊娠、出産しても、全然世話しなかった。私は長女を産んだ時、世話どころか、姑は一回も病院に来たことがなかった。まったくがっかりした。三年を隔たってまた妊娠したが、ちょうど一人っ子政策が厳しくなる時期になり、村の計生幹部は妊娠九ヶ月の私を病院に連れていき、子供を堕ちさせた。すでに姑にがっかりしていた私は、反抗なく病院に行った。しかし、その日は病院が停電し、手術ができなかったので、とりあえず病院に泊まった。ちょうどその日の夜に子供を産んだ。

黄さんは事例①のYZさんのお母さんと同様に、病院で墮胎しようとした直後に出産した事例である。二人は墮胎の理由について、日頃の姑への不満と第一子を産んだ時に姑が全然世話してくれなかったことへの失望があることがわかる。中国では、産婦は出産後の一ヶ月「坐月子」の風習がある。この一か月間は姑が産婦の生活や食事などの世話をするのが一般的である。これは姑の責任であり、嫁の権利でもある。また育児ではお祖母さんとしての姑は孫を世話する責任もある。「坐月子」及び赤ちゃんの面倒を見ることにより、その後の姑嫁の関係に大きな影響を与える。黄さんもYZさんのお母さんも、普段の生活のなかで姑に不満があり、出産後に姑が全く世話をしてくれなかったことから彼女たちは一人っ子政策を利用し、産児制限により夫及び夫側の親世帯に対抗した。

嫁の出産に関して、常に「為你老X（夫の苗字）家生兒子」（あなたの宗族のため息子を産む）の嫁が評価されてきた。嫁は息子を産むことこそ、夫の宗族の血統が継続し、夫の宗族に大きな貢献をしたことになる。上記の事例では嫁は墮胎を通じ、跡継ぎを断たせることで夫の家に対抗したのである。さらに、家族を超え、出産により村と交渉した女性もいる。

事例⑤ 口述者：晨さんのおばあさん（61才）

私は嫁になっても、実家の村に住んでいた。当時村の大隊は厳しくて、実家に息子がいれば、娘は必ず婚家へ行くとされたが、夫の村は山の奥であり、苦しすぎて、こっちに来てもらいたい。でも村は私たちをここの（生産）大隊に所属させない、向こうの村（夫の村）に追い払おうとして、四才の息子を

入籍させない⁷、「分田到戸」（村の田地を家族で請負する）の時に田んぼをくれなかった。その時、一人っ子政策の活動が厳しく行われ、もう一人を産むつもりはなかったが、入籍させないならもう一人を産んでやった。生産大隊の人が私の計画外妊娠を知ってうちに来たが、私たちはこの村の大隊に所属していないから、あなたたちと関係がないと言いつ返した。最後には私が結紮すれば、子供二人を入籍させると村のほうは同意した。そして、結紮の手術をして、手当の田んぼ六分⁸をもらった。

晨さんのおばあさんが得意満面で、自分が家族と土地を守ったことを話した。彼女は村と「戦い」、最終的には結紮の手術を受けることにより、家族四人が村に永住する権利と土地をもらった。一人っ子政策はここで地位が変わり、上から下に、村から村民に対する強要ではなく、一部の農村女性の武器になっている。彼女たちは出産権を手段として積極的に村と対抗した。

一人っ子政策の産児制限と避妊、堕胎など現代医療の発展に従い、嫁は妊娠の主導権を握れるようになった。彼女たちは家のために子供を産まない（＝夫の父系血縁が続けない）ことにより夫及び夫側の親世帯に対抗し、一人っ子政策が厳しい時に子供を産む（＝一人っ子政策の違反）ことにより、村から自分の家族に利益を求めた。

一人っ子政策に関して、国から個人に対しての出産観念、客観的には農村の出産形式が変わったとよく認識されている。ところが、個人の視点から見れば、女性は能動性を発揮し、一人っ子政策を利用し自分の利益を守っていたことがわかる。

3 現在の出産観念

本節の冒頭で現在の若い嫁が年上の女性に「子供一人しか産まない楽な生活を送っている」と評価されると述べた。現在の農村の女性は、どのような出産観念を持っているのか。

(1) 全国の出産意思に関する調査

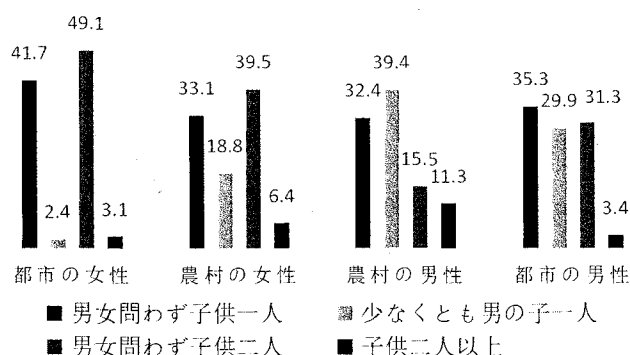
陳方は「1997年中国婦女の価値観念課題組調査データ」と「2000年第二期中国婦女社会地位調査データ」を利用し、「町一農村」の比較に着目し、全国の女性の出産観念を以下のようにまとめた。①家族における女性の地位は、必ずしも子供には関わらないという意識が現在広く認められる。女性は出産にかなり自己意識を持っている；②女性が「男女問わず子供二人がほしい」という出産意思の比率が断然高い。また、若いほど「男女問わず子供一人」ほしい女性の割合が高い。女性は教育が高いほど、出産率が低い；③息子を偏愛する現象は、まだ存在している、と三つの特徴を指摘した〔陳 2003:118～128〕。

⁷ 中国では、子供が戸籍を持たなければ、学校にいけなと決められる。

⁸ 中国に旧制の田んぼの数え方、約六畝である。

「男女問わず子供二人がほしい」理由について、都市では子供一人が経済に言えば妥当だが、「子供二人いると育てやすい」や、兄弟がいたほうが子供の心理状態と性格が良いなど子供の成長のために二人のほうが理想だと考えている。農村では、以上の配慮の他、現在の生産様式と養老制度により、家の労働力と親の養老を重視するため、出産の意欲が高い〔陳 2003 : 120～122〕。村で若い人ほど「男女問わず子供一人」と答える現象について、陳方は現在、出稼ぎ女性が大幅に増え、彼女たちが農民の身分や、親のようにたくさんの子供を育てなければならない生活から飛び出し、よりいい収入を得てより自分の子供に良い生活条件を提供するためと二つの原因をまとめた〔陳 2003 : 123〕。

現代農村における出産意思をより深く把握するため、ここで陳が引用した「政策にかかわらず、子供は何人ほしいか」というアンケート調査の農村のデータを見よう。



図表 1 理想の子供の数と性別（データ典拠：1997 年中国婦女の価値観念課題組）

表によると、農村では現在、子供二人以上ほしいと答える村人が少ないことが明らかである。91.15%の村人は子供は二人以下で十分だと考え、32.75%が「男女問わず一人」を選び、子供が多いほどよい「多子多福」の観念はすでに薄い。しかし、「子供二人以上」ほしい村人は都市の2.7倍であり、農村部では出産の意思が強いという傾向が見られる。また、農村には、18.8%の女性と39.4%の男性は息子がほしいと息子を偏愛する傾向が強いことがわかる。それについて男女別で見ると、都市、農村問わず、息子がほしい男性の割合は女性よりはるかに高い。

(2) 竹林村における女性の出産観念

全国のデータに対し、竹林村の状況はどうだろう。竹林村では、一人っ子政策により第一子が息子だったら、第二子が生めない⁹。娘一人しかいない家族は全村で二十戸に達しない。長女を産んだら、ほとんどの家族は「二胎証」を申請する。しかし、そのうち、避妊リングの手術を受けたくない健康のた

⁹ 2016年1月から、一人っ子政策が廃止され、「全面二胎政策」（全面的に二人っ子政策）が実施されている。しかし、現在のところ、「全面二胎政策」は村に影響がまだ不明であり、ここで省略する。

め「二胎証」を申請する女性がいる。彼女たちにとって、第二子の妊娠が強制の任務ではなく、「もしできたら産む」と考えた女性が多い。女性は子供により家族の地位を固めるという意識はほとんどなく、また健康意識が高まる現在の女性たちは、国の政策を利用し、自分の健康を守ることが見られる。

以下の事例⑥XPさんは現代における農村女性の典型と見ることができる。

事例⑥ 口述者：XPさん（29才）

私は21才で結婚して、二か月後にすぐ妊娠した。若くて結婚したばかりなので、まだ遊びたくて、随そうと思ったが、子供ができたなら産もうと夫に勧められ、娘を産んだ。去年、娘がようやく9才になって、ちょっと息抜きしようと思ったが、また息子ができた。息子は今一才六ヶ月だ。私は子供は一人で十分だと思ったが、夫はずっともう一人がほしいと言って、2015年に息子を産んだ。1999年には避妊のリングが落ちて妊娠した。リングが落ちて妊娠したのだから、大丈夫だと思ったが、結局妊娠九ヶ月で発覚し、計生専幹に病院に連れられ流産させられた。だから2014年に息子を妊娠した時、大変だった。習慣流産になったので、毎日家に横になって、家事も娘の世話も全然できなくて、そしてよく病院に通って、流産を防ぐ「安胎薬」（流産を防ぐ薬）を飲んだ。子供二人でもう十分だ。子供の世話は本当に疲れる。死んでも産みたくない。夫ももう一人ほしいなんてぜんぜん言えない。お金かかりすぎる。特に息子の妊娠中の検査費や入院費、薬代なども高かったし、そして息子はよく病気になり、検査費など合わせて何万元もかかって、保険も使えないし本当にたまらない。

現在、XPさんは家事をしたり、息子を世話したりして毎日忙しく、娘のほうは姑に世話してもらっている。九年間専業主婦を務めたXPさんは外で働けず、お金を儲けることができない。夫は建築関係の会社に勤め、村では結構よい生活を送っているが、一人の給料で四大家族を支え、夫婦二人で子供二人を育てることは容易ではない。妊娠、出産の費用が高く、子供の養育にはさらに費用がかかる。一人っ子政策以外に、妊娠の苦しさ、育児の忙しさと高額な養育費がXPさん夫婦にとって、子供を多く産まない原因となる。

子供の数について、竹林村の若い嫁はほぼXPさんと同じように、一人がよいと率直に答え、また若いほど男女問わず子供は一人でよいという観念が強い。その原因を追究すると、過半数は経済的な理由である。子供二人の扶養コストが高すぎるのみではなく、妊娠や子供を世話するため、女性は少なくとも二年間工場や町に出稼ぎすることができず、夫一人の給料では家計がきついと言う。また事例④黄さんの息子の嫁と事例①YZさんのように、息子を偏愛する傾向が強い家族に育てられ自分の幼い頃の苦しさを子供に体験させたくない、よい生活条件を提供するため、娘一人でも立派に育てたいと考えた女性もいる。

しかし、夫及び夫側の親世帯とは意見が異なり、結局嫁の立場が弱くなり第二子を産む例は多い。例

えば、村の妊娠七ヶ月の湖北省出身の嫁は、第二子のことについて自分はそこまで考えたことがないが、姑に男女問わず子供二人を産むことを要求されたと話した。現在、農村のみではなく、第二子が全国の話題になり、さらに第二子をめぐる嫁と婚家（夫と舅姑）の間に衝突が出る。夫と舅姑が第二子がほしいという意見が確かに第二子の原因となるが、その要因は若い嫁の成長と共に、家族観念の変化ではないかと考えられる。全国のデータでは、45%の女性が「男女問わず子供二人」を選んでいる。つまり約半分の女性は子供二人が妥当だと考えている。若い嫁は「もっと遊びたい」、「生活を楽しみたい」という気持ちで、自分及び夫婦二人だけの生活を考えているが、歳を重ねるたびに将来の生活や養老問題及び子供の生活に関心に移り、子供の数に関する観念も変わっていく。婦人幹部のQさんは18才の高校二年生の息子が一人いるが、今の歳で、今後の養老問題を考えると子供一人では足りないと感じ、もしできれば本当に子供もう一人ほしいと本音を話した。

「一人っ子政策の影響により、女性は若いほど男女問わず一人がほしいという「優産優育」（よりよく産み、より良く育てる）の考え方が形成されている」〔陳 2003：122〕と陳方は結論した。竹林村では、若いほど子供一人がよいと考える嫁が多く、扶養費や家計の維持、子供にできるだけよい生活条件を提供したいなど経済的な理由で「優産優育」の観念が強くみられる。

しかし、長年に渡って変化している家族観念を考えずに女性の出産観念を分析するのは不十分ではないかと考えられる。村の嫁たちは歳を重ねるたびに、家に対する責任感が増え、養老問題や老いた親を扶養する子供の将来を考え、その結果子供の数に関する観念も変わる。なお親世帯の意見を受け入れ、村では最初に子供が一人ほしいと言った女性は第二子を産む場合が多くなる。

(3) 「息子偏愛」から「娘偏愛」へ

竹林村の村人たち、特に60代以上の人に子供の人数を聞くと、息子の数と娘の数を具体的に聞かないと息子の数しか答えない習慣がある。なぜなら彼らは、婚出した娘は自分の家族にはなれないという意識が残っているからである。約四十年にわたり「一人っ子政策」を教え込まれた農村では、インタビューに答えてくれた50代のHさんの態度が息子を偏愛することについて村の男性たちを代表しているといえるだろう。Hさんは喜んで、先日息子の嫁が女の子を産んだと話したが、「もし男の子だったら、もっと嬉しいか」と聞かれると、Hさんは「うん、やっぱり男の子がほしいな」と恥ずかしく頷いた。他の40代の女性が「女の子の孫をもらってもうれしいと言うのをよく聞くが、あの「ても」が嫌だな。やっぱり男の子がほしいだろう。これこそ不平等だ」とはっきり言った。

田んぼを失い、すでにきつい農作業をしなくなり多くの女性も出稼ぎに行く現在の竹林村の村民で、息子を偏愛するという考え方がまだ残っている原因は何だろう。「計生専幹」が計画外妊娠をしないようにと村人を説得した言葉に村人の心理が反映されていると考えられる。元「計生専幹」であったQさ

んは以前の仕事を語ったとき、何度も「まあ、しょせん香火(父系血縁の跡継ぎ)が絶たれるよ。一人っ子政策で子供十人まで産める時代ではないし、いつか終わっちゃう」と繰り返した。息子がほしいという願いは現在の村人、特に男性の心の奥に多かれ少なかれ残っている。徽州は昔から宗族の意識が強かった地域である。解放以降から改革開放までの三十年間、宗族の思想が批判され破壊されたが、最近族譜の編纂、祖先祭祀などの活動が復活し、宗族を再建する風潮が台頭し始めている。竹林村では、勢力が強かった汪氏と曹氏宗族の祠堂は20世紀60年代に倒れた。現在、祠堂の再建や族譜の再編纂などはないが、村の年上の男性だけではなく40代の男性も自分たちの宗族に誇りを持ち、話をしてくれた。しかし、一人っ子政策、男女平等の思想に長く影響を受けてきた現在、一人っ子政策を違反したら政府から罰され、父系血縁を受け継ぐため息子を偏愛する態度を表しすぎると他の村人(特に女性から)に「頭が固い」と非難されるほか、さらに自分の子供の結婚に悪い影響をもたらす可能性があるのも現実である。したがって、徽州地区には父系の血縁関係による家構造の思想が今でも深く人々の意識にいたることがHさんのような男性が恥ずかしく男の子がほしいと認めた原因であろう。

しかし、近年、村には「娘好き」の人が増えている。Qさんは「十年前と全然違って、今、みなさんは娘が大好きよ」と言った。村に数多い50代以上の女性は息子と娘について、「娘のほうが親密だ」、「今、村には息子好きの人があまりいない」、「息子ってさ、面倒くさい」と評価した。その原因を聞くと、彼女たちは息子の結婚費用が高すぎると文句を言った。

「今はね、婚約する時にお金を払い、また結婚する時もお金を払う。お金がないと結婚できないな。息子が早く結婚してよかった」と67才のCさんはため息をつき、息子が結婚する時(1995年)、家屋があれば結婚できた。家で披露宴をして全部合わせて三千元を払った。結納金は払わず、相手も受け取らなかったからと昔を思い出した。隣の50代の女性二人は「嫁のアクセサリー「三金」¹⁰はすべて婚家がい、その上に何万元かを送る。嫁をもらいたいなら、十何万元を必ず払う。また農村では、家屋がないと、絶対嫁がもらえない」と現在の結婚費用事情を教えてくれた。

2002年から、黄山市は経済を発展させるため、外部の投資を誘致して町の西部に経済開発区を設立した。また市内と経済開発区をつなぐ主要な道である梅林大道を拡張するため、当時まだ近郊農村ではなかった竹林村の土地や敷地が収用された。土地の弁償金をもらいながら、経済開発区の工場で働いた村人は生活が大幅に改善された。結婚の費用もそれと同時に、毎年高くなっている。

高騰な結婚費用に困って、地元の女性と結婚できない男性もいる。隣の梅林村にベトナムの嫁をもらった男性がいる¹¹。彼のお母さんはうちが貧しくなければ、あそこから嫁をもらうこともないと嘆いた。ベトナムの

¹⁰ 金の指輪、ネックレス、ブレスレットである。

¹¹ この男性の父親が早く亡くなり、母親がリウマチで指が変形し、農事が全然できない。彼は家が貧しく、彼自身がおと

嫁をもらった男性は梅林村以外に竹林村、引充村に各一人ずついる。村民の話によると、貧困救済金をもらうまではいかないが貧しい家では、息子が地味すぎ¹²、或いは頭がおかしいなら、地元の女性と結婚できないので、仕方がなく外から嫁を買う。

現在、村には息子に嫁をもらうため、借金をして家屋を造ったり、半生かけて儲けた貯金を全部出したりする親は少なくない。20世紀90年代に比べ竹林村の人々は生活水準が大いに向上したが、この十年間に結婚費用がそれより猛烈な勢いで上昇し、息子がいる家にとって高額な結婚費用が重い負担になる。

しかし、現在、村の娘の嫁入り道具は結納より価値が高いことが一般的であり¹³、親が娘に高価な嫁入り道具を準備する。メンツを失わないように、彼らは養老問題に対して娘の価値をますます意識するようになっていく。仙林村のSさんは二か月前に足をケガした時、アフリカで商売している長女が車椅子とつえを買ってくれ、南京で働いている次女が一か月の休みを取り、世話をしてくれたと褒めたが、同じ町に住んでいる息子については時間があればお見舞いに来たと一言を言っただけであった。筆者はインタビューした村人から実家に帰らない、親孝行しない婚出した娘の事例を聞いたことがなかった。それに対し、苦勞して息子を結婚させた後、息子は恩返ししない上に孫の世話をしなければならない親がいる。

同じ村内に嫁いだ女性は婚家があり遠くなく、自分の新しい家庭を支えるため町周辺の工場や市内で働いている。これにより、彼女たちは実家に帰って親に面倒を見る余裕があり、経済的に親孝行ができる。したがって、精神の面でも財力の面でも娘はますます親の頼りになる。

そして、村の大学進学奨学金をもらえるのは過半数が女の子であり、村にいる三人の大学院生もすべて女の子である。また村民の話によると、政府の田んぼ補助金をもらい、生活が豊かになった後、ギャンブルや麻薬で捕まった男の子が少なくない。子供が一人または二人しかいない現在の村人にとって、親に心配される息子より、賢くて大人しい娘の方をより可愛がる傾向になっている。

現在の村には、若いほど、男女問わず子供一人がよいと考える女性が多い。それは一人っ子政策が村に徹底的に実行されたことと関わり、また高額な扶養費、子供に良い生活条件を提供したいなど経済的な理由で、「優産優育」の観念が広く浸透している。しかし、嫁は歳を重ねるたびに家に対する責任感が増え、将来の子供の生活や今後の養老問題などが気になるようになり、家族観念が変わり第二子を望む気持ちが強くなる。また、この十年間息子の結婚費用が高騰し、負担が重くなる一方、娘からは精神的、経済的な親孝行が行われること

なしすぎて、まともな仕事もなく、下働きをする時、一日150元しか稼がない。ベトナムの嫁をもらうため、7万元をかった。「買われた」嫁について、村人は「逃げなくて、息子を生んでくれるし、金銭に見合った」と評価した。

¹² 徽州の村では、人を評判しても、あまりひどく言わない。上に述べた「おとなしすぎる」も「地味すぎる」も、ふがないという意味であり、一人前にならないさまである。

¹³ 村に雑貨屋を営んでいる程さんは仲人をする経験があり、彼女は高い結納をもらおうとする嫁側に「結納はね、ただでもらえるわけではないんだ。2万元（の結納）をもらったら、4万元（の嫁入り道具）を返す、4万元をもらったら、8万元を返す。高い結納をもらって、嫁入り道具をどう準備するの。安い嫁入り道具を送ったら、あなたと娘さんのメンツは失ったよ」と説得した。結納の二倍の嫁入り道具が大げさな話だが、Qさんは「2万元の結納をもらったら、3万元を返す。メンツのためだね。今の親はあまり結納で儲けることをしない」と認めた。

から息子より娘の方が親の頼りになり、その結果村には息子好きの雰囲気が弱くなり、娘の方が好きという人が増えている。

20 世紀の百年間に、徽州農村の出産観念は大きく変わっている。

父系血縁を継続し老いた親を扶養するため子供を産むという伝統的な出産観念に、娘は無用であり、軽視されていた。また儒教に深く影響された徽州地区では、女性の行動が制限され、働けない娘は家計にとって役に立たない存在であり、また結婚する時には高価な嫁入り道具をもらうため、娘の育成は家にとって損失が高いと思われ娘を捨てる、童養媳に送られる、さらには間引きする現象が長く存在していた。また、息子が多いほど幸せであるという伝統的な出産観念により、物質が乏しい時期には無制限の出産による大家族は扶養することが難しく、親が丁寧に子供たちを世話することができなかった。1970 年代一人っ子政策が実施された以降、子供の数が控えられ、「優産優育」の観念が教え込まれ、その結果現在村の若い女性が「多子多福」の考え方が薄く、男女問わず子供一人がほしいという出産観念が強くなった。しかし、子供の成長や農村の養老問題を考慮した上で、第二子を産む家庭は多い。

また、一人っ子政策で娘しかいなく「香火」が断たれた家族が大幅に増え、町の建設に従い土地を失い、村の若者が町や工場に出稼ぎし「農民工」になる。それにより親の土地を息子に継続させ、息子が老後の親を世話するという交換的な伝統の養老制度が崩壊した。養老資源が欠乏した農村では、親が娘に頼り親孝行をしてもらうことで家の養老資源を新しく整合したと考えられる。養老に娘の役割を再発見したことで農村では娘をより大事にする傾向が見られる。しかし、徽州地区には父系の血縁関係による家構造の思想が未だに深く民衆の意識に在り、息子を偏愛するという考えもまだ完全に消えていない。息子を偏愛する伝統的な意識と娘を頼りにする新たな変化が現実互いに絡み合っ、都市化する徽州の農村に共存している。

第2節 家生活における嫁の地位の変化

徽州農村では嫁入り婚が主流であり、男性側は新郎新婦の部屋を準備し、結納を女性側に送り、嫁を娶る。若い嫁は婚家に居住し、家事をして舅姑に仕える。しかし、最近一人っ子娘の家庭では、娘が結婚する時に家屋を準備し、「両辺住」という現象が多くなった。娘が婚出するのではなく、「結婚する」という表現を強調する。この暮らし方の変化により、農村における嫁の地位はどのように変わってきたのか、またその変化の原因はどこにあるのだろうか。

1 若い夫妻の家はどこか

(1) 伝統的な嫁入り婚

昔から徽州地区では、ほぼ嫁入り婚が行われ、嫁が夫側の家に嫁ぎ、入籍し、子供が父親から苗字を受け継ぐことが一般的である。調査に対しても、村では老若問わず、ほとんどの嫁が「私は〇〇年に嫁に来た」と自然に答えている。家に娘しかいない場合、養老問題と跡継ぎの問題を解決するため、一人の娘が婿をもらい、妻側の親世帯と同居し、他の娘が婚出することが多い。婿入りは「入贅」、「招女婿」（婿を招く）、「招親」と呼ばれ、村人には昔「好男不招親」（よい男性は婿入りに行かない）という言い方があった。家が貧しくて年齢が高く、嫁がもらえない男性しか婿入りに行かないという観念である。

結婚後、よく知らない夫側の家に移住する若い嫁は、その不安感を取り除くため、頻繁に里帰りをする。李霞が観察した華北の農村において、若い嫁は「両棲」の生活を送る。結婚後、頻繁に実家に帰り、泊まることは異なる年齢層の女性間の共通した経験である。女性側の家の地位が現在ほど高くない時にも、嫁が実家の家族に連れられ、頻繁に里に帰ることが多く見られた。「娶三年不知道是家」（結婚して3年だが、夫側の家を自分の家と思わない）の気持ちで、数日ごとに実家に帰って泊まり、さらに夫が遠いところで働いた場合、嫁は半分以上の時間を実家で過ごす。若い嫁がこのような気持ちで頻繁に里帰りすることは婚家および村では公認され、さらに賛同されている〔李 2010：102～104〕。調査した竹林村では、頻繁に里帰りすることが代々若い嫁たちの慣習であったが、長期にわたり実家に泊まることはあまりなかった。

事例⑦ 口述者：程さん(40才)

竹林村の程さんは1991年に嫁に来た。程さんの実家は兄弟5人の大家族である。

「嫁に来たばかりの時には、ほとんど毎週実家に帰った。実家が近くて、自転車でだいたい三十分でいける。里帰りが日帰りで、用事がなければ、実家には泊まらない。私、嫁に来て二十数年間、弟の結婚の手伝い、父親の葬式、そして09年に乳腺ガンで、姉に連れられ——姉が実家の村に嫁いだので、世話してくれる——1週間くらい実家で休んだ以外、実家に泊まったことがない。父親は結構頭が固くて、嫁になった娘が蒔いた水のように¹⁴、自分の家族ではないという観念を持って、普段、「妹を迎えてこっちに遊びに連れてきて」とよく私の兄と弟に言ったが、でも泊まれなかった。主人と喧嘩したら実家に帰って親に訴えても、親に「理屈があっても仕方がない。もうあそこ（夫側）の家族になったので、私はしらんよ」と言われ、追い出された。まあ、実家の兄は結婚しているし、嫁になった妹としてあまり泊まらない。

¹⁴ 中国語のことわざ「嫁出去的女兒撥出去的水」は、嫁に行った娘が撒いた水のように戻れない、よそ者になるという意味である。

若い嫁がよく実家に帰ることは認められるが、すでに実家に所属しない（＝客）嫁は、所属している家（＝夫側）に早く帰るべきだと言われる。計画経済時期には、田んぼと土地は全村人に分けられた。婚出した女性はほぼ戸籍が夫側に移動するので、実家の田んぼは村に回収され、夫側の村から新しい田んぼが支給される。若い嫁は新しい家の家事を分担したり、夫側の村からもらった田んぼを耕したり、さらに外でアルバイトをしたりするため、長期間、実家に泊まることはできない。また一人っ子政策が実施されていない時期には、多くの嫁は実家に男性の兄弟がいた。実家の家計に役に立たない、婚出した女性が長期に実家に泊まることは、兄弟の小家庭、特に兄弟の嫁に抵抗されることであった。

また、1970年代に生まれた「七零後」の彼女たちにとって、「嫁出去」（嫁に行く）と「娶進來」（嫁をもらう）の概念は大切なことであった。婚出した嫁は婚家に住むべきであり、もらった嫁がよく実家に長期泊まるのは「みっともない」ことである。さらに夫婦あるいは嫁と舅姑の仲が悪い、夫が無能だと思われるのである。梓源村のYさんは本村に嫁ぎ、実家と婚家が歩いて5分以内の距離だが、「やはり実家の方が楽だ、何をやってもよい。婚家はね、ちょっと不自由だ。お昼は息子を連れてずっと実家にいるが、夜はやっぱり帰るよ。何とんでも（婚家に）嫁に行ったから」と話した。

経済的理由から、実家にとって嫁が長期に実家に泊まることは大きな負担になる。また娶ることと嫁ぐことの方向性が大事にされた雰囲気の中では、若い嫁は長期に実家に泊まることはできない。これにより、婚出した娘は早く実家から離れるという感情を抱かなければならない。

（2） 夫・妻両方に住む若い夫婦たち

20世紀70年代から全国で実施された一人っ子政策により、各家の子供の数は一人、あるいは二人まで減少し、村に息子がいない「純女戸」が多くなる。それによって、息子に頼り、老後生活を送るという伝統的なフィードバックの養老制度は崩壊しつつある。一人っ子政策時期に生まれた子供が結婚適齢期に入るに従い、現在「両^{リャンベンジュ}辺住」という結婚の形式が現れ、流行している。

「両辺住」という言葉の正式な言い方はない。徽州地区では「両辺蹲」、「両頭跑」、「両頭住」とも呼ばれる¹⁵。これは、徽州地区に特別な現象ではなく、四川省西部、湖南省北部、江蘇省南部および湖北省中南部の農村で、このような新しい暮らし方が現れている〔王会 狄金華 2011 魏程琳 劉燕舞 2014；黄亜恵 2013；李永萍 2015〕。「両辺住」は男女両方とも子供が一人しかいない場合に、双方の親を世話するため、結婚前に相談し合い、若い夫婦が双方に住み、扶養義務を負担する結婚、生活形式である。現在、正式な規則はない。上記の各地の状況により、「両辺住」の条件を簡単にまとめる。結婚する時

¹⁵ 徽州地区だけではなく、全国の各地に異なる呼び方がある。文章を読みやすくするため、以下全て（インタビューの会話も含む）「両辺住」に統一する。

に、外に対して「嫁をもらう」と「婿をもらう」を明白に言わない。結婚の贈り物についてみると、女性側は嫁入り道具を準備せず、男性側も結納を渡さない。結婚後、夫婦二人は双方の家にも一定の時期に住むと約束する。子供がいれば、区分せずに両方の老人とも「爺爺」「奶奶」¹⁶と呼ぶ。あるいは子供二人を産み、一人が男性側の苗字をつけて、もう一人が女性側の苗字をつける。また、夫婦二人は両方の親を扶養する義務があり、もちろん両方の遺産も相続できる。

「両辺住」のため、嫁の実家は若い夫婦が住める家屋（あるいは部屋）およびエアコン、テレビなどの生活用具を準備しなければならない。それは村民たちが言うように「部屋がないと、両辺住に全然ならない」からである。中国では、新郎新婦の部屋を準備することは男性側の義務であり、部屋がないと結婚できない状況にある。娘しかいない家は娘に部屋を準備することにより、娘を結婚相手に相当する立場に引き上げる。また生活条件がよいところへ住む傾向がある若い夫婦を招くため、嫁の実家はかなりの費用をかける。「両辺住」を行う嫁側は十分な経済力を持っているといえる。

しかし、「両辺住」に関する考えは人により大きな相違がある。筆者がインタビューした村人はこうした事情に関して、「必ずとは言えない」と答えた。Qさんは「結納をもらい、嫁入り道具を準備する場合もあるし、両方の老人を区分せずに「爺爺」「奶奶」と呼ばないこともある。それは必ず守らなければならないルールではない。まあ、子供が二人いれば、一人が母の苗字をつける場合が多い。それは全部結婚の前に相談によって決められた」と言う。つまり、「両辺住」の内容は不定であり、「結婚から日常生活の各方面に、協議性が強い」〔黄 2013 : 109〕と言える。結婚前の相談は大切なことになる。

XPさんの隣家の嫁は、同じ村の出身で、同じ年に子供を産んだので、XPさんと仲がよい。彼女は「両辺住」の生活を送っているが、姑はそれについて認めていない。

事例⑧ 口述者：XPさん

「子供を産んでも、よく実家に帰って長期に泊まった。まあ、一人っ子なので、「両辺住」をしていると彼女がその時に言った。前は実家に泊まって旧正月を過ごし、今年は姑の方で過ごした。「両辺住」なので、彼女の息子は両方の老人とも爺爺、奶奶と呼んでいるが、姑が聞いたら、すごく怒って、「あれは爺爺、奶奶じゃない、外公、外婆のはずだ。うちの息子は嫁をもらったのであって、婿入りでもなく、両辺待でもない」と言った。しかし彼女は「親が私（子供）一人しかいないので、嫁に来たのではなく、もちろん「両辺住」だ。結婚前にすでに話した」と言い争った。姑は「嫁に来るということじゃなければ、何も買ってあげるわけではない」と。まあ、そういえば、結婚の時、彼女の実家は何も準備していない。服や「三金」など全てご主人が買ってあげたそう。それは嫁に行くということだ。で

¹⁶ 日本語では、父母の両親は祖父、祖母（お爺さん、おばあさん）だが、中国語では、父系の血縁を強調するため、双方の呼び方が異なり、父親の方が「祖父」「祖母」（「爺爺」「奶奶」）、母親の方が「外」をつけて、「外祖父」と「外祖母」になる。

も彼女自身は「両辺住」だと主張した。やっぱり結婚前にちゃんと相談しなかったから。（ご主人はそれについてどう思う？）ご主人は彼女に本当にやさしいなあ、何でも妻の意見の通りにやる。ご主人は外で働いているから、彼女はここでは一人寂しくて、子供を連れて山に（実家は竹林村より離れた山村である）帰る。ご主人が外から帰ると、喜んで車で山に行って、この家には帰らない。

事例⑧では、村人は伝統的な結婚風習に従っているため、「両辺住」の婚姻形式が成り立つかどうかは、結納にかかっている。男性側が高価な贈与（＝結納）を送ることにより、嫁入り婚が成立すると認められる。姑が娶ると主張する理由は「何でも買ってあげた」ことであり、XPさんは、女性側が嫁入り道具を準備せずに高価な結納（服、金のアクセサリ）をもらうことにより嫁が「婚家に行く」と考えた。ところが、嫁は自分が一人っ子のため、結婚したら「両辺住」になると意識し、結婚前に明白に決まらなかったもので、姑との間に葛藤が起きた。

一人っ子政策により子供が一人しかいない状況に対応するため現れた斬新な「両辺住」は、伝統的な暮らし方と異なり、まだ固定的なシステムが確立されていないため、相談の余地が多く、柔軟性の高いやり方である。そのため、定義が曖昧で結婚前に男女双方がしっかりと相談する必要がある。

2 「両辺住」が与えた影響および原因

(1) 養老視点から見る「両辺住」

一人っ子政策が実施された農村では、息子のいない家がフィードバックの養老を確保できないことが「両辺住」の直接の原因になると考えられる。中国の伝統文化では、親の養老を負担することは息子の義務であり、嫁に行った娘は正式な負担者ではなく、実家の家産を継ぐ権利もない。娘が実家の養老において、役割を果し、次第に重視されているが、あくまでも「義理」の立場から要求される〔唐灿 2009〕に過ぎない。「義理」によって娘が親を扶養しても、娘に遺産を継ぐ権利はない。また、父系血縁関係を重視する社会では正式に認められていないため、女性にとって不公平である。さらに娘の親にとっては、老後の扶養を確保することができないことになる。したがって、養老する人が不足しているという状況の中で、村人は現在、苗字および家産の継続について、伝統的な父系継続の規則を若干変更し、積極的に家制度を改革する試みを行っている〔黄 2013 : 110〕。

黄は「両辺住」に関して養老問題の視点から注目をしている。農村の娘一人しかいない家庭で、親が娘に遺産相続権を授けることにより、娘に親の扶養義務が定められる。それ故、結婚しても「娘」の身分は弱くならず、半分の娘（実家）と半分の嫁（婚家）になる。「実家と婚家は養老資源、財産相続、苗字相続に平等な権利を持ち、資源の分配にバランスを取る」〔黄 2013 : 111〕。その不完全な嫁の身

分および実家との親密な関係により、婚家が完全に嫁を支配することはできない。さらに嫁が姑の養老資源——夫（息子）と家の財政を支配するため、姑と嫁の矛盾を緩和できる〔黄 2013〕。

「両辺住」により、若い夫婦、婚家、実家の三つの家の間に起きた変化を図1で分析しよう。

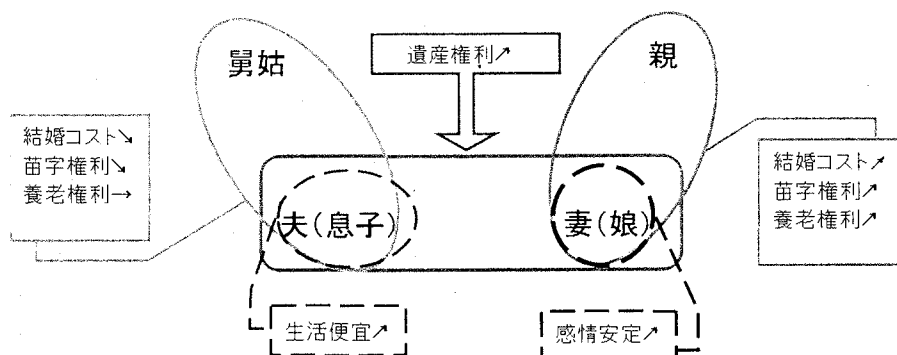


図1 「両辺住」における各方面の変化(筆者作成)

「両辺住」を行った嫁の実家では結婚コストは上がるが、遺産権利を娘に授けることにより、苗字相続の権利と養老資源が手に入る。娘としての嫁は親子関係が保たれ、嫁は精神的な安定感が増す。一方、夫の婚家では、結婚コストおよび結婚以降の生活費用は下がり、養老資源も変わらない。また、苗字相続の権利は嫁の婚家と平等に分けられる。若い夫婦の家族では、もともと親の財産を継ぐことができない妻（娘）が「両辺住」により、親の家産がもらえ、双方の親世帯の財産が共に「夫—妻」の家族に流れ込む。新しい家族にとっては遺産権利が高まることになる。一方で、「夫—妻」の家族は妻が実家に長期居住し、妻の肉親の扶養義務を負うようになる。いわゆる養老問題をめぐり、娘一人しかいない家の財産継続と養老義務の変化により、「両辺住」という暮らし方が生まれた。

(2) 村人が語った「両辺住」の原因

しかし、村人は「両辺住」の原因を話す際に、「養老はね、そんなに重要ではないよ」と言う。意外にも養老の問題は「両辺住」の要因ではないと当地の村民たちには見なされている。「現在の一人っ子の親世帯は、大金持ちとは言えないが、結構豊かな生活をしている」と竹林村の書記Gさんは言う。町の拡張と道路の建設により、多くの農家が土地と屋敷の補助金をもらった。一人っ子の娘の家庭に娘のための家を準備できる程の財力があるのは言うまでもないが、息子がいる家庭でも、将来の息子の結婚に備え、かなりの貯金を持っている。また子供が結婚すれば、まだ40代の若い親世帯は町や工場で働き、お金を稼ぐこともできる。したがって「養老について、現在の村人はほとんど問題がない」としている。さらに上資村の書記は、村の養老コストが町より低いという点を示し、「自分の家を持っていて、大きな田んぼはないが、自分の家で食べるための野菜や豚肉などは問題がない。ひどい病気がなければ、農村の生存コストは低い」と述べた。また一人っ子の扶養義務について、Qさんは「一人っ子だったら扶養

の義務はより明白で、男女を問わず、必ず老いた親を扶養するから。一人っ子の家では扶養に関するもめごとはあまりない。逆に息子が何人かいて、息子を結婚させるため力を尽くし、一生涯の貯金を使い切った今 80、90 代の親の養老には、息子の間でもめごとが起きやすい」と述べた。

養老コストが比較的低い農村で暮らし、現在ほとんど自分で養老生活の費用を負担している一人っ子の親世帯がなぜわざわざ「両辺住」を行うのだろうか。

先述した「両辺住」の特徴には、結婚する時、外に対して「嫁をもらう」と「婿をもらう」を明白に言わないということがあった。「嫁ぐ」と「娶る」の方向性を曖昧にすることにより、嫁および嫁の親に大きな慰めをもたらす。

上資村の書記Wさんは「今「両辺住」を行った女の子はほとんど 20 代の子だ（ほぼ 1987 年以降生まれた女性たち）。一人っ子なので、彼女たちは小さい頃から親に甘えて育てられ、親子の絆が深く、唯一の娘が婚出して家を出てしまうのが、感情的に親にとって大変だよ。夫の親もこのつらさを何とか理解できるだろう。もし「両辺住」にしたら、結婚しても、嫁の親に急に自分の娘と離れるという感じをさせないし、また嫁にとっても、よく知らない夫側の家族と生活する最初の 2、3 年間は慣れなくてつらいから、「両辺住」の嫁はゆっくりと結婚後の生活に慣れる」と述べた。いわゆる「両辺住」とは結婚後の過渡期であり、この暮らし方により嫁と嫁の親は徐々に親子分離の状態を生活や、気持ちの面で順応できることになる。また嫁にとっては新しい家族と一緒に生活する十分な緩衝の時間が与えられるのである。

若い夫婦と嫁の親はこの過渡期を経て、結婚後の生活に慣れていく。さらに子供を産み、双方の気持ち安定してから、生活の利便性、通勤の距離や子供の進学などの要素を総合的に考え、よりよい場所へ住む傾向が見られる。「誰も長期に「両辺住」をするわけではない。結局最後、どこかのところを選んで住むから。ほとんど生活が便利の方へ」とWさんが話した。竹林村の村人は「両辺住」の現実的な意味を明らかにした：「「両辺住」とは、結婚した娘に実家がちゃんと家を準備することだ。今、家を出て町や工場で働く若者が多くて、若い夫婦は住みやすいところを選ぶはずだ。例えば、うちの村の娘は屯溪や休寧などの村人と結婚したが、近くの開発区で働くので、普段実家に住んでいて、年中行事の祝日などは婚家に住んでいる。ほとんど仕事のため、通勤のためだ。また嫁の親が健康であれば、そこの方へ住む場合が多い。孫を世話してくれるから」。

もともと姑の義務である孫と産婦の嫁を世話する仕事を、若い嫁の実家の親に頼む事例が多く見られる。それに対して村人は黙許し、さらに賛成の声も出ている。「姑がいくらやさしい人でも、嫁と姑の関係は微妙だ。実家に住んで、自分の母に子供の世話を見てもらう方がましだ。喧嘩しても大丈夫、家族だから」と言う。嫁は実家の支援により、自由に住みたいところを選ぶ。また、親世帯が「困る」ほ

ど、若い嫁が「両辺住」を自然に受け入れていることに注目したい。事例⑧の嫁が私一人っ子娘だから、もちろん「両辺住」を行うという態度は、彼女の姑に怒られる。一人っ子である甥娘が先日の結婚披露宴で「私は両辺住だよ」とはっきり言ったことに対して、結婚式をどう行うのかとWさんは戸惑った。90年代以降に生まれた「九零後」の若い一人っ子娘たちにとっては、一人っ子なので「両辺住」は当たり前のことである。また親の扶養問題や財産の相続について、彼女たちには疑問がなく「もちろん私の責任と権利だ」と言う。一人っ子娘が持っている、実家に対する責任と権利の自覚は、想像以上に高い。彼女たちは一人っ子家庭で息子と同様に育てられた。より正確に言うと、彼女たちは娘が結婚により家における身分が変わるという意識がなく、嫁になっても、永遠の実家の正式な家族一員の身分が保たれている。半分の娘と半分の嫁」だけではなく、両方の家では正式な家族一員となり、「永遠の娘と嫁」である。

他方、夫としての若い男性はこの状況を喜んで受け入れている。例えば、上に述べた事例⑧は夫が妻と共に嫁の実家に行ってしまった例である。村人はそれについて、「ただでご飯を食べられるし、嫁の親の財産をもらえるし、生活も子供もちゃんと義理の親に世話される。夫にとってお得だ」と評価する。中国には「丈母娘看女婿、越看越喜欢」（義理の母は婿を見るほど納得する）ということわざがある。婿は嫁の実家の客として扱われ、義理の母は「まるで皇帝が来るように大切に招待する」。それ故、嫁の実家において、自分の気持ちや生活を大切にされた若い夫は喜んで嫁の家で生活する。

「現在の若者は「実在」のことばかり考える」という評価がよく聞かれる。「彼らは頑固な考え方を持っている親世代と異なり、自分の必要から、より現実的な方法で、問題を解決する」とWさんは嘆きながらまとめた。いわゆる、若い夫婦の家はどこかという問題について考えてみよう。夫が嫁について、嫁の実家に住むことは、嫁の実家がよい生活条件と温かいもてなしを提供することにより、利己主義的な若い夫婦を引き付ける。村人が養老のような将来の問題を考えるのに比べ、若い夫婦は親子の感情や生活の利便性など、より現実的な問題を考慮する傾向が分かる。

「両辺住」という暮らし方が成立した背景には、婚姻の市場で、嫁の実家が若い夫婦に感情的な要求を明白に、積極的に表現したという状況があった。その表現の方法は、よりよい物質的、精神的な生活条件を提供し、若い夫婦を嫁の実家に引き付けたのである。嫁の実家が自由に感情的な要求を表すことが、一人っ子の家族が激増している農村社会では認められている。この強く求められる親子感情は、一人っ子政策において、子供の数が激減し、親が一人っ子にすべての精力と愛情を集中した結果であり、この「唯一」の親子関係が家族において最も重要なことであることは言うまでもない。子供、特に娘の地位は伝統的な娘軽視の家族の時代に比べ、格段に向上したと言える。

一人っ子であるために、親子の感情が深くなる以外、子供の面から見ると、独立した生活はしにくく、親に依存した一人っ子が多くなる。「湯水のようにお金を使った若い子は、仕事して給料をもらっても足りない。結局、親から補助をもらう」一人っ子は少なくない。また、全て自分の求めから問題を解決するという利己主義の性格が強い一人っ子は、親と一緒に生活し、世話してもらうという考えが強い。

嫁は実家の支援で「両辺住」を行い、自由に住みたいところを選ぶ。彼女たちは積極的に実家に対する責任と権利を担う結果、両方の家の正式な家族一員であり、「永遠の娘と嫁」になる。その直接の結果として、婚家が嫁を支配する権利は弱くなる。この新しい嫁の身分および実家との密接な関係により、姑が嫁を完全に支配することはできなくなった。結婚を通じて、嫁の実家が嫁の側の権利——出産権利と労働権利を贈与として婚家に譲るが〔李 2010: 99〕、現在、一人っ子政策の影響および高額な扶養費用のため、子供の欲望が抑えられ、出産の権利も若い夫婦が握っている。また外で働き、家計に役に立つ嫁は、その労働収入が若い夫婦の家族に所属し、分担する家事も減少している。嫁の出産権利と労働権利が若い夫婦の家族に移り、婚家が支配できる権利はますます減少しつつある。また若い夫婦と孫を世話する仕事が嫁の実家に移転するからこそ、舅姑の負担が軽くなり、まだ40、50代の彼らは外で働き、お金を稼ぐことができる。嫁の実家は婚家に感謝され、より大切にされる。以上により嫁および嫁の実家は日常生活において勢力が強くなり、地位も高くなる。

第3節 若い嫁の経済生活

嫁になった女性は一人前と見られ、家の仕事、家計の管理などを担当しなければならない。家事と家計を上手に切り盛りする嫁が合格の嫁として褒められる。若い嫁は出産と「分家」¹⁷（かまど分け）により新しい生活が始まる。

中国の分家生活に関する研究は主に父系家族や男性の視点から分析し、あるいは分家という時点だけに注目する。分家において若い嫁は、夫の家で曖昧な身分を持っている家族一員として、分家のきっかけというイメージが付けられる。つまり、彼女たちの視点から分家およびその以降の生活を見ることがなされてこなかったと言える。本節では以上の視点から嫁の新しい経済生活を分析したい。

1 親世帯の伝統的な分家生活

(1) 分家のきっかけと家計の管理

¹⁷ 中国語の「分家」は一世帯として生活していた息子たちが親世帯から独立して、親の財産や土地を均分に分けて別に世帯を持つことである。分家で一番顕著なことは食事を分けることであるため、分家はまた「分食」、「分竈」（かまどを分ける）と呼ばれる。日本語の「分家」と若干ニュアンスが異なるが、本論では直接に中国語の分家を使う。

徽州の農村では、昔から早く分家する習慣がある。息子が何人かいる家では、長男が結婚して分家すると、親はほかの男性の兄弟と一緒に住む。また次男や三男なども結婚するとすぐ分家する。全ての息子が結婚した後、親は男性兄弟の一人と同居し、あるいは順番に各息子の家に住む。もう一つの方法はほぼ同様であるが、分家の時点が若干異なる。下の男性兄弟が結婚する前に、上の兄が分家する。つまり、結婚により親と分家することが一般的であり、各息子の分家の間隔期は短い。娘（何人か）がいて、息子が一人しかいない場合には、娘を婚出させ、親はほとんど息子と分家せずに生活を送る。結婚してすぐ分家することは親にとって負担が減ることになる。村人は息子が結婚すれば、家に重要なことはもうないという考えを現在も持っている。

分家のことについて、年配の女性は分家の時間や、分家前後の生活についてはっきり覚えていた。分家の前に家計を管理する人はほとんど親世帯である。インタビューに、婚家が姑の家計を管理すると答えた女性が多い。1981年に結婚したLさんは夫が唯一の息子（婚出した姉一人がいる）として、分家をしなかった。「現在の舅姑と違って、私が結婚したばかりの時、アルバイトの給料を全部姑に渡し、自分のお金を持っていなかった。かわいそうよ。家の重要なことを話す権力がない、食事は彼らが賄う。私の新しい服も姑が布を用意し、裁縫人に作ってもらった」と話した。仙林村のMさんは舅が祁門文化站の公務員で、安定した収入をもらっていたため、舅が家計を管理するという少数派である。夫が長男であるため、1977年に長女を産んだ後、舅と姑は祁門から移住し、Mさん夫婦と同居した。その後、Mさん夫婦は雑貨店を営み、稼いだお金は舅に渡さず、食事をすべてMさん夫婦が賄った。当時の若い嫁は、分家する前には舅姑が家計を管理する権力を認め、結婚した後には、彼らを扶養する義務があった。未婚の息子のほとんどの給料は親に保管され、結婚の費用として預けられる。しかし、姑が息子の結婚時に、預かったお金を出さない事例を聞いたことがある。事例②で述べた劉さんの気が強い姑は、息子が多く、貧しい生活を送っていた。1990年に劉さんが三男の夫と結婚した時、預けたお金をもらえず、その上、すぐ「蹴とばされる」ように分家された。20世紀90年代の徽州の農村においても、伝統的な家族では至高の権力を持っている親がまだおり、それに対して嫁は家長である舅姑の権威を尊敬し、認めている状況であった。

（2）新しい生活のため頑張った若い嫁

婚家から分けられたものについて、1950年代から90年代まで結婚した女性は、異口同音に家が貧しかったので、あまりもらわなかったと言う。92年に分家した程さんの夫婦は、二人が住む古い部屋、お椀、お皿、お箸など簡単な食器、鍋二つ、ポット、石炭を燃やすストーブ、豚肉1キロ、お米一かごをもらった。「その時は家に客が来ると、婚家にお椀を借りに行った」と程さんは思い出を語る。程さんより貧しい状況もある。姑が嫁のかけ布団カバーを取り戻したり、ディーゼルオイル一缶だけで生活を余儀

なくされたりなど、1988年に分家された黄さんは気が沈んで泣いたものだという。さらに嫁に来てから、婚家に借金があることを知り、一所懸命アルバイトや下働きをして借金を返す嫁もいる。舅姑および未婚の夫の兄弟と一緒に古い家屋に同居し、ほとんど何もない（さらに借金でマイナスの）状態から新しい生活を始める。

当時まだ田地を持っている村人として、さほど広くない田畑を耕し、野菜を栽培し、豚2匹と鶏十何羽を飼うことだけで、ぎりぎりの生活しかできなかった。商品経済が始まったばかりの時期で、地方都市の黄山市はまだ発展初期であり、工場や町の商店の就職先も少なかった。お金を稼ぐため、若い夫婦二人は一所懸命農業をしたり、家を出て給料が低い下働きをしたりする生活を送っていた。出産1週間後、山に登って豚のまぐさを刈る嫁、娘と一緒に露店を開いた嫁や、大工をする夫に連れられ、下働きを手伝いながら大工チームに食事を作る嫁などたくさんの事例もある。重度の肉体労働の結果、婦人病やリュウマチなど慢性疾患にかかる40、50代の女性は少なくない。頑張って稼いだお金と借金を合わせ、夫婦二人に所属する新しい家屋を造り、また借金を返すため労働するのが20世紀80、90年代における嫁の結婚後の生活である。

孫を世話するのが姑の義務であると思われ、子供を育てる経験が少ない（特に第一子を産んだ）若い嫁は経験者の姑に世話してもらい、あるいは手伝ってもらうことが普通である。また農業やアルバイトに忙しい若嫁にとって、子供の面倒を見てくれる姑は大変助かる存在であった。例えば、屯溪の町の建築現場で下働きをした程さんは、お昼に姑に小さい息子の世話をしてもらい、夜7、8時に帰ると、息子をお風呂に入れ、洗濯や掃除などの家事をした。しかし、一人っ子政策が実施されていない時代には、姑は息子が多い家庭で全ての孫を世話することは不可能であった。それ故、相嫁、また姑との間で孫の世話によるもめごとがよく起きた。インタビューしている際中に、当時の孫の世話について、「息子が多すぎて、（孫の世話に）姑が全然手伝わなかった」、「次男と末っ子を可愛がっていたので、彼らの孫だけ面倒を見たが、（三男である）夫には何もしてくれなかった」など嫁の姑に対する不満を言い出した。

商品経済時期の初期、未だ発展していない農村部では大部分の村人は農作業をし、衣食の問題だけを解決できるような生活を送っていた。また伝統的に子供が多い家族のため、一組の若い夫婦世帯は分家により親世帯から基本的な生活用品以外、強力な支援や資源をもらえなく、自力で苦勞して得たお金で新しい生活をつくる。忙しい労働生活のため、子供の世話を姑に手伝ってもらいが、姑と相嫁の間で孫を世話する時間の分配によるもめごとが少なくなかった。その一方、彼女たちはまだ家長である舅姑の權威を尊敬し、親世帯に親孝行をする意識はまだ強かった。

2 分家をしない「分家」における若い嫁

(1) 舅姑との同居生活

① 「分家の話をしない」

村で分家について調査した際、息子一人しかいないので、分家はしないと云った家が多かった。一人っ子政策により、ほとんどの家の息子の数は一人であり、村人は親が息子と一緒に生活する慣行に従い、親世帯が息子世帯と同居する。それ故、分家をして意味がないと考える村人は多い。しかし、現在、親子の間に分家の話をしないが、実際は息子が結婚後、「各管各的家」（各世帯が自分の家を管理する）の状態になっている。なおこの状態は、結婚の前にも見られる傾向がある。曹さんは息子の新郎新婦の部屋を改装した時、当時まだ婚約者であったPさんに部屋の内装デザインやペンキの色などについてわざわざ意見を聞いている。これはPさんが住む部屋だから、彼女のお好みでものを選ぶはずだと曹さんは言う。それに対して、X Pさんは欲しいソファを買ってもらえず、部屋の内装に自分の意見を聞かない舅姑に対する不満を表した。若い嫁は婚約者としての時期から婚家にある程度、主張することができる。

② 「お金のかからない」舅姑と同居同食の生活

現在の結婚では、両方の親が新しい部屋（家屋）だけではなく、エアコン、テレビ、たんすなどの大型家具や車などを全部準備してくれる。結婚当日に新郎新婦の部屋を見学し、エアコンなどの電気製品から真っ赤なかけ布団まで全て斬新なものである。自力で新しい部屋をつくる親世帯と異なり、村の若い夫婦は努力せずによい生活を享受できる。「内装がないボロボロの部屋には住めない」ので、親が準備した家電設備と生活用具が整った部屋が、若い嫁には結婚の基本条件と見られる。

「親によい生活条件を提供され、親世帯と同居同食する上に、儲けたお金を自分で握って、親を食う」ということが村人の若い夫婦に対する評価である。親に貢がれることは現在、村では普通のことであり、村の若者もあまり異議なく認める。Pさんは服装工場で働き、サラリーマンのように時間通りの生活を送っている。自炊が面倒くさくて、時間も足りないので、二世帯で一緒に食事をする。現在、料理は親世帯と口に合うので一緒に取っているが、舅姑が年を取って柔らかいものしか食べられない時には別々にするとPさんは言う。仕事で忙しいことが親世帯と同食の要因となる。また食事費用に関して、若い夫婦が負担する事例はあまりない。「確かに普段舅姑に正式に毎月、食事費用や扶養費用を出すことは少ないが、時々食材や果物やお菓子などを買って一緒に食べる。また毎年の「拿節」¹⁸が不可欠だ」とよく若い嫁たちは話した。実際、村では全くお金を出さず、親ばかりに依存する若い嫁はあまり聞いたこ

¹⁸ 「拿節」は屯溪の方言であり、毎年の春節、端午節、中秋節に親孝行として親に贈り物を贈与する習慣である。昔は旬の食べ物を送ったが、現在は衣服、サプリメントなどや直接、お金を送る場合もある。

とがない。なぜならば、一人っ子の家では扶養の義務は明白であり、お金が必要な時期にお金を出さない嫁は、村の人に悪く言われることになる。

「親を食う」現象について、若い嫁は次のように考えている。その原因はほとんど子供の扶養コストが高すぎることにあり、子供の教育、将来の結婚のため早く貯金をしなければならないからである。また村にいる40、50代の舅姑はまだ仕事を持っている割合が高いため、若い世帯から扶養費をもらう必要がない。昔のように物質不足の時代ではなく、衣食問題は既に親世帯と子世帯の間の一番重要な問題ではない。若い夫婦は分家せずに、親世帯からより多くの資源をもらう。

アンケート¹⁹では出産前後の看護と子供の世話に関して、過半数の女性は婚家で姑の世話をもらうと答えている。4割以上の女性が親世帯に子供の面倒を見てもらっている。孫の面倒を見ることは姑の責任であるという思想を、村人は多かれ少なかれ持っている。実際、村の聞き取り調査でも、20、30代の嫁が専業主婦として子供を世話する事例は非常に少ない。しかし、アンケートによると、20、30代の嫁では「孫の世話は姑の責任ではない」という項目の比率が87%に対し、実際に「自分で子供を世話する」という項目の比率は3割弱である。子供を世話してもらうという現実と、子守りの責任帰属の考えには大きな差が存在することに注目した。将来この差がどのようなことになるのかに関心を持っている。現在、嫁の出産前後の看護と子供の世話を実家の親に依頼する事例が多くなっている。一人っ子政策の時代において、親に甘えて育てられた娘と実家の精神的な絆は強い。また若い嫁は、姑が行った古い子守りのやり方に不満があるが、姑と嫁の微妙な関係によってはっきりと言うことができない。

現在、基本的な衣食問題は既に親世帯と子世帯の間で一番重要な問題ではない。また一人っ子政策で、分家せずに親と同居同食する若い夫婦も多い。親が提供したよい生活条件を享受している一方、家仕事や子供の世話なども親に依頼する。一人っ子政策の時代において、親に甘えて育てられたことが原因の一つであり、多くの嫁が仕事に忙殺されていることがその要因となっている。

(2) 明白な家計管理——実際の「分家」生活

① 働く若い嫁たち

村の若い女性は中学校を卒業すると、すぐ工場で働くのが普通である。また彼女たちは結婚で仕事を辞めることも少ない。妊娠から子供の離乳（あるいは幼稚園に行く）までの間、休みを取り、その後すぐ仕事場に戻る。経済開発区の汎帛服装工場の女工50人に行ったアンケートでは、働く理由について、半分以上の女性は「夫一人の給料では家計がきつい」を選んだ。また支出の78%は「家庭の日常生活に充てる」と答えた。まさに竹林村の書記が話したように「なまけず、ギャンブルをしないなら、衣食住

¹⁹ 2016年に筆者が黄山汎帛工業有限公司の女工50人に行った「女性の婚姻生活調査」のアンケート調査である。以下同様。

XPさんは子供二人を世話するため9年間、専業主婦をしている。あまり儲けられない仕事をして、家で子供の世話をしたくないと言う。彼女は、家事をしながら子供を世話することに多大な労力を払っているにも関わらず、姑やほかの村人に「夫に養われている」と言われることについて不公平を感じる。下の息子が離乳するとすぐ仕事を探し、舅姑の顔色を伺うような生活はしたくないと何回も繰り返した。村の男性が考える妻や母親の仕事という質問に対し、男性は「在家玩」（家で遊ぶ²⁰）と答えている。現在に至るまで、村では嫁の家内労働は十分に評価されていない。専業主婦の価値が十分に認められない環境では、嫁は、子守りよりむしろ仕事を選ぶ。家計の補助、子供のよりよい将来のためだけでなく、家族に個人の価値を認めてもらうため、彼女たちは積極的に働く。

[illegible][illegible]

② 子世帯の家計管理者

83

現在、村の中の分家をしない家では、世帯を分けて自分の家計を自分で管理するのが圧倒的主流になっている。村で姑が息子夫婦の給料を預かるという例は、1例だけであった。それは第1節で述べたベトナム人の嫁をもらった家である。

事例⑨ 口述者：ベトナム人嫁の姑

嫁はスーパーで働いた。息子は今アルバイトで150元の日給をもらう。給料をもらうと、すぐ私が預かりためる。毎年息子が「拿節」をくれるから、今年の春節に、嫁に2000元をあげた。嫁は孫にミルクや肉のスープをあげる…絶対嫁をベトナムの実家に帰らせない。妹さんが亡くなった時も行かせなかった。帰って来ないかも。旅費が高すぎるから…（嫁は）親孝行をしてくれ、洗濯したり、ご飯を作ったり、私をお風呂に入れたりする。今はアルバイトに行かない、その怠けるもの。この前、（嫁が）饅頭を買ってほしいって。買うもんか、お金がない！

「買われた」ベトナム人の嫁にお金があれば、必ずベトナムに逃げてしまうと多くの村人が言う。この特殊な身分を持っているベトナム人の女性が嫁に来て4年以上になるが、家計を管理することができず、家族や村人にまだ信頼されていない。また、村民たちのこの家の息子に対する評価は、基本的にマイナスである。親世帯はそれについて不満や感慨があるにしても、子世帯が自分で管理できないことがふがいないと思われる。親世帯から伝えられた土地に頼らず、早くお金を儲けることで、子世帯の地位が全体的に上がっているのである。

現在の子世帯で嫁が家計を切り盛りする家は、半分以上だと村人は言う。実際、調査によると、夫より妻の方が積極的に家計を管理する傾向が分かる。家のことを細かいところまで考慮できる嫁は家計を管理することに向いている。夫の給料を彼女たちに預け、定期的にお小遣いをもらう。それに対し、不満を持つ夫がいる。CSさんは嫁が給料を預かることに反対であったが、CSさんのお父さんは賛成する。CSさんのお湯のようにお金を使うといういいかげんな性格に対し、嫁は「まめまめしく働き、ギャンブルをやらない、頭がよくて道理がわかる」人として舅に信用されている。「CSが嫁の話を聞かない時は、私が説教する。これから家計を全部彼女に管理させる」とお父さんは言う。CSさんの嫁は親世帯の家計の管理者であったお父さんから支持をもらい、若い夫婦の家計管理権力は徐々に嫁に渡されるようだ。

専業主婦のXPさんは夫の給料を預かることについて、最初に話し合ったことであり、私に管理させないと、絶対離婚すると語った。離婚について「離婚しても怖くない。工場で稼げるし、次の受け手（夫）も簡単。子供の扶養権も好きにしろ」とXPさんは態度が硬くなる。夫は千元しかもらえないお小遣いのことでXPさんと喧嘩をした。XPさんが夫の要求通りにお小遣いをくれた結果、夫はしょっちゅう金のア

クセサリーをXPさんに送っている²¹。夫婦喧嘩で嫁の脅かす方法は「一哭二鬧三上吊」（泣き、喧嘩、自殺）から「喧嘩して離婚する」になる。多くの農村女性が仕事、教育、よい生活条件を求めて町へ移動することにより、村の男性らの結婚難の問題がより厳しくなった。高騰する結婚費用と農村における「嫁の買い手市場」という現状に対し、家計の管理権を嫁に渡す方法により、夫は家庭の安定を保つ。

③ 子育てに力を尽くす嫁

一人っ子政策で、家における子供の数は一人、二人まで減少した。親は大きな精力と金銭を子供に注ぐ。村で若い嫁と子育ての話をした際、嫁は「疲れた」と「お金がかかり過ぎ」という不満を多く語った。日常生活を除き、子育ておよび教育にかかる費用が最大の支出となっている。

事例⑩ 口述者：朱さん

息子は今、合肥市の広告関係の専門学校で勉強している。高校の成績が悪かったので、「芸術生」²²として大学の入学試験を受けた。中学校の時、成績がまあまあで、普通の私立高校へも行けるが、私は2、3万元を払って、市立高校へ転学させた。ただ2か月で同級生と喧嘩し、仕方がなくもう一つの私立へ転学した。中学校から高校を卒業まで、合わせて20万元くらいかかった。小学校1年生から塾に行かせて、高校の時、先生にもっと世話してもらうため、毎学期千元のギフトカードを先生に送った。20万で3階建ての家屋が造れるんだ。ちゃんと勉強しなくちゃ、よい仕事が見つからない。息子の教育ではすべて私が苦勞した。夫は甘やかすすぎる。この子しかいないので、仕方がない。悪くならないように私は精一杯だ。子供が二人であったならば、ひたすらこの子に期待したわけではなかった。

「子育てについて非常に気に掛ける」と言ったXPさんは、わざわざ赤ちゃんのお風呂カードを買い、息子をベビーセンターまでつれて行って、入浴させる。また幼稚園の選択に関しては、村近くの幼稚園では保育士の資格をもつ人がいないことに心配し、息子を学費が三倍高い鎮の幼稚園に入園させたいとXPさんは言った。娘に素質教育を行い、バイオリン教室、絵画教室に通わせる村の居酒屋の女将さんなどのような人がいる。村では、母は子育てと子供の教育に関し、大きな決定権を持っている。赤ん坊が飲む牛乳のブランドから、子供が進学する学校まで、意見を出したり、苦勞したりする。そのような母に対して、父は「家族を養う」（時々子供と遊ぶ）役として、あまりその領域に足を踏み入れない。子

²¹ 村の女性は貴金属、特に金のアクセサリーを購入する習慣がある。これは個人の資産でもあり、誇示できるものである。旧正月に所持したイヤリング、ネックレス、指輪、ブレスレットなどを着ける風景が村でよく見られる。

²² 中国の大学入学試験「高考」には、一般の受験生（文系と理系）を除き、芸術類（音楽、美術、体育、パフォーマンス）の大学にめざし、専門試験を受ける「芸体生」がいる。芸術類の大学は、入学試験の成績が一般の受験生よりはるかに低い。とりあえず大学に行けるため、成績が悪い学生が芸体生になる場合が多い。しかし、芸体生は学校の学費や練習のコストが高い。

供の養育に多額の費用が掛かるという事情が、子育てに強い発言権を持つ嫁が家の経済を管理できる要因となる。

息子一人しかいない農村の家では、伝統的な分家は意味を失った。この分家をしない「分家」において、嫁の婚家の中での地位は上っている。現在、基本的な衣食問題は既に親世帯と子世帯の間における重要な問題ではない。それ故、生活の上では分家せずに親と同居同食することにより、若い嫁は親が提供したよい生活条件を享受する。同時に、家事や子供の世話なども親に依頼する。また、経済の上で分家した生活によって、嫁はより早く若い夫婦家庭の経済権を把握できる。若い女性は自分の給料を管理した経験をもとに、結婚後も早く家計の管理に慣れ、さらに親世帯の支持をもらえる。結婚後また出産後の女性は仕事が続けられ、家計を補助することにより、家族に個人の価値が認められる。子供に高い精力と財力を注ぐ現代家族では、子育てに強い発言権を持つ嫁は、間接的にもう一つの経済権を手に入れたと言える。

まとめ

伝統的な社会では、娘は働けず、家計にとって役に立たない存在であった。結婚の際には、高価な嫁入り道具を必要とするため、娘の育成は家にとって大きな損出であると思われていた。また婚出した娘は合法的な継承権と養老権がなく、父系血縁の継承にも役に立たないので、娘は無用であり、軽視されていた。解放以降、宗族が中国共産党によって消滅されたが、考え方が保守的であった農村にはその古い観念が残されている。

計画経済時期に、平均主義という思想により、村では男女問わず共同労働が行われ、女性に家を出て働く権利が与えられた。また、1970年代からは一人っ子政策が実施された。この「子宮革命」により、国家の制度から父系血縁を継続する観念と農村の伝統的な養老制度とが打破された。フィードバックの養老制度を変えないということを前提に、娘の役割は養老において徐々に重要視され、正式な地位が認められるようになった。

1990年代には商品経済が発展する。内陸である徽州地区でも一定の発展があり、町や工場へ出稼ぎに行く女性が多くなった。仕事を持つことにより家計を補充し、家族における女性の役割が重視されてきた。

現在まで、一人っ子政策が40年以上実施され、「優産優育」の観念が教え込まれた。1990年代生まれの女性も適齢期に入っている。親に甘やかされて育った彼女たちは大人になっても、生活の上では親世帯に頼り、親は養老や精神的な支えを彼女たちに依頼する。したがって、実家は娘および娘の新しい家族に対して力を尽くして応援する。嫁になった若い女性たちは両方にとって正式な家族一員であり、「永

遠の娘と嫁」である。実家、婚家、自分の新しい家庭の中で彼女たちの地位は上がっている。

しかし、農村では男女の地位が平等であるとまでは言いづらい。一人っ子政策で娘の養老と家産相続は必然的な趨勢になった。しかし、息子ではフィードバックの養老観念が主流であり、息子がいる場合には、娘は副次的な地位にある。自分の新しい家族において、女性は外で働き、お金を稼ぐが、所詮家計の補助であり、大黒柱になれない。仕事以外、彼女たちは大部分の家事を担い、子供の教育に苦勞する。また離婚した場合に、農村の伝統的な観念により、嫁が嫁入り道具以外、夫婦の共同財産をもらうことは難しい。一人っ子政策が実施され、商品経済が発展している現在、農村の若い女性の地位は飛躍的に向上しているが、男女平等まで長い距離がある。

第5章 「婦人家」^{フエンゴ}の生活における女性の地位

はじめに

「婦人家」(フエンゴ)というのは屯溪の方言であり、50代前後の中年女性を指す。少々消極的な意味があるため、他人を呼ぶ場合にあまり使わない。「婦人家」より年上の人には「老太婆」(ラウタイポ)になる。しかし、両者は年齢の限界が曖昧で、「老太婆」が「婦人家」に所属する場合もある。本章は両者を「婦人家」とも通称する。

母親である女性は、子供が結婚し孫が誕生することにより、祖母(「婆婆/丈母娘」(姑/妻の母親))となり、身分が変化し世代が一つ上がる。伝統的な「婦人家」は、特に姑になる女性は「使われる」息子の嫁がいるため、家族における地位が頂点に立ったにもかかわらず、その後、子供「分家」や体力の衰弱と共に、家族の大部分の実際の権力が徐々に嫁に移転し、家族の年配者として尊敬され、扶養された。しかし、村では「今は立場が逆になった。年上の方が若者に仕えなければならない」ということが一般的になり、子供を育て、結婚させる「婦人家」たちは、孫を世話し、子供の家族を手伝わなければならない。彼女たちの地位はどのように変わり、またそれに対して彼女たちはどのように対応しているのかについて考察する。

第1節 二度目の母親へ

1 二度目の母親の形成

(1) 伝統的な扶養制度における祖母の役割

レイモンド・ファースは、社会構造の基本である三角関係は感情で結ばれた親子関係であることを提示した¹ [ファース 2002: 83]。それにより、費孝通はその親と子供の上に結ばれた「社会構造の基本である三角関係」を強調し、出自集団の双系制(両親)が中国の伝統社会において子供を扶養することの重要性を論じた [費 2010: 159-163]。また孔は、他の家族員(たとえば姑)も多かれ少なかれ子供の扶養に参加すると記している。[孔 2012: 60]。嫁が妊娠、出産、「坐月子」の時に世話をし、幼い孫の扶養を手伝うことは、父方の母である姑の責任と思われる。姑の労働や子守りの経験はある程度、姑嫁の関係を深くさせる [李 2010: 109]。伝統的には姑は息子の子供だけを世話し、娘の子供「外孫」^{ワイソン}を扶養することはあまりなかった。その原因は、婚出した娘と、苗字が異なる外孫が他人の家族と見な

¹ 原文は次の通りである。「人類学者から見れば、「永遠の三角」とは、共同の感情で結ばれた子供と父親、母親の集団であり、すなわち「基本の家族」である。…社会自体は家族という組織を基にして建てられたものである」(筆者訳)

されるだけではない。出産制限がなかった時代、多くの息子ができた結果、孫が多くなり姑は外孫を世話する余裕がなかった。筆者の調査によると、その時期に姑が世話してくれない一部の嫁は、実家の母親に子供の世話をしてもらった。しかし、それは結局一時的な手伝いだけであった。

伝統的な中国社会にとって、家族の三角関係は安定した形を表し、親世帯（特に母親）は子供の扶養に主要な地位を占めるが、祖父母世帯は補充の位置づけである。その家族関係は孔海娥が描いた図1²を改善して表される。単線の実線によって親が子供に対する扶養行為を表し、点線によって祖母が孫に対する扶養補助を表している。改革開放初期まで、中国の村社会にはこのような伝統的な扶養形式が続けられていた〔孔 2012 : 63〕。

（2）二度目の母親の形成

1990年代以降、商品経済の発展に従い、村の多くの若い夫婦はともに家を離れ、都市に出稼ぎに行く。仕事が忙しく生活コストも高いことから、両親は子供を連れて一緒に生活するのが難しく、また戸籍問題もあり村出身の子供たちは簡単に都市の公立学校に簡単に入れない³。それゆえ、親はやむを得ず子供を農村に残し、祖父母世帯に世話してもらうのである。村では、若い母親が1～2才くらいの子供を祖母に預け、出稼ぎ先に戻る。さらに離乳したばかりで一歳未満の嬰兒が農村に残されることもある。

竹林村は都市近郊の農村であり、近くの開発区に多くの工場が建てられ、村の隣に大型ホテルがある。そのため、家を離れ遠い長江デルタ地区⁴に出稼ぎする人は少なく、大部分の女性は家族のために自分の家から開発区の工場に働きに行く生活を送っている。帰宅が遅くなるため、若い母親は子供をお風呂に入れたり、宿題を指導したりと世話をする時間が夜に集中している。それに対して、日中の世話はすべて祖母である「婦人家」の仕事になる。子供が幼稚園に行く年齢になると、「婦人家」の仕事は少し減り、主に幼稚園や学校の送

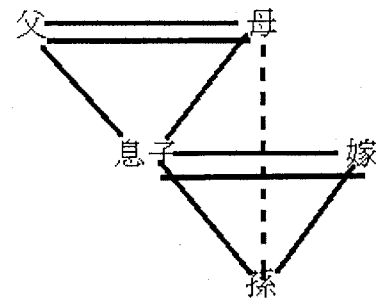


図1 伝統的な扶養形式

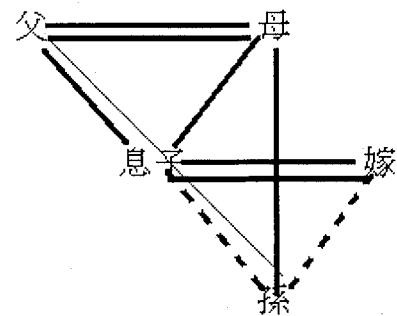


図2 「跨代的擬核心家庭」

迎と、ご飯をつくることになる。幼稚園に行く前までは、彼女たちはいつときも手離せないほど孫を世

² 孔海娥の原図には、「母」（姑）と「嫁」の間に実線がある。しかし、「親—子供」の扶養パターンから見れば、「母」の「嫁」に対する扶養行為は存在していないので、この図では筆者がその実線を消去した。また「父—母」、「息子—嫁」の関係は二重線に変えた。

³ 中国では原則として生まれたところの戸籍が一生ついて回る。農村戸籍から都市戸籍への切り替えが難しく、農村出身の出稼ぎ労働者は戸籍を移動せずに都市に働いている。農村戸籍で、都市の公的教育サービスが制限されている。農村の子供が公立学校へ通うため、高額な「学校選択費」を払うか、親が都市で安定した職業があることを証明するかと定めている市が多い。

⁴ 上海市と江蘇省南部、浙江省北部を含み、長江河口の三角洲地域であり、かつて豊かな農業地帯であったが、20世紀後半から工業地帯として大発展し、長江デルタ経済圏になり、全国のGDPの20%以上を占める経済繁栄なところである。

話している。

開発区から離れた農村や山村では、多くの村民たちは大都市に働きに出て、旧正月だけ村に帰る。子供たちは四六時中祖父母世帯と暮らし、すべての子守りの仕事は彼らに移る。離れて暮らす若い夫婦は毎月扶養費を振り込む。このような新しい扶養形式は孔によると「跨代的擬核心家庭」（親世帯をまたがり、核家族を模擬する家庭）と定義される。その家族関係は図2（孔海娥が描いた図を改善した図—改善したところは注1と同様である）のように表される。親世帯の扶養が失われるため、図1の「息子、嫁—孫」の間の実線が点線になり、逆に「祖父母世帯—孫」の間に直接な扶養関係が結ばれて実線になる。しかし、村では大部分の子守りの仕事は祖母である「婦人家」が行うのが現実であり、祖父は補助の位置を占める。そのため、筆者は「父—孫」の間には細い実線が入ると考える。「父、母（祖父母）—孫」の間に新しい安定した三角関係が構成される。息子世帯が出稼ぎで、自分の子供を世話できないため、「婦人家」は息子夫婦に扶養されるべき歳で、息子世帯の代わりに孫を扶養し、二度目の母親になる。

2 孫の世話は祖母の責任か？

現在の村では、孫を世話している祖母の姿がよく見られる。一歳くらいの孫を抱いて散歩したり、3、4歳の孫にご飯を食べさせたり、孫と手を繋いで村の小学校に送迎したりする祖母たちの姿は日常風景である。第4章に述べたように、子供の母親たちは家を出て出稼ぎする傾向が強く、彼女たちが専業主婦として子供を世話する事例は非常に少ない。以下に孫の面倒をみる祖母たちへの聞き取りの事例を挙げ、実態を見ていく。

事例5—① 調査対象：Mさん（53）

仙林村のMさんは息子一人と娘一人がいる。息子は浙江省に出稼ぎした時、湖南省出身の女性と出会い、結婚している。現在、夫婦二人も浙江省で働き、4才の娘はMさんに世話してもらっている。毎月嫁が扶養費をMさんに送金し、一年間で1~2万円を払う。孫のことについて、Mさんは「第二子を産むかどうかはあなた(夫婦)たちの自由だ。産むなら、必ず面倒を見てあげる。私がまだ動けるうちにね。年を取って動けなくなったら、私に愚痴をこぼさないで」と息子にこう言った。

実は、Mさんは足が病気でしゃがむことがあまりできない。夫を2013年に肝臓ガンで亡くし、現在一人で小さい孫娘を世話しているが、容易なことではない。夫を失い今まで落ち込んでいたMさんは、孫娘と話すと、元気になり、「すごくおとなしい子だ。私のことを思い遣ってくれている」と褒め、孫娘の

世話を唯一の大切な仕事としている。Mさんにとって孫娘を世話することは当然のことであり、また責任でもあった。

Mさんの娘は屯溪区に嫁に行き、息子を産み、2017年冬の時点ではまだ哺乳期であった。婚家の全員がこの子を可愛がり、舅姑がわれ先にと孫を世話し、娘は「子供一人では全然足りない」と笑って言った。このようにわれ先にと孫の世話をしたがるのは、舅姑の間だけではない。竹林村と梅林村では、婚家と嫁の実家の親の間でも見られる。しかし、それは若い夫婦が二人とも一人っ子の家庭である場合によくあることである。村では孫の世話をする祖母は多いが、嫁の母親である「^{フイボ}外婆」が世話する事例が少なくない。孫の世話について、現在の村人は出稼ぎが多いが、孫が産まれたら、双方の親の一人が必ず孫のために家に帰り世話している。ほとんどは姑か嫁の母親かどちらか一人が世話をすると竹林村のQさんが言った。孫の世話について、父方の祖母である「婦人家」はよく「うちの孫は私の責任で、孫の面倒を見なければならない」とはっきり言う。母方の祖母である「婦人家」は「孫の苗字なんてどうでもいい。息子の子供しか世話しないというのは古い考え方だ⁵。どちらもうちの娘と婿だから」と言う。父系の血縁と苗字を受け継ぐ孫を世話することがその家族一員である姑の責任であった。今までこの思想は村人たち、特に年上の村人の心に深く教え込まれてきた。それに対して、嫁の実家は実際の家族成員⁶の視点から母方の祖母が孫を世話する理由を説明する。母方の祖母は、娘と婿を家族の一員として扱うが、父方の祖母のような孫を世話する強い責任感はない。

事例5-② 調査対象：梅林村のお婆さん（50）

梅林村で孫を連れて、雑貨屋のそばに座っていた「婦人家」に会った。彼女は娘二人がおり、すでに婚出した。長女の息子（7才）を育て、現在は次女の2才の息子の世話をしている。次女は開発区の工場で働き、夫が一人っ子であり、姑も開発区で仕事をしている。婚家が若い夫婦に家屋を準備したが、次女は実家に住みたいと言い、実家に戻り、孫も実家で産んだ。姑がまだ働いているから娘の子供を世話するではないかと聞くと、このお婆さんは「私もずっと工場で働いたんだ。でも孫が8ヵ月の時に娘は離乳して、私に世話するように頼んだ。婚家には行きたくないからって。私は去年工場を休み、仕方なくこの子の世話をしている。もう子供の世話なんて本当に嫌だ」と言った。

⁵ かつて婿入りの場合だけ母方の祖母は娘の子供を世話する習慣がある。しかし、筆者が調査した娘の子供を世話するすべての村人には婿入りの状況がなかった。特に娘しかいない家庭に「子供お苗字が全然重要ではない」と考え、娘の子供を世話している。

⁶ 娘が正式な家族一員になることは、第4章の第2節を参照。

もともと娘たちが婚出したら、自分はあまり負担がなく、安心して工場で働けると思っていたこの「婦人家」は、長女の孫のほか、次女の孫の世話をしなければならない。親として平等に娘たちを扱うべきだという気持ちで、次女の頼みを受けるしかなかった。村で外孫をベビーカーに乗せて散歩していた別のお婆さんは「しょうがないよ。自分の娘だから。目を下に向けて見なきゃ（親として娘のために力を尽くし手伝う）」と言った。娘や孫を可愛がる親心は母方の祖母が子供を世話する要因となっている。

子守りについて、第4章第3節に述べたアンケート調査の結果をもう一度見よう。アンケートでは出産前後の看護と子供の世話に関して、過半数の女性は婚家で姑の世話をもらおうと答えている。4割以上の女性が親世帯に子供の面倒を見てもらっている。この結果から、若い女性は姑や自分の母親に世話してもらったことが多い。

また、20、30代の嫁では「孫の世話は姑の責任ではない」と答えた割合が87%なのに対し、実際には「自分で子供を世話する」割合は3割弱である。子供を世話してもらおうという現実と、子守りの責任帰属の考えには大きな差が存在することに注目したい。しかし聞き取り調査により、どんな年代でも嫁や孫をよく世話していない姑に対して、嫁が公然と非難や文句を言うことが分かった。50、60代の女性は保守的な姑の話として、姑が全然子供を世話しなかったとか、不公平や男尊女卑の考えで哺乳期の親子を無視するとか、長い時間文句を言い続けた。さらに仙林村のLさんは庭に座り、入ったり出たりする夫をかまわず、大きな声で姑の不公平を筆者に話した。若い嫁であるXPさんは姑が社交ダンスにはまってるくにXPさんの長女を世話していないと2時間も話し続けた。

実際に、「婦人家」は孫の世話において重要な存在と見なされ、責任を持っている。若い母親が出稼ぎに行く状況の中で、彼女たちは家庭労働と育児の経験者として頼りにされ、さらに実の母親と同じように孫の世話をし、二度目の母親になる。若い人の大部分は孫の世話は姑である「婦人家」たちの責任ではないと認めている。しかし、都市化の進展により、多くの若い夫婦が家を出て出稼ぎに行くため、「婦人家」たちは家に残り孫の世話をせざるを得ないことは現実である。一方、姑が孫の世話をするべきだという伝統的な観念、および一人っ子政策で娘も親の家族の一員になるという考えによって、「婦人家」たちが孫と「外孫」を世話することは必然になっている。

3 孫の世話に関する二度目の母親のため息

責任感や娘と孫に対する思いやりから「婦人家」たちは孫を世話するようになる。しかし、彼女たちはそれについて不満もある。上述した事例5-②のように、孫の世話で祖母自身の仕事と生活が乱されることへの不満以外に、一番の不満は子守りにかかる費用である。前文で述べた湖北省出身の嫁の姑は、自宅で一歳未満の外孫を世話している。その姑は自分の娘について、結婚しても婚家に住みたくなく、

食費も生活費も出さずに実家に住み、外孫を世話してもらっている。現在の自分は「大人（娘）も子供（孫）も世話している」と言った。

しかし、子供の扶養手当をもらっても、なかなか足りないのは事実である。事例5-②の「婦人家」は、娘の孫の面倒を見ているので、婿の親世帯が毎月子供の扶養手当として500円を支援している。彼女にインタビューした時に、2才の孫はひとりで雑貨屋の棚からヨーグルトやクッキーを飲んだり食べたりした時には、その「婦人家」は自分のお金を払った。毎月のミルク代、衣服代およびお菓子代だけでも500円では足りないので、何百元かを彼女が補填しなければならない。

程さんが経営している雑貨屋は村の入口に位置し、村の小学校に近く、学生や子供が雑貨屋に来てお菓子を買う光景がよく見られる。特に、午後4時くらい放課後の小学生は、迎えに来た祖父母を連れて、店で1-2円のお菓子を選び、買ってもらう。週末や休みの日には子供たちは平日より頻繁に雑貨屋に通っている。現在、村では、子供一人のために毎月千元くらいかかり、孫を世話する「婦人家」たちは貯金を切り崩して扶養の補助するのはごく普通なことである。主要な扶養者になる「婦人家」たちは、常に孫にお小遣いを渡すだけでなく、孫のためにかなりの金銭を使う。それについて彼女たちは子世帯に文句を言いながらも、可愛がっている孫にお菓子を買ってあげる。「孫がこれしかないから、仕方がない。お菓子を買うお金ならまだあるんだ。」とよく答えた。

お菓子の購入のように、孫の要求を無限なく満たし、孫を溺愛するのは祖父母世帯の共通の欠点である。多くの「婦人家」は自分の子供を教育していた時には、体罰をしたことがあると認めている。黄さんは、息子が学校をさぼることを聞いたら、街で息子を掴み、罰として跪かせ、反省させたと言った。YZさんのお母さんは、娘が小さい頃、こっそりとお金をもってせんべい一枚を買うので、ドアの後ろに逃げるほどさんざん殴られたと思い出した。「自分の子供だから、叱っても殴っても構わない」だが、祖父母世帯の立場において一世帯を隔てる孫を、自分の子供のように教育するのは難しい。「教育にもお金にもあまり厳しすぎなく」、「もし何か起こったら、嫁に叱られる」と言う。

子供の世話について、多くの「婦人家」は昔のやり方と全然違うと嘆いた。かつて農作業をするため、子供を部屋に残し、或いは田んぼまで連れて行くのは普通である。「今（そうしたら、）絶対嫁に「そんな汚いところに連れなくて」と怒られるから」、Xお婆さんは孫を世話するため、田んぼの仕事をしばらくやめている。「私の子供が学校に通う時には、自分で行くのか、兄、姉と一緒に行くのか、親に送ったり、迎えたりすることがなかった。」とLさんが言った。しかし、彼女は、社会の変化と共に、通学路がより安全でなくなり、「万が一事故があったら、考えられない。みんなが一人っ子だから」と理解できないわけではない。現在の「婦人家」たちは一寸も孫から離れないほど、慎重に家族における大切な孫を世話しなければならない。一人っ子政策で孫の数が減るが、子守りの負担は以前に比べ手間がかかり、

体力が衰えている年上の人にとってより苦勞になる。

親が出稼ぎに行き、一人で農村の実家に残される「留守児童」は、親から十分な愛情をもらえないため、心身に計り知れないほどの悪影響を与える〔孔 2012: 64〕。親子の間に交流が少なく、親に対する感情が冷淡になるのは、現在注目され、「留守児童」に関わる社会問題として報道されている。しかし、筆者の調査によると異なる事情が出ている。晨さん（1歳）は「留守児童」であり、父方の祖母に世話され、親は浙江省へ出稼ぎに行き、一年の中で春節しか実家に帰らない。晨さんの母親は息子を見たくてほぼ毎日ビデオ電話をしている。2才未満の晨さんはあまり話せないが、親からの電話がわかり、母の声を聞いたら、すぐ喜びで手足を振り回す。近年、ネットとスマートフォンが普及になり、人々の連絡方法が音声電話に限らず、まるで面と向かって話し合っているようである。それによりある程度親子関係を親密にさせる。

朱さんは村の入口で建材屋を経営している。彼女の一番年下の妹は近くのホテルで働き、当番の交代で忙しく、7歳の娘を世話する時間があまりないので、朱さんに子供の世話をしてもらっている。学校への送り迎えや宿題の指導、お風呂に入れること、寝かせこと、すべては朱さんの仕事になり、「もう一人の母親みたい」と話していた。しかし、朱さんは「この子はお母さんがいない場合、私と親しいけど、お母さんを見たら、興奮してお母さん、お母さんと呼びながら、走って母親に抱きついた。本当の母親じゃないから、いくら愛情をもってこの子を世話しても無駄だ」と落ち込んでいた。親に会える時間が少ないからこそ、逆に親子関係を深めると言うことができるのではないか。それに対して、子供が二度目の母親との親密感を下げ、どんなに愛情を費やしても、血縁の親に勝てないという現実が彼女たちに、「裏切られた」のような無力感を感じさせる状況もある。

家族を支えるため、現在村では多くの若い夫婦が出稼ぎに行き、祖母が孫の直接扶養者となっている。また一人っ子政策時代に甘えて育てられた娘に対する親心により、娘の子供を世話する「婦人家」は多くなっている。それにより、父方の祖母はむしろ向こう（嫁側）の祖母に孫を世話してもらいたいという考え方が徐々に現れてきている。息子が間もなく大学に行くQさんは、「私はお金を支払って相手の祖母に世話してほしい。楽にしたい。むなしいもの（父系血縁など）のため苦勞して子守りするなんてあまり意味がない。どうせ私は父方の祖母だから。現在、そう考えている村人は少なくないよ。みんな心が広がった」と述べた。より煩雑になる孫の世話を権利と見なさず、むしろ負担と見なす。

現在の村の「婦人家」たち、およびもうすぐ「婦人家」になる女性たちは、家族のために一生貢献することよりも、自分たちの生活を優先している。一人っ子の孫を世話するのはより精力とコストがかかることであり、取った責任も大きい。それゆえ、「婦人家」は客観的に見ると、二度目の母になるほど孫の世話をしたくなくなっている。また祖母になったばかりの「婦人家」たちは、まだ働ける時期であり、

孫の世話によって仕事をやめるだけではなく、孫のために大量の金銭を投入しなければならない。このような状況は、彼女たちの養老生活の資金に影響をもたらす可能性が高い。商品経済に影響された村において、「婦人家」たちは家族に対する観念が徐々に変わっている。父方の祖母の責任を担い、父系血縁の正統性によって自分の地位と価値を証明する必要がなく、彼女たちは自分の生活を大切に考えるように変化している。一人っ子政策の環境において、姑である「婦人家」は、嫁と親家族の関係の変化に気付いた。そのため、一部の権利を放棄し、家族関係（特に姑と嫁の関係）を調和させようとする。そのことによって、彼女自身も現実の利益を享受できることになる。

孫の世話に関して、「婦人家」は主要な責任を取るわけではないが、その家族を支えるため、二度目の母親の責任を担い、孫の世話をしなければならない。本来、息子家族に扶養される地位から扶養者の立場に転換している。現在の村では、母方の祖母が「外孫」を世話する事例が多くなっている。父方の祖母は自己の生活を重視し、孫の世話の権利を母方の祖母に譲る傾向が見られる。この責任の所在の変化は、村人の生き方と働き方の変化を反映していると言えよう。

第2節 「婦人家」の養老生活

「婦人家」が息子夫婦に扶養されるのは村人の慣習である。彼女は母親と姑の身分で息子と嫁の扶養を受ける。実際の生活において、嫁は姑に対する扶養の役割を担っている。商品経済が強く影響している村では、かつて孝道や家産継続により支えられたフィード・バック式の養老生活は崩壊した。そのような村において、「婦人家」の養老生活はどのように変化しているのか、家族における彼女たちの地位がどうなっているのかについて以下に分析する。

1 徽州農村のフィード・バック式の養老生活——「養兒防老」

（1）孝道と家産について

かつて宗族勢力が強かった徽州地区では、各宗族は孝道を重視し、孝道に関する規定が宗族の規則の中で重要な位置を占める。績溪县華陽邵氏宗族の『家規』には「孝為百行之源、人子所当自尽者…」(すべての行いは親孝行をもって第一とする。子供として全力をかけて親孝行をするべし)、黟県方氏宗族の『方氏族譜・家訓』には「人子于父母、不得不愉色婉容、以飲其情…」(子供として親を喜ばせ、気分よくするべきだ)と記載され、婺源県の『武口王氏統宗世譜・庭訓八則』では第一則は孝道であると決められていた〔趙 2004：369-370〕。また老親に親孝行しない族人には、情状の程度に応じてそれぞれ処罰がされていた。イ県の環山余氏宗族は『余氏家規』に「悍妻傲婦蔑視舅姑恣肆忤逆者、家長呼至中堂、舅姑上坐、責令長跪、誨育省改。再犯从重撲罰、三犯令夫出之。如纵容、坐以不孝例論」(もし舅姑を蔑視し、親不孝な嫁がいれば、族長は彼女を祠堂まで呼び、彼女の舅姑の前に長時間ひざまずかせて、

教育させ、反省させる。再犯したら体罰させ、何度注意しても改めない嫁は夫に離縁させられる。親孝行をしないままにさせておく家族は不孝と同視する」と決めた。趙華富は宗族について実地調査した時に、年取った母親を虐待し、注意されても改めなかった息子が宗族の家長たちに祠堂まで連れられ、20遍叩かれたという話を聞いた〔趙 2004 : 414〕。長期にわたって孝道に関する規範と教化を受けた子供は、家長として至高の権威を持つ親に極めて恭しく接し、老後の親を扶養する心が育っていた。

竹林村には、現在でもこのような思想を持っている50代の嫁世帯は少なくない。彼女たちは普遍的に姑である「婦人家」の権威を尊敬した考え方をもち続けていた。Kさんは嫁に来て姑から不公平な対応をされた。屋敷を夫の兄弟と均分してもらえなかったり、子供の世話を全然手伝ってもらえなかったり、姑のやり方に「寒心した」と話したが、嫁の義務として、毎月の扶養の費用や食糧、毎年の「拿節」の贈り物を夫から送らせ、さらに夫が亡くなった後もそれを送り続けている。彼女がそうする理由は「ほかの人に親不孝と言われぬように」という考え方が強いからである。村社会における地域の規則や周囲の監視の目により、子供たちは自覚的に老親扶養の義務を実行する。

経済の面から見れば、普通の農家では、親世帯から土地や家屋、日常用品など重要な生産財と生活財を相続する以外に息子世帯がほかのところから生産、生活資源を入手することは難しい。父系血縁を受け継ぐ息子は親に育てられ、大人になったら親の家産を継承し、老親扶養の責任を負担する。いわゆる費孝通が提唱したフィード・バック式の養老制度〔費 1985 : 306〕である。竹林村の村人の話によると、かつて田地を耕し生活する村人は必ずと言っていいほど老人を扶養していた。田地があればそれにより養老できるし、親が亡くなれば扶養義務をしなかった息子には田地は分け与えない。もともと村には耕作に適する田地が少なく、平均で一人田んぼ1-2畝しかもらえないほど、人口と土地の関係が厳しい状況であった。息子が多い場合は、一人一人に配られる土地がより少なくなり、老親が所有している養老用の土地は息子たちにとって大切な生産資源であった。老人はこのような経済手段で養老権を確保してきた。このようにして孝道観念および親に掌握された生産や生活資源は、思想と経済の両面においてフィード・バック式の養老制度を支えている。村の「婦人家」たちはこのような環境で子供に扶養してもらうことができる。

（2）異なる養老形式

出産制限がなく子供が多くいた時には、息子たちは老親の扶養を均等に負担していた。扶養のやり方はほぼ三種類ある。一つは、息子たちが結婚により親家族から独立して「分家」し、親は末っ子の息子（あるいは息子たちの一人）と一緒に暮らし、世話してもらい、ほかの息子たちには平等に食糧や生活費などを支払う。二つ目は、親が順番に各息子たちのところを回り暮らしていく。それぞれの息子は自分の家で親が暮らしている間のすべての費用を負担する。三つ目は、老親が息子たちと別居し、息子た

ちが均等に食糧や生活費を支払う。三番目は親が健康で、二人も健在している状態の時に多く行われるが、親が一人しかいない場合でも、また息子と一緒に生活する可能性が高い。

もちろん、実際の生活は上述した養老パタンよりもかなり複雑である。例えば、仙林村の黄さんの姑は息子が四人と娘が三人いるが、次男を偏愛している。そのため長期間次男の家で暮らし、次男家族の子供だけを世話したり、ご飯を作ったりする。姑は三男と仲が非常に悪く、春節でも挨拶しないほどいっさい交流がない。もちろん三男は普段母親に扶養費を出さない。それゆえ、古い屋敷の売却金を息子たちに均分しなかった。実際の生活では親子の関係が養老に大きな影響を与えるが、息子夫婦から「婦人家」が扶養をもらうのは基本である。

婚出した娘は夫側の家族になり、夫の親を扶養する義務があり、自分の老親を養う義務がないが、毎年の春節、端午節、中秋節には親孝行として旬の食品などの贈り物を肉親に贈与する習慣（「拿節」と呼ばれる）がある。「拿節」をしない娘は「忘本」（根本＝育てる親を忘れる）とまわりの村人に非難される。娘は親を直接には扶養しないが、兄弟に対して権威がある娘（普通は長女である）は彼らを監督し、親の扶養について指導する地位にある。Yさんは長女であり、母の代わりに弟5人と妹3人を育てた。父親より兄弟たちはYさんの指示を聞く。Yさんの母親が転んで起きられなくなった時に、杭州にいる弟2人は母親を世話したくないため帰らなかった。Yさんは電話して2人を帰らせ、4ヵ月の世話をさせた上、治療費や栄養費として1000元を負担させた。フィード・バック式の養老制度から排除された娘たちは実際の生活として親の扶養に関して役割を果たす。

商品経済がまだ村で発達していない時期に、伝統的なフィード・バック式の養老観念が持たれ、息子を主要な養老資源と見なし、娘が間接的に養老の役割を果たしてきた。

2 都市化における養老生活の変化

20世紀90年代後半から多くの若者が出稼ぎに行き、村の土地が収用され、村の都市化とともに、農村の「婦人家」たちの養老生活が大きく変化していった。

客観的にいえば、息子たちに扶養されるのは老親にとって、養老方式に選択可能な範囲が大きくなる。実際の生活や親子の感情的な側面からも最適な決定ができ、息子たちにとっては扶養の負担が軽くなる。しかし、実際には土地の束縛が軽くなることで親世帯の資源が若者への吸引力とはならなくなり、多くの息子は老親の扶養責任を回避する事例が増えている。例えば上述したYさんの杭州に出稼ぎに行った弟たちは、病気で横になった母親の世話をしたくないため、実家に帰らないといった事例が挙げられる。竹林村の書記は、1990年代には村の幹部がよく息子が多い家族の老親扶養に関するもめごとや老人の虐待事件を仲裁したと述べている。

2000 年以降、村では土地収用が進められ、たくさんの農民が田んぼを失い、「失地農民」になっている。伝統的な養老制度に重要な生産資源がなくなった老人にとって、養老には大きな変化が起きている。

現在、養老の話について、村では「息子に扶養してもらわない」と明言する「婦人家」は少なくない。原因を尋ねると、「自分のお金が足りるから、子供たちからお金をもらわない」と答える。つまり彼女たちは普段の生活費を息子からもらっていないのである。

竹林村の T お婆さんは (80) は毎月、160 元の「田保⁷」と 80 元の「農保⁸」を受け取り、80 才以上の老人へは、毎年の新年に民政局から 100 元とお米一袋が支給される。隣の梅林村の M お婆さんはそれ以外に毎年村から 360 元の補助金を受領している⁹。T お婆さんは「ギャンブルしないなら、毎月 250 元くらいで生活ができる。現在、田んぼがないので、お米を買うけど、野菜は家の近くの空き地で植え、いない野菜の葉っぱや残りご飯で鶏と豚を飼う」と言った。T お婆さんのように、毎月お米や光熱費以外、あまりお金がかからない最低限の養老生活をしている村の老人たちは少なくない。なぜ息子から扶養費をもらわないかについて、M お婆さんはこう答えた。「昔と違って、今は食事の問題が厳しくない。自分のお金で好きな食品を買えるから楽だと思う。お金を持っているのに、毎月息子に扶養費を求めるなんて、息子も嫁もうれしくない。まだまだ動けるので、子供に迷惑をかけないようにしている」。年配の彼女たちはできるだけ子供の負担にならないように、自力で老後生活をしている。

生活費をもらわないため、彼女たちは子供に尊敬されている。C さんは敬意をもって自分の姑を「うちの姑は 80 代になっても扶養されなくて生活している。彼女は道理がわかる人で、それで夫の兄弟たちともとても仲がいい」と評価した。毎年の「拿節」には子供が母親に食品、衣服とお金を送る習慣が現在まで続けられている。生活費をもらわない「婦人家」はより高価な「拿節」をもらえる。村の 40 代の男性は普段母親が生活費を受け取らないので、親孝行が十分できなくて後悔すると言い、その代りに「拿節」には新年の時より多い金銭を母親に送る。このような状況において、「婦人家」は意識的に普段の生活費をもらわないことにより、子供の尊敬とより多くの贈与をもらえる。

「婦人家」たちの生活費の中で、「田保」は大きな役割を果たした。しかし、竹林村の婦人幹部 Q さんが語った彼女たちに関する話はより面白い。「今「田保」をもらえる人は、土地をほとんど売り払った村人だ。その人たちは国から十何万元、何十万元の「土地補償費」と「生活安定補償費」をもらった。子供の結婚に一部分を使ったけど、少なくとも何万元の貯金を手に入れている。だから現在「田保」で食って

⁷ 「田保」は「農地収用補償金」の略称であり、政府が農地を失った農民に毎月最低の食事費の手当てとして補償する。村には「失地手当」、「口糧金」（食糧のお金）とも呼ばれる。各地の政府は当地の消費水準により補償の金額を決める。

⁸ 「農保」は「新型農村社会養老保険」の略称である。一人で毎年 100 元を上納し、60 才（女性は 55 才）以降、毎月 60 元の年金をもらえる。また歳の増長とともに、70 代が 70 元になり、80 代が 80 元に増加する。

⁹ 各村の財政により、老人向けの補助金の変動している。竹林村の幹部の話により、2005-2009 年、土地収用の最盛期に、村政府は上級の政府から補償金をもらい、村財政が豊かになる。その補償金の一部分を村の老人に手当として配る。しかし、土地収用の終了に従い、村財政が厳しくなり、老人向けの補助金は 3 年前から減少しつつ、今年が取り消しとする。

いる「婦人家」たちは結構養老の金銭を持っているよ」。実は、上述した自力で養老生活していると自信を持って言っていた「婦人家」たちは、土地収用で得た高額な補償金という後ろ盾があった。その補償金があるからこそ、彼女たちは安心して毎月「田保」を受け取り、自立の養老生活ができると言える。国の土地収用の補助金は農村の老人に対する扶養制度の不足を補っている。しかし、この制度が根本的に農村の養老問題を解決するわけではない。

また、村には「田保」をもらっていない「婦人家」がまだいる。

事例5-③ 口述者：Wさん（67）

うちは他の村人と違って、田地を耕さなかった。都市戸籍（非農業戸籍）を持っている。夫が鎮の書記を務め、50才に早くに亡くなった。死んだ時、一ヶ月の給料が600円で、当時村に一番高かった。今とは全然比べものにならないけど。田地を持っていないので¹⁰、土地収用の時に新しい屋敷しか配られなかったし、もらった補償金が新しい家の建設費に足りな買った。村にはお金をもっている年配の人が少なくないが、私のように貯金がない人もいる。息子が出稼ぎに行くので、今は娘の家族と生活している。現在の生活がまあまあだけど、やはりお金がないな。

非農業戸籍やまだ田んぼが収用されていない「婦人家」たちは「田保」をもらえなく、貯金もあまり持っていない。それゆえ彼女たちは子供と同居し、子供の家族を手伝い、養老生活を送っている。

しかし、「田保」や貯金をもらえない「婦人家」たちのなかには、労働で養老費を稼ぐ人もいる。梅林村のJさんは今年69才で工場や商店で雇われるのは難しいため、屯溪区の清掃員をしている。毎月何百円の給料がもらえるので生活ができる。竹林村のZさんの姑（70）は持っている田んぼが道路から遠いので、現在半分しか収用されていなく、貯金が多くない。まだ元気な彼女は町にグリーンベルトの雑草刈りのアルバイトをして、毎日70円の収入がある。一年中一万元あまりの貯金ができる。「今は労働で稼ぐ社会だから」とZさんの姑は気軽に話した。Zさんは「あんな暑い夏に藁の帽子をかぶって、室外で労働するのは、私には無理だ。姑は本当に強い」と評価した。いわゆる子供に頼らず、労働で養老生活をするという考え方は一部の「婦人家」に受け入れられている。彼女たちは50代前後に孫の世話をし、孫が大きくなって祖母の世話が必要なくなった時に、また家を出て働き出す。陳伯峰は中国の伝統的な農民の価値観について、「生活の意味を「祖先崇拜—子孫繁衍」という連鎖に託し、個人の有限な命を持っている彼らは、その無限に繰り返している連鎖から意義を獲得する。それゆえ、自分の生活より、祖先

¹⁰ 非農業戸籍を持っている人は土地の使用権がないと国に制限されている。

—子孫という連鎖を延ばして、維持するのは彼らにとって一番大切なことである」〔陳 2009 : 173〕と指摘した。しかし、個人の生活を大事にする現在の社会では、彼女たちはその伝統的な価値観を保留する一方、自分の現実の養老生活を重視し、豊かな養老資金のため努力している。彼女たちは新しい方法で個人の生活の意味を求め始める。

しかし、この考え方を持っている「婦人家」の割合は低い。事例5-③のWさんに労働で養老生活することについて、「働けない。清掃員って。娘に扶養されていないわけではない」と言った。Wさんは非農村戸籍や、鎮書記を務めた夫の話をした時、少し優越感を持ち、ほかの村人と違うと強調した。清掃員のアルバイトが彼女にとってはプライドを傷つける仕事であり、受けられないだろう。また、年を取った親が外で働くのは子供に扶養されないという観念を持っている彼女にとって、それはまわりの人に自分の子供が親孝行をしてない証明となるのである。筆者の調査により、現在村の「婦人家」には、そういう考えを多少なりとも持っている人が少なくない。もちろん、病気で働けない場合や高齢で雇われななど客観的な制限もあるが、心に深く根付いた伝統的な「養児防老」の観念は、自力で養老生活できない彼女たちが老後に家を出て労働することを拒否する要因になっているのではないかと考えられる。

もともと生産資源として子世帯に伝わった土地は、形を変えて金銭として養老生活に役割を果たす。土地が収用された「婦人家」たちは田畑を耕さなくなった代りに、土地の補償金で楽に養老生活を過ごす。土地収用で一夜にして巨万の富を得た村人がいる一方で、村には貧富の格差が現れる。豊かな養老資金をもらえるため、一部の「婦人家」は思想が変わり、労働で自分たちの養老生活を支えようとする。

「婦人家」は土地収用の補助金をもらい、自由に養老生活を選ぶことができる。好きなものを買ひ、子供の尊敬を受けて、家族における地位も高い。また、働いて養老の資金を稼ぐことによって一層、子供からの尊敬を受けることになる。この二種類の養老資金は「婦人家」の養老生活の後ろ盾となっている。

3 「等価交換」の養老生活

笑冬が提唱した伝統家族等級制度の三原則（性別、長幼の順序、年齢）〔笑 2002 : 80〕によると、女性は父系制の家族において従属的な地位に置かれ、嫁に来たばかりの若い女性は全家族の中での地位が低い。が、「婦人家」になると、長幼の順序と年齢によって下の世帯に尊敬され、扶養される。即ち「孝道の名義で息子夫婦の敬意と服従をもらう」〔李 2010 : 184〕。しかし、年配の女性が獲得した権威は、嫁いだけばかりの若い嫁としての低い地位を経て得たものである〔李 2010 : 185〕。

現在の農村家族では、子世帯の地位が上がるとともに、親世帯の子世帯に対する権威が崩壊されている。また、親が所有している家産について、土地収用で一定の貯金を持っているため養老には問題がな

いが、子世帯の家族の長期的な発展において考えると資金が足りない（村に毎日かけ麻雀をする老人は少なくないことも資金が足りない原因の一つになる）。老親は孝道や所有している生産資源だけで生活をし、子供から扶養（高質な扶養）をもらうのが難しくなる。

それでは、現在の「婦人家」たちはどのように現在と今後の生活のための資金と介護を獲得できるのか。まずは老親が置かれている社会的な地位から基本の扶養がもらえる。それは親族制度の倫理規範で定められ、社会の輿論と法律に保証されている。村の「婦人家」たちは現在ほとんどの家族が子供一人、二人しかいないので、扶養されないことをあまり心配していない。「何とんでも、村委員会や法律が管理しているから」、老親に対する扶養関係と扶養責任は明白である。しかし、この基本的な扶養費は村で自力で養老生活ができる「婦人家」たちにとって一番大切なことではない。現在、村の「婦人家」たちがほしい養老とは何かについて説明する。まずCさんが語った母親の実家の村にいるお婆さんの養老問題を見よう。

事例5-④ 口述者：Cさん（45）

お婆さんは転んで、動けなくなり、毎日ベッドに横になっている。彼女には息子4人と娘2人がいる。夫が亡くなった時、長男はまだ結婚していなかった。彼女は苦勞して息子4人を結婚させて、「分家」した。長男夫婦が30代に亡くなり、当時50代だったお婆さんは長男夫婦の娘を育てていた。そのため、他の3人の息子家族の孫を世話する時間がなかった。女一人でありお金を稼げないので、息子たちが結婚した時に部屋（家屋ではない）しか準備できなく、「分家」の時には息子の嫁たちはいくつかのキッチン用具しかもらえなかった。だから、お婆さんが転んだ後、3人の息子の嫁たちは誰も世話をしに行かないし、毎日息子3人は母親の部屋に顔を出すに行くが、ちゃんと面倒を見ていない。遠くに嫁に行った長男の娘が仕方なく、お婆さんを世話するために帰るが、彼女が一人で長時間祖母を世話するのが難しいので、お婆さんの娘に頼んでいた。でもお婆さんの娘も自分の家族がある。まあ、老人はまだ元気で動けて、誰にも世話してもらわない時はいいけど、動けなくなった時が大変だ。

前述した普段子供から扶養費をもらっていないという「婦人家」の養老に対する態度はわかるが、病気や衰弱して横になって動けない時、大手術を伴う深刻な病気になり高額な医療費¹¹を家族に負担させる

¹¹ 村では「新型農村合作医療保険」（略称「新農合」）が実施されているが、医療費や入院費用に対する公費負担は3割だけで、7割は自己負担となっている。村では、乳がん、肺がん、人工ペースメーカーなどの手術で貯金十萬元さらに何十万

時、子供にどのように扱われるのかについて、「婦人家」たちは一番心配している。いわゆる彼女たちはいい親子関係を保った老後扶養を望んでいる。

しかし、実際に農村では、彼女たちは子供が孝道に従い、動けない自分を世話してくれることをあまり積極的に望んでいない。Wさんは「自分の健康が一番だ。本当に病気で横になったら、誰でもちゃんと世話してくれないよ。これは嫁か娘か、誰が世話してくれる話ではない、(自分が) お金を持っても、彼らは買ってくれない(親の指示通りやらない)。だから子供を多く産んでも無駄だ。子供一人で十分だ」と言った。「婦人家」は子供が提供した老親扶養に対する期待が下がっていて、さらに出産観念に影響を与える。

それゆえ、「婦人家」たちは心のこもった老後扶養をもらえるため、子供たちの家族が望む愛情と労働を提供する。例えば、妊娠と出産後の嫁の世話をすることである。感情面から見れば、この時期の女性が一番弱く、無力であり、嫁の世話をしっかりしないとその後、姑と嫁はあまり仲がよくなる。姑の面倒をよく見ていない嫁について筆者が調査したXPさんと黄さんは、自分の姑について「寒心」、「意味がない」と言い、李霞が調査した嫁の雪萍さんはまわりの人に笑われないように、無理やりに姑に話かけた〔李 2010: 109〕。XPさんと雪萍さんの姑が動けなくなり、嫁に世話してもらう時に、そこにどのような感情が入っているのか、つまりその姑たちがどのような扶養がもらえるのかについて、想像できるだろう。

それ以外、子供の家庭を手伝う一番重要な仕事は孫の世話である。第1節で、村の若い人たちが出稼ぎに行った後、孫の世話が祖母である「婦人家」の義務と見なされることを論じた。孫の世話をしないことは、「婦人家」の扶養を拒否する原因となる。例えば、事例5-④のお婆さんは、両親が亡くなった長男の孫娘を育てるため、他の孫を世話しなかった。その結果嫁三人は横になったお婆さんの世話を拒否した。子供たちは「婦人家」が提供した労働が平等かどうかを計算する。

事例5-⑤ 口述者：Dさん(45)

姉は息子が二人いる。長男の息子は生まれて12日目に病気になって、姉がずっと世話して、杭州の病院まで連れて行って何万元もの医療費がかかった。その子は今12才になった。長男の息子が3才くらいの時に次男にも息子ができ、姉はその孫を世話するため次男の家族と生活している。長男夫婦は、母親が孫たちを平等に世話していないと怒って、自分の息子の前で「死にぞこないめ、年取ったら扶養するもんか、次男に扶養してもらおう」と罵った。

元をかける事例を結構聞いた。

「婦人家」に貢献するかは子供たちの商品経済への価値尺度で考量される。子供たちは、「婦人家」が自分たちに提供する労働が完全に平等であることを厳しく観察し、もしわずかでも不公平だと思えば、彼らはそれを言い訳として養老のお返しを減少する。「婦人家」たちはできる限り平等に子供たちの世話をすることで、その対価として心のこもった扶養生活が享受できることを期待している。この新しい交換のルールを現在では多くの村人が受け取っている。

上述したWさんは「私は娘（の家族）と一緒に暮らし、彼らの生活を世話している。だから娘が扶養してくれる。雇った手伝いさんより、きっと私のほうが心が通い合う。私がやれば、何でも気に入るようにやってあげる」と言った。まさに、「婦人家」は感情と労働を子供に提供し、感情があふれる老後扶養をもらう。

伝統的な孝道や家長権威による被扶養者になった「婦人家」たちは、現在扶養者の立場に立っている。彼女たちは目に見える社会労働および、目に見えない家庭労働の時間を延長し、養老費用を蓄積し、結婚している子供、孫を世話することにより、病気や衰弱で動けない時に心のこもった養老を確保する。

第3節 家族以外の人間交際

1 親類交際の冷淡化

竹林村では、村外婚がよく行われている。村の書記によると80%以上の家族が村外の人と結婚すると言う。筆者の調査では、村内婚は6例しかなく、しかも最年少の女性は45才である。竹林村の通婚対象は隣の梅林村、屯溪区、開発区、休寧県に集中し、近年では省を跨って結婚する事例が多くなる。それゆえ、大部分の「婦人家」の実家は婚家の村にはない。そのうち、婚家と実家の距離が遠くない（一日に往復できる程度）「婦人家」は多いが、村には嫁が実家に帰り長期間住む風習がない¹²ので、彼女たちは結婚してから、多く婚家の親戚と付き合いをせざるを得ない。

婚家の親戚の中でも、夫の男性兄弟の家族との交流が一番多いと言われる。李霞が述べたように、大家庭の面子に関わるため、男兄弟は互いに仲がよいことを重視するが、男兄弟の嫁たちの間には、各家族の争いが表れる〔李 2010: 156〕。第1、2節に述べたように、嫁たちは結婚、「分家」、孫の世話などにおいて「婦人家」が提供した支援が公平かどうかを判断し、それにより養老資源を還元する。また筆者は幼馴染から、農村に住んだお祖母さんが亡くなった直後、二人の「婦人家」であるおばさんがすぐ争って彼女の遺品を「片付ける」ということを聞いた。ところが、競争の関係以外では彼女たちは日常生活の中で協力し合うことが多い。農繁期や結婚式、葬式など忙しい時期には互いに農作業をしたり、

¹² 第4章の第2節に、現在、「婦人家」世帯の嫁は日帰りの里帰りをする。

ご飯をつくったりする。また彼女たちの関係は子供たちにも影響している。夫と男性兄弟はほとんど生まれた村を離れず、しかも近くに住んでいるため、父方のいとこ兄弟である子供たちは小さいころから一緒に遊び、親しくなる。梓源村で調査した時、家を借りてくれた村の婦人幹部 ZF さんの次女（2才）が、毎日家の後ろに住んでいる父方の伯父のところでご飯を食べて、年齢が近い伯父の孫娘たちと一緒に遊ぶのを見た¹³。農村では、子供が親戚の家でご飯を食べることは珍しいことではない。子供にご飯をつくるということは「婦人家」と親戚の家庭が良い関係を持っていることを表し、二つの家庭の協力の延長と見なされる。現在「婦人家」夫婦はまだ実の兄弟が多い世帯であるため、夫側の男兄弟たちの家族と競争しながらも協力し合う生活をしている。この競争と協力の関係において、「婦人家」は自分の家庭の利益を守り、繁栄を求めるため、主導的役割を果たしている。

もともと家族である「婦人家」の実の兄弟たちは、結婚により自分の家族ができ、結婚後互いの交流が少なくなり、彼女にとっては親戚となる¹⁴。特に兄（弟）には嫁がいるから、その関係の距離は遠くになると感じる「婦人家」が多い。それは彼女たちの子供に影響を与える。「婦人家」は子供がまだ小さい頃（学校に行く前に）には、よく子供を連れて実家に行く。しかし、年齢が上がるにつれて、実家に帰る頻度が低くなる。一方、子供は学校に行くようになると、昼に自由時間がないため、同じ村に住んでいる父方のいとこ兄弟ほど、母方のほうと付き合う時間が多くない。Qさんは旧正月に高校3年生の息子連れで実家へ新年挨拶しに行ったが、息子は母方のいとこたちとあまり親しくならず、一日中一人で座っていたため結局早く帰った。徽州には、「母方の親戚は一世帯で終わる」（「老表親、親一代¹⁵」）という俗語がある。母方の親戚関係は継続性がなく、同世帯のいとこ兄弟が亡くなったら、その親戚関係が消え、次の世帯には続かない。婚家における長期の生活に従い、「婦人家」になる彼女たちは夫側の家庭に対する連帯感が高くなる一方、実家側の兄弟たちに対する家族の認可度が低くなる。

仙林村のSさんは休寧の出身で、梅林村に嫁に来た。2000年以降、実家の兄弟たちは村を出て出稼ぎに行き、昼に遊びに行っても常に誰もいないので、そのうちSさんは普段はあまり兄弟のところに行かなくなった。旧正月や、国慶節などの連休に兄弟たちが集まるとき、あるいは結婚、葬式に手伝いに行く。Lさんの母方の兄は梅林村で十畝以上の野菜を栽培し、一年中野菜卸売りに忙しく、大晦日の夜まで商売を続ける。Lさんは「忙しいのがわかるから、隣の村だけど、あまり遊びに行かない。迷惑しないように」と言った。豊かな生活のため忙しくなる農民たちは、親戚間の交際にかかる時間が減少し、平日はあまり連絡しないのが普遍になる。このような変化は「婦人家」の実家の兄弟にだけでなく、夫の

¹³ 竹林村には、このような現象がないが、父方のいとこたちとよく遊んでいる。

¹⁴ 費孝通の解釈により、家族の範囲とは、母方の親戚と婚出した娘を含まない〔費 2006：84〕。

¹⁵ 中国は、父方の親戚が「堂」と定義され、母方のほうが「表」である。話し言葉では「老表」で母方のいとこ兄弟を指す。

方にも同様におきている。

現在、親戚の付き合いはすべて旧正月の親戚まわりに集中している。新年の二日、嫁の里帰り日をはじめ、上元節（旧暦の1月15日）まで、村人たちは親戚まわりで忙しくなる。旧正月に村で調査した時、Cさんは息子の嫁と一緒に料理を準備していた。「昨日は私の兄弟たちの家族14人がうちに来て、15品料理を作った。今日は息子嫁の兄弟たちが来る。あさっては夫の二番目の姉のところに行く。ほとんど毎日ご馳走するか、されるか、正月は親戚まわりが忙しい。」とCさんが言った。料理をつくったり、親戚をもてなしたりするのはすべて女性の仕事である。「婦人家」たちにとって新年の親戚まわりは疲れることだが、親戚関係を深める時間は旧正月しかない。かつては味付け卵や饅頭などの軽食を食べて済んでいた親戚まわりが食事会と盛大化し、また妹が兄に、弟が姉に、下の人が上の人に訪れる方向性は弱くなり、兄弟の家族が集まり一緒ににぎやかに食事をする傾向が見られる。

現在の親戚関係が以前よりかなり希薄になっていると、ほぼ全村の人が感じている。出稼ぎや仕事で一人一人の生活が忙しく、普段会える時間は急激に減少している。また土地収用した後、かつて平屋で生活していた村人は三階の一戸建てに引っ越し、村人との交流の機能を果たしていた庭が、留守のため庭の門が閉鎖されることにより、その機能が弱くなり、家にこもって町の人のような暮らし方が徐々に村人たちに受け入れられるようになる。特に、以前舅姑や夫の兄弟の家族と一緒に狭い部屋で生活した嫁たちは、距離を保ち親戚と付き合うのは以前より本当に楽だと積極的な評価をした。都市化が進んだ村には、多くの村民たちはこのような新しい親戚との付き合いを受け止める。

夫側の兄弟でも、実家側の兄弟でも、血縁関係を持っていることは、親戚同士が往来するための基本的要素である。しかし、都市化とともに、出稼ぎの村人が多くなり、親戚の往来の頻度が低下し、親戚関係は明らかに冷淡化した。

都市化の進展は村の女性の交際関係に、大きな影響を与えた。多くの村人が出稼ぎに出たため、親戚間の交際は狭く、浅くなった。「婦人家」たちの親戚関係における役割は低下した。「距離を保ち、疲れない」親戚交際の基準が村人に受け入れられ、「婦人家」は親戚関係に束縛されなくなった。彼女たちの交際の中心は社会に変わり、交際の選択性と自主性が増加している。

2 村の女性の交流の変化——広場ダンスを例として

（1） 広場ダンスについて

広場ダンス（中国語は「広場舞」）とは健康のために広場、公園などで集団で行う健康ダンスである。参加者はほとんど中高年の女性であり、男性の割合は低い。太極拳と同じように、みんなが一人の上手な人について、音楽に合わせて踊る。太極拳の緩やかな音楽とは異なり、広場ダンスの音楽は、リズム

が強い「民族風」のディスコだったり、ダンスに合うポピュラーソングだったり、地域や時期によって異なる。ダンスと言うが、健康志向的なものなので体操とダンスの間にあるものである。

1990年代に入ってから都市部では、インフラ整備として多くの広場が建てられた。そもそも中国の都市の居住者は、朝食前の運動（朝運動は定年の人が多い）のほかに、夕食後にも散歩する習慣がある。それらの運動と散歩が徐々に広場ダンスに替わる。そして2000年代後半以降、広場ダンスが農村部にも伝わる。

（2）竹林村の広場ダンスについて

竹林村の程さんは2008年から広場ダンスを始め、村の広場ダンスグループの「元老」とも言える。最初に村に住んでいた市文化局¹⁶を定年した役員にダンスを教えてもらった。その後、ダンスを教えた先生がやめたため、ダンスの先輩たちはネットで他の広場ダンスグループのビデオを見て真似して、新しいメンバーに教えるようになった。毎日踊っている村人は少なくとも40才以上の女性である。若い人は「仕事や家事で疲れるから、夜は動かずに休みたい」とか、「工場が忙しくよく残業するので、毎日行けるわけではない、ちゃんと学べないから結局やめた」とか、「あれは年上の人がやっていることだから、若い人は入りづらい」などの理由であまり来ない。毎日晚御飯以降、みんなは村委員会ビルの前の広場で集まり、音楽に合わせて踊っている。

現在広場ダンスグループの規模は60人くらい、その中で人員の流動は速い。知り合いに連れられて踊り始めた人や、仕事や子供の世話のためにやめた人が少なくない。Zさんの妹さんは5、6年間踊ったが、去年から転職し、12時間交替勤務制の紡織工場で働き、毎日踊る時間がないのでやめた。筆者が二年間取材した程さんは今年の旧正月に孫の誕生で、しばらくダンスを休んだ。

その60人くらいのグループの中にダンスが上手で、稽古の時間がある12人の「婦人家」は「竹林村広場ダンスチーム」を結成し、竹林村を代表してさまざまな活動に参加する。その中では、ようさんはリズム感がよく、ダンスの振り付けとステップを担当している。Zさんはパソコンに詳しく、音楽の編集や、撮ったビデオをネットにアップロードし、またネットショップでダンスの衣装と道具を買う。程さんは組織者としてチームの練習所やスピーカーなどの事務を村と交渉する。

チームには男性がいなく、毎晩グループのダンスに村の男性は参加しない。彼らは「普段人々の前でダンスするのが恥ずかしい」、「女ばかりだから入りづらい」などの理由で広場ダンスの参加を断る。それについて、「男性が入ったら、喧嘩が起こしやすい。農村は都市と違って、（夫婦ではない男女2人が）一緒にダンスすれば、まわりに不倫の噂がされてしまう。煩いから、私たち女同士だけ踊っている」と程さんは言った。村で広場ダンスをする「婦人家」たちは確かに性格が明るく、見た目がファッショナ

¹⁶ 文化事業を管轄する政府の行政部門であり、日本の文化部に相当する。

ブルという傾向が見られる。村で踊ってない「婦人家」から、「男が健康のため踊りに行くわけではない。女と遊びたいだけだ。踊ってる男は浮気と同じだ」と過激な言葉を聞いたこともある。現在、近郊農村である竹林村では、男女のことについてかなり保守である。

村社会の男女関係について、費孝通は、社会関係が既定された安定な村社会では、その安定さを求めるため、男女別の原則が整えられ、双方の間に激しい感情を起こさないように、生活および心理の両面から隔たれ、その安定さを破壊するものはすべて抑えられると述べた〔費 2010 :46-47〕。



写真 5-3-1 新潭镇政府が催す公演で踊った竹林村広場ダンスチーム

多くの「婦人家」は、公式の場である広場ダンス

に、夫がほかの女性と触れ合うのは、自分の夫婦関係を脅かすという認識を持っている。それゆえ、竹林村の広場ダンスグループは男性を排除し、女性同士の団体となっている。

（3）広場ダンスが交際の範囲に対する影響

現在のチームメンバーは50代が3人、37才が一人、そのあとは40代である。年齢層が異なるが、メンバーたちはお互いに仲がよい。程さんは2013年に乳ガンで手術を受けた。最初、程さんは乳ガンかもしれないことをあまり気にしていなかったが、ほかのメンバー立ちが異常に気づき、先生に見てもらいように説得し、おかげで程さんはガンの初期段階で治療がされた。そしてみんなは家で療養中の程さんにお見舞いに行った。それに対して、程さんはメンバーたちに感謝の気持ちを持っている。Y2さんは「家族ではないが、チームのメンバーとして互いに気にかける。病気になった人には見舞いに行き、つらい時間が速く過ぎるように一緒に話をして元気にさせる」と言った。ダンスチームは、メンバーたちが相互に慰め合い、感情を吐き出すところであり、彼女たちの交流を満足させる。

ダンスチームができたことにより、「婦人家」たちは村社会における付き合い方が変わる。もともと家庭の世話を中心として生活している農村の「婦人家」たちは、血縁および地縁のもとで、労働や生活の技を習得するため、村に住んでいる親戚や隣家の人々と関係を築く。それゆえ、彼女たちは日常生活をめぐる、生活、生産道具の貸し借りや、服、靴の中敷きなどの裁縫技術を教えたり、学んだりすることにより、自分の家を中心に人間関係を広げてきた。ところが、広場ダンスという共同の趣味により程さん、ようさんなどの十何人は自発的にチームを結成する。彼女たちは、個人の趣味によって各人の家を繋ぎ、交際の範囲を広げた。

竹林村のダンスチームとして、彼女たちは村の範囲を超えて隣村や他の区、県と関わる機会が多い。

竹林村と梅林村は近くにあるため、夜に双方の村人たちが一緒に踊る時もある。両村の広場ダンスチームは互いに親しく、梅林村チームの人数が足りない時、竹林村のメンバーを借りて試合に参加することがある。現在、黄山市では、各村で広場ダンスチームを結成し、互いに交流し試合も多い。程さんは、

「毎年、たくさんの広場ダンスの試合に参加するよ。近くの村だけではなく、荷花池(屯溪区東部の地名)まで行く。あの辺のチームがコンクールを行ったが、参加したチームが足りなくて、私たちがパフォーマンスに行く。屯溪区以外では休寧県も行った。(ビデオを筆者に見せる)これは高霞村の映像だ。チームメンバーの一人の実家だ。あそこに広い平地があるから、高霞村に誘われて、周辺の村と一緒に高霞村で試合をした。うちのチームは踊りが上手だから、年末年始の時、忙しくなる。新潭鎮や屯溪区の政府が行った合同公演に参加し、2016年に開発区の企業連合会の新年会に誘われ、パフォーマンスした。」

と自慢に紹介した。「婦人家」たちは広場ダンスにより交際範囲が広がり、自分の村だけではなく、他村や他県で活躍している。彼女たちは趣味によって、自信をもって社会に自己を表現する。また他の村や区、県の広場ダンスチームとの交流が彼女たちの実家を通して始まることから村の「婦人家」たちは、親族で他村と交流することになる。

竹林村広場ダンスチームは互いに仲がいいので、試合後よく集まって一緒に食事会に行く。他村のチームと一緒に食事する時、割り勘で支払うが、村のチームメンバーだけの食事会は順番にご馳走をする。彼女たちはこのようなやり方が好きで、「今日は私をご馳走する、明日はあなたで、あさっては彼女が。それで食事会が多くなれる。平均で一ヶ月、少なくとも一回集まる」とメンバーのZさんが言った。食事会の後、みんなはカラオケに行ったり、屯溪にショッピングしたりして、夜遅くまで遊ぶ。それに対する夫の意見について、Hさんは「何にも言わない。彼は彼の友達とギャンブルして、私が広場ダンスの女性同士と遊んだ」と言った。夫婦二人は交際の範囲が被らなく、互いに自分の友達と付き合う。しかし、チームメンバーたちは徐々に、自分の夫を連れて、食事会に参加するようになった。連れられた夫たちは男性同士で飲んだり、話をしたりして親しくなる。夫が妻のダンスチームを通し、さらに村に交際範囲を広げ、「婦人家」は趣味でつくられた村の交際圏が夫の人間関係を影響する。

村の代表として、村委員会は彼女たちを応援している。2008年に、村の党員代表を務めたダンスグループの一人は座談会で、ギャンブルのブームが強い村で、精神文明を建設するために広場ダンスが重要だと主張し、広場ダンスに使うスピーカーを申請した。また土地収用で村に広い空き地がなく、広場ダンスに適するスペースがない。程さんは代表として、その問題を新潭鎮人民代表大会に正式に提案し、

村委員会が意見を聞き、新しい村委員会ビルの前に花壇を造るため残された空き地を平らにして、小さい広場を造った。雨の日に彼女たちは許可をもらい、村委員会ビルの一階のホールで練習できる。彼女たちは広場ダンスによい条件をつくるため、積極的に村委員会に意見を提出する。それに対し、村委員会は、上級の新潭鎮政府や屯溪区政府に竹林村広場ダンスチームを新農村建設の成果として示し、社会に宣伝する。村委員会は村の活動だけではなく、鎮や区の政府にチームを薦め、さまざまな公演に参加できるように努力する。

村の広場ダンスチームには当村の婦人幹部がよく参加している。隣の仙林村では、婦人幹部である余さんは広場ダンスが好きで、チームのリーダーを務めている。広場ダンスに必要なスピーカーや空き地などは全部彼女によって準備され、村の公費を申請し、ダンスの衣装、道具を購入した。竹林村では、婦人幹部Qさんは「踊るタレントがない」という理由で、広場ダンスに参加しない。チームメンバーは「何回も誘ったが、断られた。仙林村の婦人幹部は先頭を率いて村人と一緒に踊っているのに、うちの村は、私たちのことを応援していない」と言った。ダンス用の道具や衣装の支援はいうまでもなく、竹林村のチームが一番気にするのは「仙林村の婦人幹部がチームを連れて各地で踊っている」ことである。彼女たちにとって、もし婦人幹部を味方にするなら、面目が保てる一方、より広く自分のチームを宣伝できる。彼女たちは村の政治資源を借りてチームの影響力と名声を広げたいと希望する。

かつては公の場に顔を出せないと教育された「婦人家」は、一生かまどのそばにぐるぐる回り（「転鍋台」）、家族の世話を中心として家事に縛り付けられていた。伝統的な社会における女性の地位について、「家庭の単位を超えると、女性の公式的な役割が消滅され」とフリードマンは指摘した〔フリードマン 1991：41〕。村では、公的な活動（竜踊り、祭祀など）は、昔は男性が主役として活躍し、「婦人家」は脇役として協力し、さらには排除された。しかし、現在、彼女たちは家族のみを中心とする生活をしなくなり、自分の趣味があり、村で共通の趣味を持つ仲間と付き合い、交際の範囲を広げる。村の公的な活動では「婦人家」が逆に主役になり、彼女たちは積極的に公の場所に出て自由に自己を表し、さらにはこの活動をととして村の管理にも参加する。

現在の村では、家族のため、多くの村人が出稼ぎに行く。そのため普段、親戚に会える時間がなく、夫側も実家側も、親戚間の交流は弱くなっている。一人っ子政策の実施により、将来兄弟が少ない（さらにいない）一人っ子世帯は中年になったら、親戚関係が現在より薄くなる。また夫に男性兄弟がいない状況において、父方に親戚との交流は無くなる。一方、嫁のほうには兄弟がいるため、それにより客観的に、夫婦家族が嫁側の親戚とより関係が深くなる可能性が高いと考えられる。これは上述した兄弟が多い世帯にいる「婦人家」たちの現在の生活と逆である。

都市から農村に伝わった広場ダンスは、現在の村において「婦人家」たちの主な娯楽の一つになる。

仕事をすれば、日常の運動は必要がないという意識は徐々になくなり、健康やスタイルを保つため、彼女たちは都市の人のように、夕べに散歩したり、広場ダンスを踊ったりする。村の「婦人家」たちの思想や、行為は都市の人に近くなり、村の暮らし方が都市化していると言ってよいだろう。村の都市化は「婦人家」たちの生き方に影響を与え、彼女たちをセミ町の人に改造している。

広場ダンスは「婦人家」たちが自由意思で選んだ娯楽方法である。彼女たちは自分でチームをつくり、練習し、夫に制限されることがない。自由な活動空間と権利を拡大させたのである。それにより、「婦人家」は村社会の公の娯楽活動において、脇役と傍観者の役から主役に転身した。その活動は近隣の村、県まで広がり、「婦人家」の生活と観念は大きく変わった。すでに家庭の主婦であることが唯一の役柄ではない。また彼女たちは広場ダンスをはじめ、村の公共の管理に関心を持っている。自分の要求を積極的に表し、公共の政治意識が強くなっている。

おわりに

本章は、村の中高年女性である「婦人家」の家族および村社会における生活の変化を分析した。

商品経済に影響された村では、子供たちが遠い都市へ出稼ぎに行き、「婦人家」たちは二度目の母親として孫を世話する。「婦人家」たちの地位は、本来被扶養者であるが、孫の面倒を見ることによって扶養者の立場へと逆転している。一人っ子政策において、家族の構造が変わり、子供の地位が上昇し、「婦人家」の地位は下がっている。

村では伝統的なフィード・バック式の養老制度が1990年代まで続けられてきた。2000年以降、竹林村は都市化され、一部の「婦人家」は土地の補助金をもらい、あるいは近所で働き、養老金を貯めてきた。普段は息子から生活費をもらわず、自力での老後生活を過ごす。それによって、子供世帯は彼女たちに尊敬を払うのである。また「婦人家」は息子夫婦を補助して孫の世話をしたり、できるだけ息子夫婦の生活を手伝う。動けなくなかった時には息子夫婦の世話を受け、思いやりにあふれた扶養生活が享受できることを期待している。しかし、村の老人すべてが生活に足りるだけの養老資金をもらっているわけではない。このような現実において、農村では、フィード・バック式の養老制度を完全に手離すことはできない。以上の二つの方法ですべての農村の養老問題を解決できるわけではない。この親と息子家族分離の家族構造が引き起こした農村における養老扶養者不足の現状は、国家が急いで解決しなければならない農村の問題となっている。

村のまだ元気な「婦人家」たちは、広場ダンスにより、自由な活動空間と中年女性としての権利が大きくなった。夫の男兄弟の家族や、実家の兄弟の家族は日常生活における主な交際相手ではなく、「距離を保った」親戚になる。その「婦人家」たちは町の生き方を真似し、自分の興味により、自由意思で娯

楽方法を選ぶようになった。また彼女たちは村の公共管理に関心を持ち、自分の要求を積極的に表し、公共の政治意識が強くなっている。都市化の進展によって村に生活する若い女性だけではなく、「婦人家」たちも観念が変化し、自主意識が増加し、日常の生活中心が家族から、自分の個人生活の幸せに移り、活動の範囲が広がった。

第6章 女性に対する社会的期待と女性の社会的地位——男性に従属する地位から「女性は天の半分を支える」へ

はじめに

前述した各章は女性の家庭生活の視点から、徽州における女性の地位の変化を研究した。しかし、女性はただ家族の一員だけではなく、社会の一員でもある。社会は彼女たちに一定な期待と要求がある。女性に対する社会的期待は女性の社会地位を反映できる。その中に、表彰は中国社会が女性に対する社会的期待の直接的な表現である。本章は女性の表彰を糸口として、牌坊、女祠などの表彰の分析により、清末、中華民国時期における女性に対する社会的期待の内容と原因を研究する。また「鉄姑娘」、「三八紅旗手」、「十星級文明戸」などの表彰の分析により、計画経済時期および改革開放以降、女性に対する社会的期待の内容と原因を考察する。最後に異なる時期における女性に対する社会的期待の変化によって、女性の社会的地位および変化を究明する。

第1節 伝統社会における女性に対する社会的期待

1 貞孝節烈婦のために建てる貞節牌坊

(1) 牌坊について

「牌坊」とは、中国の伝統的建築様式の門の一つであり、牌楼または略して坊と呼ばれ、空間を区別する建物である。海外では中華文化のシンボルの一つとされる。例えば、横浜中華街の牌楼（西陽門、善隣門、朝陽門、延平門など）は中華街の入口として建てられる。空間の区別以外、牌坊は忠孝節義の人物を顕彰するために、家、墓、宗族の祠堂などの近くにも建てられた。

徽州地区は、「牌坊の故郷」として有名である。中国に現存している牌坊は1064基である。安徽省には125基存在し、浙江省と共に1位になっている。黄山市には104基あり、全国の都市の中で1位の数となっている。その内80%以上がシャ県に集中している（データ典拠：麻 2015；趙 2016；羅 2002）。

徽州で賞揚機能を持っている牌坊はほぼ2種類に分けられる。①「功德」（功績と徳行）牌坊類：偉業を成し遂げた文化的功労者と政府の役人、科挙に及第した学生、義挙と善行をした人を表彰する。②節孝牌坊：貞孝節烈婦と孝行息子を表彰する。その中で女性に対する表彰は「貞節」「節孝」「節烈」¹の

¹ 「貞節」とは、未婚あるいは婚約中の男性が亡くなった場合に貞節を守る女性に対する表彰である。「節孝」とは、夫が亡くなっても再婚しない、夫の家族に一生を貢献する女性に対する表彰である。「節烈」とは貞節を守るため命をかけて、殉死という激しい行為をした女性に対する表彰である。民間では以上の女性を同一視することが多かった。本論では

三つの項目がある。

貞孝節烈婦を表彰する牌坊は「貞節牌坊」、「節孝牌坊」、「節烈牌坊」²と呼ばれ、節孝牌坊類に所属する³。徽州の牌坊はほぼ「専坊」、すなわち特定の対象一人のために建てられた建造物である。シャ県だけで35基存在する〔王 2010: 45〕。清代後期、公金で造られた専坊は少なくなり、地域の貞孝節烈婦を合同表彰する「総坊」が建てられた。例えば、1905年に建造された煉瓦牌坊の「貞孝節烈磚坊」はシャ県の貞孝節烈婦65078人を表彰した。

(2) 牌坊の構造

貞節牌坊にはそれぞれ異なる材質と形がある。ここではシャ県斗山街の葉氏貞節木門坊とシャ県棠樾村の鮑文齡妻節孝坊を例として説明する。

葉氏貞節木門坊（写真6-1-1上）は、シャ県の町の斗山街の南口の近くに位置し、明代洪武24年（1391）に建てられた。徽州に現存する最も古い貞節牌坊である。牌坊は「双柱一間三樓」（二つの柱で一間口の三階建て）のシンプルな木造建造物で、高さが6メートル、幅が4.3メートルである。柱の間の石に門を描き、牌坊を葉氏宅の壁に巧みに溶け込ませている。牌坊の上には小さい瓦が並べあり、「額板」に「旌表江萊甫妻葉氏貞節之門」と墨で書かれている。「額板」の上に「聖旨」と書かれた「字牌」があり、清代乾隆時期に修繕した時に書き直された。



写真6-1-1 葉氏貞節木門坊（上）と棠樾村の鮑文齡妻節孝坊（下）

26才で未亡人になった葉氏は再婚しないまま、貞節を守った。息子がいなかったため、夫の甥を養子としてもらった。

元代末に、葉氏は姑を山に連れて戦乱を避け、困難な時期に葉氏は十数年も心を尽くし姑に孝行し、養子を育てた。1391年に85才になった葉氏は皇帝の表彰をもらい、貞節牌坊が造られた。

鮑文齡妻節孝坊（写真6-1-1下）はシャ県棠樾村にあり、鮑氏宗族の祠堂の隣に7基並んでいる牌坊の3番目にあたる。鮑氏宗族の牌坊群の中の、貞節牌坊は鮑文齡妻汪氏節孝坊、鮑文淵継妻呉氏節孝坊の2基である。棠樾村鮑文齡妻節孝坊を例として牌坊の構造を説明する。

説明しやすくするため、特に明記がない場合には、以上の女性を「貞孝節烈婦」と総称する。

² 清代以降、殉死という行為はあまり奨励されなくなったので、牌坊の中の「節烈牌坊」は少なかった。

³ 徽州では、女性に関わる全ての牌坊を貞節牌坊と呼ぶ。そのため、本文ではそれを基準として、牌坊を総称する時には貞節牌坊の用語を使用する。

鮑文齡妻汪氏節孝坊は、乾隆 41 年（1776）に鮑文齡の妻である汪氏を表彰するため建造されたものである。汪氏は 25 才で夫を亡くして以降、節を守り再婚せず、舅姑に親孝行し、息子をシャ県の名医者に育てた。45 才で病気により亡くなった汪氏の生誕 80 年目に、鮑氏宗族が朝廷に申請し、表彰の牌坊が授

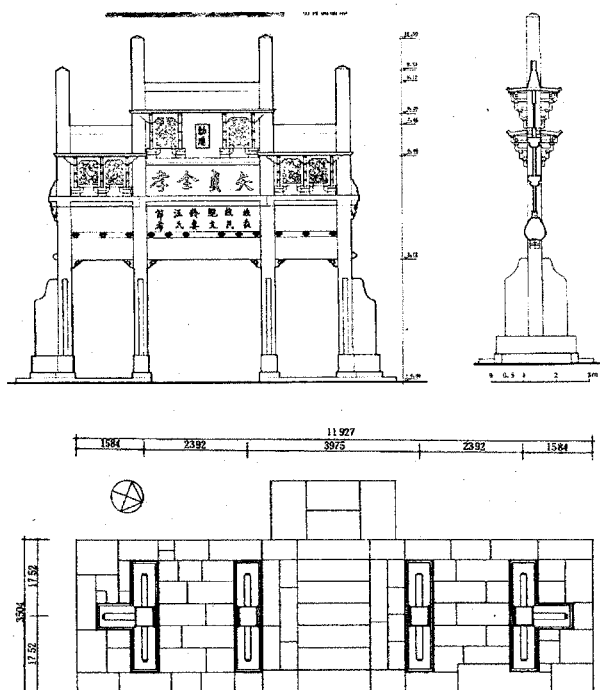


図1 鮑文齡妻汪氏節孝坊の正面図、断面図（上）と地面図（下）（『徽州古建筑丛书——棠樾』より）

けられた。この節孝牌坊の材料と形は尚書⁴の牌坊と同様に、「シャ県青」という石灰岩で造られ、高さが 11.1 メートル、幅が 8.75 メートルある。「四柱三間三楼冲天」（四つの柱で三間口があり、三階建てで柱が屋根より高い）式の東向きの牌坊である。両面の「一階」の「額板」に「旌表故民鮑文齡妻汪氏節孝」と彫刻されている。牌坊の「額板」は表彰対象——節を守り、親孝行をし、亡くなった庶民の鮑文齡の妻である汪氏——を明らかにする。「額板」の上に「字牌」が建てられ、汪氏の行為を賛美する言葉「矢貞全孝」（東面）「立節完孤」（西面）を刻んでいる。その上に「勅建」と刻んでいる「小字牌」があり、これは乾隆皇帝の恩典で造られた牌坊であることを表している。

（3）貞節牌坊の申請について

『清会典』に記載された貞節牌坊の申請資格を持っている女性は以下のとおりである。妻妾問わず、年齢が 30 代以前から 50 代までで節を守る者（15 年以上節を守り、50 代に亡くなるのも含む）、婚約夫婦が離散し、節を守る者、親や子孫がなく、未婚のまま親孝行をする娘、強盗にあつて節を守って亡くなった者、悪ふざけや強姦を拒み亡くなった者、夫に売春させられ、あるいは節婦が家族、親戚に結婚させられることに死をもって抵抗する者などである。以上の女性の宗族あるいは家族は、地方政府から国の銀 30 両をもらい、自由に牌坊を建造することができた〔王 2010：43-44〕。清代では、明代に比べ貞節がより強く提唱された。康熙帝から咸豊帝に至るまで貞節に関する詔が公布され、貞節牌坊の申請資格である年齢幅が広がった。

明代には、「県→府→按察院→礼部→朝廷」という流れで貞節牌坊を申請した。地元の学校、長老代表が県政府に報告し、県政府が事実を確認して府政府へ上申し、府が照合して按察院に提出し、最後に礼部から朝廷に上申する。清代においても基本的には明代に決められた申請流れに従い貞孝節烈婦を表

⁴ 中国の六つの中央行政官庁長官である。

彰した。しかし、煩雑な手続きで時間がかかりすぎる上に、間違いが出やすいため、清政府は申請の流れを簡略化し、異郷で申請する規則まで公布した。申請資格の拡張と申請の簡略化により、清代に表彰される女性の数は激増した。

表彰された女性が激増した一方、清代中後期から政府は徐々に財政困難に陥り、一人一人の貞孝節烈婦に銀 30 両を受け、専坊を建てさせるのが難しくなった。嘉慶帝時期からは銀 30 両で各県が総坊を建設し、表彰された女性全員の名前を牌坊に刻んでいる。政府は財政支出を減少させると共に、表彰の目的を達成することができた。

厳しい審査がある表彰では、貞節を守る女性たちが全て公平な立場にあったとは言えない。貧しい家に生まれた人は財力が弱く、各級の官吏に関係をつけることが困難であった。そのため、家族の女性の表彰を申請しても失敗した例もある〔黄 2012 : 41〕。政府に表彰された貞孝節烈婦の数は、わずかである。政府の表彰は、女性自身の持つ優れた道德だけで決定されるのではない。その女性の背後にある家族や宗族の権力、社会地位、金銭、人脈などをめぐって争った結果、表彰が決定するのである。

(4) 貞節牌坊の機能

貞節牌坊は、夫が亡くなった後、再婚しない上に親孝行と子供の扶養に責任と義務を尽くし、家庭を支えた女性を表彰する。

徽州の貞節牌坊は、普通の村の女性に対して国から与えられる、最高の精神的な奨励と見なされる。女性の価値はそこに認められる。つまり、貞節を守り、舅姑に親孝行し、息子を育てることにより、女性が表彰され、永遠に記念されるのである。当時の女性は一生の自由と幸せ、さらに自分の命を条件として、無上の光栄であった貞節牌坊を求めた。

また貞節牌坊は宗族にとって、族内の女性を教化する機能がある一方、本宗族の権力を示す重要な手段である。より多くの人に見せるため、貞節牌坊は村の入口あるいは村人が集まったところに建てられ、日常的に教化の機能を果たした。10 メートル以上ある立派な牌坊は視覚的にインパクトを与え、その威厳と神秘さが客観的に宗族の地位と権力を高めた。上述のように、貞節牌坊は単に国からの表彰ということだけではなく、その背後に家や宗族と密接な関係を持っている。宗族の権力、社会地位、金銭、人脈などを表し、さまざまな利益とも繋がっている。したがって、このような事情が徽州地区において、各宗族が熱心に族内の女性の表彰を申請する原因となっている。

牌坊を建築するためには朝廷の許可が必要である。政治的な宣伝の目的があり、その条件を満たす女性の事績しか朝廷から建築許可をもらえない。村社会において牌坊の建設は、国の意思が直接的に表現されたものといえる。牌坊で貞孝節烈女を表彰するのは、民衆に対する教化機能を果たす一方、実際は、政府による「良妻賢母式」の女性への社会的期待を表している。貞節牌坊という表彰の内容は、女性が

妻と母親としての責任と義務を強調する。牌坊の教化機能によって、女性が妻として良妻になり、母親として賢母になることを提唱する。牌坊は清代において女性に対する期待を表したものである。

牌坊の建設は、徽州商人にとって現実的な意味がある。多くの徽州商人は家を離れて商売をし、数年から数十年を隔たて実家に帰ることができた。徽州商人の夫婦は一緒に生活する時間が短く、「一世夫妻三年半」（夫婦になるが、一生涯に夫婦生活が三年間半しかできない）という徽州のことわざが、徽州商人の夫婦が長期にわたり離ればなれの生活を送る実情を物語っている。それゆえ、徽州商人にとって、「良妻賢母式」の女性に対する期待、妻の貞節と責任感に対する要求はより切実である。文人たちにとって、「良妻賢母式」の女性は儒教倫理が女性の生活における具体的な表現であり、彼らが提唱し、要望する儒教の価値観と相応する。

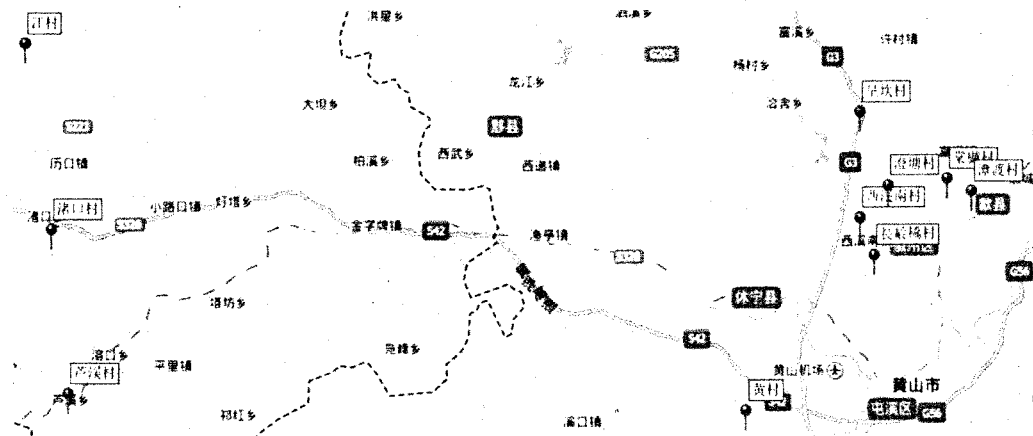
2 宗族の女性のために建てた女祠

(1) 徽州の女祠について

1949年解放以前、徽州は、宗族の勢力が強かった地域であった。儒教の理論により、祖先の血筋を記録した族譜を編纂し、先祖の位牌を祭る祠堂を造った。成年の男性は亡くなると、宗族の祠堂で子孫に祭られた。徽州は明代から商業が栄え、宗族が発達し多くの祠堂が造られた。

史料によると、徽州地区では女性の位牌だけを祭る位牌堂である女祠、つまり女性の祠堂がいくつか存在した。女祠の建造は本来儒教における「礼」に従う行為ではなく、ほかの地域では、現在のところ、その存在はほとんど報告されていない。

今まで文献や論文に記録された徽州の女祠は13軒あり、10カ所の村に分布している。



地図1 調査地

県	村	番号	女祠
	棠樾村	①	●清懿堂

シャ県	潭渡村	②	壺徳祠
	西溪南村	③	◎思睦祠
	長齡橋村	④	鄭家女祠
	澄塘	⑤	(呉氏女祠)
徽州区	呈坎村	⑥	●則内
		⑦	◎前羅家廟女祠
		⑧	一善祠
		⑨	姑婆祠
休寧県	黄村	⑩	(黄村女祠)
祁門県	渚口村	⑪	庶母祠
	芦溪村	⑫	●衍正堂
	汪村	⑬	●怡燕祠

表1 女祠の分布（筆者作成）

* 「●」は祠堂が現在も残っている。「◎」は一部分が残っている。ほかの女祠は消滅した⁵。

* 「()」は正式の名がない女祠である。

地図で見ると、現存の女祠は徽州の東部に集中し、約7割がシャ県内にある⁶。女祠の建造は民間や個人の行為であり、巨額の建設費がかかる。明代の中後期に塩商売を営んだ徽州商人が富を蓄積したことにより、祠堂の建造が可能になった。シャ県は隋代から中華民国38年（1949）まで、徽州府の治所が置かれたところである。かつて新安江に沿って杭州や揚州へ向かい商売を営んだ徽州商人たちは必ずここを通った。そのため、シャ県は徽州の政治・経済・文化の中心として栄え、名門や大商人を出した宗族もここに多く集まった。明代の中後期から清代の中期まで建造された女祠はシャ県に集中した。

清代後期から女祠の建造はシャ県から徽州の西部祁門に移った。清代中期は徽州商人の全盛期であり、商売は明代に比べ大幅に増えた。後期以降、塩専売を中心とした商売が衰えた一方、祁門出身の徽州商人は紅茶の販売を世界的に広げ、勢力を拡大させた。紅茶販売は祁門の経済を発展させ、清代後期および中華民国時代には祁門で女祠が多く建造されるようになった。

（2）女祠の紹介

① 女祠の構造

女祠が現存している呈坎村の則内と棠樾村の清懿堂を例として、建造物の構造を説明する。

⁵ 女祠は明代、清代に建てられたが、現在はほとんどなくなっている。棠樾村と呈坎村の清懿堂と則内の女祠は保存され、古民家として有名な観光スポットになっている。

⁶ 徽州区はもともとシャ県の一部であり、1988年にシャ県の西部地区が単独の区に分けられるが、ここでは徽州区をシャ県の範疇として共に紹介する。

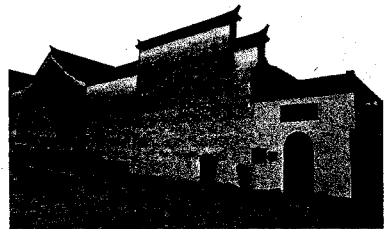
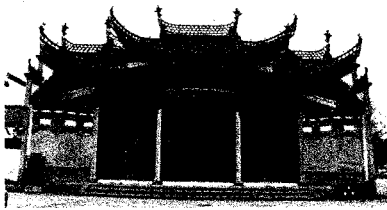


写真 6-1-2 男祠の門（上）と女祠の門（下）（筆者撮影）

い中庭になっている。中庭により、清懿堂は三つの部分に分けられる。右から「門庁」、「中庁」、「享堂」と呼ばれる、いわゆる「三進」構造である。「開間」というのは、柱の本数により建造物の広さを表すことである。平面図には、一列で六本の柱があり、つまり「五開間」である。

清懿堂の内部は精緻な木彫と石彫が数多く施されている。入り口を入ると、「門庁」と呼ばれる場所になる。そこは村民たちが

集まった場所である。左側は「中庁」の入り口である。左右の石壁は「八字牆」と呼ばれ、中国古典の物語「八仙」や動物、および縁起がいいものを彫る。「中庁」は宗族の人々が族内の大切なことを検討する議事堂である。「中庁」の後ろの中庭を越え、階段を上ると、「享堂」になる。そこは祖先を祭る場所である。「寝堂」は祖先の魂が寝ているところという意味であり、「享堂」と繋がっている。かつて、祖先の位牌が如意を刻んでいる石の土台に並んでいた。もともと土台の上に窓があり祭祀の時のみ開けていたが、現在、窓の痕跡である窓枠だけが残っている。

1949 年以降、宗族が消え、祠堂が農民公社、倉庫、学校に転用され、祖先祭祀の活動も止められた。1996 年に牌坊が「全国重点文物保护单位」に登録され、明と清時代に建てられた村の民家も 2013 年に登録され、徽州観光の定番スポットとなっている。

清懿堂はシャ県棠樾村に位置する。男祠である敦本堂とは、逆方向の北向きに建っている。屋根には徽州建築の特徴である「馬頭牆」が飾り付けてある。清懿堂は幅 16.9 メートル、奥行き 48.4 メートル、総面積 818 平方メートルである。位牌堂は、一宗族の誇りとして、立派な門が造られるが、清懿堂は入り口が小さくシンプルな構造である⁷（写真 6-1-2）。

位牌堂は「三進二天井五開間」という構造である。図 2 の平面図で、小さい長方形が集まった二つの部分は「天井」と呼ばれ、採光のため、屋根がな

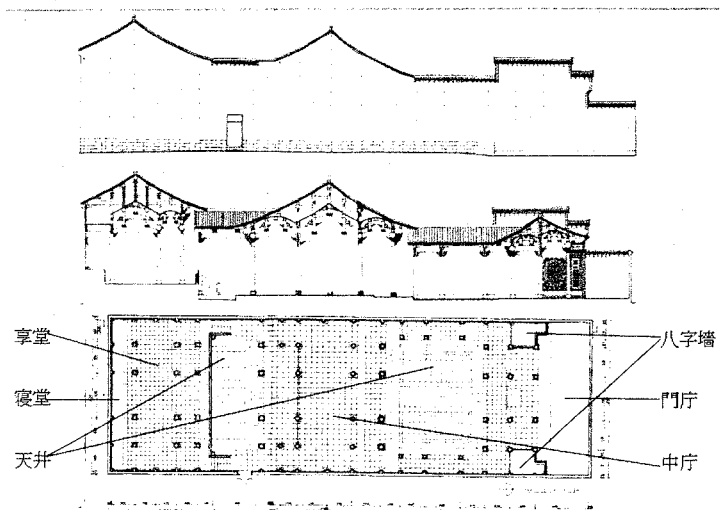


図 2 清懿堂の側面図、断面図と平面図（『徽州古建築叢書——棠樾』より）

⁷ 清懿堂の門はもともと正面にあったが、通行しやすいため、側面の壁に変わった。

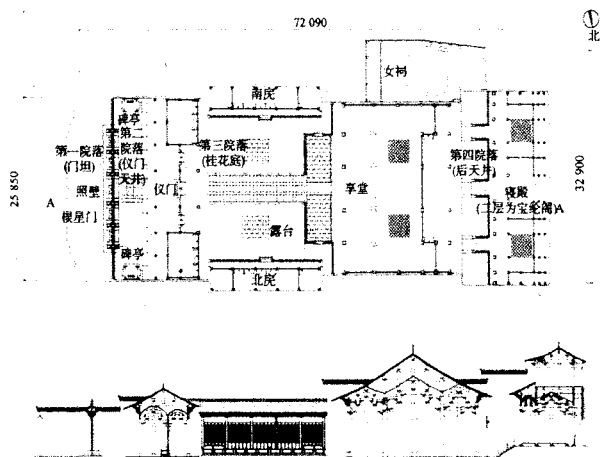


図3 羅東舒祠の平面図と断面図（「徽州古祠堂羅東舒祠建築特色浅析」より）

「則内」は朱子が「呈坎双賢里、江南第一村」と賛美した徽州区呈坎村の羅氏宗族の女祠である。呈坎村は1995年に安徽省の「省級歴史文化保護区」に指定され、村内の古民家が建造物群として国文化財に登録され、現在観光スポットとなっている。

則内は男祠である「貞靖羅東舒先生祠」（以下羅東舒祠と略称する）に付属している。明代万暦40年（1612）、22代の先祖羅応鶴は、羅東舒祠が規模を広げた時に則内を建て加えた。則内は羅東舒祠の南に位置している。羅氏宗族は当初、妻と継母の位

牌しか女祠に入れないとした。羅東舒祠がリフォームされた後、羅応鶴は「妻も妾も族譜に載せられる」と宗族の約束を変え、妻や妾も女祠に入れた。

羅東舒祠は孔子の文廟を模倣して造られた位牌堂であり、幅26.5～29.6メートル、奥行き79メートル、総面積が2997平方メートルである。寝堂が四開間二つ、三開間で構成され、天井には花模様が満遍なく、巧みに装飾されている。羅東舒祠は徽州地区でも立派な位牌堂だと言われる。則内は東向きの羅東舒祠と反対に、西向きに建っている。則内には正門がなく、壁に一人しか通れないほどの狭い門がある。その上に「則内」と書かれている。女祠の面積は約154平方メートルであり、総面積の10分の1以下で、高さも羅東舒祠主体部分の3分の1である。女祠には位牌の棚、享堂、物置と三つの部分しかない。極めてシンプルなデザインである（写真6-1-3）。

② ほかの女祠

● 呈坎村の文昌祠の女祠、一善祠の女祠と姑婆祠

文昌祠は明代弘治11年（1498）に建造され、位牌堂内の南側に女性の位牌を祭るため、奥の部屋が設置された。徽州地区では最初の女祠と言える。部屋の構造は単純であり、名前さえ付けられなかった。現在、文昌祠は寝殿の骨組みだけが残され、女祠の部分は既にある。

一善祠は清代乾隆時期に、28代の先祖羅廷梅により建造された位牌堂である。羅廷梅の母親は再婚し、



写真6-1-3 則内の正門と内部構造(上) 羅東舒祠の寝堂の一部(下) (筆者撮影)

羅氏の嫁になった。翰林院庶吉士になった羅廷梅は親孝行をするため、再婚で位牌堂に入れない母親に、新たに一善祠の隣に女性の祠堂を造り、母親の位牌を祭祀した。

羅氏宗族では、未婚のまま亡くなった娘は位牌堂の姑婆祠に祭られた。「羅氏姑婆祠」と書いてある扁額が位牌堂の入口に掛けられていた。祭られた娘の家族や親戚は線香を燃やし、供養した。姑婆祠は新中国成立の初期になくなっている。

● 渚口村倪氏庶母祠

宣統2年(1910)に食料商人倪秀亭(尚榮公)が巨資を出資し、倪氏宗族の祠堂である貞一堂を再建した。しかし、倪尚榮が工事の途中で亡くなり、妾の金氏と王氏は身銭を切り、位牌堂の中の池を造った。倪氏宗族の代表は、二人の行動を讃えるため、金氏と王氏の位牌堂を貞一堂の棚の隅に置くという例外を認めた。族人は二人の実績を賛美する文を書き、池の脇の壁に刻んでいる⁸。

倪尚榮は倪氏の庶母が亡くなった後、位牌堂に入れず、祭られない状態が気に入り、貞一堂の右側に庶母祠を建てた⁹。しかし、その祠は1970年代になくなった。貞一堂のガイドを務めている倪世治さんは「位牌を庶母祠に置いても、公式な祭祀儀礼を行わなかった。祭られた人の子孫が線香をあげて、お供えを差し上げた。それでおしまいだ…金氏と王氏は倪氏の子孫の供養をしてもらいたいだろう」と言った。

● 潭渡村の壺徳祠

壺徳祠は清代の康熙丁酉年(1717)に、黄以正によって建てられた。族譜に女祠を建造した理由および規模が述べられている¹⁰。宗族の父親が遠いところまで勉強や商売に行き、数十年も帰らない。母親が家を支え、子供を育て大変苦労したが、祖先祭祀の時、祠堂に母親の位牌を置けず不安を感じた。先人の母親が朝廷から表彰を頂いたことをきっかけとして、女祠を造った。女祠は享堂が五開間であり、その前に三つの門がある。祠堂は奥行き約90メートル、幅21メートルあり、建造費は白金3万両であった。三十六世代の女性の先祖を祭り、毎年春と秋に2回ほど祭祀を行い、定期的に女祠を修繕した。

(3) 宗族祠堂における女性の祭祀

① 祠堂における位牌の並び方

徽州では、亡くなった族人の位牌は当初は家屋で祭られ、宗族が決めた日にまとめて祠堂に入れられ

⁸ 原文は「我倪氏貞一祠者建于有明●乎/清初規模完備/春秋祭祀得所憑依/宣統二年庚戌元宵之明日/祝融為厲/突兆焚如柱折梁傾玉石俱碎耳…尚榮公首捐巨資議復重建…兩閱寒暑大局甫成/尚榮公不幸作古/副室金氏等善承夫志/雇石工造天池/輒出數百金…是巾幗中烈烈有大夫風…」である。

⁹ 『祁門倪氏族譜』『清授直奉大夫五品銜例貢生倪公秀亭行狀』(倪望隆 著):「我倪氏向無庶母祠、公倡議建築、遂觀厥成」。

¹⁰ 『潭渡孝里黃氏族譜』『新建享妣專門祠記略』による。

た。ここでは、シャ県桂溪項氏の族譜により徽州における祠堂の位牌の並び方を紹介する¹¹。位牌を置く場所である寢堂は三つの位牌棚に分かれている。中央が「正寝」であり、その最上層に元祖が置かれ、下には五代の先祖が祭られていた。「正寝」の左右は「昭室」と「穆室」と呼ばれ、「昭室」には官僚になった先祖、あるいは表彰された先祖などの位牌が置かれ、「穆室」には祠堂や宗族に巨財を出資した先祖が置かれた。元祖および昭室、穆室の先祖は永遠に祠堂に祭られたが、ほかの先祖の位牌は5世代ごとに祠堂の別部屋へ移動して保管され（「五世則遷」）、あるいは墓に埋められて燃やされた。



写真 6-1-4 位牌棚（筆者撮影）

② 祖先祭祀の流れ

女祠の祭祀について、文献には詳しい記録は残されていない。しかし、呈坎村羅氏の34代子孫羅会定氏が女祠祭祀の流れについて語ってくれた。

「…女性は亡くなったら、位牌は羅氏の祠堂の正門から入り、右の「則内」（女祠）に置く。祭祀は男性の祠堂と大体同じ。香案（香炉を置く細長い台）もあるし、供え物も同じだ。祭祀はね、まず、男性の祠堂で行われ、終わってから、（女祠で）女性の位牌を拜む。羅姓の宗族はね、祭祀する時、特別なルールがある。それは男女問わず、みんなも祠堂に入り、祖先を祭る（この話を羅会定氏は何回も強調した）。女祠の祭祀は1年に2回、春と秋に行い、徽州のほかの祠堂と大体同じで、供え物や飾りなどもあまり違いがない…羅氏は女祠のほか、姑婆祠もある。そこでは未婚のまま亡くなった娘だけを祭る。子孫がない未婚の娘は家族の叔父さんの子孫に祭られる…」

羅会定氏の話により、女祠の祭祀は普通の宗族の祠堂とほぼ同じであることが分かる。シャ県鮑氏の族譜を参考にしながら、祭祀の流れを以下のようにまとめる。

女祠は1年に2回、春と秋に正式な祭祀を行う。祭祀当日の前に、供え物の豚や羊などを準備し、司会者を招く。そして、「正献」¹²、「分献」¹³および司会者の名前を白い板に記し、祠堂の入り口に掛け、宗族の人に知らせる。祭祀の1日前に族人が書院に集まり、祭祀の予行演習をする。執事が正装し、太鼓の音に従い、皆が儀礼を行い、「正献」と供物の肉を差し出す。祭祀の当日、執事が位牌を並べて、祭文を唱え、族人が執事の指導に従い祖先に「正献」、「分献」、供物を捧げ、身を伏して祖先に叩頭する。祭祀が終わると宗族の規則により供物を参加者に配り記録する。

¹¹ 『シャ県桂溪項氏族譜』の「供奉神主龕室規」による。

¹² 祖先にお酒と絹織物を差し上げること。

¹³ 付属の祖先にお酒と絹織物を差し上げること。

③ 異なる女性の祭祀

『家礼』には、祠堂において男女共同祭祀をする際の規則が決められている¹⁴。したがって、徽州では多く『家礼』に従い、夫妻共同祭祀を行った。夫婦の位牌は卓に左から右に並べられ、子孫の祭祀を受けた（図4）、妾は祖先祭祀から除外された。

しかし、一部には『家礼』と異なる解釈も生まれた。祠堂では男性しか祭らず、男女が別々の部屋で祭祀される場合もあった。男性しか祭らないことについて、朱子の弟子である程頤が書いた『二程集』には、男性が夫婦の代表であり、男性を祭ることは、夫婦二人を一緒に祭ることである（「祭只一位者、夫婦同享也」）と記されている。シャ県潭渡村の黄氏宗族は女祠を建てる前は祠堂で36世代の男性祖先しか祭らなかった¹⁵。

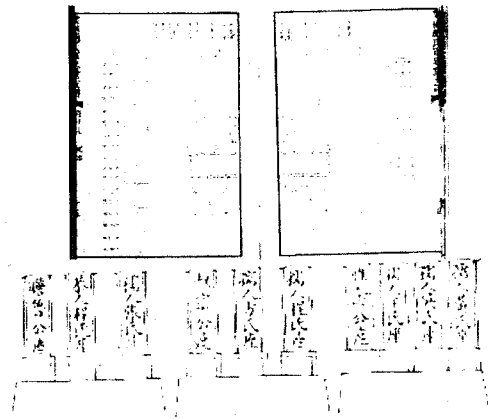


図4 棠樾鮑氏宣忠堂の祭位図および拡大図

これを受けて、男女別祭について呈坎村の羅氏の族譜では、異なる家に生まれた夫婦二人が同じ祠堂に祭られると、先祖の霊が不安になる、それゆえ男女の霊を分けて、男女を別々の部屋に置くべきだと解釈した¹⁶。歙西の洪氏の族譜には、男女別祭が礼に相応しいことだと述べられている¹⁷。このように男女の位牌を別々に祭ることは相応しいという解釈を見ることができる。この解釈から、徽州には女性のみを祭る女祠が建造された。

番号	年代	位牌堂	村	一戸建て	祭られた人	公式の祭祀
①	明弘治11年	前羅家廟女祠	呈坎村	×	妻	○
②	明 万暦	則内	呈坎村	×	妻→妾	○
③	明 万暦末期	(呉氏女祠)	澄塘村	×	?	?
④	明 崇禎	思睦祠	西溪南村	×	妻?	?
⑤	清 康熙	壺徳祠	黄村	○	妻	○
⑥	清 乾隆	一善祠	呈坎村	×	再婚した女性	?
⑦	清 嘉慶	清懿堂	棠樾村	○	母→全宗族の嫁	○
⑧	中華民国時期	庶母祠	渚口村	○	妾	×

表2 建築年代順による女祠の並び（筆者作成）

¹⁴ 『家礼』には女性の位牌が置かれた場所は「伯叔祖父、母、附於高祖；伯叔父、母、附於曾祖」、祭祀の方法は「設高祖考妣位於堂西北壁下…考西妣東，各用一倚一卓而合之」と書かれている。

¹⁵ 原文は「更念宗祠所承祀者皆自諱璋者之考而下逮今，三十有六世，然皆祀祖而不及妣…」である。（『潭渡黄氏族譜』「潭渡黄氏享妣專祠記」）

¹⁶ 『羅氏宗譜・宗儀八条』には「至於女主、当峻其防。…男女素著遠別之文。生則異室、主則同堂、幽冥有不安之魂。当專立一室、分妥諸靈…」と述べられている。

¹⁷ 『歙西王充東源洪氏宗譜』巻十「王充東源洪氏六派祠記」に「祖若妣分為兩祠、礼也」とある。

建造された年代順に調査した女祠を並べる。13軒の女祠のうち、8軒しか明白な年代が分からない。

女祠に祭られる女性祖先は基本的には「妻」に限られる。表2によると、⑧の女祠を除き、全ての女祠で妻を祭る。ところが、②、⑥、⑦、⑧のように、「妾」も祭られる女祠が存在している。

伝統的な中国の婚姻制度は、「一夫一妻多妾制」であり、正妻以外に、多くの息子を求めるためや、財産や地位の高さを誇示するため、「妾」を娶ることが可能であった¹⁸。法的に認められた男性の正妻が「妻」である。「妾」は正式な家族員ではなく、「隷属的な立場にある」〔胡 1996: 66〕。したがって、「妾」の死後、その位牌は作られることも祭られることも基本的にはなかった。

ところが、徽州では明代から息子を産んでくれた「妾」への感謝や、成功した「妾」の息子である庶子が、親孝行と生母を尊び、また自分の社会的地位を顕彰するために「妾」であった母を女祠に祭る例が出てきた。このように、宗族の祠堂に祭られない「妾」や庶子の母の地位を高めることは「礼」で言えば、嫡庶の身分を乱す行為だが、庶子にとって親孝行、夫にとって「妾」への思いやりを示すことになり、徽州では女祠に「妾」を祭ることは有力な商人の間で行われるようになった。徽州地区の女祠には、族譜に記載した正妻を祭る「妣祠」でも、「妾」のため建造した「庶母祠」でも、その中心が「母」になることである。すなわち、息子を生むことが子孫に祭られる必要な条件である。

女祠の建設には、一定の社会と経済条件が必要である。史料から見れば、女祠が建てられた宗族には、高官を務めた、あるいは商売で大金持ちになった子孫がいる。前者の例として、呈坎村の一善祠の建造者である羅廷梅があげられる。羅廷梅は清代乾隆丁丑年(1757)に進士になり、翰林院に勤め、奉直大夫(五品)になる。後者は棠樾村の鮑志道、鮑漱芳である。二人は清代の有名な塩商人であり、兩淮総商を務め、塩商人のリーダーになる〔朱益新 1995: 680〕。潭渡村の黃氏宗族も清代初期に有名な塩商人を輩出した宗族である。〔江蘇古籍出版社 1998: 733〕祁門県の芦溪、渚口村が女祠を建設する時期は清末、中華民国初期であり、それは祁門紅茶を販売する商人の最盛期である。したがって、高い社会的地位と豊富な経済力は女祠が建てられる現実的な条件である。

上述した分析から見れば、女性の先祖が祠堂に祭られない理由は、徽州宗族の祭祀制度における地方的な規定に属する。しかし、これらの地方的な規定は永久不変ではなく、柔軟性と融通性があり、時代の変遷に従い、あるいは実際の状況において、変化する可能性がある。現存の史料では、宗族の女性のために女祠の提案や資金集め、および建設の過程で族長や族人がそれを反対する事例はまだ見たことがない。すなわち女祠の建設は、宗族制度の黙認と許可を得ているといえる。宗族の祭祀制度の柔軟性と融通性は、女祠が建設される重要な要因ではないかと考えられる。

(4) 女祠の機能

女祠は女性祖先のみを祭祀し、宗族内の女性を賞揚する宗族の祠堂である。基本的に「妻」しか祭ら

¹⁸ 「妻」と「妾」は日本語と中国語では漢字が同じだが、意味が異なる。

ないが、「妾」は条件付きで女祠に祭られた。死後「孤魂野鬼」（供養する後嗣がなく祭祀してもらえない霊）にならないようにという死生観が強かった伝統的な社会においては、宗族の規則に違反せず、舅姑に親孝行し、息子を育てる女性は、子孫に祭られ、宗族の祖先になる資格があった。

また貞孝節烈婦になると、宗族の祠堂に入ることができ、しかも優待ももらえることになる。旺川の曹氏は『祠規』で「凡有大功力於祠…歿後秉公崇報進主配享、不在常例之列、節烈孝婦女亦如之」と決め、宗族に功績をもたらした人は祠堂の中で通常の列より高いところに置かれた。また、貞女と烈婦も同様であった。シャ県稠墅の『汪氏祠規』に女性祖先の祭祀費用は「母主九五銀一両一錢、備主一錢、貼祭一錢」と書かれてある。節を守り、親孝行をし、道徳が優れた女性（「節孝可風」）であれば、「公請入祠、以示表揚、免其出銀」、つまり公に祠堂に招待され、無料で祠堂に祭られる。

そして、貞節の模範だと思われたものの、政府の表彰基準に達しない女性には、宗族は「貞」、「節」などの漢字が含まれる個人の追号を賜る。24才で未亡人になり、37才で亡くなった休寧県畢節の女性呉氏は、宗族の族長から「節婦」の個人の追号が授けられた¹⁹。

宗族が女性に対して求める規範は貞節を基礎として、夫および夫の宗族に、忠誠と孝行を尽くすことである。貞節は特殊な状況における行為であるが、宗族の要求としては現実に達成されなければならない目標となる。宗族における女性祖先の祭祀は、農村の女性たちに対する基礎的、普遍的な賞揚である。宗族は女性に対する要求を、女性が祖先として祭られる本願と結び付け、日常の祭祀を通し、その観念を教え込む。また祠堂には家族と親戚の位牌が置かれ、身近な事例から一般の女性に、これが人並の彼女たちももらえる賞揚と信じさせる。祭祀される女性の範囲が広がると共に、より多くの宗族の女性はその規範を自発的に実行した。

女性の先祖が女祠に入り、子孫に祭られることにより、先祖の霊が慰められると考えられている。他の祠堂と同様に、女祠の主な機能は祭祀であるが、それ以外の機能もあると考えられる。女祠の建設は、現実の面では、女性の先祖が祠堂に祭られるかどうかの問題であるが、その裏では宗族の女性祖先に対する子孫の評価と関わる。女性の先祖が女祠に祭られるのは彼女たちに対する子孫の貢献と品行が表れている。

現存の史料から見れば、徽州に女祠が建設される原動力は、族内の女性先祖が高潔な婦徳であり家族に対する長年の貢献が認められることである。宗族で女性の貢献と役割をはっきり記した『潭渡孝里黃氏族譜』はその典型である。

¹⁹ 原文は「二十四而孀、居三十七以完節下世、宗老賢之、私諡為節婦」である。『甌甌洞統稿・明畢節婦吳氏墓志銘』（吳国倫 著）続修四庫全書本。

(訳文) 「私たちの故郷は山の奥に位置している。夫は遠いところで勉強し、商売しているの、数年、数十年にも帰れない。家族のすべてのことは母に任される。われわれ息子が生まれてから大人になるまで、扶養、教育、勉強、結婚において、母親は父親の責任を兼ねることが多い。母親の恩がどれほど大きいことか！幼い頃に母親の優しさをもらい、成長期に母親の教育をもらったからこそ、今の我々がある。」²⁰

徽州地区は山に囲まれ、田んぼが少ないところであり、男性は12、3才から家を離れ、外で商売を営む伝統がある。7-8割の徽州の男子は外で商売をし〔張 1985:42〕、数年から数十年を隔て実家に帰る。男性が長期不在のため、夫または父親としての責任はすべて家に残る女性に転嫁される。彼女たちは舅姑に対して孝行し、自分の子供を育て、一人で息子、母親、父親の役と責任を担っている。息子の成長において、母親の苦勞と教育があるからこそ、子供たちが立派になれると考えられている。さらに夫の宗族に寄付し、夫が宗族に貢献したいという願望を実現させる。彼女たちは勤勉で、やさしい母親であり、賢明な妻（および妾）である。いわゆる「良妻賢母式」の女性である。それゆえ、女祠の建設は「良妻賢母式」の女性が家族に対しておこなってきた貢献、および高潔な婦徳であることを認めることである。女祠が建設されると、祭られた彼女たちの事績は広く伝えられ、教化の機能を果たす。また家に残る女性が認められ表彰されることは、長期的に家を離れる商人にとって慰めの役割を果たす。家に残る妻が女祠に祭られる女性の先祖を見習い、舅姑に孝行し、子供を育て、家が安定することで、彼らも安心して外で商業を続けることができる。徽州商人には、女祠を通して「良妻賢母式」の女性となることへの期待を表す現実的な要求があるといえる。

上述したように、女祠は、女性の先祖が家族に対する貢献を認め、高潔な婦徳を表彰する社会的評価や教化の機能を持っている。女祠は、既存の宗族祭祀制度に違反しない前提で存在し、その機能を実現する。女祠は、規模や構造および細部における特別な設計により、男性宗族の祠堂より地位が低いことを表明する。それによって、女祠の建造は宗族の族人から許可をもらい、各原因で女性の先祖が祠堂に祭られない規則を修正する。そのため、潭渡の黄氏宗族は女祠の建設が「前代の不足を補う」（「補先世之闕遺」）のである。女祠は宗族祭祀制度に対する補正であり、またそれによって宗族の女性に対する「良妻賢母式」の社会的期待が表される。

3 ほかの表彰

(1) 文人に記録される女性

²⁰ 原文は「吾郷僻在深山之中，為丈夫者，或游学于他郷，或服賈于遠地，嘗違其家数年、数十年之久，家之黽勉維持，惟母氏是頼。凡子之一身，由嬰及壯，扶養教誨，从師受室，以母而兼父道者多有之，母氏之恩何如其深重耶！正幼恃母慈，長承母訓，以有今日。」である。『潭渡孝里黄氏族譜・新建享妣專祠記略』

極めて少ない中央政府の表彰および宗族の基本的な表彰を除き、徽州では、地方のエリートや文人がそれらの女性の事績を地方志、族譜、文集に収録し、後世に名を残した。

明代には政府に表彰された女性だけが地方志に載せられる資格があった〔王 2009:115〕。そのため、資格のない多くの貞孝節烈婦は、地方志に記録されないことになった。しかし、各地方志の作者は融通をきかし、記載を可能にした。例えば、明代弘治版の『徽州府志』には、結果を問わず、貞節表彰の立候補になった女性の名が載っている。また、清代康熙版の『徽州府志』には、中央政府の表彰に達しないが、地方の民衆と役人に認められた女性が付録に載せられている。明代と清代では女性の貞節が重視されたため、徽州の地方志でも『烈女伝』²¹の幅が広がった。中華民国時代の『シャ県志』は16冊あるが、その中の4冊が『烈女伝』である。その原因は、編纂者が貞孝節烈婦に敬意を持ち、前回の地方志に収録されたものを消すのは忍びないと感じ、また、モラルが乱れている社会では、彼女たちがいればこそ、国が成り立つ²²と評価したためであった。

宗族は族譜を編纂する時に、族人である文人に族内の貞節と評価される女性の伝記を書かせるほか、有名人の伝記、あるいは伝記の序、貞節の行為を表彰する扁額や対聯も書かせた。棠樾村の清懿堂では、有名な書道家である鮑鈇が堂号を書き、清代の有名な大臣である曾國藩が「貞孝両全」という扁額を書いた。名人や地位が高い役人は権威と公信力を持っている。道徳が優れた宗族の女性が彼らに認められれば、信頼度は高まり、価値ある光栄がもたらされる。

また民衆を教化し、社会の気風を正しくすることを自分の務めとする地方のエリートは、貞節の意識を发扬するため、自発的にその事績を記録し、文集にする。地方志では、数多くの貞孝節烈婦が記録されるため、事績は簡単に書かれ、さらに名前だけが載せられることになる。しかし、地方のエリートは民衆を教化するため、地方志とは別に女性の物語を詳しく記録し、貞孝節烈婦はそれにより後世に名と事績を残すことになる。

(2) ほかの貞節祠堂

宗族の女性を祭祀する女祠を除き、各県志と府志には女性の祠堂に関する記載もある。

大姑小姑廟 在県南陳村山上祀唐章氏二孝女。又有孝女祠在県南劉村。此二处祠廟今存惟孝女廟。在南門外城陽山麓、久廢遺址無考。（シャ県志 卷三秩祀）

節孝祠 有二。一在府城南街…光緒三十一年知府黃曾源購民宅為之、並於祠前甃為坊、刊六県歴旌節孝人数於其上。一在県城上路街。雍正元年建。祀歴旌貞烈、歳二祭、祭款銀三両。（同上）

²¹ 『烈女伝』は貞節、節孝、節烈の女性が全て含まれる。

²² 原文は「其俗尚廉貞、褒孝節、前志已詳、敬而閔之、不忍刪損也。文釗以為、群渙俗涼、至于今日、在室無愉婉之養、在郷無任恤之行、在野無高尚之節、慈孝之教衰、夫婦之道苦、奮私徇己、苟以自悦、其生吾神州、立国之大本拔矣」である。『民国歙县志』「楼文釗序」（楼文釗著）。

孝女祠 在県南劉村祀唐章氏二女。（大清一統志）按此条旧志、不載。今按祀在劉村与大姑小姑廟在陳村者別故兩存之。（徽州府志 營建志 壇廟 十）

節孝祠 在上路街。雍正元年建。祀歷旌貞烈。（同上 十四）

貞女祠 在東門内祀方王貞女…（同上 十九）

節烈祠 在上路街。旧在府城水洞口。久圯。康熙中江応全捐資重建於機巷口。咸豐時毀于兵。乃就遺址改造市屋，岁以租值所入為祀費，而將祠移建今处。（徽州府志 卷二 祭祀 五） 旧在府城水洞口。祀歷代節烈。後圯。今改建於機巷口。（江南通志 ）

節孝祠、貞女祠、節烈祠（総称貞節祠堂）は貞孝節烈婦を祭祀するため建造された祠堂である。貞節祠堂では、歴代の貞女、節烈として表彰された女性だけを祭り（「祀歷旌貞烈」）、普通の女性は除外されていた。また、貞節祠堂に祭られることは宗族祠に祭られるのとは異なり、祭祀された女性の後代あるいは親戚は貞節祠堂に入ることができない。

以上の貞節祠堂に関する資料には、ごく簡単なことしか説明されておらず、建造者については、ほとんど不明である。1軒は徽州府の知府である黄曾源で民宅から改造されている。これは地方政府が貞孝節烈婦を表彰するためであった。しかも普通の祠堂と同様に「歳二祭、祭款銀三両」（毎年2回の祭祀を行い、祭祀費が銀3両）と決められた。官設の祠堂であるため、祭祀の費用も朝廷からの出資ではないかと推測される。

官設以外、里人、宗族の人が貞節祠堂を建造した場合もある。それらの節烈祠は個人である江応全が出資し、建てられたものである。『新安女史徴』の「淳安県重建烈婦祠碑」には、次のような話がかかれてある。「清代の順治年間、乙酉の乱で夫が殺された葉氏は夫の死に殉じ、川に身投げした。失名氏として沿岸の村人に埋葬された葉氏は、夢で家族に不幸を伝えた。家族は夢に見たところで夫婦二人の死体を見つけた。葉氏の顔はまるで生きている人のように見え、周りの人は驚かされ、烈女と褒めた。葉氏は故郷に連れられ、村の神様になり、村人を守った。」地方の名士は記念のため、祠堂を造り、石碑を立てた。康熙時期に洪水で祠堂と碑が倒されたが、村人は祠堂を再建し、民衆を教化した（「郷人擬復建祠…以風境内」）。「汪氏…姑病、割股以療…里人立祠祀焉」（徽州府志 卷十六・列女）。「吳烈女…未嫁夫客死於盜、自經卒…族人建正節祠祀焉」（同上）。婺源の施虹玉は両親を失った幼い弟を育て、結婚もしなかった先祖の伯母さんに感動し、貞孝の祠堂を建てた（『婺源施氏特建貞孝姑祠堂記』）。さらに、潭渡黄氏の族譜には、現実に造れない貞節祠堂を絵に描き、子孫後代を励ますことが記載されている。

子孫が祖先祭祀のために造った宗族の祠堂に比べ、貞節祠堂の建造者は必ずしも宗族の人とは言えない。なぜ血縁の遠い宗族の人や里人および地元の統治者が金銭を払い、貞節位牌堂を造るのだろうか。

王伝満は貞節祠堂建造の理由を、節烈な女性を礼賛し、彼女たちの亡霊を慰め、子孫への激励および世間への教化という四つにまとめた（王 2008：23）。淳安県の烈婦祠の物語では、葉氏の体は腐らず、村の神様になる。そういった話は現在から見れば、明らかにフィクションである。しかも貞節祠堂は貞烈な女性を祭り、いわゆる人間を祭祀する場所であり、普段は神と関わらない。中国において、神は廟に祭られ、地元の人を守っている。自然災害や疫病の時には、葉氏の烈婦祠で祈願すると、効き目がある（「里有水旱、疾病、災沴、悉禱之、屢著靈異」）という。それゆえ、葉氏は、女性は貞節を守るべきだと教化した上で、里人を守る女神になった。淳安県の烈婦祠は普通の貞節祠堂より機能が複雑である。民間信仰と関わり、烈婦を祭る貞節祠堂であると共に、神を祭る廟でもあるという二重の構造を持っている。

前に述べた女祠は宗族位牌堂の範囲に所属し、建造者は普段、位牌堂に入れない女性の夫、あるいは息子である。また、そこでは家族および宗族の女性を祖先として、慰霊、祭祀を行う。中国の宗族社会では、基本的にはほかの宗族の位牌堂には入らない。一族の規則で位牌堂に入る人は本宗族の人までと決められる。

貞節祠堂は女性の霊を慰めることを目的とする一方、社会教化活動の一環としても機能を発揮する。建造者は複雑で、宗族にとどまらず、里人、地方名士、地方政府まで含む。貞節祠堂に祭られるのは貞節を守るため特別な行為を行った女性に限られ、しかも継続性はなく、彼女たちの後代は無条件に入ることはできない。貞節祠堂はより広く社会各界から祭祀を受け、影響する範囲も宗族の祠堂より大きい。また一部の貞節祠堂に祭られた女性が民間信仰の神に進化し、廟のような地方を守る機能を発揮している場合もある。

最高級の表彰である牌坊と基礎的な表彰である宗族の女祠の間には、大きなギャップがある。地方志、族譜、文集における貞孝節烈婦の記録および、社会各界に建てられた貞節祠堂は、貞節を守る女性の霊を慰め、彼女らに適切な光栄をもたらす一方、社会教化活動の一環として、機能を発揮する。

伝統社会では女性に対する表彰と賞揚は貞節と孝行に集中する。夫に節操を守り、夫の親に親孝行し、夫の息子を育てる女性は、家族および社会に認められる。宗族は、子孫の供養をもらえるような祖先になりたいという女性の願望が叶うように、地元エリートや文人に彼女たちの事績を記録させ、後世に名を残させる。地方政府などの社会各界は貞節祠堂を造り、適切な表彰を与える。最高級の表彰は皇帝の許可をもらい、立派な貞節牌坊を賜われることである。

女性の表彰と賞揚を運営するのは宗族の男性と地方のエリートである。多くの男性が家を出て商売する徽州では、男性族人の家庭の安定を維持し、宗族人口の増長を保証することが、宗族を維持する基礎である。また族人の女性がもらった表彰は宗族に光栄をもたらし、ほかの族人の女性を教化することが

できる。表彰がもらえる背後には、宗族の権力、社会地位、金銭、人脈などをめぐる争いがある。地方のエリートは民衆を教化し、社会の気風をよくすることを自分の務めにする。彼らは貞節意識の提唱により、理想的な社会や国になることを希望していた。女性は独立できず、男性に従属する伝統的な男権社会に認められるため、男性が決めた要求に応じて行動しなければならない。このような状況において、女性は男性の私有財産として、他の選択肢がなく、ただ期待される「良妻賢母式」の女性にならざるを得ない人生に、家族に貢献することだけにより、女性としての価値を実現する。

徽州地区の伝統社会で、国からの貞節牌坊の建設、宗族からの女祠の建設および文集の編纂により、当時の人々は「良妻賢母式」の女性に対する期待を表した。現在、女祠も、牌坊も有名な観光スポットとなっている。村人たちは女祠と牌坊が全村の大切な祖先の遺産であり、観光客を引きつける重要な観光資源だと考えている。女祠と牌坊および祭られる女性たちについて、村人も観光客も尊敬の意を表すが、現在には実行できなく、必要がないと評価した。時代の変化とともに、民衆の価値観が変わり、女性に対する社会的期待も変化している。

第2節 1949年以降女性に対する社会的期待——「女性は天の半分を支える」

1 社会主義農村の建設者と「鉄姑娘」式の農村女性

1949年解放後、徽州の農村は「解放されて国家の主人公となる」時代に入る〔中共上庄村党支部、上庄村委員会 2009：13〕。新しい政権において、村の女性たちは「主人公」の身分が授けられ、社会主義農村の建設者と期待される。

女性たちを家庭から社会へ引っ張り出し、農村の建設者になるため、各村では相次いで「婦女联合会」（略称「婦聯」）を設立し、本村の女性を組織化し管理した。たとえば、休寧県は1949年末まで、全県263ヶ所の村に、221か所の村が「婦女联合会」を設立し、会員は15891人になる〔休寧県地方志編纂委員会 2012：776〕。それから村の「婦女联合会」は、女性のために一連の活動を行った。夜間学校で勉強することを薦めたり、新婚姻法を宣伝し、男女平等と結婚自由を提唱したり、家族の男性を中国人民志願軍に参加させることを勧めたり、靴作りで抗美援朝軍に支援したりした〔中共上庄村党支部、上庄村委員会 2009：122〕。これらの活動により、女性に中華人民共和国に対する共感を高めさせ、国の一員という認識を与え、村の女性たちに「主人公」の意識を育てる。

竹林村のYHさんの事例から、国に対する共感を見てみよう。

13才に童養媳に行かせられた。解放以降、毛沢東が童養媳を禁じて、私はもともと童養媳に行きたくなかったので帰られた。解放前に、生活が言えないほど苦しかったな、国家

が全然私たちを守ってくれなかった。毛沢東のおかげで、よい生活ができる。1950年に村に帰って、村の宣伝チームに参加した。歌ったり、踊ったり、太鼓を敲いたりした。演出から「工分」（労働量を計算する単位）はもらえないが（参加した）。その時、本当に毎日気持ちがすっきりした。自分も歌ったり、踊ったりすることが好きで、楽しくて参加できる。村は踊り用の服を準備してはくれないが、私と他の女の子と一緒に同じ服を裁縫に作ってもらった。

新婚姻法によって、YHさんは自分の意思により、童養媳の身分を終えて実家に帰った。国に対する感激を表す一方、彼女は「解放して主人公になる」という気持ちから生活への情熱が喚起され、積極的に村の宣伝活動に参加した。国の法律や政策が村の女性の身分を変えた。この変化に感激した彼女たちはより積極的に村の集団活動に参加するようになった。

女性を村の建設に参加するよう導くため、徽州地区の県政府や村委員会が表彰するという方法で進歩的な女性を宣伝し、女性に対する社会的期待を表す。たとえば、1953年に、績溪県上庄村の柯助萍さんはこれまで男性の労働であった「役牛耕田」（牛を駆使して田んぼを耕す）の技術を学び、県の「労働模範」と評価され、また村の婦人主任に任命された〔中共上庄村党支部、上庄村委員会 2009:123-124〕。柯助萍さんに栄誉を授け、政治的地位を与えるのは、村の女性たちが彼女を模範として、農村の建設に参加するように導くためである。1955年に、毛沢東は全国の女性に「女性は天の半分を支える」という評価を与えた。この評価により、女性に対する社会的期待を「天の半分を支える」レベルに上昇し、各地の政府はさまざまな方法で、多くの女性が農村の建設に参加できるように励ました。

しかし、女性が村の建設に参加する理由は、社会的期待を実現するためではなかった。以下は1950年代に村の婦人主任PLさんは、当時各村人の家に宣伝する光景を言った。

当時、私は一軒一軒の家を訪ね、女性に村の労働に参加しようと説得した。彼女たちに「旧社会ではわれわれは圧迫されて、苦しかった。今、新中国が成立し、共産党の政策がいいから、女も働けるよ」なんて政治のことばかり言い、現実的な利益がなければ、誰もついて来ない。だから、私は彼女たちに、「もし労働に来れば、毎月多くの食糧がもらえる。集団労働しない家庭の主婦でいれば、毎月食糧が少ないし、「工分」もない、それで年末に配当金をもらえない。それを聞くと、多くの女性は働きに行った。

国の女性に対する社会的期待は農村の建設者になることであるが、村人は政治の視点から国の政策を

理解するわけではなく、現実の利益を考量して社会的期待に対応する。国の社会的期待は村人の求めとの間に完全に合致しているわけではないが、両者が交差すれば、社会的期待が実現できる。

1956 年末、国の強力的な推進と政策の導きにおいて、全国ではすべての農村に、農業合作社を設立し、徽州農村の女性も男性と同様に、農業社組織に納められ、農村の労働者になる。1960-70 年代に、女性に対する社会的期待が「鉄姑娘」になる。

「^{テューグーニャン}鉄姑娘」（鉄の娘）とは、鉄のような強い意志を持ち、男に負けないような労働ができる若い娘のことである。1960-70 年代に、集団労働が行われた時期における中国の特別なシンボルであった。

「^{テューグーニャン}鉄姑娘」という言葉は、もともと山西省の方言「^{テューグーザイ}鉄妮妮」²³から始まった。1963 年、山西省大寨村は洪水に見舞われた。そのとき、郭鳳蓮さんをはじめ、村の 22 名の若い娘が自発的に災害支援チームに集まり、「鉄姑娘チーム」の最初の形態ができた。1964 年に毛沢東が呼びかけた「農業学大寨」（農業は大寨に見習え）²⁴のスローガンと共に、大寨村は中国農村の聖地になる。年間 2 百万人に及ぶ各地の農民代表が大寨村に見学を訪れ、「鉄姑娘」は全国に報道され、有名になった。現在、「鉄姑娘」という言葉には、ほぼ「一生懸命働く」と「女らしくない、性的魅力がない」というイメージが与えられている〔金 2007 : 55-56〕。伝統的なやさしい女性の特質は隠され、体が丈夫で、声が大きく、生気が満ち溢れ、おしゃれを気にしない、働くときに男性に負けないほどたくましいというイメージがたてられた〔周 2013 : 7〕。

また「時代は変わった。男と女は皆同じである。男の同志ができることは女の同志にもできる」とか、「女性は天の半分を支える」²⁵などの毛沢東語録は「最高の指示」という地位まで上げられ、広く宣伝、引用され、20 世紀 60、70 年代の「男女平等における最高の道理となったわけである」〔金 2006 : 180〕。中国の各地では、サービス業、紡織業、農業だけではなく、建築、製錬、機械、運搬など力仕事が多い「男性の業界」に女性が入り、「鉄姑娘」式の若い娘がよく出て、「鉄姑娘」チームが結成された。農村では、「女はまぐわを持てない」、「女は壁を接げば人畜が栄えず、女が梁に触れば人が病み、畜が死ぬ」などという頑固な文化タブーと規範が破られた〔金 2006 : 189〕。

徽州地区の、太平県甘棠大隊（現在は黄山区甘棠鎮甘棠社区）に「鉄姑娘チーム」がある。リーダー

²³ 「妮妮」は山西省の方言で若い娘という意味である。

²⁴ 大寨村はもともと平地が極めて少なく、貧しい山村であったが、村人たちが山地を切り開いて農地の改造を行い、急速な生産力の成長と社会改造を成し遂げた。1963 年その成果が認められ、毛沢東が全国に「農業は大寨に見習え」と呼びかけたため、模範農村として一躍有名になった。その後、全国で「大寨式」の農業が推し進められた。しかし大寨村の開発は、自然を無視して山地の耕地化を進めたもので、1980 年代に批判され、模範も取り消された。

²⁵ 毛沢東が「女性は天の半分を支える」と発言したかどうかについて、正確な考証ができないが〔耿化敏 2007〕、世間はそれを毛沢東の発言と黙認し、よく引用される。

である方和珍さんは「赤脚医者」²⁶（はだしの医者）になり、村人を診察する。シャ県大梅口村に、大梅口ダムを建設するため、村の3人の娘が「鉄姑娘爆破チーム」を結成し、人力で毎日八つの穴を爆破した。メンバーの方如秀さんはハンマーに打たれ負傷し、左膝を粉碎骨折したが、1週間休んで、つえをつきながら工事現場で仕事を続けた。『徽州日報』には彼女たちの事績を「鉄姑娘放砲隊 意如鉄 膝如鋼」（「鉄姑娘爆破チーム」の意識は鉄のごとき、膝が鋼のごとく）と報道した。

農村では、男性が毎日「工分」満点10点をもらい、女性は満点8点をもらった。金一虹が行ったインタビューによると以下のようなことがあったという。「鉄姑娘」は男性と同様に仕事をしたが、同じ「工分」を受けとれなかった。しかし、そのことを気にせず、「無私に貢献する」と解釈したという現象があった〔金 2006：193〕。農業や茶業が主流である徽州地方では、男女問わず田んぼ、および茶畑で農作業をした。徽州地区の農村では、男性10点、女性8点の「工分」計算制度があったが、男性より仕事ができる女性は、奨励として男性と同様に10点がとれた。しかし、それは極めて稀なことである。休寧県梓源村は、大寨村と同様に平地が極めて少ないところであり、酸度が高い土は茶業に向いていた。1974年「農業は大寨に学べ」時に、全村の人力を尽くし、棚田を造った。遠くの山から大きい石を持ち運び、小さく砕き、その石で棚田を積み重ねた（写真6-2-1）。

村人のYさんは当時の仕事を思い出して、「うちの嫁がすごかったな。（棚田を造ったため）山の下から上に石を担って運び、1日で男の私より多く運んだ。だから工分10点をもらった。うちの生産大隊では工分1点が5分（人民元0.05元）だ」と語ってくれた。男性が家を離れ、外で商売する伝統

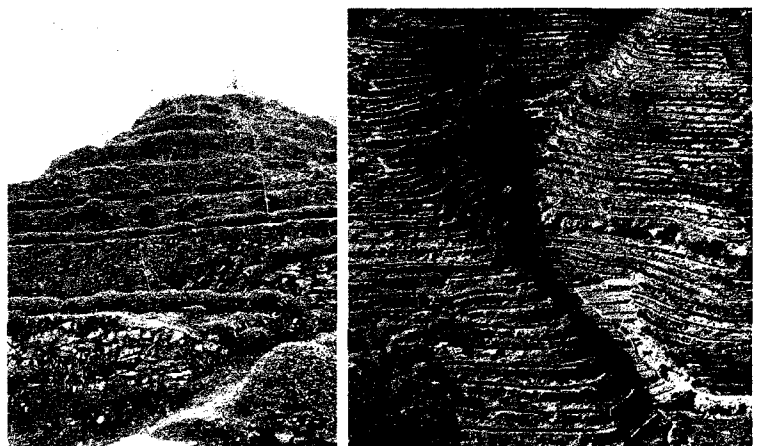


写真6-2-1 梓源村の棚田（右下が「梓源村委員会」wechat 公衆号より、ほかが筆者撮影）

があった徽州地区では、農作業を担う女性が多くいたため、農業や茶業などにおいて、女性に関するタブーや禁忌が少なかった。当時、ほかの収入源がなかった普通の農家にとって、工分の奨励は最も得に感じる褒賞であった。それらのことを通じて、村団体は女性の労働能力と個人の価値を認めるようにな

²⁶ 農村の農民公社で、農業に従事しながら医療衛生活動を行った半農半医の衛生員である。

った。

また当時、村で仕事が一番できる女性は村の婦人主任を担当した。これは農村の女性が村の権力集団に入る唯一の方法である。前に述べた方和珍さんは、医学を勉強し、正式に村の衛生員になり、村人および隣村の人々まで診察した。さらに、村の婦人主任となり、伝統的な出産観念が強かった1970-80年代に「計画生育」の仕事をした。その後、方和珍さんは共産党に入り、村の共産党支部委員になった。優れた仕事能力を持ち、村人に貢献することにより、方和珍さんは「黄山十大傑出女性」として表彰された。1970年代に「考えが進歩的」な村の女性たちは、積極的に共産党に入党の申請をし、あるいは「先進工作者」に申請した。農村の女性は仕事の能力により、個人の価値が認められ、さらに政治に参加でき、管理層に入ることも可能であった。

「鉄姑娘」式の女性は、集団労働の時期における政治に深く関わる産物であった。大隊や村集団で一定の役割を果たした農村の女性たちは表彰された。1978年から「家庭聯産承包責任制」（家族営農請負制）の実施により、農家が一定数量の農作物を村（国家）に上納し、それ以外の余った農作物は農民で自由に処分できるようになった。それゆえ、仕事ができる女性の活動は大隊や村より、自分の家庭経済へと向いて行った。また2006年から農業税金が免除され、農村における村団体の経済は、村人の個人活動との関連性を薄めていった。もともと集団の利益に役に立つとされた「鉄姑娘」式の女性たちは徐々に忘れられるようになった。

「鉄姑娘」の特徴は、男性に負けないほどの労働をする。いわゆる毛沢東が提唱した「男女都一样」（男と女は皆同じである）である。当時の人々は簡単に「男女都一样」を男女平等と同一化した。その「鉄姑娘」式の女性については、竹林村の程書記の話が意味深い。彼は「当時その女性たちは本当に苦労した。体を壊すほど。しかし、今われわれはあまりその話をしない。なぜならば、村は何も彼女たちにあげていないから。過去のことがそのままに過ぎ去ってしまった」と言った。当時の女性たちの役割は認めるが、生理の差別を無視して女性が男性と同様に仕事することに反対する気持ちは理解できる。その歴史に現れた女性を忘れようという曖昧な態度を持っているのは竹林村のような農村だけではない。「主流もその記憶を薄れさせよう」〔金 2007: 158〕としているのである。

筆者は梓源村で調査をした際、現婦人主任の家に泊まった。その隣家の庭に顔色がよくないお婆さんであるCJさんが座り込んでいた。彼女は1970年代後半に村の婦人主任を担当した。毎日きつい農作業と一人っ子政策の実施に忙しかったCJさんは、仕事で体を壊し、早くに仕事や家事ができなくなった。現在、同村の村人は当時仕事で体を壊し、実際の利益がもらえなく、引き合わないことだと考えていた。しかし、CJさんは当時「工分」の満点8点しかもらえなかった。女性が男性より「工分」が低い原因を聞くと、彼女はただ「上はそう決まった」と言った。自分の利益に関わる「工分」の計算制度について、

CJさんは異議を出さなく、当たり前のことだと考えた。金一虹が述べたように、「鉄姑娘」が表した「男女都一样」は左傾した政治的な呼びかけであり、女性を男性のように貢献させ、平等の権利は無視された。女性は農村集団の労働にてできる限り義務を尽くしたが、自分の権利を守る意識がなかった〔金 2006 : 193〕。

2 商品経済における女性の表彰

1978年以降、中国では経済建設を中心とする政策を実施し始めた。経済発展の策略は鄧小平の「先富論」：先富帶動後富、最終實現共同富裕²⁷〔鄧 1994 : 152〕である。「先富帶動後富」というのは、先に豊かになる人は経済的なリーダーを務め、村人を率いて裕福になる。全社会が経済の発展を強調する背景において、村の女性も例外なく、経済的なリーダーと期待されている。

徽州地区の農村では、そのような社会的期待を持っている女性は二種類に分けられる。一つは農村の女性村管理者である。彼女たちは村管理者として、村人を率いて村人の収入を増加し、村経済の発展を実現することに役に立てられると期待される。たとえば、シャ県紹濂郷和平村の鮑彩鸞さんである。

シャ県紹濂郷和平村の鮑彩鸞さんは村の荒れた山を請け負い、造林して緑化し、全国、安徽省の労働模範に授けられ、全国「婦聯」から「三八綠色獎章」、安徽省「婦聯」から「三八紅旗手」²⁸が授与された。

鮑彩鸞さんは1987年に村の婦人代表になった。1990年に安徽省が「5年間で荒れた山を消せ」という目標を決定したため、紹濂郷の役人が各村人の家まで行って造林の役割や、国が提供した造林の優待を宣伝した。しかし、村人にとって造林のことは初耳であり、村人たちは躊躇していた。村の婦人代表であり、共産黨員である、鮑彩鸞さんは村の荒れた山を改造するため、率先して「虎形坑を緑化する契約」に署名し、16人の女性の村人を説得し、彼女たちを率いて45畝の山地に2万本の杉の苗を植えた。それにより「和平村三八造林場」が造られ、鮑彩鸞さんがリーダーに選ばれた。

²⁷ 先に豊かになる者たちは、落伍した者たちを助け、最後に共同富裕の理想を実現する。

²⁸ 1978年第4次全国人民代表大会では、仕事における婦人の特殊性を無視することの誤りが強調され、「婦聯」が再び活動を始めた。「婦聯」とは、婦女聯合会の略称であり、中国の女性と児童の利益を代表し、守る組織である。「婦聯」組織の構造は上から下に、全国（全国婦聯）、地方（省、市、区の婦聯）、基層（郷鎮婦聯と農村婦女代表会、街道婦聯と社区婦聯）となっている。文化大革命の時期には一時、組織は壊滅状態となり、約11年間にわたって活動を中断した。「婦聯」は1979年から毎年、「三八紅旗手」と「文明巾幗崗」を授与し、社会に大きく貢献した女性、仕事に優れた女性および女性団体を表彰した。

成功した鮑彩鸞さんは1991年に村の北部の荒れた山135畝を引き受け、山地を小さく分けて村人たちに請け負わせた。また参加した村人たちに土地の整理、苗の植え方を詳しく指導した。銀行の融資金はまだもらえなかったが、村人たちに給料を出すため、息子の結婚に準備した貯金を流用したこともある。1995年に茶葉市場が弱気相場になり、村の茶園300畝と製茶工場が閉まる状態になる。鮑彩鸞さんは村人の何人かを率い、茶園を請け負った。経済的な利益を上げるため、鮑さんは借金し、茶園で間作を行い、新しい製茶機械を投資し、製茶工場は赤字から黒字に転じた。

鮑彩鸞さんはまわりの人にやめようと言われる状況で荒れた山を請け負った。その動機は「私が村の婦人代表と共産党員」であることにある。個人の損得を計算せずに集団に貢献するという考え方と責任感とは計画経済時期を経験した人々の特徴として残されている。1980、90年代に表彰された女性には「集団のために貢献する」という動機が強く表れている。

しかし、鮑彩鸞さんの後期の目標は変わった。市場の変化に従い、村の造林場と茶園の農業構造を調整し、山林の資源を最大限に活用し、村人の収入を増加させることを目標とした。商品経済の発展により、経済的利益を追い求めるのが主流になっている。経済的な利益を強調する社会では、農村の女性に対する表彰は、個人の責任感やほかの人に与える精神的な励ましより、女性が村および村人にもたらす経済的な貢献が重視されるようになった。

鮑彩鸞さんは、村人たちを率いて裕福になることにより、経済的なリーダーとなり、国から「三八紅旗手」²⁹を授けられた。これは女性に対する表彰の最高の榮譽である。鮑彩鸞さんの業績から見れば、村の管理者に属する婦人幹部という身分は、彼女が村の女性を率いて村を経済発展させ、村人の生活を豊かにするという目標を実現することに役立つということがわかる。鮑彩鸞さんのような経済的なリーダーに対する期待は、実は女性の村管理者に対する期待である。そのような女性管理者は村経済の発展および村の女性たちの家庭地位をあげることににおいて、率先して手本を示す作用を発揮できるように望まれている。政府の視点から見れば、鮑彩鸞さんのような女性が多く出て、村の経済を発展させ、女性の収入を増加させ、家族における女性の地位が上昇することを期待している。

第二は村に工場を建てる女性の企業家に対する期待である。女性の企業家は「先に豊かになる人」と

²⁹ 1978年第4次全国人民代表大会では、仕事における婦人の特殊性を無視することの誤りが強調され、「婦聯」が再び活動を始めた。「婦聯」とは、婦女聯合会の略称であり、中国の女性と児童の利益を代表し、守る組織である。「婦聯」組織の構造は上から下に、全国（全国婦聯）、地方（省、市、区の婦聯）、基層（郷鎮婦聯と農村婦女代表会、街道婦聯と社区婦聯）となっている。文化大革命の時期には一時、組織は壊滅状態となり、約11年間にわたって活動を中断した。「婦聯」は1979年から毎年、「三八紅旗手」と「文明巾幗崗」を授与し、社会に大きく貢献した女性、仕事に優れた女性および女性団体を表彰した。

言える。彼女たちが建てた工場により、まわりの女性の就職を助け、収入を増加させられると期待されている。その典型的な人物は姚秋紅さんである。

休寧県^{チャーコウ} 汭口村に、姚秋紅さんの服装工場がある。姚秋紅さんは以前、ほかの村人と一緒に杭州の服装工場に出稼ぎに行っていた。彼女は家族と離れたくないため、2008年に故郷に服装工場を造り、事業を始めた。休寧県は町である屯溪に近いので、多くの村人は屯溪で、より給料が高いところへ就職した。そのため、工場を始めたころは、工人を招くのが難しい状況であった。姚秋紅さんは汭口村で子供や親を世話するため家にいる女性を工場へ働きに来るようにと説得し、裁縫に未経験の女性を無料で育成した。服装工場は徐々に広げられ、2014年に年産値は200万元（約3400万円）以上に達し、従業員は55人となった。そのうちの女性の多くは村の留守女性である。

姚さんは、今までの成果の中で、一番の自慢は、村に家で「留守女性」³⁰の収入を増加させたことだと述べた。村の「能人」たちは、「農民的生活世界に住み続けており、地域の生活にシンパシーを抱いている」〔田原 2009：235〕ため、個人の利益を最大化するのみならず、地域の村人の利益も守る。それゆえ、村人にとってこのような工場は、鋭い対立関係もなく、生活の助力として、さらに「庇護者に近い」〔田原 2009：236〕存在である。

姚秋紅さんは服装工場の経営により生活が豊かになった。当地の税収に大きな役割を果たす一方、工場が近所の村人の仕事先として提供されたため、「休寧県農村致富带头人」（休寧県農村の経済的なリーダー）として表彰され、県婦人代表に選ばれた。姚さんのような村の「能人」（農村リーダー）は生産活動において、政府から支援を受け取り、地元の資源を生かしている。さらに、自分に利益をもたらすことだけでなく、地域に公的な利益をもたらすことも考えられる。彼女の事例から見れば、創業によって村に残る女性の就職問題を解決するのは、村の経済を発展させる可能性が高い方法であり、「先富論」の策略に一致している。それゆえ、女性の企業家に対する期待は、現在の社会の経済発展において主流の思想に合致する。村にいる女性の経済的なリーダーや企業家はまわりの女性を率い、家を興し富を築き、彼女たちの経済収入をあげることを通して、村の女性たちの家庭、社会的地位を上昇させる。村において女性の経済的なリーダーに対する評価は高い。

³⁰ 中国語の「留守女性」は夫が出稼ぎなどで長期間不在のため、子供や親を世話し、シングル生活を強いられている女性たちである。

3 「良妻賢母式」の女性に対する再期待

改革開放以降、階級闘争を主流にして政治階層だけで他人を評価するイデオロギーや、仕事や審美において女性の性別を曖昧にする「脱女性化」意識が批判されてきた。また、家庭における女性の役割が再重視され、「良妻賢母式」の女性が再び呼びかけられている。

現在の「良妻賢母式の女性」に対する社会的期待は、「十星級文明戸」として表彰されている。

「精神文明建設指導委員会」と「婦聯」が行った「十星級文明戸」の表彰は、農村の家庭に対する要求がどのようなものなのかを表している。その十星とは「道德」、「守法」、「義務」、「致富」、「計生」、「科技」、「新風」、「文教」、「団結」、「環境」である。道德と法律を守り、社会義務を尽くし、生活水準を上昇させるため勤勉に労働し、一人っ子政策を守り、科学を信じて勉強し、よい家族関係をつくり、知識を学び、迷信に反対し、村人とよい人間関係をつくり、家と村の環境を守るという10のポイントで村人を評定する。「十星文明戸」となった家庭には表彰メダルが授与され、メダルは家の正門の上に掛けられる。村人の話によると、十星を全てとることは難しいことで、多くの家庭では7-9星がとれる程度であるという。「十星級文明戸」に達するのは簡単なことではない。

気になるのは「十星文明戸」の主催者の一つが女性の權益を代表する「婦聯」であることである。その点について、元黃山市副「婦聯」主席李維玲さんは、次のように述べている。「〈十星級文明戸〉は家庭に対する表彰だが、妻である女性がそこで重要な地位を占めている。上の親に孝行し、下の子供を育て、また近隣との関係や、家計の切り盛りはほぼ妻が担っている。村人たちは、家族の仲がよいかどうかは妻が肝心だと考えている」と。竹林村の曹さんは隣家の妻について、「家族の仲が悪い。夫婦二人がギャンブル好き。妻の方は夫を待たずに先にご飯を食べる。食べ終わったら、すぐ麻雀（農村のギャンブル）の遊びに行く。みっともない家だ。こんな妻がいるからね。」と述べた。夫婦関係を基にする「生活家庭」が実際に広く存在していると人々は感じている〔李 2010: 11〕現在、夫婦関係の良し悪しが家族の關係に直接に影響していると認められている。妻は黙って家族に貢献するのではなく、彼女たちの言葉と行動が家族に大きな影響を与える。伝統的な「良妻賢母式」の女性に比べ、現在の妻は家族における地位が高い。

經濟發展を強調する現在の社会では、このような表彰が村人の生活に対してどのような現実的な役割を果たすのだろうか。このことについて、李維玲さんは「もちろんあるよ。例えばお見合いする時に、相手が十星級文明戸だったら、女性側は向こうが道理のよくわかった家庭で、将来の姑嫁の間に問題は起きず安心できそうだと考える可能性が高い」と言う。しかし、この表彰は精神的な面での励みであるが、人々の現実の利益とは合致していないので、村人たちの積極性を引き出せない。このような社会的期待の実現は明白ではない。

における舅姑の世話とは明らかに異なる。経済力の不足や伝統的な養老観念が強かったことから、農村では国家養老を全面的に実施できない時期があった。その時期、一人っ子政策により養老資源が不足する現代農村の実情に直面した国家は、「家庭養老」を提唱した。そこでは養老における、女性の役割の重要性が強調された。嫁が担う養老の役割は国家養老制度の不足を補い、社会の基である家庭の安定を守り、社会の安定に役割を果す。

「文明戸」と「好媳婦」の表彰から見れば、女性は家族および村社会の中でよい関係の築き、老人扶養問題の解決に主要な役割を果す「良妻賢母式」の現象が表れる。しかし、現在の「良妻賢母」は伝統的なものと比較すれば、明白な区別が見られる。伝統的な「良妻賢母」は受け身の立場で家族を中心に貢献するが、現在のほうは家族だけではなく、村社会とのよい関係を保つ。彼女たちは役割を果す範囲が広がっている。また彼女たちは能力や、教育程度など総合的に見れば、伝統的な「良妻賢母」より遥かに高い。

1949年以降、女性に対する社会的期待が段階的に変化している。1950-60年代には、女性は村の建設者として期待される。1970年代から、徐々に「鉄姑娘」に変わる。1978年に改革開放し、政策が調整されると、女性に対する社会期待は主に経済発展を中心とする女性経済的なリーダー、および精神文明を中心とする「文明戸」と「好媳婦」になる。異なる段階における女性に対する社会的期待は、その後ろに現実的な利益が求められている。女性に対する社会的期待が変化する原因は、国家の政策の影響を受ける。政策が変われば、女性の役柄および地位も変化する。1949年以降、女性に対する社会的期待は、家庭を中心とすることから社会を中心とすることに移り、生産、経営の活動に参加し、女性が家庭の安定および社会の調和の各面で積極的に役割を果す。

おわりに

女性に対する社会的期待は、その当時の人の女性の地位に関する考えが反映されている。

清代、中華民国時代における徽州社会の女性に対する社会的期待は、貞節牌坊、女祠の建設と文集の刊行による「良妻賢母式」の女性が求められた。このような社会的期待の背景にあるのは、長期間、家を離れ商売する徽州商人にとって、家族の世話をし、暮し向きを管理するという現実の生活から求められたものであった。また各時期の政府の村社会を統治するための政治的な要求、および文人たちの儒家倫理をもとにした要求があった。そして、1949年以降は、女性に対する社会的期待の段階的な変化が表れる。1950-60年代には、女性は村の建設者として期待された。1970年代からは徐々に「鉄姑娘」に変わっていく。「女性は天の半分を支える」時代には、女性に対する評価と表彰は著しく上昇するが、「鉄姑娘」式の「男女平等」は真の平等ではなく、伝統的な性別分業に対して挑戦することはなかった。女

性は経済活動に参加したが、男性と同じ平等な地位をもらうことはなかった。1978年改革開放以降、女性に対する社会的期待は主に、経済発展を中心とする女性の経済的なリーダー、および精神文明を中心とする「文明戸」と「好媳婦」になる。村経済の発展には女性の参加が不可欠であり、仲がよい家族、安定した社会もまた女性の関わりが大きく影響を与えた。女性が家族と社会に果たす役割は重要になり、それによって女性の社会的地位は大きく上昇したことが明らかになった。

しかし、貞節牌坊、女祠は女性を褒める意味があるが、男性の需要によって建てられ、当時の女性には「良妻賢母式」の女性になるという期待が与えられた。女性は受け身の立場でこれに従い、夫の家族に貢献をせざるを得なかった。本意が問われることなく、人生の選択の自由がなかった女性たちは、男性と厳しく差別され、「暗闇の世界」の中で抑圧されていた。1949年以降、社会主義農村の建設者や「鉄姑娘」は国が生産活動の期待に応じて出現させたものであり、女性が自発的に求めているものではなかった。「女性は天の半分を支える」という政治的なスローガンは、中国の女性解放の象徴として唱えられ、女性はその下で、全面的に社会的労働に進出させられた。こうした建前の男女平等は、実は国の発展のために女性の「女性性」を犠牲にしたにすぎなかった〔関西中国女性史研究会 2014: 61、80〕。改革開放以降、自分の理想や経済的な利益のため、社会的期待に相応した行為を行った女性の経済的なリーダーが現れる。多様な生活が選べる中で、自ら夫の親を世話すると決意した「好媳婦」の事例からもわかるように、彼女たちは能動的に選択する意識が強くなっている。

第7章 結論

本論は結婚、出産、養老、表彰の四つの視点から、徽州の女性の地位および変化を分析する。

まず、結婚儀式と結婚の贈与の視点から、結婚における女性の地位を分析する。伝統社会において、親の意思に従い結婚する女性は、結婚の儀式、結婚相手の選定などに関して、自分の意見や気持ちは考慮されなかった。強い父権に抑圧された状況において、嫁になる女性に発言権、選択権、および決定権はなかった。1949年解放以降、新しい婚姻法では個人の結婚自由の権利が認められ、結婚における女性の地位が保障されたが、保守的な村では伝統に従い結婚する意識がまだ強かった。1978年改革開放以降、一人っ子政策が実施され、親に対する子の地位が大幅に向上した。結婚に関する親の主導権は減少し、若い女性の結婚における選択権は大きくなった。女性たちは自分の意思で結婚を決めることができるようになった。

伝統的な村社会では、結婚の贈与は、結婚儀式のために準備されたものである。婚家、嫁の実家と親友の間で行われる贈与は、親世帯の範囲で交換しあうもので、若い夫婦の家庭に対する支援ではなかった。それゆえ、親が準備した個人用品の嫁入り道具を除き、結婚の贈与において、嫁は決定権と支配権を持っていなかった。物資が欠乏した1950年代の計画経済時期には、結婚の贈与はあまり行われず、少量の食品で結婚式を済ませた。1978年以降、商品経済発展時期に、生活が豊かになると共に、結婚の贈与が復活し、特に1990年代後半、初代の一人っ子世帯が結婚適齢期に入る時期、結婚の贈与は高騰した。近年では贈与が金銭に換算され、贈与の対象は親から子に移り、贈与品の内容は若い夫婦の家庭の支援になっている。さらに、現在、嫁入り道具以外の結婚の贈与を管理、決定する嫁の権利はかなり大きくなった。贈与の金銭の扱いにおいて、嫁の意思が明白に表わされる。結婚式の買い物は女性が自分の好みで選び、彼女たちの選択は多元化している。また消費観念の変化と共に、金銭をあまり使わず、より合理的なアレンジをすることが多くの嫁のやり方になっている。さらに、嫁入り道具の価値が結納より高い風潮において、嫁が親から高額な支援をもらえるため、男性側が高い結納を与えることを通してより高価な嫁入り道具をもらうようになった。結婚儀式と贈与の分析から、社会の転換、経済の発展、政策の調整に従い、徽州農村において、結婚における女性の地位が高くなり、彼女たちが結婚に関して、自由に意思を表すようになったことがわかる。

次に、嫁生活における女性の地位を分析する。伝統的な社会では、娘は働けず、家計にとって役に立たない存在であった。さらに結婚の際には、高価な嫁入り道具を必要とするため、娘の育成は家にとって大きな損出であると思われていた。また婚出した娘は合法的な継承権と養老権がなく、父系血縁の継

承にも役に立たないので、娘は無用であり、軽視されていた。解放以降、宗族が中国共産党によって消滅されたが、考え方が保守的であった農村にはその古い観念が残されていた。

計画経済時期に、平均主義という思想により、村では男女問わず共同労働が行われ、女性に対して家を出て働く権利が与えられた。また、1970年代からは一人っ子政策が実施された。この「子宮革命」により、国家の制度から父系血縁を継続する観念と農村の伝統的な養老制度とが打破された。フィードバックの養老制度を変えないということを前提に、娘の役割は養老において徐々に重要視され、正式な地位が認められるようになった。

1990年代には商品経済が発展する。内陸である徽州地区でも一定の発展があり、町や工場へ出稼ぎに行く女性が多くなった。仕事を持つことにより家計を補充し、家族における女性の役割が重視されてきた。現在まで、一人っ子政策が40年以上実施され、「優産優育」の観念が教え込まれた。1990年代生まれの女性も適齢期に入っている。一人っ子として親に甘やかされて育った彼女たちは、大人になっても生活の上では親世帯に頼り、親は養老や精神的な支えを彼女たちに求める。したがって、娘の実家は娘および娘の新しい家族に対して力を尽くして応援する。嫁になった若い女性たちは、実家と婚家の方にとって正式な家族一員であり、「永遠の^{コドモ}娘と嫁」である。実家、婚家、自分の新しい家庭の中で彼女たちの地位は上がっている。

しかし、農村では男女の地位が平等であるとまでは言いづらい。一人っ子政策で娘の親に対する養老と家産相続は必然的な趨勢になった。しかし、息子にとってはフィードバック式の養老観念が主流であり、息子がいる場合には、娘は副次的な地位にある。若い男女の新しい家庭において、女性は外で働き、お金を稼ぐが、所詮家計の補助であり、大黒柱になれない。仕事以外、彼女たちは大部分の家事を担い、子供の教育に従事する。また離婚した場合に、農村の伝統的な観念により、女性は嫁入り道具以外、夫婦の共同財産を分けることは難しい。一人っ子政策が実施され、商品経済が発展している現在、農村の若い女性の地位は飛躍的に向上しているが、男女平等まで長い距離がある。

また、村の「婦人家」による孫の世話、養老および社会交際の生活状態を考察し、都市化の進展の影響下における「婦人家」の家族、村社会における地位を分析する。

商品経済に影響された村では、子供たちが遠い都市へ出稼ぎに行き、「婦人家」たちは二度目の母親として孫を世話する。「婦人家」たちの地位は、本来被扶養者であるが、孫の面倒を見ることによって扶養者の立場へと逆転している。一人っ子政策において、家族の構造が変わり、子供の地位が上昇し、「婦人家」の地位は下がっている。

村では伝統的なフィード・バック式の養老制度が1990年代まで続けられてきた。2000年以降、竹林村

は都市化され、一部の「婦人家」は土地の補助金をもらい、あるいは近所で働き、養老金を貯めてきた。普段は息子から生活費をもらわず、自力での老後生活を過ごす。それによって、子供世帯は彼女たちに尊敬を払うのである。また「婦人家」は息子夫婦を補助して孫の世話をしたり、できるだけ息子夫婦の生活を手伝う。動けなくなかった時には息子夫婦の世話を受け、思いやりにあふれた扶養生活が享受できることを期待している。しかし、村の老人すべてが生活に足りるだけの養老資金をもらっているわけではない。このような現実において、農村では、フィード・バック式の養老制度を完全に手離すことはできない。以上の二つの方法ですべての農村の養老問題を解決できるわけではない。この親と息子家族分離の家族構造が引き起こした農村における養老扶養者不足の現状は、国家が急いで解決しなければならない農村の問題となっている。

村のまだ元気な「婦人家」たちは、広場ダンスにより、自由な活動空間と中年女性としての権利が大きくなった。夫の男兄弟の家族や、実家の兄弟の家族は日常生活における主な交際相手ではなく、「距離を保った」親戚になる。その「婦人家」たちは町の生き方を真似し、自分の興味により、自由意思で娯楽方法を選ぶようになった。また彼女たちは村の公共管理に関心を持ち、自分の要求を積極的に表し、公共の政治意識が強くなっている。都市化の進展によって村に生活する若い女性だけではなく、「婦人家」たちも観念が変化し、自主意識が増加し、日常の生活中心が家族から、自分の個人生活の幸せに移り、活動の範囲が広がった。

最後に、女性に対する社会的期待と女性の社会的地位を分析する。女性に対する社会的期待は、その当時の女性の地位に関する考えが反映されている。清代、中華民国時代における徽州社会の女性に対する社会的期待は、貞節牌坊、女祠の建設と文集の刊行による「良妻賢母式」の女性が求められた。このような社会的期待の背景にあるのは、長期間家を離れて商売する徽州商人にとって、妻が家族の世話をし、暮し向きを管理するという現実の生活から求められたものであった。また各時期の政府の村社会を統治するための政治的な要求、および文人たちの儒家倫理をもとにした要求があった。

そして、1949年以降は、女性に対する社会的期待の段階的な変化が表れた。1950-60年代には、女性は村の建設者として期待された。1970年代からは徐々に「鉄姑娘」に変わっていった。「女性は天の半分を支える」の時代には、女性に対する評価と表彰は著しく上昇したが、「鉄姑娘」式の「男女平等」は真の平等ではなく、伝統的な性別分業に対して変化を起こすことはなかった。女性は経済活動に参加したが、男性と同じ平等な地位をもらうことはなかった。1978年改革開放以降、女性に対する社会的期待は主に、経済発展を中心とする女性の経済的なリーダー、および精神文明を中心とする「文明戸」と「好媳婦」に変化した。村経済の発展には女性の参加が不可欠であり、仲がよい家族、安定した社会もまた女性の関わりが大きく影響を与えた。女性が家族と社会に果たす役割は重要になり、それによって女性

の社会的地位は大きく上昇したことが明らかになった。

しかし、貞節牌坊、女祠は女性を褒める意味があったが、それらは男性の需要によって建てられ、当時の女性には「良妻賢母式」の女性になるという期待が与えられた。女性は受け身の立場でこれに従い、夫の家族に貢献をせざるを得なかった。本意が問われることなく、人生の選択の自由がなかった女性たちは、男性と厳しく差別され、「暗闇の世界」の中で抑圧されていた。

1949年以降、社会主義農村の建設者としての女性や「鉄姑娘」は、国が生産活動の期待に応じて出現させたものであり、女性が自発的に求めていたものではなかった。「女性は天の半分を支える」という政治的なスローガンは、中国の女性解放の象徴として唱えられ、女性はその下で全面的に社会的労働に進出させられた。こうした建前としての男女平等は、実は国の発展のために女性の「女性性」を犠牲にしたにすぎなかった〔関西中国女性史研究会 2014: 61、80〕。改革開放以降、自分の理想や経済的な利益のため、社会的期待に相応した行為を行った女性の経済的なリーダーが現れた。多様な生活が選べる中で、自ら夫の親を世話することを決意した「好媳婦」の事例からもわかるように、彼女たちは能動的に選択する意識が強くなっている。

本論の目的は、徽州という山間地域に暮らしている農村女性の地位が、百年にわたってどのように変化しているのかについて観察することである。

この結果の一つは、農村女性の地位が時間的、空間的に著しく上がっていることである。1949年解放前から計画経済時期を経て、改革開放以降、及び現在に至るまで、女性の地位は絶えず上昇してきた。また、家族においてだけではなく、社会的地位も著しく向上し、女性が男性と同様に社会のなかで競争し、評価を受けるようになっている。もう一つは、女性地位の変化率が、異なる年齢層によって同一ではないことである。女性が若いほど地位の上昇が明らかである。

その原因を以下のようにまとめる。

まずは女性が普遍的に家を出て働ける背景について。1950-70年代から、共産党政府が女性にも平等に仕事の機会を与え、さらに女性の働きを奨励した（当時、女性の利益や権利などを十分に守らないことがあったが）。1980年代から改革開放によって、経済発展のため、まちや工場から大量の労働力が求められ、多くの農村女性が村を出て就職した。中国では、結婚を問わず女性が働く意識を人々は強く持っている。農村の女性はこの背景において、村で農業をしたり、農産物を加工したり、農村観光業をしたり、企業を営んだりし、家を離れて都市で出稼ぎしたり、隣の開発区の企業で働いたりして、自分の都合で仕事を選び、家計を支え、経済的に独立できるようになっている。

そして、経済面の独立と教育レベルの上昇に従い、彼女たちは自主意識が徐々に強くなっている。特に2000年以降、徽州地区における農村の生活環境は大きく変わり、町が村へと広がり、鉄道や新幹線の

駅、空港、経済開発区がもともと村であった土地に建てられ、山の奥の村まで各村が道路によって結ばれ、テレビやインターネットが全地域に普及した。徽州の村の女性の生活にも空前の変化が起きている。女性にとって閉鎖的だった生活環境が開放的になり、家族を唯一の中心とする観念から自己を中心として、家族を重視する観念に変わっている。受け身で従属的な地位にあった女性は、独立的で自主的な地位に変化し、自分の求めを明白に伝えるようになった。経済環境の変化は女性を男性と同様な経済的地位にまで引き上げ、女性の独立観念に直接影響を与えている。

最後は、根本から中国農村の家族の構造・権力を揺がした一人っ子政策である。一人っ子政策は客観的には農村の家族の構造を変え、子供、特に女の子の地位を上昇させた。双方の家族の「永遠の娘と嫁」である女の子の高い地位は、実家の娘としてだけではなく、婚家でまでも保たれている。一方で女性は、もともとは家族において年齢の増加と息子の出産により得られていた唯一の地位の上昇ルートを失う。経済利益が最重視される現在、家庭に最大の利益をもたらす若い女性の方が地位が高い。養老における年取った「婦人家」の地位が被扶養者から扶養者になることが明らかな証拠である。年取った女性は若い世帯の女性より地位の上昇率が低く、彼女たちを完全に掌握することができない。また40年程実行されてきた一人っ子政策は女性の出産、育児観念に強く影響し、若い女性は徐々に出産権を掌握できるようになり、「優産優育」の観念が深く教え込まれる。これらの観念と行為は逆に家族における子供の高い地位を確保しつつける。一人っ子政策は長期的安定的に女性の地位の変化を起こす原因になった。

1970年代後半に生まれた一代目の一人っ子世帯の女性たちは、現在壮年期にあたり、一人っ子ではない親世帯の女性よりかなり地位が上がっている。一方で親世帯に頼りすぎる傾向が見られる。彼女たちもまたほぼ一人っ子政策により子供一人、二人を大切に育てている。将来一人っ子世帯の女性が老年期に入ったとき、彼女たちの地位はどのように変化するのだろうか、そのとき、夫婦の双方も彼らの子供も一人っ子である親子世帯の間に、どのような関係が起きるのかは今後の新たな研究課題となると考えられる。

参考文献：

日本語参考文献：

- 植野弘子 2000 『台湾漢民族の姻戚』 風響社
- 臼井佐知子 2003 「中国徽州文書」『史資料ハブ』文部科学省 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ 地域文化研究拠点」総括班
- 関西中国女性史研究会(編) 2014 『中国女性史入門——女たちの今と昔』 人文書院
- 胡潔 1996 「古代日本の婚姻形態に関する一考察——中日両国における妻妾の呼称の相違を通じて」
お茶の水女子大学人間文化研究年報・第 20 号
- ジュリア・クリステヴァ 1981 『中国の女たち』 せりか書房
- 瀬川昌久(編) 2016 『宗族と中国社会——その変貌と人類学的研究の現在』 風響社
- 田口宏二郎 2011 「簡紹 徽州文書」 第一回出土文書研究会
- 田原史起 2009 「農業産業化と農村リーダー——農村專業合作社成立の社会的文脈」 『中国農村改革と農業産業化』池上彰英(編) 日本貿易振興機構アジア経済研究所
- 費孝通 仙波泰雄訳 1939 『支那の農民生活：揚子江流域に於ける田園生活の実態調査』 生活社
- 費孝通 横山廣子訳 1985 『生育制度——中国の家族と社会』 東京大学出版会
- M. フリードマン 1991 末成道男など訳 『東南中国の宗族組織』 弘文堂
- ファン・ヘネップ 綾部恒雄訳 2012 『通過儀礼』 岩波書店
- 馬路 2014 『中国農村における結婚の贈答に関する研究——安徽省黄山市休寧県を例として——』 神奈川大学
- マルセル・モース 有地亨訳 1962 『贈与論』 勁草書房
- 山川麗 1977 『中国女性史』 笠間書院

族譜と地方誌：

- 鮑光純再編 乾隆版 『重編歙邑棠樾鮑氏三族宗譜』
- 鮑志道、鮑琮 嘉慶版 『棠樾鮑氏宣忠堂支譜』
- 曹誠瑾 中華民国 旺川曹氏統修宗譜
- 安徽省屯溪市地方志編纂委員会(編) 1990 『屯溪市志』 安徽教育出版社
- 安徽省地方志編纂委員会(編) 2010 『歙県志』 黄山書社
- 黄之雋等 1967 清・乾隆二年重修『江南通志』 京華書局
- 績溪县地方志編纂委員会(編) 1998 『績溪县志』 黄山書社
- 江蘇古籍出版社 1998 『中国地方志集成 安徽府県誌輯 51 民国歙県志』
- 休寧県地方志編纂委員会(編) 1990 『休寧県志』 安徽教育出版社

●休寧縣地方志編纂委員會(編) 2012 『休寧縣誌』 黃山書社

●中共上庄村黨支部、上庄村委員會 2009 『上庄村誌』內刊

●朱益新(編) 1995 『歙縣志』 中華書局

中國語文獻：

●阿風 2002 『徽州文書所見明清時代婦女的地位與權利』 中國社會科學院研究生院

—— 2009 『明清時代婦女的地位與權利——以明清契約文書、訴訟檔案為中心』 社會科學文獻出版社

●安徽省新運會 1937 「安徽省各縣婚喪禮俗迷信習慣之調查及改革意見書」 『新運導報』第九期

●白馥蘭(Francesca Bray) 江湄、鄧京力(訳) 2006 『技術與性別：晚清帝制中國的權利經緯』 江蘇人民出版社

●寶森(Laurel Bossen) 胡玉坤(訳) 2006 『中國婦女與農村發展：雲南祿村六十年的變遷』 江蘇人民出版社

●畢明智 1996 「徽州女祠初考」 安徽大學學報・第2期

●畢忠松、李芸璋、梁燕楓 2014 「徽州古祠堂羅東舒祠建築特色淺析」 『瀋陽建築大學學報(社會科學版)』16卷第4期

●卞利 2005 『徽州民俗』 安徽人民出版社

—— 2015 『源的守望——徽州文化生態保護研究』 中國社會科學出版社

●鮑樹民、鮑雷 2008 『坊林集』 安徽省文芸出版社

●常建華 2006 『婚姻內外的古代女性』 中華書局

●陳伯峰 2009 「代際關係變動與老年人自殺——對湖北京山農村的實證研究」 『社會學研究』2009(4)

●陳方 2003 『失落與追尋——世紀之交中國女性價值觀的變化』 中國社會科學出版社

●陳鵬 1990 『中國婚姻史稿』 中華書局

●陳瑞 2007 『明清時期徽州宗族對社會問題的控制』 安徽大學出版社

●陳曉燕 2001 「近代江南農村工業化與婦女社會地位的變遷」 『浙江學刊』2001(6)

●陳瑛珣 2010 『中國社會經濟史研究叢書 清代民間婦女生活史料的發掘與運用』 天津古籍出版社

●程郁 2002 「民國時期妾的法律地位及其變遷」 『史林』2002(2)

—— 2005 「清至民國的蓄妾習俗與社會變遷」 復旦大學

●鄧小平 1994 『鄧小平文選』第2卷 人民出版社

●刁統菊 2016 『華北鄉村社會姻親關係研究』 中國社會科學出版社

●董妙齡 2000 「中國共產黨與新中國的婦女參政」 『中共黨史研究』2000(3)

—— 2001 「建國以來婦女幹部選拔任用的歷程及其基本經驗」 『河南大學學報』(社會科學)

版)2001(4)

- 東南大学建築系、シャ県文物事業管理局 1999 『徽州古建築丛书——棠樾』 東南大学出版社
- 方静 2007 『徽州民謡』 合肥工業大学出版社
- 費孝通 2006 『江村經濟——中国農民的生活』 商務印書館
—— 2010 『鄉土中国 生育制度』 北京大学出版社
- 馮爾康、常建華 2001 『清人社会生活』 瀋陽出版社
- 馮劍輝 2008 『近代徽商研究』 山東大学博士学位論文
- 高世瑜 2015 『从婦女史到婦女/性別史——新世紀婦女史学科的新發展』 婦女研究論丛
- 高小賢 1999 「婦女發展在中国：对实践的分析与再認識」 『浙江学刊』1999(3)
- 高彦頤(Dorothy Y Ko) 李志生(訳) 2006 『閨塾師：17世紀中国的婦女与文化』 江蘇人民出版社
- 耿化敏 2007 「関与「鉄姑娘」再思考」一文幾則史実的探討 『当代中国史研究』第14卷第4期
- 郭松義 2000 『倫理与生活——清代的婚姻關係』 商務印書館
- 郭松義 定宜庄 2005 『清代民間婚書研究』 人民出版社
- 韓嘉玲 1998 「国家在中国婦女發展中的作用」 『浙江学刊』1998(6)
- 韓廉 2001 「对戊戌婦女運動局限的歷史審視」 『婦女研究論丛』2001(1)
- 韓敏(編) 2009 『革命の实践と表象 中国の社会变化と再構築』 風響社
- 韓寧平 2010 「女裁縫：20世紀前期徽州婦女的口述史之四」 『黄山学院報』第12卷第1期
- 韓寧平、熊遠抱 2008 「農民的妻子：20世紀前期徽州婦女的口述史」 『黄山学院報』第10卷第2期
- 何黎萍 1998 「中国婦女争取財產權和繼承權的斗争歷程」 『北京社会科学』1998(4)
- 黄曼 2012 「从女性墓碑文看晚明節烈的表彰」 『浙江海洋学院学報』第29卷第5期
- 黄亜恵 2013 「并家婚姻中女兒的身分与地位」 『婦女研究論丛』第4期
- 胡桂香 2014 『中国的計画生育政策与農村婦女——湖南西村歷史變遷(1950-1980)』 華東師範大学
- 胡素文、韓寧平 2009 「嫁作商人婦 富貴也艱辛——20世紀前期徽州婦女口述史之二」 『黄山学院報』第11卷第1期
- 胡中生 2001 「明清徽州下層社会的非常態婚姻及其特点」 『安徽史学』2001(3)
- 吉国秀 2007 「婚姻支付變遷与姻親秩序謀划」 『社会学研究』第一期
- 江巧珍、孫承平 2004 「歙縣南鄉婚嫁撒帳歌」 『黄山学院学報』第6卷第2期
- 江巧珍、孫海峰 2011 『塩商文化象徵——棠樾』 合肥工業大学出版社
- 蔣美華 1998 「略論辛亥革命時知識婦女群的解放心態」 『江海学刊』1998(6)
- 金一虹 2006 「「鉄姑娘」再思考——中国文化大革命期間的社会性別与労働」 『社会学研究』第1期
—— 2007 『女性叙事与記憶』 九州出版社

- 柯靈樞 2003 『古徽州村族礼教鉤沉』 中国文史出版社
- 孔海娥 2012 「二度母親：社会轉型期農村留守老年婦女扶育角度的變化—以湖北省浠水縣L村為例」
『華中農業大學學報』2012(3)
- 雷蒙德·弗思(レイモンド・ファース) 費孝通(訳) 2002 『人文類型』 華夏出版社
- 李衡眉 1992 『中国古代婚姻史論集』 吉林文史出版社
- 李木義 1998 「辛亥革命与五四時期婦女解放運動比較研究」 『湖北大學學報』(哲学社会科学版)1998(6)
- 李霞 2010 『娘家与婆家—華北農村婦女的生活空間和後台權力』 社会科学文献出版社
- 李永萍、慈勤英 2015 「「兩頭走」：一種流動性婚居模式及其隱憂—基於對江漢平原J村的考察」
『南方人口』第30卷
- 梁軍、許孔玲 1997 「計劃生育于婦女生育健康之利弊」 『生育：傳統与現代化』 河南人民出版社
- 劉汝驥 1997 『陶甕公牘』 黃山書社
- 林耀華 2000 『義序的宗族研究』 三聯書店
- 羅剛 2002 『千古悲歡閱滄桑 徽州古牌坊』 遼寧人民出版社
- 羅開玉 1999 「我國近五十年配偶標準札記」 『中華文化論壇』1999(4)
- 羅蘇文 1996 『女性与近代中国社会』 上海人民出版社
- 呂美頤 1999 「論中國近代婦女運動對社會變遷的推動作用」 『鄭州大學學報』(哲学社会科学版)1999(4)
- 呂美頤、鄭永福 1990 『中國婦女運動(1840-1921)』 河南人民出版社
- 麻勤 2015 「中國牌坊文化遺跡空間分布特征与旅遊資源價值評估」
- 曼素恩(Susan Mann) 定宜庄(訳) 2006 『綴珍錄：十八世紀及其前后的中國婦女』 江蘇人民出版社
- 毛立平 2007 『清代嫁粧研究』 中國人民大學出版社
- 潘傑 1999 「女性人類學概說」 『民族研究』第4期
- 潘婧 2013 「徽州地區城鄉婚俗比較研究」 安徽大學
- 潘敏 2001 「評近代女權主義運動觀」 『婦女研究論叢』2001(4)
- 瞿同祖 2003 『中國法律与社会』 中華書局
- 沈海梅 2001 『明清雲南婦女生活研究』 雲南教育出版社
- 唐灿、馬春華、石金群 2009 「女兒贍養的倫理与公平—浙東農村家庭代際關係的性別考察」 『社會學研究』第6期
- 唐力行 2005 『徽州宗族社会』 安徽人民出版社
- 王伝満 2008 「徽州女祠与節烈婦女」 阿坝師範高等專科學校學報・第25卷

- 2009 「明清徽州知識精英對節烈婦女事跡的張揚」 『湖南第一師範學院學報』第9卷第6期
- 2010 「明清徽州節烈婦女的牌坊旌表」 『文山學院學報』第23卷第2期
- 王會、狄金華 2011 「「兩頭走」：雙獨子女婚後家庭居住的新模式」 『中國青年研究』第5期
- 王麗 2001 「近代廣東女性獨身現象：自梳和不落夫家」 『廣西民族學院學報』2001(3)
- 王振忠 2002 『徽州社會文化史探微』 上海社會科學出版社
- 魏程琳、劉燕舞 2014 「從招郎到「兩頭住」：招贅婚姻變遷研究」 『南方人口』第29卷
- 吳玉廉 2004 「香火繚繞中的規範與記憶：徽州地區女祠堂研究」 『女學學誌：婦女與性別研究』第18期
- 肖愛樹 2005 「建國初期婦女因婚姻問題自殺和被殺現象研究」 『齊魯學刊』2005(2)
- 笑風 2002 「最後一代傳統婆婆」 『社會學研究』2002(3)
- 許承堯 2001 『歙事閑談』 黃山書社
- 徐柯 1984 『清稗類鈔』 中華書局出版
- 閻雲翔 2000 『禮物的流動一個中國村莊中的互惠原則和社會網絡』 上海人民出版社
- 2009 『私人生活的變革——一個中國村莊里的愛情家庭與親密關係』 上海書店出版社
- 姚暘 2010 「清代中期徽州婚俗與社會生活管窺解讀天津博物館收藏的邵氏嫁女收支賬冊」 『收藏家』七號 p 58~60
- 葉春生 2001 「珠三角的「自梳女」」 『婦女研究』2001(3)
- 伊沛霞(Patricia Buckley Ebrey) 胡志宏(譯) 2006 『內闈：宋代的婚姻和婦女生活』 江蘇人民出版社
- 岳璫 1999 「近代陝北女子早婚與生育健康」 『人文雜誌』1999(4)
- 曾春花、羅艷紅 2008 「清代婺源의 溺女陋習與育嬰事業」 『南昌工程學院學報』第27卷第5期
- 祖曉敏 2005 「近二十年來明清婚姻問題研究述評」 『安徽冶金科技職業學院學報』15卷
- 張海鵬(等) 1985 『明清徽商資料選編』 安徽人民出版社
- 張佩國 2002 「近代江南鄉村婦女的「財產權」」 『史學月刊』2002(1)
- 張珊珍 1999 「建國以來婦女解放事業的歷史回顧」 『信陽師範學院學報』(哲學社會科學版)1999年10月
- 張曉紅 梁建東 2008 「從「鉄姑娘」到「新典範」——中國女性社會角色的歷史變遷」 『思想戰線』第34卷第1期
- 張小平 2002 『聚族而居柏森森——徽州古祠堂』 遼寧人民出版社
- 張智 2003 『中國風土志叢刊』 廣陵書社

- 趙華富 2004 『徽州宗族研究』 安徽大学出版社
- 趙媛、麻勤、郝麗莎 2016「中国現存牌坊文化遺跡的地域分异及成因」『地理研究』第 35 卷第 10 期
- 周大鳴 郭永平 2013 「性別、權力与身份建構——以大寨「鉄姑娘」為考察对象」『青海民族研究』第 24 卷第 1 期
- 周星 2015 「实践的親族關係——関与「娘家」与「婆家」的人類学研究」『西北民族研究』第 87 ~88 期
- 鄭永福、呂美頤 1993 『近代中国婦女生活』 河南人民出版社
- 朱琳 2005 「明清徽州婚姻彩礼略述」『黄山学院学报』第 7 卷第 5 期
- 朱熹 1986 『朱子家礼』 上海古籍出版社
- 朱熹 『四庫全書 晦庵集』卷 26 <http://archive.org/stream/06058060.cn#page/n90/mode/2up>

英語文献：

Gail Hershatter 1986 The workers of Tianjin, 1900-1949 Stanford University Press